# 『談虎集』

周作人著　　中島長文訳

【上海北新書局 1928 年初版表紙　『談虎集』上巻】

※京都産業大学図書館所蔵（同大学より掲載許可済）

【上海北新書局 1928 年初版表紙　『談虎集』下巻】

※京都産業大学図書館所蔵（同大学より掲載許可済）

周作人文集翻訳叢刊序

周作人が書いた書物に関する文章は、先に出した『周作人読書雑記』全 5 巻（平凡社東洋文庫）にだいたいは訳したが、彼の著作は翻訳の他は大抵が書物に関わらないものはないので、漏れたものも多い。これはそれを補おうというのではないが、補う分も含めて周作人が出版した最初の形にして日本の読者に読んでもらおうとしたものである。というのはやはり書物という視点からだけでは、彼が民国期の文化において果たした役割というか、彼の全体像が見えにくい。その全体をつかむためには、やはり彼の著作をそのまま提示するのが一番だろう。周作人の著作は 1980 年代の半ばに解禁され、1998 年にはテーマ別編集の『周作人文類編』（湖南文芸出版社・全 10 冊）が編まれ、2009 年 4 月には編年体の、索引も含めた『周作人散文全集』全 15 巻が広西師範大学出版社から出て、日記や手紙を除いた現存するほとんどの文章が読めるようになった。そいうわけで読書環境が整備され、中国では一時に爆発的なブームを引き起こし、今では少し落ち着いているようだが、近代作家としての認知は回復したように見える。極めて優秀な才能と文学的感覚を持ちながらほとんど日本の中国侵略によって潰されたと言ってよいこの作家の作品を、少しでも日本人に読んでもらいたいと思う。中国での動向に促されてか、日本でも次第に周作人に興味を持つ人は増えてきている。しかし研究者など原文が読める人はよいが、読めない人にとっては依然蚊帳の外である。この翻訳は自分で周作人を読むと同時に、元々そうした人々に読んでもらえば、周作人という民国時期の文人がその時代にどういうことを言っていたのかを知り、読者自身が自分で論を立てるにしろ、彼をめぐる議論に参加するにしろ、一応基礎的な資料としての役割を果たせるのではないかと思ったのである。もっとも専門家の議論にしたところで、この人本当に読めているのかというようなところはなきにしもあらずで、難しいところはある。しかしそんなところはよくわからないと言えば済むことで、それよりももっと難しいのは、小品文の名手と言われた彼の文章の文学的香気とも言うべきものを訳出できているかである。それはこの際あっさりと目を瞑ってもらい、のちの文才ある人の翻訳を待ってもらうしかない。ただ散文は詩とちがって意味の繋がりがまだ比較的取りやすい。それを頼りにだいたいのところが掴めるようにと心がけた。

翻訳に際してのもう一つの難題は、彼の文中に引用せられた外国語の文章をどうするかという問題である。抄文公、つまり引用魔とでも言おうか、と称せられた周作人の文章には、様々な書物からの引用が山盛りである。ただ日本の読者ということを考えれば、ギリシア語や英語からの引用は周作人の翻訳をそのまま重訳するしかない。問題は引用されたのが日本文の場合である。たとえば『徒然草』や芭蕉の紀行文など、日本人によく知られた文の引用を、周作人がいくらうまく中国語に置き換えていたにしろ、そこからの重訳では気が抜けてしまい、日本の読者にはかえって奇異な感じを与えるだろう。特に原文が詩歌になるとそれが突出してくる。わたしが試みた中国語訳された俳句や川柳からの復元では、たった一句「蝙蝠や人買船の岸による」がまぐれ当たりで戻っただけで、川柳の「お前たち何を笑うか爺様の屁」は残念ながら「爺様」は原文では「隠居」であった。短詩は言葉がイメージだけで繋がるのでまだまぐれもあり得るのだ

が、短歌になるともうダメである。それで日本の読者には引用の原文をできるだけ持ってくる方が、その文章を周作人がどういう文脈の中でどのように引いているのかが分かりやすいだろう。そう考えて先に出した『周作人読書雑記』では努めてそうした。しかし周作人が前にした原文の光景がどういうものであったかはそれでよく分かるが、彼がそれをどのように取ったか、どのように理解したか、どのように解釈したかは、また別問題で、それを見るためには引用部分の翻訳（中国語）を文章全体の文脈と主旨との関連からできるだけ正確に重訳して、必要なときには注釈をつけるより他に手はない。本来的には翻訳である以上そうするのが真っ当であるとは思う。ただここに訳した文章では、あるものは原文を引いたり、あるものは重訳したりして、二つの間を揺れ動いていて一定していない。どちらかに決めた方がよいのか、それもまだ決めかねているのである。この問題は他の外国語の場合でもたぶん同じことだろう。それぞれの言語に堪能な人が詳しい注釈をつけてくれることを待っている。

なお読んでもらえばわかることだが、文集ごとの翻訳とは言い条、『読書雑記』に所収のものは巻数を指示してあるのでそちらをご覧いただきたい。また戦後の翻訳では、周作人の日本関係の文章を集めた木山英雄さんの『日本談義集』（平凡社・東洋文庫 2002 年 3 月）が拙訳よりはるかに優れているので、そこに収録された文章は凡て木山さんの訳におんぶすることにして、目次にその旨を示した。

以上はいわゆる能書きをまとめた前口上である。実のところ『颸風』の広告にも載せたように、教師をしていた頃から教室で読んだりして、訳し貯めたものがまずまずの分量になっているので、ゆっくり注をつけて訳文も吟味してそのうち公表できるようにしておこうと考えていた。ところが気がついてみると、自分にはそれだけの時間が残っているのかどうかさえ怪しくなってきた。そこで老後の仕事はとりあえず放っておいて、今ある分を『颸風』の資料庫に入れてもらって、興味のある人に読んでもらうことにした、というのがほんとうである。その作業の最中、戦後初めて周作人の民俗学的な方面の仕事に本格的なメスを入れられ、中国民話学とでもいうべき分野を開拓された飯倉照平さんの訃報が伝えられた。はるかに敬意を払っていた飯倉さんはわたしより先輩だが、そのことでもいよいよ自分の持ち時間を意識することになった。

むかし人の文章を読んで、これはなんだろうと思うところに注が振ってあって、さてどうだと注を見れば「未詳」とくる、それを見てもどかしい思いをしたものだが、注をつける立場に立って見て、ああこれはこういうことなのだろうと思うようになった。つまり論者や訳者にも解らないから、このことについては知識や見聞もなく解りませんので、ご存知の方がありましたらどうぞお教えを賜りますようにという信号なのではないか、と。これらの翻訳にはそういうつもりで「未詳」をつけたので、一体どれだけの「未詳」がつくのか数えたことはないので分からないが、お気付きの方がおいででしたらどうかご教示を吝しまれませんように。そして「未詳」のみならず、本訳文の誤訳や欠陥などのご指摘もお願いしたい。

予告には夏休みまでに追い追い公開したいと書いたが、読み返しに思いの外時間がかかって、夏休みはとっくに終わってしまった。今後もこの調子でいくとかなり時間がかかりそうだ。食言

をお詫びするとともに、そのことも予め白状しておく。

　なお表紙の写真については主に佐原陽子さんの助力を得、オンライン上の様式・構成の作成は高井美香さんに依頼した。お二人の協力に感謝する。

2019 年 9 月 15 日、五四運動百周年に際してかろうじてその糸を繋いだ香港の抗議運動の行く末を案じて。

周作人文集翻訳叢刊凡例

一、翻訳の底本は原刊本ないしその影印本とした。正確には初出誌から直接訳したものもあるが、整理の過程で一通りは原刊本と対校した。
他に岳麓書社版周作人各文集・河北教育出版社版『周作人自編文集』・『周作人文類編』・『周作人散文全集』等を適宜参照した。

二、各文章の末尾にその初出誌を示した。

三、『周作人読書雑記』（平凡社・東洋文庫）全 5 冊に既収の文章は収録せず、目次にその巻号を示した。木山英雄氏訳『日本談義集』（平凡社・東洋文庫）所収の文章は収録せず、同様にそのことを示した。

〇〇→『読書雑記』第〇巻
〇〇→『日本談義集』

四、先行する文集にすでに収録済みであるものは、上記と同様に当該の文集には収録せず、先行する文集名を示した。例えば、『談龍集』所載の「日本の諷刺詩」はすでに『自分の畑』に収録されているので、次のように示した。

「日本の諷刺詩」→『自分の畑』

五、注釈は精粗一定しない。本文中〔〕の中は訳者の注である。

六、注釈に用いた写真版はほとんどが Internet Archive からの借用である。これには大いに感謝の意を表する。

# 『談虎集』版本及び目次

上海北新書局 1928 年 1・2 月上・下巻初版
香港実用書局 1967 年 11 月據 1929 年北新書局版影印上下二巻
上海書店 1987 年 9 月第一版　中国現代文学史参考資料　北新書局版影印一冊本

岳麓書社 1989 年 1 月據北新書局初版整理合訂排印
河北教育出版社 2002 年 1 月據北新書局 1936 年 6 月第五版整理合訂排印

目次中、文章のタイトルの日本語訳の後に括弧に入れたのは原文の篇題で、日本語訳と同じになるものは省いた。

上巻


01　序　(13)
02　祖先崇拝　(19)
03　思想革命　(21)
04　前門にて騎馬隊に遭うの記（前門遇馬隊記）　(23)
05　ラッセルと国粋（羅素與国粋）　(25)
06　排日の悪化（排日的悪化）→木山英雄氏『日本談義集』
07　親日派→木山英雄氏『日本談義集』「親日派二」
08　訳詞の困難（譯詞的困難）　(26)
09　民衆の詩歌（民衆的詩歌）　(27)
10　翻訳と批評（翻訳與批評）　(28)
11　批評の問題（批評的問題）　(30)
12　新詩　(32)
13　美文　(33)
14　新文学への非難（新文学的非難）　(34)
15　ぶつかって怪我をする（碰傷）→『澤瀉集』所収
　　附録「編集余談」（編餘閒話附）　(35)
16　宣伝
　　附録「労働者と白い手の人」ツルゲーネフ作（工人與白手的人附）　(37)
17　三日（三天）　(40)
18　麝香　(41)
19　売薬（賣藥）　(42)
20　天足　(44)

21　天職（勝業）　(45)
22　子どもの悔しさ（小孩的委屈）　(46)
23　感慨　(48)
24　資本主義の娼妓禁止（資本主義的禁娼）　(50)
25　「先進国の婦人」（先進國之婦女）　(51)
26　憐れむべき者（可憐憫者）　(53)
27　北京の外国書の値段（北京的外國書價）→『周作人読書雑記』1
28　上海の芝居（上海的戲劇）　(54)
29　「迷魂薬」　(56)
30　「鉄の算盤」　(58)
31　再来（重来）　(59)
32　病院の階段（医院的階陛）　(61)
33　ロマンティックな生活（浪漫的生活）　(62)
34　同姓同名の問題（同姓名的問題）　(63)
35　別名の解釈（別名的解釈）　(65)
36　別号の使い道（別号的用處）　(66)
37　文士と芸人（文人與藝人）　(68)
38　思想界の傾向（思想界的傾向）
　　附録「仲密君の“思想界の傾向”を読んで」（「讀仲密君“思想界的傾向”」）(69)
39　気に入られない思想革命（不討好的思想革命）　(72)
40　問星処（ほしうらないしょ）の予言（問星處的豫言）　(74)
41　読経の将来（讀經的將來）　(76)
42　古書は読むべきかどうかの問題（古書可讀否的問題）→『周作人読書雑記』1
43　『孟子』を読む（讀孟子）　(78)
44　新文化に反対する一通の手紙（一封反對新文化的信）　(80)
45　速達に代えて（代快郵）　(82)
46　四項の陳情書（條陳四項）　(85)
47　苦しみを訴える（訴苦）　(89)
48　何ぞ必ずしも（何必）　(92)
49　溥儀君に致す書（致溥儀君書）　(95)
50　女のズボンを論ず（論女袴）　(98)
51　国慶節（国慶日）　(100)
52　国語ローマ字（國語羅馬字）　(101)
53　郊外　(103)
54　南北　(105)
55　豚を飼う（養猪）　(107)

56　宋二の写真（宋二的照相）　(108)
57　肉饅税（包子税）　(109)
58　奴隷の言語（奴隷的言語）　(110)
59　京城の拳骨（京城的拳頭）　(111)
60　拝脚の討論（拜脚商兌）　(112)
61　拝髪狂　(115)
62　女子学院の火事（女子学院的火）　(116)
63　男装　(118)
64　頭髪、名誉と程度（頭髪名誉和程度）　(120)
65　男子の纏足（男子之裹脚）　(121)
66　銅元の玩味（銅元的咬嚼）　(122)
67　二つの吉兆に非ざるの論　（二非佳兆論）　(124)
68　壁を取り壊す（柝牆）　(126)
69　宣伝と広告（宣伝與広告）　(127)
70　素人の按語（外行的按語）　(128)
71　臥薪嘗胆　(131)
72　革命党の妻（革命党之妻）　(132)
73　孫中山先生　(133)
74　偶感（偶感四則）　(135)
75　人力車と斬罪（人力車與斬決）　(139)
76　呪詛（詛呪）　(140)
77　どう言えばよいか（怎麼說纔好）　(141)

上巻終わり

下巻

78　双十節の感想（雙十節的感想）　(143)
79　『酒後主語』はしがき（酒後主語小引）　(146)
80　「土のままごと」はしがき（土之盤筵小引）　(147)
81　小書　(148)
82　古文の秘訣（古文秘訣）　(149)
83　新名詞　(151)
84　牛山の詩（牛山詩）　(152)
85　旧詩呈政　(153)
86　エリスの詩（藹理斯的詩）　(154)
87　マタイ神父（馬太神甫）　(155)
88　道学芸術家の二派（道学藝術家的兩派）　(157)

89　風紀の脆弱（風紀之脆弱）　(159)
90　シャーマニズムの礼教思想（薩滿的禮教思想）　(161)
91　郷村と道教思想（郷村與道教思想）　(163)
92　王と魔法使い（王與術士）　(169)
93　雨乞い（求雨）　(175)
94　再び雨乞い（再求雨）　(177)
95　半分春画（半春）　(178)
96　野蛮民族の礼法（野蠻民族的禮法）　(180)
97　ユダヤ人からカトリックまで（從猶太人到天主教）　(182)
98　反宗教運動（非宗教運動）　(185)
99　反宗教について（關于非宗教）　(187)
100 道を探す人（尋路的人）→『自分の畑』所収
101 二匹の幽鬼（兩個鬼）　(189)
102 籤を引く（拈鬮）　(191)
103 わたしが国文を学んだ経験（我學國文的經驗）　(192)
104 婦人運動と常識（婦女運動與常識）　(195)
105 ケーキ作りを論ず（論做鷄蛋糕）　(200)
106 北溝沿通信　(203)
107 抱犢谷通信　(208)
108 『色欲を訶る法』あとがき（訶色欲法書後）
　　附録『色欲を訶る法』（訶色欲法附）　(211)
109 新聞を読んだ経験（讀報的經驗）　(215)
110 叢台修復の事について（關于重修叢台的事）　(218)
111 児童の書物について（關于兒童的書）→『周作人読書雑記』3
112 『児童世界遊記』を読む（讀兒童世界游記）　(220)
113 『自由魂』を評す（評自由魂）　(222)
114 ギリシア人名の訳音（希臘人名的譯音）　(225)
115 新ギリシアと中国（新希臘與中國）　(228)
116 日本と中国（日本與中國）→木山英雄氏『日本談義集』
117 日本浪人と『順天時報』（日本浪人與順天時報）→木山英雄氏『日本談義集』
118 日本人の好意（日本人的好意）→木山英雄氏『日本談義集』
119 再び『順天時報』（再是順天時報）→木山英雄氏『日本談義集』
120 排日平議→木山英雄氏『日本談義集』
121 裸体行進考訂（裸體游行考訂）→木山英雄氏『日本談義集』
122 ギリシアの風教維持（希臘的維持風化）　(231)
123 清朝の玉璽（清朝的玉璽）　(233)

124 李佳白の不解（李佳白之不解）　(234)
125 清浦子爵の特殊理解（清浦子爵之特殊理解）→木山英雄氏『日本談義集』
126 『支那の民族性』（支那民族性）→木山英雄氏『日本談義集』
127 支那と倭（支那與倭）→木山英雄氏『日本談義集』
128 李完用と朴烈（李完用與朴烈）→木山英雄氏『日本談義集』
129 文明国の文字の獄（文明国的文字獄）→木山英雄氏『日本談義集』
130 夏の夜の夢（夏夜夢）→『自分の畑』
131 本当の瘋癲日記（真的瘋人日記）　(235)
132 アヘン祭竈考（雅片祭灶考）　(241)
133 断髪の一考察（剪髪之一考察）　(244)
134 後記　(247)

下巻終わり

木山英雄氏『日本談義集』は平凡社「東洋文庫 701」2002 年 3 月を指す。
『周作人読書雑記』は中島長文編訳平凡社「東洋文庫 886-892」2018 年 1 月～11 月を指す。

## 01　『談虎集』[i]序

ここ何年かに書いた小文で、すでに編集されたものに『自分の畑』など三冊百二十篇があり、また『芸術と生活』の二十篇がある。このほかにあちこちに散らばっているものがまだいくらもある。今年の夏休みに発心して整理し、もう一冊小冊子を編もうとした。集めてから一通り読んだ。いずれも細々した小品ではあるけれども、総数にして百五六十はある。一冊には収まりきらぬと思って、えいっという感じでそれらを“分家”させるしかなかった。そのうちいくらかでも文芸に関する四十四篇を選んで、別に一集とし、『談龍集』と呼ぶことにした。その他の百十何篇かを残してやはり『談虎集』ということにする。

書名をなぜ「談虎」や「談龍」にするのか、そこにはどういう意味があるのか。その理由はとても単純である。わたしたち（厳密にはわたしと言うべきであるが）は好んで文芸を語る、実際にはやみくもに語るだけで、時には文芸そのものについてすらはっきり分かっていないのだ。ちょうどわたしたちは『龍経』を著したり、水墨の龍を描いたりするが、龍とはいったいどんなものかと訊かれれば、誰も見たことがないのと同じように。むかし葉公という人がいて、たいそう龍が好きで、部屋中に龍を彫ったり、描いたりするほどであったが、ほんとうの龍が降ってくると、彼は顔面蒼白になるほど驚いたということで、今に至るも人々の語り草である[ii]。わたし自身も多分そんな風に可笑しいのだろうと思う。しかし次のことはわたしにはよく分かっている。自分の語るのは根っからの偽の龍であって、しばらくでたらめにそれを語っているに過ぎず、決して龍にお出まし願って雨を降らそうとか、龍涎香を一くれ得ようなどとは思っていない。誰かほんとうの龍を知りたければ、どうか豢龍氏[iii]を訪ねてほしい。わたしのところには何もないから。わたしには空談しかできない。いままた雲をつかむような龍の話になったから、その空談の空たることは無論推して知るべしである。

『談虎集』に収めたのは、あらゆる人事に関する評論である。わたしはもともと御史でも監察委員でもないから、守るべき官職もなければ、責任を持つべき言論もない。だから何もこんな余計な口をきいて我から面倒を起こすこともないのだ。わたしはただ話すのが好きなだけだ。文芸をあれこれ語るのが好きなように。関わりのないいろんな事柄について、勝手な批評をしたり、注釈をつけたりして、その挙句はこの原稿の山だ。古人は言っている、虎を談ずれば色を変ずと。虎に出遭った人なら虎の話を聞けばもちろん恐がるだろうし、たとい出遭ったことのない人でも、虎のこととなるとびくびくせざるをえない。虎というものはほんとうに恐ろしいものであって、もともと軽々しく語ってはならないものである。わたしのこれらの小文は、たいていがいくらか人や社会の恨みを買っているので、まるで虎の尾を踏んだような気がし、内心ではびくびくしがちで、大いに色を変ずる恐れがある。これがわたしが文集に談虎と名づけた由来であって、そのほかに別に深い意味があるわけではない。こうした文章は全体でたぶん二百篇以上あるだろうが、一部を削った。一半は時期遅れになったものであり、大半は個人にわたる議論である。わたしもそれらを集めて一本にし、「文壇」における戦功を表してもよいと思ったこともあるが、たちまちそういう考えを打ち消してしまった。というのはわたしの紳士の気性（わたしはもともと中庸主

義者なのだ）というものがやっぱり根深く、そんなことをすれば自分から値打ちを下げるだけだと思われたので、孔仲尼の削除の故事に倣うことに決めた。それで広告までした『真談虎集』は有名無実と相成った次第である。

『談龍』『談虎』二冊の表紙の絵は、どちらも古い日本の画家光琳（Korin）のものから借用したもので、『光琳百図』の中にうまい具合に二幅の絵があって、龍と虎が画かれていたので、それを応用して、人に頼んで別に描いてもらう手間を省いた。――『真談虎集』の図案[iv]はもともと早くから考えがあって、後の『甲寅』の、木鐸の中の黄色い毛をした虎を借用するつもりであった。いま計画は中止になったけれども、この巧妙な応用法はなかなかうまく考えてあって、すててしまうのもいささか惜しい気がするので、ここに付記しておく。

民国十六年十一月八日、周作人、北京苦雨斎にて。

※初出：1927 年 11 月『文學周報』第 5 巻第 14 期

---

[i] この『談虎集』には次のような広告文がある。

「豈明老人はふだんから他に長とするものがないが、決して絶対に一つも長所がないわけではない。彼は自分で他に長とするものがないのを知っており、これが彼の唯一の長所である。彼も以前には文士の看板をかける時期を過ごしたこともあったが、程なく事態がはっきりしたので、慌ててそうした看板の類はすっかり仕舞い込んで、今彼の欲望はとても簡単である。ただ人の世の様々な事柄を少しでも多く知り、多く理解したいと思うだけである。看板はなくなったが、癖というものはやっぱりあって、いろいろな事柄を聞いたり見たりすると、時には常識から何言か評論してしまう。その結果二百篇余りの小文が積み重なることになった。政治的な野心もなければ、恋愛の野心もない。学問でもなければ、文芸でもない。そうした文章は誠に精彩がなく、忌諱がなく、又空疎でもあり、又凡庸でもある。しかしながらこれは却って平凡な作者の真相であって、おおぼらを吹きでたらめをこくよりも意味はあるようだ。今そこから百三十篇を選び取って、一冊に編み、名付けて『談虎集』と言い、皆さんに売りつけて読んでもらう。名人たちとの喧嘩の文章は全て収めないから、「文壇」の掌故を備えるには不足であるが、もし読者が芸術を研究や鑑賞しようとの大それた望みを持たず、ただ作者の平凡な話や、真面目な感想を聞こうとするだけならば、この一冊の書物も買ってよく、皆さんに過度の失望を与えることにはならないだろう。」

これは署名こそないが、行文からして明らかに周作人の文である。この広告文は 1927 年 12 月 24 日『語絲』第 4 巻第 2 期以後第 13 期まで断続的に載った。最初の広告には「日ならずして出版」と注があり、1928 年 1 月 14 日の第 5 期には「十七年一月份出版予定の新書」という北新書局の広告欄に「談虎集　周作人著　実価一元二」とあるから、この広告の作成段階ではまだ一冊の予定であったらしい。ところが同じ号の別のページには上の広告文が掲載され、そこには「上冊出版　実価九角」とあり、上下二冊で出ることになったのであろう。そして 3 月 5 日の第 10 期では「上下巻　毎巻九角　出版」となる。こうして『談虎集』は世に出たわけである

が、企画はもっと早く、序に「広告までした『真談虎集』」という通り、1926 年 6 月 7 日の『語絲』第 82 期の広告には「近日中に印刷に付す予定のものは」とあってその後に魯迅の『彷徨』などとともに、「『談虎集』周豈明著　雑感集」として名が挙がり、そして翌週の第 83 期の広告では、「8 月中に出版、実価六角予約四角半」と値段まで明記されたが、8 月 28 日の第 94 期の広告では、魯迅の『彷徨』は「旬日内に出版できる」部類に入ったものの、『談虎集』はまだ「予約の書」のままである。予約すると定価の八掛けで買えたから、周作人が「広告までして」と言うのにはそういう事があったからかもしれない。どれだけの予約があったのかはわからないけれども。そうした広告は北新の老板の打ち上げた花火であったかもしれないが、ともかくこの時点で『真談虎集』の構想はあったわけで、それにはおそらく名人たちとの喧嘩の文章も含まれていたことであろう。そして孔子の刪詩の故事などに倣わずにそのまま全部を出していたらもっと面白かったろう。後の世の研究者はいわゆる『真談虎集』を復元する義務があろう。

ところでこの文集の名付けについてであるが、彼の社会的発言が最も旺盛であった時期の作物をそれぞれ『談龍集』『談虎集』としたのには、この序文にその謂れを書いているから、以下は蛇足に近い。中国では古来“龍・虎”は対になって、皇帝や猛将の象徴として強力を有する者を言う言葉として使われてきた。儒教だけではなく道教においても、『龍虎経』などと言うものがあって、“龍虎”で鉛汞を意味するらしい。鉛汞とは長生の丹薬でやはり活力あるものと考えられたのであろう。龍の実在がいつ頃まで信じられていたのか、調べたことがないのでわからないが、伝統的な考えでは要するに“力”、それも強大な力を意味した。清の王漁洋より一世代遅れる趙執信に『談龍録』という書がある。そこには「詩は龍の然るが如し。首、尾、爪、角、鱗、鬣一として具わざれば、龍に非ざるなり」と見てきたようなことを書いているが、その実在を信じているかどうかは別として、こうした文人たちの頭の中だけには歴として存在したのである。ところが十八世紀の半ばになると、西洋からの新しい思想の流入で、龍の実在を信じるような知識人はいなくなり、それと歩調を合わせるかのような辛亥革命で実際の清朝の皇帝が追放されると、皇帝という存在も虚像になってしまった。こうして“龍・虎”は虚実という新しい対に変わる。

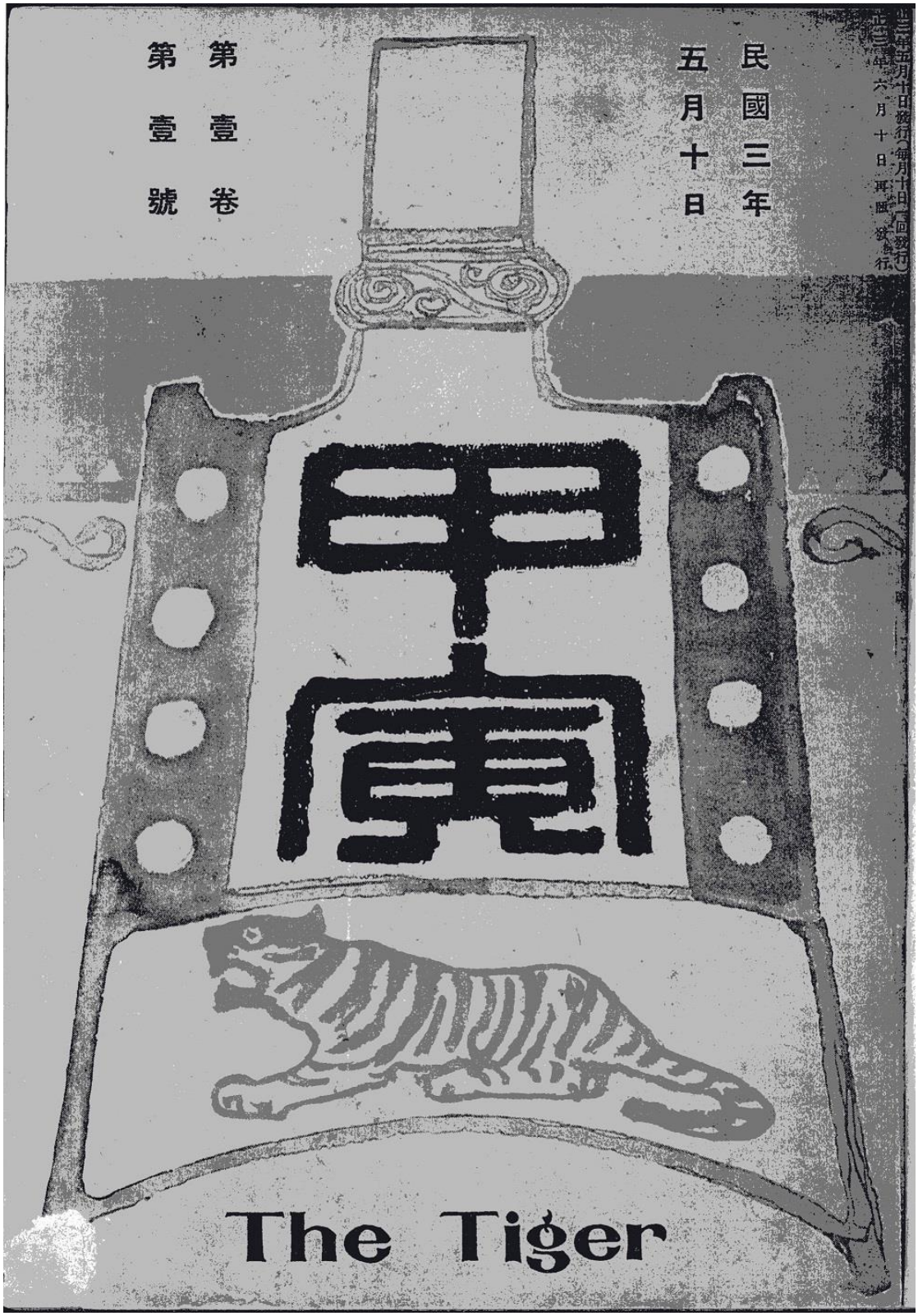
周作人の名付けはそこを捉えている。この序文に言うように、“分家”に出されたのは文学や芸術に関わる「虚」の文章であって、それに「龍」と付けたのは「龍・虎」という虚実を対称した絶妙の名付けである。しかし本家はあくまで現実に関わる「虎」なのである。虎といえば『礼記』以来“苛政は虎よりも猛し”ということで現実の酷い政治との連想があり、ここも民国の政治・社会という現実にたいする社会批評・政治批評を除外しない。しないどころか人事に関する文章を除いたほかはほとんどが社会現象を問題にした時評の文である。そうした文章を「虎」に関するものと考えてよいのだが、周作人がほんとうに目指したのはもっと直接的な、この時期に関わる論戦の文章を言う。「大半は個人にわたる文章」とは具体的には『現代評論』派との論争の文章である。いまある『談虎集』に残されたものでは「奴隷の言語」がその典型とも言える一つである。この文章は『現代評論』が北洋軍閥政府から金をもらって運営されていたのでそこを衝いたのである。軍閥政府は三一八に見られるように学生運動や市民の活動を弾圧した。その時の教育

総長が章士釗であった。彼は民国の初期に東京で『甲寅』という雑誌を刊行し、様々な新しい思想を公表する場を提供した。陳独秀なども寄稿しており、ある意味では『新青年』のゆりかごでもあった。それが後期の『甲寅』になると白話反対で文言を主張して、文学革命や新文化運動に反対する立場をとった。彼は軍閥政府に食い込み、教育総長や司法総長を歴任した。『現代評論』派は西洋留学者が多く、新しい思想を装いつつ、現実には軍閥政府の高級官僚を後ろ盾としたのである。周作人のいう「真談虎集」の「虎」は『現代評論』の象徴としての章士釗を言うのである。しかしこの時期の文章をまとめるに際して、彼は紳士の態度でもって論争の文章を省いてしまった。彼は自分の性格にはごろつきと紳士の二面があるというのだが、それは彼のその時々の都合の良い使い分けであろう。『談虎集』が刊行された 1926 年夏というのは、国民党の北伐が開始されると同時に、軍閥政府の知識人弾圧も強化され、ヘタをするとどういう言いがかりで逮捕令が出るかもわからない状態であった。魯迅が南下して廈門に行ったのもこの頃である。周作人が論争の文章を省いたのもそういう政治情況に対する対応の一つであったかもしれない。ともかく章士釗つまり「老虎」を後ろ盾とする『現代評論』派との論戦を省いたがために、『談虎集』の焦点は完全にボケてしまった。『談虎集』は普通の社会時評として読めばそれでよいのであるが、裏には決めて政治的な情況があったことも頭に入れておくとよい。

[ii] 葉公の話　劉向『新序』巻五「雑事」に見える。

[iii] 豢龍氏　龍を飼ったという伝説の氏族名。『左伝』昭公二十九年に見える。

[iv] 『真談虎集』の図案　「後の『甲寅』」は民国 14 年 7 月に章士釗が再刊したもの。前のは民国 3 年（1914、甲寅）5 月に東京で発行されたもの、共に主編は章士釗である。ここで前後と言うものの雑誌の表紙のデザインは後掲の通り全く同じで、色彩も同様である。周作人は前期の『甲寅』を直接には見ていなかったようである。前期は甲寅の刊行、後期は戊寅で共に寅年である。




『甲寅』創刊号表紙

『甲寅週刊』創刊号　出典：百度百科

## 02　祖先崇拝

極東の各国にはいずれも祖先崇拝という風習がある。いま未開の民族は多くそのようで、ヨーロッパの古代にもあった。中国がいまに至るまで、まだこの部落時代の蛮風を保存しているのはまことに奇怪である。わたしの考えでは、このことは道理に合わないばかりか、事実としても有害で、廃止すべきだと思う。

第一に、祖先崇拝の原始的な理由は、むろん精霊の信仰に基づく。原人の思想は、万物を霊あるもので、形体はしばしの住処にすぎないと考えた。だから人間は死んだ後依然として霊があって、この世に止まり、飲食起居も生前と同じなのである。それらの賄いは子孫によって供給される。でなければ死んだ霊を怒らせ、災害が起きる。これが祖先崇拝の起源である。現在、科学が盛んになって、世の中には幽鬼なぞないことはとっくに分かっており、この人を騙る祭礼はむろん止めたがよい。この風習は、時間を無駄にし、金を費して、大変な損失で、しかも線香を絶やさず供物を受けるという迷信によって、多くの男たちは往々にして“不孝に三あり、後なきを大と為す”という謬説を口実に、妾を囲い婢を買い、人間倫理を破壊しているのは、実に人道に合わない悪事である。

第二に、祖先崇拝が少しく高尚になったわけは、「本に報じて始に還る」ということである。彼らは言う。「身体はどこから来たか考えてみよ。父母がお前を生んだのは、昊天の限りない恩恵である。どうしてそれに報いずにおれようか」と。わたしはこの理由はそれほど妥当なものとは思わない。父母が息子を生むのは、息子にとってはなんの恩恵でもなく、父母の側こそ借りができたことになる。わたしは、この世に千百年もの間人類の教訓となり得るような経典があるとは信じない。ただ生物の生活現象を記した Biologie（生物学）だけがわれわれの参考になって、人類の行為の基準を定められるのだ。自然律の上では、確かに祖先は子孫のために生存するのであって、子孫は祖先のために生存するものでは決してない。だから父母が子どもを生むのは、つまり彼ら（父母）の義務が始まる日であって、子どもが成人になるまでそれは続くのである。世に孝行息子とは〔父母の〕借金を返すものだと言われるが、わたしの考えでは、息子は誰もが借金の催促をするものであって、父母こそが借金を返す――彼を生んだ借金――側である。債務が清算されると、本来ならばすでに“両方相済んだ”ことになる。だが結局は一体の関係で、天性の愛情というものがあって、互いに関係し合うから、生涯にわたる親子の情というものが生まれる。恩ということについては、まことに言いようがない。もしもほんとうに自然の規律を理解するならば、自分を生んでくれた者の恩に報いるには、いっそう努力して人間となり、自分が父母よりもより良くなり、自分の義務――子どもに対する債務――つまり子どもを自分よりももっと良くするようにしなければならない。それこそがまっとうなやり方である。もしも相変わらず祖先を崇拝して、古人になろうとし、羲皇より盤古の時代に遡り果ては類人猿の時代まで行こうとするような人間形成法は、自然律からすれば、明らかに逆行であって、決して許されるものではない。

多くの人が「わが国は文明開化が最も早い」とか、「わが祖先の文明はどうであった」とか言うが、わたしの最も嫌いなものだ。開化が早く、古い時代に少しばかり文明があったというのはも

ともとよいことである。しかしどうしてそのように崇拝し、まるで人間の一生の事業が、自分の祖先にべんちゃらを言うほか、何一つとしてないようにならなければならないのか。たとえば道を歩くとする。目的は前進することだ。過去の何歩かは、元来自分たちが前進する基礎であるが、どうしてもそこに立ち止まらなければならないということはない。振り向いて、色々数え上げては良いというのは、却って前進という本来のことを誤ってしまう。さらに何歩か歩むのは、もっと良いものがまさしく前方にあるからである！古い時代の文化があるからこそ、現在の文化がある。祖先があるからこそ、われわれがある。しかしもし古い時代の文化がいつまでも変わらず、祖先がいつまでもいるならば、いまの文化もわれわれもありえない。だからわれわれが感謝するのは、まさしく古い時代の文化が生まれては去り、祖先が生まれては死にして、いまの文化とわれわれを残してくれたからである。――いまの文化は、将来もまた来ては去り、われわれも生まれては死にして、いまよりももっと良い文化と、われわれよりももっと良い人間とを残すことができる。

われわれは断じて祖先を崇拝してはならないし、また子孫にわれわれを崇拝するよう望んではならない。

ニーチェは言う。「君たちは祖先の国を愛してはいけない。君たちの子孫の国を愛すべきである。……君たちの子孫によって、君たち自身が祖先の子孫たる不幸を救うべきである。君たちはこうして一切の過去を救うべきである」と。だからわれわれは祖先崇拝を廃止し、自己崇拝――子孫崇拝に改めないではおれないのである。　　（民国八年三月）

※初出：1919 年 2 月 23 日『毎周評論』第 10 期

## 03　思想革命

近年来、文学革命の運動は次第に効果を現してきて、「三綱五常の名教」をかつぐ経学者や、「鴛鴦の瓦冷たくして」を作る詩余の作家など数人のほかは、白話をまっとうだと思う人がいくらでもいて、雑誌や新聞にも、しょっちゅう白話で書かれた文章を見るようになり、白話の社会における勢力は、日ましに盛大になった。これはとても楽観すべき事である。だが、文学というものは本来ことばと思想の両者から成るものだと思う。思想を表現することばがよくなければ、もちろん文学の発達を阻害するに十分だが、もし思想の本質がよくなく、いたずらにことばだけがあるとすれば、それもいったい何の役に立つか。われわれが古文に反対するのは、大半もとはと言えばそれが難解晦渋で、国民の曖昧な考えを養い、表現力と理解力とを発達させないからである。だが一方、実はその中の思想がでたらめで、人間に有害だからである。この儒教と道教が合成した不自然な思想は、古文の中に寄寓して、何千年来、しっかりと根を下ろし、粛清されたことがない。そのためこのでたらめな思想と晦渋な古文は、ほとんど融け合って一つになり、分離できなくなっている。手近の古文を開いてみると、たいてい決まってでたらめな思想が顔を出す。たとい現代の人間が古文の文章を書くとしても、いくつか古典の熟語の使用は免れない以上、そのでたらめ思想はすでにことばのうちに浸透してしまっているから、むろんのこと至るところで顔を出す。たとえば年月を記すのに、民国という名は古くないからというので、「春、王の正月」と書けばもちろん宗社党の気味が濃いし、「己未孟春」と書けばこれまた遺老のようだ。いま古文を廃棄して、このでたらめ思想を表現する専用の道具を撤去するのも、また有効な方法ではある。だが連中の心の中の思想は、おそらくついに一時には変わらず、いつか癖が戻って、相変わらずでたらめに書き出すだろう。以前は古文だったのが、今度は白話を使うというだけに過ぎないだろう。話は解りやすくなったけれども、思想の方は相変わらずでたらめで、相変わらず有害である。ちょうど「君師主義」[i]の人間が、洋服を着、維新の看板を掲げるが、まさかほんとうに民主政治を実行すると言えようか、というようなものである。こんな単にことばを変えただけで思想を変えない改革が、どうして文学革命の完全な勝利だなどと言えよう。

中国のでたらめ思想を抱いた人間は、ふだんそのでたらめ思想を公表するのに、必ずいわゆる古文を使って、白話は使わないけれども、連中の口にのぼるのはもともと一つとして白話でないものはない。だからもし白話が通行して、でたらめ思想がなくならないとなれば、依然として楽観はできない。というのは連中は以前『聖諭広訓直解』[ii]を書いた方法でもって、筋の通らぬ白話でけったいな三綱五常の名教を説くこともできるからである。連中は三綱を説いて「三本の綱」と言い、「親父は息子の綱であり、夫は妻の綱である」と言い、またあるいは例によって復辟を論じて、「皇帝の復職」と言うだろう。われわれはどうして連中の話すのが白話だからといって、かの四六文や桐城派の古文よりも重く見ることができようか。たとえば「皇帝の復職」を提唱する白話文があったとする。「復辟を非とす」と言う古文と一緒にして、どちらがよいと言えるか。わたしは中国の淫書はみな白話を使っているのをみて、それで白話の前途の危うさに気がついた。中国人がほんとうに「心を洗い面を革める」改悛をやり、旧来のでたらめ思想を捨て去らない限

り、古文であろうと白話文であろうと、いずれにしろ碌なことは言えない。たといドイツ語やエスペラントに意匠替えしたとしても、「黒幕」小説を書いて、忠孝節烈をかつぎ、連中のでたらめ思想を公表できないわけではない。もし湯を換えただけで薬を換えず、単に古文を白話に換えただけなら、それは上海の書店の訳した『白話論語』のように、まだしもやらない方がましなのである。なぜならば以前のでたらめ思想は、まだ晦渋な古文の中に寄寓していて、読んで中毒する人間は、やっぱり少数であったが、白話に変わったとなると、もっと広く通行して、流毒は極まりなくなるからである。だから言うのである。文学革命において、ことばの改革は第一歩であって、思想の改革が第二歩であるが、第一歩よりもずっと重要であると。われわれはことばの面であまりに楽観しすぎて、こちらの重大問題を閑却してはならない。　（民国八年三月）

※初出：1919 年 3 月 2 日『毎周評論』第 11 期

---

[i] 君師主義　　中国の人倫において絶対に尊崇服従すべきものとして「天地君親師」という五つがあるとされ、「君師主義」の「君師」はそこから抽出してその全体をいう。「君師主義」はつまり中国旧思想のエッセンスである。周作人のこの文章は、直接には『新青年』第五巻第六号（民国七年十二月）に載った高一涵の「君師主義を非とす」を承ける。高一涵はその文章で、発令されたばかりの徐世昌の「大総統令」を取り上げ、それが公然と「天地君親師」の旧思想によって個人の道徳に干渉していることを指弾して、特に辛亥革命は制度の革命は行なったが、思想の革命を行わなかったから、こういう事態が出来したのだと述べて、のちの五四新文化運動における「思想革命」の端緒を切った。

[ii]『聖諭広訓直解』　　清王又樸撰。書の原本そのものは清の世宗雍正帝の撰で、一巻、人民が守るべき日常倫理を説いたもの。直解本はそれを民衆に解りやすいように、具体例を提示したりして口語で解説敷衍している。多く役人が民衆を説教啓発するための種本として使われた。「直解」とは読めばそのまま理解できると言う意味だが、多く文言を口語に翻訳した書物の名として使われる。日本で言えば抄物に当たるか。

## 04　前門にて騎馬隊に遇うの記

中華民国八年六月五日の午後三時すぎ、わたしは北池子から南に行き、前門を出て少々買物をするつもりであった。宗人府夾道まで来て、通行人があまりに多いので、ちょっとおかしいなと思った。警察庁の前まで来ると、両側の歩道は人でいっぱいで、車道の真中には大勢の軍警が立っていた。もう少し行ってみると、長衫を着た青年の隊列がいくつか、隊ごとに国旗を一枚持ち、通りの真中に立ち、周囲はやはりみな軍警であった。わたしは前に進もうとして、兵隊の何人かに止められた。人は兵隊の話をすると、とても恐がるが、兵隊だってわたしと同じ中国人だから、なんの恐いことがあろうか。その兵士たちは果たしてなかなか穏やかで、これ以上前に行かないでくれと言った。わたしは言った。「あの連中だって我が中国の公民だし、武器も持ってないんだから、横切ったってなんの危険があるものか。」「とがめないでくれ。おれたちだって仕方がないんだ。ちょっと待ってくれたら、通れるようになるさ。」わたしはそれを聞いて安心して立っていた。と思いもよらず怪しげな叫び声が聞こえた。「北へ行け！」とか言ったようだった。向こうの方に鉄蹄の響きが起こり、わたしはまるで自分の右肩のあたりに、赤毛の馬の顔が突き当たったような気がした。その時はみんな大慌てで、一斉に北に向って走った。うしろではまだ馬蹄の響きと怪しげな叫び声がしていた。危険が去ったと思ったので、立ち止まってみると、なんと「履中」の牌楼の下まで来てしまっていた。気を鎮めて、もう一度前門を出る算段をしてみたが、何としてよいか、どっちに行けば騎馬隊に蹴散らされないで済むか分からなかった。そこで持ち場についている警官に尋ねた。すると彼はとても親切に、天安門から南へ、中華門を抜ければ、安全に出られると教えてくれた。礼を言って、指示通りにゆくと、果たしてなんの危険もなかった。石敷きの道を歩きながら思った。今日出くわした様子では、兵士や警官は皆よくしてくれ、確かに同国人らしかったが、騎馬隊だけはとても恐ろしかった。馬は無知な畜生だから、むろんまっすぐ突っかかってき、共和が何で、法律が何か知らないのは当然だ。だが馬上には乗り手がいたようだし、それは当然兵士か警官だったろう。彼らは馬に乗ってはいても、自分の考えと思想は持ち合わせているだろうに、どうして馬に任せてわれわれ自分たちの側の人間を踏みつけるようなことをしたのだろうか。わたしはその時逃げてはいけなかったのだ。逃げずに馬上の“人間”と話をすべきであったのだ。そうすれば彼もきっと穏やかで、物の道理がわかり、われわれを保護してくれるだろうことがわかったはずである。わたしはそうぜず、馬に驚いて、逃げることばかり考え、ポケットの十何枚かの銅貨を全部失くしてしまったことを悔やんだ。そこまで考えたところで、思わず天安門外の三十九番目のテントの前まで来てしまい、もう一度引き返して彼らと話をしようにも、もう間に合わなくなってしまった。夜、家で午後からの事をふり返ると、腹立たしくもまたうれしくもあった。腹立たしいのは自分がろくでなしで、騎馬の人間と話をしなかったこと、うれしいのは幸いにも馬に踏みつぶされなかったことで、これはやはり幸運なことであった。そこで筆を執って、この一篇を記め、記念とする。以前中国の文人は危険な目に遇うと、事後にしばしば『思痛記』とか『虎口余生記』*とかいう類のものを書いた。今度のことはなんのたいしたことでもないが、わたしには初めてであった。以前外国で道を歩いていても、兵士

や警官の叱咤や駆逐を受けたことはなかったし、生命からがらの追跡に遇うというようなことは、なおさらであった。いま本国の首都でこんなにびっくりしたのは、まことに「人の意表の外に出る」ものであって、そのためどうもオーヴァーになって、こんなよけいなことを書いてしまった。しかしわたしは今度の遭遇を悔いてはいない。これで得た教訓と覚醒とが受けた侮辱をはるかに上回るからである。

※初出：1919 年 6 月 8 日『毎周評論』第 25 期

---

* 『思痛記』『虎口余生記』　　前者は『周作人読書雑記』第 4 巻 52･53 参照。後者は明末の人辺大綬の撰、知不足斎叢書などに収録、最近では明代野史叢書版（北京古籍出版社）などがある。

## 05　ラッセルと国粋

ラッセルが来華した。彼は最初の演説で、中国人に粋を大事にするようにと勧めた。これは必然的に中国の人間、上は遺老から下は青年に至るまでみなの歓迎するところとなった。

ラッセルのこの言葉は、あるいは客と主人との付き合いの上での必要な応対であるのかもしれない。しかしわたしは賛成できない。

中国の古代の老荘などの思想には、確かによいものがある。だが今ではすでに絶滅している。いまの共和国の国民はもう「長となるも宰せず」〔頭となっても支配せず。『老子』五十一章〕とかいうことも覚えてはいない。連中が抱いているのは尊皇攘夷の思想なのだ。

国粋とは実は社会的な遺伝性のようなものにすぎないと思う。いいものであって、しかもまた今でもなお存在していなければならない。それでこそ保存する価値があり、保存することもできるのだ。たとえばいま相当思想のある人間がいたとする。われわれは優生学の方法によって、その人特有の能力を保存し、それを後世に伝えればよろしい。もしその人がすでに亡くなっていて、子孫がアホになったら、その系統はそこで途絶えたことになる。一つの著作を残しても、以前かつてこんな偉大な思想があったというにすぎないのであって、彼の子孫の頭脳にはむろんアホな思想しかなく、通じ合うことはできないのである。中国の国民性の中には、尊王攘夷、名を変えれば復古排外の思想の外には、ほんとうに何も特別保存できるようなところはないと思われる。いくつかの古書にはいいところもあるのだけれども、不肖の子孫の眼には、白紙に書かれた黒い文字でしかない。虫食いに負かすのはもともともったいないことだが、保存させたところで、裱装してアホの書棚に置いておくにすぎなくて、そいつの頭に入れることはできないのである。もう一点ある。そいつに老荘を大事にさせたところで、他のまじない治療や星占いの本も裱装して、老荘は見ても解らないが、まじない治療や星占いには興味津々で、国粋は全部そこにあると思うだろう。

中国人はどうしてインドのタゴールが好きなのだろう。それは彼が東方化を主張し、西方化に抵抗するからである。どうして国粋や東方化を言うと、中国人は喜ぶのだろう。懶け者で、頭を使うのがこわく、生活を改めるのがこわいからだ。だから新しい思想・新しい生活に反対し、復古しようとし、排外しようとするのである。

ラッセルは中国に来たばかりだから、中国の内情はそれほど知らない。まもなく分かるだろうと思う。中国の欠点は長所より多く、中国人には夜郎自大の性質があるが、それは賞賛できない。

われわれはラッセルの社会改革の意見を歓迎する。これがわれわれの彼に対する唯一の要望である。　（一九二〇、十月十七日）

※初出：1920 年 10 月 19 日『晨報副刊』

## 08　訳詩の困難

日本の太田君が一冊詩集をくれた。太田君は医学士であるが、彼はまた絵画を善くし、多くの詩歌戯曲がある。彼の別名は木下杢太郎で、日本の芸術界でもとても有名である。この詩集の名は『食後の唄』で、一九一九年十二月の出版。一通り繰ってみて、何首かは非常に趣味があると思い、それを中国語にしたいと思った。しかし一晩やってみたが、ついになんの成績も出せなかった。

われわれ自身が詩文を作るのは、自由である。完全に表現できない意味に出会っても、いつもそれを全部かあるいは部分的に変えてしまうので、あまり困難を覚えない。翻訳となると、文中の意味はもともと生まれついてのものだから、われわれの改変を容れない。そしてありきたりの文句ではどうしてもうまく合わず、元々もっている趣味が伝達できない。そこで困難が発生する。原作がもし散文なら、まだ無理やりなんとかなるが、詩歌だと、その価値はすべてが思想にあるのではなく、まだ調子とか気韻とかに大きく関係するので、実際手の着けようがない。原作の価値を尊重するなら、訳さないという方法しかない。

中国語は孤立した単音の言葉が多く、文法の変化がなく、文芸の淘汰と学術の編制を経ていず、細緻な文詞を欠いている。これは極めて大きな障碍である。文学革命を言う人は、もし時代の新しい要求に応じて、創造に努力し、中国語の内容を豊富にし、組織を精密にしないならば、外来の文芸の情調を伝述できないばかりか、自分の少しはきめ細かい優美な思想でさえも、表現できなくなるかもしれない。

中国語の能力は一体どんなものか、改造して次第に完善に至るのかどうか。この問題はわたしには回答できない。

かつてこの事を友人の玄同君に話すと、彼は言った、「中国語の改造は元々喫緊であるが、翻訳という点では、別にそれほど解決が難しいという問題はない。翻訳は本来緊急の方法でしかなく、しばらく飢えを満たすだけだ。もし彼らが腹一杯食べたいというのであれば、やっぱり自分で耕して食べるしかない。訳せるものは訳し、訳せないものはいっそ訳さないで、読みたい人には自分で原本を読んでもらうことだ。」この言葉はストレートで、やりやすいと思うので、わたしの『食後の唄』の翻訳もおかげでボロを出さずに済んだ。（十月二十日）

※初出：1920 年 10 月 25 日『晨報副刊』

## 09　民衆の詩歌

キャラコを包んでいた紙の上に、一首いい詩を見つけた。いま次に書き写す。

「もしも酒の字なくしたら、人を請んでも場が持たぬ。もしも色の字なくしたら、男と女に後継できぬ、盆と正月誰が墓に来よう。もしも財の字なくしたら、国に金なく商売上がったり。もしも気の字をなくしたら、多くの神仙成り立たぬ。酒を飲んでも酔わないのが真の君子、色を貪っても迷わないのがこれぞ英雄豪傑。」

この詩は当然生地屋の店員が書いたものだろう。彼の著作でないとしても、彼の愛読する作品であるに違いない。わたしは読んで二つの感想を持った。最初のは民衆文学の形式についてであり、第二はその思想についてである。

この詩を読むと、多くの芝居や山歌〔民謡〕と同じく、どれも七言を基本としており、したがって多くは下手で単調なものになってしまっている。それらはまるで詩（それも七言の）から直接変化して来て、詞曲〔詞・長短句〕の自由な句調の好い影響を受けたことがないようである。しかし一つ特色はある、つまり叶韻をしなくてもよく、また二句一聯に限定せず、随意に句数を増減してよいことである。これはただこの一首によって言うのだけれども、ほかの山歌などの中にもきっと同様の例を求めることができるだろう。

その次にこの詩が述べる話は、実際中国の極めて多くの人々の思想を代表するに足るものである。妥協、従順、生活について熱烈な愛着がないし、また真摯な抗弁もない。それは酒色財気の必要を弁護し、ただ習慣上からしか着眼しない、これは習慣を必要とすることであって、決して彼個人を必要とすることではない。

われわれはあるいは彼のために弁解して、これは民衆詩人の着想・措辞の不完全さによるものであると言うこともできるかもしれない。だがストレートに「わたしは酒が飲みたい……したいのだ」と言う方が、実は不合理な解釈よりもずっとたやすいのだが、中国の民衆詩人にはそんな胆力はないか、――あるいはそうしたいという決心もつかないかであろう。もし権威あるものが出て来て「だめだ！」と一喝すれば、おそらく彼は酒色財気の需要も皆放棄してしまい、権威の意志に妥協するだろう。というのは中国人は生活をあまりに冷淡に見、また生活と習慣を一緒くたにしてしまうので、彼らが極端な現世主義を奉じて生活しているように見えるのも無理はないのだが、実際には一日として真摯で熱烈な生活をしたことがないのである。

しかし形式・思想がどんなにわれわれを満足させることができなくとも、民衆芸術のうちに表現された心情については、われわれに一種の同情と考察を引き起こさざるを得ない。太田君は『食後の唄』の序文で、「異香の酒を飲み、一方あの鄙俗なしかし涙に満ちた江戸平民の芸術を楽しみとする」と言ったが、これこそ実にわれわれ民衆文学を理解しようとする人の取るべき態度である。（民国九年十一月）

※初出：1920 年 11 月 26 日『晨報副刊』

## 10　翻訳と批評

最近翻訳界は賑やかになったと言える。しかし批評がないから、どうしても蕪雑になる。思うのだがいま文学に従事する人々は、積極的に仕事を進め、互いに批評し合い、他人を批評する勇気を持ち、他人の批評を受け入れる度量を持つべきだと。これの第一の要件は、批評は言葉の上の誤りに限り、決して批評される人の人格に及ばないこと。中国の各種の批評はいつも人身攻撃になりやすい。これは極めて卑劣な事であって、当然改めるべきである。たとえば一篇の訳文の中の誤りを批評するのに、某句某節は訳し間違っているとは言わないで、誰それは訳し間違えていると言う。またそのことからその人の無学と頑迷を推論し、その人を嘲罵し、ほとんど一字の誤りによって、その人の人格を侮辱し尽くしてしまう。しかし文句の誤解と粗略は、翻訳では常にある事であって、ちょうど作文でたまたま他の字を書くようなもので、誰かが訂正してやり、原文の意味を誤解されないようにすればよいのだ。だから批評は文句の上での糾正を限度としさえすればよいと思う。厳密にすべきだけれども、毛を吹いて傷を求めすぎるようではいけない。訳者（すなわち批評される者）の名前については、できるだけ触れない。なぜならこれはもともと人の問題ではなく、明らかにする必要がないからである。もし議論が公平で、態度が寛大なら、その時は匿名で発表しても構わないが、そのために流弊が出るようだったら、やはり名号を署名して責任を明らかにするに越したことはない。これはわたしの文学界に対する一つの期待である。

その次に、ある種の訳文にあまり満足できない場合は、自分でもう一度訳してみる、こうした方法にはわたしもとても賛成である。だがこれは有意の糾正の翻訳であって、はじめて批評の働きに代わるのであって、偶然に重なっての翻訳なら、それはまた別問題で、反対する必要はないけれども、提唱する必要もない。たとえばビヨルンスン（Bjornson）の小説『父親』は、わたしの知るところではすでに五種の訳本があり、いずれもそれぞれ関係がなく、偶然に先後して訳されたもののようで、決して前訳に対して糾正するところがあってのものではない。その五種とは、

（1）民国八年正月十九日の『毎週評論』第五号
（2）民国九年月日未詳の『燕京大学季報』某処
（3）民国九年四月十日の『新しい小説』第四号
（4）民国九年五月二十五日の『小説月報』第十一巻五号
（5）民国九年十一月十四日の『民国日報』第四頁

ここの第二を除いてわたしは皆原本を持っているので、いま一節を書き写し、互いに比べてみて、ついでに批評してみる。

（1）我想叫我的兒子獨自一人來受洗禮。
　　是不是要在平常的日子呢？
（3）我極想使我的兒子，他自己就受了洗禮。
　　那是不是星期日的事情？
（4）我很喜歡把他親自受次洗禮。
　　這話是在一星期之後嗎？

（5）我極喜歡他自己行洗禮。

那就是說在一個作工日子麼？

わたしから見れば、第一が最もよい訳となる。なぜならその村人は自分の息子がはっきりと衆人と違うことを見せたがっている、だから彼に一人で受洗させようとした、日曜日に決まりきって他の家の受洗する子どもたちと一緒くたにはしたくない、牧師が彼に尋ねた言葉はつまり彼はそういう意味なのか、日曜以外の六日の間に受洗するのかと訊いたのである。Weekday という言葉は、漢文では確かに訳しにくい、だが「平常的日子〔ふだんの日〕」でもはっきり訳されている。その他の何種かはいずれもこの訳よりも正確ではない。だからわたしはたぶん無意に重なって訳されたのだろうと言ったので、わたしの賛成する有意の重なった訳出ではない。

最後に一つ、訳本の題名の相談である。最もよいのは原本の題名を用いることだが、もし人名地名の題名で、あまり適当でないところがあれば、替えても構わない。しかし注意すべきは、その題名が内容と合っていなければならず、いい加減に付けて、作者の原意を失してはならない。わたしが見たモーパッサンの二篇の小説の訳本は、その一つの原名は『脂肪の塊』で、女性のあだ名であるが、訳本は『娼妓と貞操』と改めてある。その二の原名は『マドモワゼル　フィフィ』だが、訳本は『軍暴〔軍の横暴〕』と改める。たとい作者の意図がもともとそうであっても、説明しようとしない以上、われわれも出しゃばって彼の代わりに言うべきではない。もし言って作者の意図と合わなければ、もっとまずいことになる。以上はわたし個人の意見であって、なかなか周到には言えない。みんなの参考にと書いたまでである。（民国九年十一月二十一日）

※初出：1920 年 11 月 23 日『晨報副刊』

## 11　批評の問題

最近ある詩集のために、又も大論争をやらかした人がいる。この詩集とそれによって起こった論戦は、あまり気に留めていなかったので、何も議論することがないが、ただそれをきっかけに古い一件を思い出したので、このことを書いてまずは前置きとする。

ある日、ある友人と話していて批評家の任務に及んだ。わたしは批評家はもっぱらよい著作を紹介すべきで、無価値でいやらしく反吐が出そうになる作品は、構わないでよい、と言った。理由は全部で三つある。その一、読者の興を冷ますべきではない。読者が要求するのはよい著作で、今は無価値等々の書物を事細かに批評し、その無価値等々の所を一々列挙するのは、読む人間を興ざめさせるものではないか。たとえば遊山のガイドが、よい風景を指して見物客に見せるのではなく、彼らに路上の汚い馬糞がどのように不潔かを説明するのは、あまり適当でないのではないか。その二、いまの人間はまだあまり批評を受け止める雅量を持っていない。彼の著作を立て続けに賛嘆し、最後に一句「湏(まつと)に人一編を手にせざるべからざる也」とやれば、まずはよろしかろう。もし彼の欠点を何カ所か指摘すれば、たちまち悶着を起こし、怒鳴り合い殴り合い、訴訟、械闘に至る。これはまたなんとも面倒なことだ。その三、古人には悪を隠し善を表揚する義があった。中国の事は、例によってやれるが言えない、古訓はうまく言っている、「人に過ち有るを聞けば、父母の名を聞くが如く、耳は得て聞くべきも、口は得て言うべからず」と。三部か四部欠陥書を書くのは、畢竟商家が欠陥品を売るのとは違う、(欠陥品を売るのは故意に人を騙すことだが、欠陥書を書くのはただ才能に限りがあるからに過ぎない、)まだ必ずしもひどい悪だとすることはできない。むろん許してやるべきだ。

友人は賛成しなかった。彼は言った。批評家の任務は、もちろんよい著作を紹介することにあるが、もし不幸にしてよくない著作が出現すれば、彼はやはり攻撃を表明すべきだ。遊山のガイドは常人の注意しないよい景色を指して人に見せてやることができる。もちろんそれは彼の任務である。だが彼がもしこの事ばかりにかまけて、途中の悪いところを見ずに、遊山の客が気をつけず、蹴つまずいて泥や馬糞の中に倒れたなら、もっと人の興を削ぐのではないか。だから批評家は一面ではあまり愉快ではない任務を持つ、つまり道路掃除人*で、路上の泥や馬糞をスコップで一々浚っていく。だから一言に総括すると、批評家は実際文学界における道路掃除人兼道案内なのだ。

この友人の話はわたしの言う第一点を論駁しているだけで、わたしの主張もこれによってあまり堅固でなくなったけれども、だがわたしはどうしてもまだ服従する気になれず、相変わらず自分の主張が正しいと思っている。いま考えるに、また友人の言うところも間違っていないように思われ、批評家は確かに道路掃除人、――あまり愉快でない職業である。そこで道路掃除人*である批評家についてわたしは同情を示さないわけにはいかない、なぜなら彼が進んでこの不愉快な任務を受け持つ勇気を持っていることに敬服するからである。わたしも以前は一つの願望を持っていて、批評家になりたいと思った。ただ結局発表する文章がなく、いまではやらないことに決めた。というのはわたしの肝っ玉はあまりに小さ過ぎるようで、人に謝罪するのと人から訴訟さ

れるのが怖いからである。（民国十年五月十日、病院にて）

※初出：1921 年 5 月 14 日『晨報』第 7 版

---

* 道路掃除人　胡適が五四時代に呉虞の評論活動を称して中国思想界の道路掃除人と言ったことがある。

## 12　新詩

現在の新詩壇は、消沈しきっていると言える。何人かの老詩人はなぜだかみんな秋の蝉のように、あまり声を上げず、しかも鳴く声もか弱い。まるで盛りは過ぎ、芸術生活の弾丸は、すでに老衰の坂へと向かっていると表明しているようなものだ。新進の詩人も、出てきそうもない。詩を作るものは、少なくないのに。だが聖書に言うように、召されたものは多いが選ばれたものは少ないのだろう。だからみんなが辛苦して開墾した新詩田が、道半ばで廃棄された荒蕪地になってしまい、一班の閑人たちが牛を放つままになっている。見てみなさい、中国の詩壇は、ほとんど全部かの「相思の苦」を改めたものと「詩のなんとか主義」[i]の先生たちが牛耳を執っているではないか。詩の改造は、現在まで実に一年半言われただけで、語体詩の本当の長所を、まだ誰も完全に示したものはいない。したがって基礎は決してそれほどしっかりしていない。かの老詩人たちは大功はすでに成ったと考え、すぐに引退した。ちょうど革命の時に、みんなが改革はすでに成ったと考え、過度に楽観し、ちょっと気を緩めた隙に、予束髪より書を受く、つまり心を民生主義に傾けた人[ii]が出てきて、大権を掻っ払い、君師主義の民国を作り上げたようなものだ。いまの詩壇が、一つの小中国でないことがあろうか。もともと慣れてしまった圧迫と苦痛は、不慣れな自由よりは、味わいはずっと甘い、だから革新の人間は十分に堅持する力がなければ、とうてい勝ちを得ることはできない。新詩が提唱されてすでに五、六年、理屈からしても少なくとも会の一つ、あるいは雑誌の一つもあって、専門にこの問題を研究すべきはずである。いまはないばかりか、逆に日々消沈してゆき、それが又前人の轍を踏むのではないかと恐れる。昔手ずから詩国を創った先生方よ、あなたがたの『孫文小史』[iii]が出現する日はたぶん遠くないだろう。（民国十年五月）

※初出：1921 年 6 月 9 日『晨報』第 7 版

---

[i] 「詩のなんとか主義」　未詳。

[ii] 袁世凱を言うのだろう。「束髪より書を受け」たけれども、科挙には受からなかった。

[iii] 『孫文小史』　袁世凱が孫文を日本と密約をしていると誹謗するために配下に書かせた小説。未見。

## 13　美文

外国文学には一種のいわゆるエッセイがあり、その中はだいたい二種類に分けられる。一は批評的なもの、学術性を持つ。二は記述的なもの、芸術性を持ち、又美文とも言われる。この中は又叙事と抒情とに分けられるが、両者が混じっているものも多い。こうした美文は英語国民の中で最も発達しているようで、中国でよく知られているアディスン、ラム、オーウェン、ホーソーンなどの諸人はいずれもとてもよい美文を書いている。近頃ではゴールズワージ、ギッシング、チェスタートンも美文の巧者である。よいエッセイを読むと、散文詩を読んでいるようだが、それは実際詩と散文との架け橋であるからである。中国の古文の中の序、記と説なども、美文の一類と言える。だが現代の国語文学では、こうした類の文章を見たことがない。新文学をやる人はなぜ試してみないのだろう。わたしは文章の外形と内容は、確かに関係があり、多くの思想を含み、小説とすることができず、又詩とするにも不適切なのは、（これはただスタイルの上から言うのであって、もし性質を論ずるなら美文も小説であり、小説も詩であり、『新青年』に載ったクプリーンの作『晩の来客』*が、その一例となる、）エッセイの形式でそれを表現することができると思う。その条件は、一切の文学作品と同様、ただ真実簡明でありさえすればよい。われわれは外国の模範を見て書いてよいが、自分の言葉と思想を使わなければならず、それまで彼らを模倣することはできない。『晨報』誌上の浪漫談は、以前は何篇か少しばかり近いものがあったが、後になって（ストレートに言うのを許してもらいたい）旧套に陥り、いくらか自然現象の字句と、衰弱した感傷的な口調で、あまり生命を持たなくなった。わたしは希望するが、みんなが捲土重来し、新文学に新たな土地を開拓すれば、よかろうではないか。（民国十年五月）

※初出：1921 年 6 月 8 日『晨報』第 7 版

---

* クプリーン『晩の来客』　　周作人の訳で『新青年』第 7 巻第 5 号（1920/4）に載り、後『点滴』『空太鼓』に収められた。

## 14　新文学への非難

『改造』三巻十号に、フランス留学生が、「新文学を談ずる者」に対して幾つか不満を表明している。中国の今の新文学運動は当然とても幼稚であるが、留学生君の不満もいくらか誤解のところがある。

留学生は中国の読者の程度、訳者の人数、出版界の力量は、いずれもフランスと同様だと思っている。だから「新文学を談ずる者」がなぜ「ホーマー、ダンテの作」を訳さないのかと訝っている。しかし「少しばかりのモーパッサンの短篇小説」さえまだ認める者が得難いし、訳者も精力の限られた一ダースばかりの非「天才」であり、辺幅のやや多い『戦争と平和』などになると、訳したいと思っても出版を引き受ける書店がないことを知っているだろうか。

メーテルリンクの象徴劇は、なんとか少しばかり訳す人は出た。「ハウプトマン」の新ロマン主義の小説に至っては、確かに「多数の国民にして文学を談ずる者は、なおその名さえ挙げることができない！」のである。留学生君にその名をざっと挙げてもらい、われわれの視野を拡げてもらって構わないのではないかと思う。

あらゆる非難には、全く理由がないわけではない。「新文学を談ずる者」は虚心に受け入れ、理由があればそれを改め、なければ努力を加えるべきである。だが批評者の方でも、一種の覚悟をもつ、つまり自分で手を着けてやる準備をすべきである。たとえば人力車に乗るとする、車夫が走るのが遅いのを嫌えば、最もよいのは自分が跳び降りて走ることである。車夫が走るのが遅いのには、自ずと速く走れないわけがあろうから、思いやるべきである。以前南京で、ある西洋人が車の走るのが遅いので、跳び降りて、車夫を車に乗せて、自分から引っ張って飛ぶように走ったのを見たことがある。これこそまことによいお手本である！（民国十年六月）

※初出：1921 年 7 月 26 日『晨報』第 7 版

15　ぶつかって怪我をする
【附録】編集余談

『雉の炙り焼き』[i]という小説を読み終わって、思わず一般の宣伝事業に従事する人のためにくしゃみが一つ出た。それでまた心の底に隠れていた全くもって申し訳のない事を思いだした。この機会にあれこれ書いて読者に公開する。

ちょうど一カ月前（六月十日）、われわれの雑感欄に子厳先生の書いた「ぶつかって怪我をする」[ii]という小文が載った。凡そ本誌の雑感に注意している人なら、ほかの文章はたやすく忘れても、この一篇はきっと決して忘れないだろう。だからその内容をこの際重ねて述べることはしない。この文章の意図はもともとなんの奥妙なところもなく、言葉もなんの難しいところもない。言ってみれば精確、周到である上に、明澄でもあって、どの面についても誤解する者に乗ずる隙を与えないと思うし、いくら考えても決して誤解などあり得ない。

しかし「人の意表の外に出る」事はほんとうに何処にでもあるもので、この文章が発表されて、二日目にＬ先生という方が雑感を書いて送ってこられた。これがすなわちはじめて記者がどうしていいか分からないほど済まなく思った日である。

わたしはいまともかくも彼の文章の何段かを抄録して読者に紹介しよう。

「彼は言う、“たとえばわたしが棘のある鉄甲を着たり、あるいは見毒の蛇であったり、あるいは剣仙であったりして、誰かが来て触ったり、あるいは見たり、あるいはわたしの機嫌を損ねたりして、その時彼らが負傷したとしても、どうしてそれがわたしのせいだと言えようか。”彼は政府を棘のある鉄甲を着ており、請願の人を毒蛇・剣仙に擬えている。彼らは大半が脆弱な書生で、残虐な鉄砲も持たないのに、なんでまた毒蛇や剣仙のような乱暴を働くのか？……どうして彼らを爬虫類に例えられるのか。……まさか彼らが皆四五十歳になっても、血気が衰えないと言うのではあるまい。学生も又手に武器なく、かの猛々しい丘八先生〔兵隊〕たちと衝突することができようか。……

「彼はまた言う、“ロシアだが、一千九百何年か、かつてこのために軍警が冬宮の前で発砲の挙に出、ぶち当たりかたがもっと酷かった。だが彼らもこれ以後は請願しなくなった。”ロシアの歴史は、わたしはもちろんよく知らない。某某先生の話では、ロシアは以後請願をしなくなったそうだが、ではいま見るに、国内の革命をやるのみならず、全世界の人種に革命をやらせようとしている。一度懲罰を受けたのち、もう騒ぎを起こさなくなったのに、どうして現在このような大きな思想が生まれたのか。……同胞よ、努力せよ！だからわたしは言おう某某先生は、他人の走狗になって、立派な人格を罵倒しなければ、それでよし！と。」

読み終わって、彼の語気の中に少しも悪の動機が見えず、彼は子厳先生の文章を、完全に誤解したのだと思った。いまでまる一カ月、わたしはまだどのようにすればこのような文章に対応できるかを思い付かずにいる。今日日本の佐藤春夫先生もとっくにこの点に気づいておられたのを見て、これを書き、宣伝事業のなかの疑問として掲げた。（民国十年七月十日『晨報』）

※初出：1921 年 7 月 10 日『晨報』第 7 版

[i] 『雉の炙り焼き』　佐藤春夫の小説、周作人はのちのこれを訳して『現代日本小説集』（上海商務印書館 1923）に収めた。

[ii] 「ぶつかって怪我をする」〔碰傷〕　子厳は周作人の筆名の一、この文は 1921 年 6 月 10 日『晨報』第 7 版に載り、のち『澤瀉集』に収められ、さらに『談虎集』にこの文章とともに収められた。

## 16　宣伝

先日記者先生の編集余談を見て、わたしの「ぶつかって怪我をする」という小文について、ちょっとした事件があったのを知った。わたしはいま自分について敢えて弁護しようとは思わない。ただ記者先生の熱心な憂慮について少し言い訳をしておきたい。

記者先生は宣伝事業のために憂慮しておられる。これは好意だけれども、わたしが言うのも無理はないので、これは実際には「杞憂」である。というのは宣伝は本来誤解を免れないので、宣伝する人も誤解されるのを構わないでやるか、あるいは結局誤解は宣伝の正当な報酬であるとも言える。ラッセルは『社会構造学』の第五講で、凡そ改進の意見は、大衆の指弾するところとならないものはない（原文ははっきり覚えていない）。だから旧権威旧迷信を離れて話をするのは、罵倒され殴られる機会なのであって、何も不思議はない、と言っている。たとえば最近新文学を語ると、人は「荊生」[i]に彼を殴らせようとするし、新道徳を語ると、人は彼が「百善のうち淫を真っ先にせよ」と提唱すると言うのは、いずれも実例である。もし宣伝を止めず、もっと運動しようとするなら、さらには実行に至るなら、彼らの報酬もむろんずっと大きくなる。『新青年』にはかつて『薬』という小説が載ったし、『晨報』に載ったことのあるツルゲーネフの散文詩[ii]のなかの「労働者と白い手の人」はその見本である。日本の社会党は、一般の貧しい友人のためになんとかしようとしているのに、その貧しい友人たちは又国粋党とか、皇国青年会とかを作り、彼らが会を開いて演説をやるたびに、必ず会場に押しかけ、社会党の指導者何人かの顔が歪むほどに殴りつける。イエスはユダヤ人のために救いの道を講じたが、ユダヤ人は却って彼が自分からユダヤ人の王と称するのは、大逆無道だと言って、無理やりローマの総督に彼を十字架の上に釘付けにさせた。われわれ後世あるいは局外の人間から見れば、いい気味でもあり可笑しくもある、しかし――実に不可避な事であるのだ。

イエスは言った、父よ、彼らを許し給え、なぜなら彼らがしている事を、彼らは分かっていないのだから、と。人々が分かることができてこそ、それはよくなるのだ。だがどのようにすれば彼らに分からせることができるかは、重大な難問であって、これはわたしと記者先生が深く憂慮するところである。フランスのル・ボンは、大衆の心理は極めて容易に変換する、たといハーヴェイの血液循環説のような、純学術的な真理であっても、彼らの旧い宗教倫理の思想と交渉がないものは、五十年経たなければ、みんなに認められない、と言った。なんと五十年！これも久しからずとは言えない。だが我が中原では、かの「功は良将に同じき」専門の国粋医が、まだこういう事があるのを知らないのだ。又細菌の場合は、飲めば、死んで見せられる、これはまことに効果抜群である。なのに我が中原の学者は、力を尽くして彼の細菌のために弁護してやる。ある者は言う、我々はエビを食っても死なないのに、まして他のものをや。ある者は言う、人が病気になれば、彼（つまり細菌）だって苦しいだろう、君らはなんだって彼をやっつけようとするのだ。……これはたぶん五十年の期限がまだやって来ていないのだろうか。記者先生、短期速成――「三日」で成功するという秘訣があることをご存知か。（民国十年七月）

※初出：1921 年 7 月 15 日『晨報』第 7 版

【附録】労働者と白い手の人

ロシア　ツルゲーネフ作

（会話一コマ）

労働者――あんた、俺たちのとこに来て何をしょうってのかい。何が欲しいのかい。あんたは俺たちの仲間じゃない。……いっちまいな！

白い手の人――あんたがたの仲間だよ、あんた。

労働者――俺たちの仲間だって、本当かい！夢でも見てんのか！おれの手を見て見な。このなんとも汚い手を見なよ。そいつは糞の臭いがすらあ、それに樺の油のもな――ところであんたのは？見ろよ、こんなに白い。それにどんな臭いがするかよ。

白い手の人――（手を伸ばして）嗅いでごらんよ。

労働者――（彼の手を嗅ぐ）これは不思議だ！鉄の気味がするようだぜ。

白い手の人――そうだ、確かに鉄の気だ。わたしの手には丸々六年手錠がかかっていたのだ。

労働者――それはどうしてだい、訊いていいか？

白い手の人――なぜかって、わたしの仕事はただただ君らの幸福のためだから、圧迫と無知から逃げ出そうとしたから、人々に圧迫者に反抗するよう励ましたから、当局者に反抗したからだ、……それでわたしを鎖に繋いだのだ。

労働者――鎖に繋いだって、あいつらがか？反抗したのはお前の勝手だろ。

（二年後）

その労働者はもう一人の労働者に言った――おい、ピーター、……おまえ覚えてるか、一昨年お前と話したあの白い手のやつのことを？

もう一人の労働者――覚えてるよ、……どうかしたのか？

初めの労働者――今日あいつらがやつを縊るとよ、聴いたんだ、命令はすでに下ったって。

二人の目の労働者――やつはまさかずっと当局に反抗してたのか？

初めの労働者――ずっと反抗してたのさ。

二人目の労働者――なら、あのな、おまえ、やつを縊った縄の切れ端を盗めるだろうか？家に持って帰ればでっけえ運が着くとさ。

初めの労働者――たしかに。ちょっくら試してみようぜ、なあ。

一八七八年四月作（民国九年『晨報』）

※初出：1920 年 6 月 8 日～10 月 9 日『晨報』第 7 版のどれか一部

---

[i] 「荊生」　林琴南が文学革命を揶揄した小説。主人公の偉丈夫荊生に文学革命の主導者胡適や陳独秀を北京外城の名勝陶然亭でこてんぱんにぶん殴らせると言うもの。

[ii] 『晨報』に載ったことのあるツルゲーネフの散文詩　これは『五四時期期刊介紹』第一集の『晨報』第七版副刊分類目録によれば、「屠尔蓋涅夫的散文詩　沈穎訳」（1920/6/8-10/9）の中の一首を言うのであろう。『晨報』第七版の当該部分を調べていないので確かなことは言えないが、この「労働者と白い手の人」は、周作人が『晨報』から引いてきたものだと思われる。「沈

---

顕」という人については、それが本名なのか筆名なのかもわからない。周作人の筆名ではないだろう。彼が序を書いた 1936 年の『現代中国作家筆名録』にも載らない。『周作人訳文全集』第十巻の注は「宣伝」の文章と一緒に『晨報』第七版に載ったので、周作人の訳文としているが再吟味の必要があろう。

## 17　三日

広告で外国語を学ぶ秘訣という本があるのを見た。三日で成功すると言う。

心で思った、これはどう見たってあまりに短かすぎるのではないか。だいたい何か成し遂げようとするには、三日ではどのみち不足である、石を指して金にするとか、みるみる花を咲かせるとかの、幻術を行う以外は。こうした奇跡は刹那の間に成就するが、「回道人〔呂洞賓〕」が俗界に降りて来た時にだけ可能だそうで、これも三日のうちに降りて来るわけのものでもない。

ある民国の辺境大臣〔未詳〕は、以前日本に留学していた頃、懸命に人に仏教を学ぶよう勧めた。彼は、たとい君らがドイツ語やフランス語などやったところで、どのみち時間の無駄だ、仏教を学びさえすればよいので、将来精進の結果六神通が得られれば、どの国の言葉だろうが、自然見ただけで解る、と言った。しかし事は十五、六年を隔てて、去年の冬彼がまだ北京で馬車に乗って駆け回っているのを見て、彼もまだ神通を得られていないのが分かった。（もし神通を得ているのなら、彼はそれを使いこなせるのだから、神出鬼没、あるいは鬼出神没、当然馬車など要らないはずだ。）そこで彼の神通力で外国語を学ぶという秘訣も、何の当てもないことになった。

『覚悟』*にかつて戴季陶先生の日本語に関する談話（確か施存統先生の文中に引用してあったと思う）が載ったことがあり、彼は三年やったら、応用が効く、自由に読書しようとすれば、どうしても五年はかかると言った。これは実に経験から得られた真面目な話で、外国語を学ぶ志がある人は彼のこの話を信じるとよいと思う。今では奇跡はすでに跡を絶った時代である。もし何かやろうとすれば、自力以外に頼るものはないし、また信じることのできる秘密の奥義などもなく、ただ堅忍勤勉という四文字だけが一切の秘訣である。三日や四日という話については、笑い話として言えるに過ぎない。

誰かがわたしに尋ねた。君がそんな風にいうと、あまりに人の興を殺ぐのではないか。三日では速成はできないけれども、ひょっとして興味は引き起こせるかもしれず、彼らに引き続き学びたいと思わせるなら、いいことだ。いまのようにすっぱ抜くと、彼らは恐れをなして、容易に萎縮してしまい、却って害があるのではないか、と。わたしは最初それを聞いてそれも一理あると思った、だが仔細に考えると、やっぱりそうではない。四五年かけて学習しようと決心した人は、わたしの話を聞いても当然めげないはずだ、あるいは逆に少しは助けになるかもしれない。三日の内に、外国語をものにしようと思うに至っては、この件はどうせ不可能なのだから、その後失望するよりは、まだ早いうちに知らせてやって、彼にその三日を利用して他の事をやらせるに越したことはなく、その方がまだ見込みがあるというものだ。（民国十年七月）

※初出：1921 年 6 月 28 日『晨報』第 7 版

---

* 『覚悟』　上海『民国日報』の副刊。その目録だけは『五四時期期刊介紹』第 1 集に見られる

## 18　麝香

わたしは「社会咫聞」〔社会の近聞・こぼれ話〕欄を愛読している。いつも新聞の本文以外に、思いがけず面白い材料が手に入るからである。近日「泥棒から乞食に落ちた青年」というのを見つけた。西城の堂子胡同の某校の学生が泥棒をやり、落ちぶれて乞食になったことを述べたものだった。この事はとてもありふれているが、わたしは被害者の某君に、少なからぬ興味を持った。この泥棒から乞食になった青年は某君のトランクを盗んだのであった。その中には友人の一枚の卒業証書と、眼鏡が四つ、それに――「一瓶の麝香」！が入っていたのである。

わたしは医術は解らないが、麝香が普通の薬でないことは知っている。お灸に凝る多くの人は、麝香を艾に混ぜると、艾の力がずっと深くまで行って経穴に届くと言う。これはわたしが知っている一種の外用法である。麝香は麝香鹿のへそから出て、交尾の時には、香気を出し、雌の鹿を呼び寄せるから、それはとても性欲を刺激する力があるそうである。用法については燻蒸するのかあるいは飲むのか、わたしは知らない。某君の一瓶は何に使うのか分からない。まさか一日がかりの大お灸でしかも特別なお灸なのだろうか。（民国十年八月）

※初出：1921 年 7 月 19 日『晨報』第 7 版

## 19　売薬

ふだん新聞を読むのに、本文を読み終わってから、必ず広告を一通り検める。新しいのはもちろん気に留めるが、長く載っているのも研究の価値はある。なぜなら長期の広告はどれも高利の商売だから、彼らの広告術もなかなか巧妙なのだ。たとえば「わたしの顔はなぜ美しい」という石鹸、「赤い卵は好きですか」というタバコ、はその一例である。このタバコの広告の含意は、わたしには今に至るもよく分からないが、同じように人の気を惹く。「妾は買わずとも、『礼拝六』は読まざるべからず」という著者の頭に枯れ草を挿した広告〔枯れ草を挿すのは売り物であるという印〕は、特に貴重だが、残念ながらいつもあるとは限らない。

新聞紙上平均して最も多いのはやはり売薬の広告である。しかしふつう広告には米や布を売るのがないように、この売薬の広告にもソーダやキニーネが一両いくらとは書いてなくて、すべてが彼らの先祖伝来の秘方の万能薬である。ちょっと一例を挙げると、癲癇や半身不随・癲狂を治す妙薬で、注に「この三つの症状の病根は肝胆から起きるものが多く、最も難治である」が、彼には霊丹があって、「この三症状を治すに奇跡的な効果があってしかも病根を取り去ることができる！」のだ。また瘰癧を治す薬などは、注に「瘰癧症に最も悪いのは西洋の医術で取り去ることである、切れば切るほど大きくなる」と言う。わたしは本当に分からないのだが、西洋人はどうしてこんなにバカなのだろう。癲癇や半身不随・瘰癧をなんの薬も使わずに治し、しかも「瘰癧症に最も悪いのは西洋の医術で取り去ることである」ことを、中原の鴻臚寺はとっくに知っているが、彼ら西洋人はなぜ切れば切るほど大きくなるのにそれでも手術で切り取るのか。――生計問題が逼迫してくると、〔訳の分からぬ薬の入った〕瓢箪を背負った蟷螂〔意味はかまきり、漢方医の隠語か〕たちも腕を伸ばして抵抗せざるを得ない。これはちょうど上海の黒幕〔小説の〕文人がいま起ち上がって最後の奮闘をやっているのとまさしく同じで、実際情としては許せるところもあるが、しかしながらこの連中は社会の害となり、正当な薬物や書物を求める知識もない可哀想な人々が、彼らによって半殺しにされるか、あるいは全く殺されてしまうのだ。

われわれはチョーサー（Chaucer）の『カンタベリー物語』を読むと、そのなかに一人の「博士」（Doctor of Physic）が手に一つの瓢箪を持った人として古拙な木版画に描かれているのを見るだろう。それから後ろの注を見ると、彼の医術は病気になった日から数えて、どんな星宿の日に当たるかを考え、病気を判断し薬を決めると書いてある。こうした巫・医合一の情況は、中国とよく似ていると思うが、それは英国の五百年前のことである。中国も五百年後には、あるいは少しは良くなるのかもしれないが、この年限はあまりにも長いと思う、心でそれを少しばかり縮めたいと思うので、こんなに焦っているのだ。しかもいまは十四世紀ではないのだ。その頃はみんなハッタリばかりやったから、いい加減にやっていけたが、今は全てが科学によって実証される。なのにまだ目を閉じて、金木水火土とかをいう医療が、様になるというのか。医者に殺された人のことは、しばらく言わないとして、こうしたデタラメばかりで、もう十分に醜い。

われわれがそうした神農時代以前の知識の「国粋医」を攻撃するのは、人々の生命の安全のためには、とても必要なことである。しかしわたしの友人某君は言う、「君らの攻撃は、実は特大の

誤りだ。現今の中国では、漢方医はなくてはかなわない。どれだけの遺老や遺少、それに別種の人非人が中国に生きていることか。こいつらが死なないかぎり、それだけ中国にとっては害である。だが謀殺は人道に反する。しかも策には策ということもある。幸い連中はどいつも国粋医を信用している、だから彼らの死機は、全てこうした医者たちの手にかかっているのだ。君らはとても彼らを攻撃できた義理ではなかろう？」彼の話は少し残忍だけれども、多少の道理はある。うまいことに連中が医者にかかって死のうが生きようが、双方の合意だから、わたしの友人を責められない。これがあるいはああいった売薬と医者の広告が現在でも存在できる理由なのかもしれない。（民国十年八月）

※初出：1921 年 9 月 1 日『晨報』第 7 版

## 20　天足

わたしは女性の天足を見るのが大好きだ。――この言葉には少し語弊があって、性急な人の罵倒を受けるだろうことは分かっている。顔を見て足を見て品定めをするのは、もともと中国のチンピラの悪習であるが、幇閑文人には李笠翁のように、女を買う時にはどのように足を見るかのやり口を、『閑情偶寄』に書き込んだ者がある。だがこれは実際わたしの言い方が転倒しているのだ。わたしの言う意味は、わたしは最も纏足が嫌いだ！ということである。

ちかごろ西洋婦人の「身を以て美観に殉ずる」コルセットは、その害は纏足よりひどいと言う学者がいるけれども、わたしはどうあっても自分の意見に固執して、身を以て醜観に殉ずる纏足は結局野蛮でしかないと考える。わたしはいつも颯爽と門を出て、我こそは文明古国の新青年と思うのだが、突如その時ひょこひょことびっこを引いた女性がやってくる。そこで自分は文明人であるというわたしの考えは、どこかへ飛んで行ってしまう。もし彼女が年寄りなら、これはわたしの伯叔父の世代がこんな醜悪な野蛮を好んだことの表れだし、もし若ければ、わたしの兄弟たちが野蛮であることを表している。要するにわたしが野蛮であることを免れないのは、確定的だ。その時はまるで気づかぬうちに彼女は籐の盾一枚と、長戈一本を、恭しく手渡そうとする、わたしは受けたくないのだけれども、話すこともなく、ただ恭しく受け取るほかはなく、かくて正式になんとか社の生蕃（やばんじん）に封ぜられるのだ。門を出るたびに、どうしても何組かの盾と矛を受け取らねばならない。これは実際そう愉快なことではない。ただ天足の姉妹たちがいることのお蔭で、わたしのこうした栄誉が大目に見られるので、わたしが上で述べた一言は、その喜びと感激を表したのである。（民国十年八月）

※初出：1921 年 7 月 29 日『晨報』第 7 版

## 21　天職

たまたま『菩薩戒本経』を読んでいると、凡そ菩薩の戒を受けた人は、もし衆生がやることを見ても、ともに事を同じくしない、あるいは病人を見舞わない、あるいは憂悩みを慰めないならば、みな染汚（ぜんま）〔不浄〕の罪を犯すことになると言う。ただいくつか罪を犯さない例外があって、その一つが自ら勝業〔天職〕を修め、かたときも止めようとしない事である。わたしは読んでとても感ずるところがあって、自分の天職をやらねばならないと決心した。

「君に？天職があるんだって？」と人は訊くかもしれない。そうなのだ。誰にもそれぞれ天職はある。お互い違うけれども、それが天職であるという点では変わりはない。俗諺に云う、「ガマのベッドの脚」と。ガマは醜いけれども、ガマの油は採れる。もしベッドの脚にかませば、ガマの力はむろん瓦のかけらにも及ばない。わたしは天性の諷刺家でないばかりか、予言する道徳家でもない。十巻の『論語』を作って、子どもたちに暗誦させることはむろんできないし、また一部の『笑林廣記』を編んで、雅俗の共賞に供することもできない。そんな高論卓説はなんのためにするのか。荒法師が高座に登ってみだりに般若を説くより、僧坊で何章か法句を訳すに越したことはないし、その方がずっと有益である。だからわたしの天職は、（高論卓説の）製造を停止して、実際に売り歩くことである。他人の思想は、要するに自分のよりすぐれ、他人の文章は、要するに自分のより美しい。ならばわたしが転向することこそ、最も勝れた天職でないことがあろうか。だがそれはわたしにとって勝れているに過ぎない。他人には、もともとそれぞれに勝れた所がある。蒙古征伐であったり、妾を買うことであったり、尊孔であったり、嗅ぎタバコを吸うことであったりしようが、なんでも構わない。それに相応しい人間にとってはそれが彼の天職であるのだ。（民国十年八月、西山にて。）

※初出：1921 年 7 月 30 日『晨報』第 7 版

## 22　子どもの悔しさ

「ファンガイリスとその年越しのパン」を訳し終えて、一つ感想を持った。

子どもの悔しさと女性の悔しさ――これは実に人類の文明上の大欠陥、大汚点である。上古からまっすぐ現代まで、まだ補償の機縁もないが、学術・思想の進歩のおかげで、理論的にはすでに明らかになったといえよう。人類は全体としてただ一つであるが、その中では男・女及び子どもの三種に分かれる。彼らはそれぞれに人間という種の一つであるが、男は男、女は女、子どもは子どもであって、彼らは心身の上でそれぞれに違いがあり、無理に一つにしてしまうことはできない。以前人々はただ男だけが人間であると考え、（女たちでさえそう思ったのである！）彼の基準によって人類を統治した。そこで女と子どもの悔しさは、当然免れることはできなくなった。女にはそれでも多少とも力があり、時には少し反抗もでき、敵にいささか損害を与えることもできたが、子どもときてはあの野蛮な大人の処置に任され、ちょうど悪童の手の中の小鳥のように、悲鳴をあげるほかにどんな手だてがあったろう。しかし彼らはむざむざと犠牲にされはしたけれども、同じように報復――その父母に復讐することができるのだ！これはまさしく自然の因果律である。少し遠回しに言うなら、たとえば、ビビナが廃人になったのはファンガイリスの血筋の凋落にほかならない。少し身近に言うなら、たとえばクトシャフェリス（これもエ氏の書いた小説*）が子どもを殴って、白痴にしてしまい、彼自身もそのため気が触れる。文中で医者が言う。「この癲癇病は父から子に伝わったのではなく、子から父に行ったのだ！」と。著者は又言う。「これは悲惨な物語である。しかしよくお聞きなさい。これはあるいはあなたにとって有益であるかもしれない。と言うのはあなたもよく腹を立てる人だから。」われわれはこうした忠言を聞いて、はたと悟らないでおれようか。われわれは子どもの横っ面をぶん殴らないけれども、日頃の理不尽な叱責、理不尽な命令から、理不尽な愛撫に至るまで、形には現れないがどれほど彼らの柔らかな感情を損ない、彼らの甘く美しい夢を打ちこわし、将来の性格にどんな影響を与えていることか。

――しかしながらこれらはみな空想の話である。事実、中国には子どもを殴って白痴にして気が触れたクトシャフェリスはいないし、また「かわいそうなビビナのために」喧嘩を止めようとしたファンガイリスもいない。わたしはかつてこの目で見たことがある。ある母親が二三歳の息子を高い椅子に座らせて、自分は地面に跪いて拝み、口では「父さんや、どうしてまだ死なないのかえ？」と言う。子どもは高座の上で、屠殺される豚のように泣き喚いていた。これが子どもの悔しさを問題にする時だろうか。人によっては、中国人はいまでもまだ人を人と見なさないし、また自分が人間であることも知らないとさえ言う。ならば、一切はむろん無駄話となる。（民国十年九月）

※初出：1921 年 8 月 10 日『晨報』第 7 版

---

* エ氏の書いた小説　エフタリオティス Argyris Ephtaliotis（1849~1923）現代ギリシアの文学者。*Tales from the Isles of Greece*,　trans. by W.H.D.Rouse. 1897. 周作人はたぶんここから「ファンガイリスとその年越しのパン」「クトシャフェリス」を訳し、『現代小説訳叢』（上海商務印書館 1922/5）に収めている。いま『周作人訳文全集』第九巻に見られる。文中の「ビビナ」はファンガイリスの障害のある娘。

## 23　感慨

「清兵衛と瓢箪」を訳して、また感慨を禁じ得なかった。しかしずっとそれを書き留めることをしなかった。小説の後に、必ず感慨を発していては、人から見れば、ちょっと大文豪が「哈氏叢書」*に序を書くようなところがあって、文学批評の正道ではないだろう。だがいまよく考えて見れば、その作品の序跋を書くわけでもなし、又言うところが文学に渉るのでもなく、ただ教育を語るだけだから、ともかく書いても構わないだろうと思う。

わたしは教育哲学は解らない。ただわたしには現在の児童教育にはひどい欠陥があるように思われる。他のことはわからないが、わたしの知る家庭及び学校での児童教育の方法について見れば、彼らは当の教育するもの――児童――の性質を理解できていない、ということはどうも本当のようだ。「清兵衛と瓢箪」は最も穏やかな筆でこの悲劇の中の最も静かな一幕を描いている――だが悲劇は結局悲劇である。これがわたしの感慨を引き起こした所以である。その表面は穏やかで静かであるけれども、以前ドイツのウェデキントの戯曲『春の目覚め』を読んだ時と同じような感慨を引き起こし、かつもっと不安な疑惑にかられたのである。

『春の目覚め』の悲劇はもっと大きくて悲惨なように見えるけれども、解決のかぎはただ「性の教育」にあって、それほどの難事ではないかもしれないが、児童についての理解は、却ってとても難しい。理解とは難事中の難事であって、われわれは以前軽々しく理解を口にしたが、ほんとうは自分でも一人の人間を理解できてはいなかったのである。人類学の生理や心理各方面での児童研究の本は世界でもすでに少なからず出ているし、研究の対象の児童はこれまたどこにでもいる。しかも――誰しも自ら児童の時期を経過しているから、理論から言えば、理解は難しくないはずである。だが実際にはそうではなく、考えてもまことに奇怪であり、ほとんど神秘に近い。まさか理解は結局不可能なのだろうか。わたしはふと中国ではどこにでも見られる木牌に気がついた。そこには天地君親師という大きな五文字が刻まれている。それでハタと分ったのである。本来この五者の地位は同じくはないが、それが権威であるという点では同じである。家庭と学校の教育も専制政治の縮図なのだ。専制と理解がどうして両立しよう。

『大智度論』に一つの比喩がある。「一子の不浄の中に在りて戯るを喜ぶ有り。土を聚めて穀と為し、草木を以て鳥獣と為し、人の奪う者有れば、嗔恚(いかり)啼哭す。其の父思惟して、此の事離れ易く、児大にならば自ずから休(や)まん、と。」これはまことに気持ちよく言ったものだ。十年前『児童の生活と教育の様相』（*Aspects of Child Life and Education*. スタンレイ・ホール博士編）に、児童の所有観念を論じた論文があり、たしか児童が人我(にんが)〔自分と他人〕の観念を持たない時には、人の物を見て喜べば、たちまち奪ったり盗んだりして手に入れるが、後になって人我あるいは所有の観念ができると、むろん改まると述べていた。彼は後になって又、多くの父母が児童の天性を自由な発展に任せず、干渉し、却って中途で停頓させ、もう二度と蛻化できないようにして、奇形な性質を作り上げてしまうとも言っている。彼は諧謔まじりに、多くの現在のケチで酷薄な金持ちは、みんなこうして作り上げられるのだと言う。（以上は原文ではなく、わたしの記憶にしたがってその大意を述べたに過ぎない。）だいたい児童を教育するのはもともと何の難事でもない。

植物を育てるように、まず植物の共通した性質をのみこんで、それからさらにそれぞれの特別な性質にしたがって、培養すれば、自然に成長できるのである。（幼稚園の創始者フレーベルはとっくにそう言っている。）しかし花園を管理する皇帝は、仕事は半分で済み効果は二倍のそうしたやり方をしようとはせず、むやみとその御意によって、仕事が倍になって効果が半減するやり方で、松柏を束ねて鹿や鶴や大獅子にしようとする。鹿や鶴、大獅子の形にむろんできないわけはない。松柏の本性はそういうものではなく、却って苦痛さえ覚えるだろうけれども。幸い自然は生物に生活に適応するという一種の健忘症を与えているので、多大の苦痛も後になればすっかり忘れてしまう。ただ彼は一生背を曲げたまま鹿や鶴でいなければならない。――しかも又それが正当だと思って、後輩たちも全て彼と同じように束ねられることを希望するのである。これは実に哀れむべくかつ残念なことである。（民国十年九月）

※初出：1921 年 9 月 22 日『晨報』第 7 版

---

* 「哈氏叢書」　林琴南はイギリスのハッガードの小説を相当数訳した。それをひっくるめて「哈氏叢書」と言った。大文豪とは林琴南のこと。

## 24　資本主義の娼妓禁止

数日前に「社会咫聞」欄に上海租界の娼妓禁止の成績が載っているのを読んだ。租界警察が私娼に対して取り締まりを強め、処分をやや重くしているということだが、これら恥知らずな婦女こそ、娼妓禁止の前途に横たわる障害物だと考えているからであろう。なんと娼妓制度の存在は、完全にこういう「恥知らずな婦女たち」が自らの気晴らしのためにこんな事をやりたがったからであったのだ。まことに不思議な事だが、彼女たちはなぜ家にいて楽々と白い米のご飯を食べていないで、こんな恥知らずな行為をして、我らが善良な風俗を壊乱しようとするのか。まことに厳重に取り締まるべきである。昔ある皇帝が、食う飯もない被災民に尋ねた。「どうして肉入りの粥を食べないのか」と。わたしも中産階級に代わってこれらの恥知らずな婦女に詰問しなければならない。

しかし二十一日の『覚悟』に引かれたドイツ人カウツキーの言葉を読んだところ、それはまた中産階級の租界警察の意見とは完全に違うのである。彼は云う。

「資本家は彼女ら（女工）の無経験を利用して、彼女らに自分の消費を賄えぬほどの少ない労賃しか与えないばかりか、彼女らに売淫だけがその収入を補う方法だと暗示したり、あるいはあからさまに言う。

資本制度の下では、売淫が社会の大黒柱となっている。」

それなら娼妓禁止の前途に横たわる障害物は、むろんそれら恥知らずな婦女たちではなく、恥を知る資本家たちである。もし個人に罪を問わないとしたら、現在の経済制度にあると言ってよいかもしれない。その本を明らかにせずしてその末を整えようとしても、なんの成績も上がらない。たとい姑息に現今の社会で手当を講じようとしても、せいぜい救済が関の山で、一度禁止すればそれで終わりというわけにいかない。もしそれら恥知らずな婦女が娼妓になるのは、決して生計に迫られたためではなく、確かに暇を持て余して、麻雀牌をいじったり、アヘンを吸ったりするように、気晴らしのためだとするなら、当然のこと法律の力で禁絶することができるだろう。しかし現在の情況は決してそうではない。嗜好悪癖なら禁止できるが、飢寒は禁止できない。資本家だとて、これくらいの道理は知っているはずではないか。

話はこの通りだけれども、上海の資本家が娼妓禁止を主張するのは、「耳を覆うて鈴を盗む」に等しいけれども、「妻の共有は資本主義の特色の一つである」ことを承認し、公然と売淫は必要な事だと宣言したがらないのは、やっぱりまだ少しは良心があるということになろうか。（民国十年十月）

※初出：1921 年 10 月 30 日『晨報副刊』

## 25　「先進国の婦人」

ある新聞で次のような文章を見た。

「日本は先進文明国と称するが、婦人界の暗黒は依然としてもとのままである。記者は日本に滞在すること幾年、あらゆる政情および婦人問題の研究については基礎がある。日本の婦人と我が国の婦人の進化の遅速にはまことに雲泥の差があると思う。最近日本の新聞がしきりに中日婦人の社交の説を唱えるが、記者はすこぶるこれに賛成するものである。我が先進国の婦人が、もし国境の区別なく、天日を見ない日本婦人に手を伸べて同席させることができるならば、その功徳はなんで浅かろう。」

日本の現在の婦人界の情況がどうかは、わたしはべつに詳述しようとは思わない。そういう問題については「研究に基礎」があるわけではないから、なんでわざわざ恥を晒すことがあろう。わたしがいささか疑問に思うのは、「我が先進国」の婦人の進化がほんとうに「雲」なのかということである。ほんとうを言うと、現今の経済制度の下では、我が男子界でさえ暗黒は依然としてもとのままであることを免れないのだから、婦人界はむろん言うまでもない。夫人・内妻・妾・妓女などの長短期の性の売買は、まことに滔々たるもので天下皆そうである。誰がいったい他人に手を差し伸べられるのか。『詩経』に云う、「我が躬すら閱れられず、我が後を恤うるに遑あらんや」〔邶風・谷風〕とは、まことに婦人界のために詠んだものとできる。さらにほんとうを言うと、中国と日本の女性は境遇の上では似たり寄ったりで、雲泥などに分けることはできないが、（知識の上ではしばらく余計なことは言わない、）中国には纏足というちょっとした事が多いだけだ。ひと様がこの事についてどういう感想をお持ちになるかは知らないが、わたしはともかく非常に不愉快である。そういう尖った脚をした姉妹たちがそこらを歩いているがために、巻き添えを食って先進国の民と自負できないばかりか、後進国の民の肩書きさえどうも覚束なく思えてくる。わたしもたぶん中国を愛する者の一人にはなろう。しかし愛するがゆえに、中国が明るくなることを望めば望むほど、その暗黒に対してはますます憎み、ますます攻撃を加えなくてはならない。これも自然の道理である。この記者が日本に何年も滞在したために、本国の情況を忘れてしまったのも、もともと怪しむに足りない。だが誰かがこれも又中国の誇大狂の表れだと誤解するといけないので、ちょっと説明を加えた。堂々たる専門家の教授[i]も『地学雑誌』にしょっちゅうこんな文章を載せるそうである。医者は彼が「恍惚症」にかかっているのではないかと疑うけれども、必ずしもそうではなかろう、やはりただ日本へ二度ばかり行ったために、本国の事情をきれいさっぱり忘れ果てただけだろう。

他人の長所が分かれば、自分の短所も分かる。これが人たるの第一に肝要の条件であって、他国を批評しようとする時にはよくよく心しなければならない。ラッセル[ii]が英国と中国を論評した文章を読むだけでよい。それこそ恰好の模範である。（民国十一年十月）

※初出：1922 年 10 月 14 日『晨報副刊』

[i] 地学専門家の教授　未詳、『現代評論』派の李四光を指すか。
[ii] バートランド・ラッセル　中国については“*The Problem of China*.”（London: George Allen & Unwin.1922.）、日本語訳に牧野力訳『中国の問題』（理想社 1971）がある。

## 26　憐れむべき者

エリス（Havelock Ellis）は英国の有名な優生学者で性の心理学者であり、また文明批評家でもある。著書の『新精神』（*New Spirit*）は世界的に著名な文学評論である。今日彼の『随感録』（*Impressions and Comments*）を読んでいて次のような一節を見つけた。

「自然の中で成長する生物は、至る所すべて美しい。ただ人類の中にのみ醜い存在がある。野蛮人でさえほとんどどこででもとても親切で和やかである。ただ文明人の中にのみ苛酷と軋轢がある。ヘンリー・エリスは 18 世紀にハドスン湾での体験を述べた書中に言う。エスキモーの一群――特に子どもを可愛がる民族――が英国の居留地にやってきて、とても悲しそうに彼らが受けた苦難と大飢饉と、そして彼らの子どもの一人が飢えのために食われてしまったことまで訴えた。英国人はそれを聞いてただ笑うばかりだったので、腹を立てたエスキモーたちは立ち去った。そういう時に、世界のどこに、それを聞いて笑う野蛮人などあろうか、と。それで思い出したが、何年か前ある男が汽車に乗り込んできて、他のお客が片隅に自分の座席を取っておくために置いてあった毛氈をかたわらに放り出し、無理やりその座席を占領してしまったのを目撃した。こんな人間が、もし野蛮人の中に生まれたならば、生きていくことができたろうか。いまみんなの目の前に浮かび上がった優生学の理想が、たといわれわれを天国へ導くことはできずとも、ただわれわれの中に礼をわきまえた野蛮人よりもずっと低級な人類が発生することを阻止できるだけでも、すでに十分その効用があることになる。」*

わたしはこれを読んで、思わず上海商報館の書記席上珍女史が縊死した事件を思い出した。彼女が新聞社で死ぬと、彼女の同僚がその側で滑稽詩や擬悼亡詩を作ったりしたという。信ずるに忍びないが、近ごろの新聞の滑稽趣味の傾向を見ていると、これはありうる事だと信ずる。野蛮人は人を殺したり敵の肉を食べたりするかもしれないが、彼の連れが死んだのを見て、決して喜び勇んでダンスをするようなことはあり得ない。たとい高等動物の世界でも決してあり得ない――狼を除いては。

詛うべきは人類をして狼以下の生物に堕落させた、かの偽文明と偽道徳である――そして彼らこそ憐れむべき者である。（民国十一年十月）

※初出：1922 年 10 月 5 日『晨報副刊』

---

*『随感録』（*Impressions and Comments*）Constable and Co. London, 1914. p.17～18. 1912/9/2.

## 28　上海の芝居

偶然三月四日の上海の古新聞を取り上げて、五ページ目の芝居の題目を見ると、大文字で以下の外題が書いてあった。

二本　狸猫を太子と換える
三本　包公出世、狸猫を太子と換える
六本　狸猫を太子と換える
呂純陽法度七真
全本　張欣生
宣統皇帝の嫁取り

わたしはこの外題を見て、微笑を禁じ得ず、それが苛酷なまでに中国民衆の心理内容を曝け出していると思った。それはすなわち包龍圖[i]であり、呂純陽[ii]であり、張欣生[iii]であり、宣統皇帝である。劇場の親父の研究工夫は言うまでもないだろうが、芝居を編劇した丁稚の手腕も敬服に値する。張欣生の劇はまだ珍しくはない。というのは以前にかつて一時を風靡した殺された妓女の芝居が前例としてあるからである。しかし「宣統皇帝の嫁取り」はどうしてかの丁稚に思いつかれたのか分からないが、またせっかく芝居にしたのだから、われわれのようにこの芝居を見たことのない者でも、賛嘆の声を発せざるを得ない。北京の商人平民は多くが王党派の性質を持っていると言われるが、その「嫁取り」の日でさえそれほど熱狂して見にゆかなかった。どうして上海でこんなに関心があるのか分からない。張少軒[iv]君が聞いたらきっと欣然と笑って「吾が道南せり」と言うだろう。(もしこの芝居が嘲弄的な喜劇なら、それはただ国民性の卑劣を表すに過ぎず、別に意味はない。もし芝居にするとすれば、あのように身は宮中にあって、城外に憧れる心情だけが、わずかに描写する価値があると思う。だが残念ながらそれができる人はいない。)

いま中国では真面目に芝居を語る人がだんだん増えてきている。しかしこのような観客に対しては、彼らはどのようにするのだろう。それには構わないのか。それではどのように力をこめようが、誰も見にきはしない。彼はやっぱり彼の「狸猫を太子と換える」を見にゆくだろう。もし構うとすれば、彼は「宣統皇帝の嫁取り」を作れというだろう。これはまことにいわゆる「進退ここに極まる」である。

いまとても流行しているいわゆる民衆の為の文学は、社会心理に迎合することがほとんど文学の必要条件になっている。しからばわたしの挙げたいくつかの劇目は、すこぶるみんなの参考にするに足りて、無用ではない。書物の上では、『礼拝六』と『小説世界』の類が当然「狸猫を太子と換える」の正統で、大多数の人が必要とするものである。以前北京・上海の各新聞で彼らを攻撃したのは、まさしく「貴族」の気を免れず、少なくとも要するに「人の性に払(さから)」ったのではないか。(民国十二年三月)

※初出：1923 年 3 月 15 日『晨報副刊』

[i] 包龍圖　包拯　北宋の官僚、名裁判官と謳われ、小説や芝居の立役者になった。中国版大岡越前。「狸猫を太子と換える」は整った形では小説『三俠五義』に見える。
[ii] 呂純陽　唐代の道士、呂洞賓。
[iii] 張欣生　1922 年の中国映画の題名でもあり主人公の名でもある。借金責めにあった米屋のドラ息子張欣生が悪漢に誘われ、親父を毒殺して財産を乗っ取るが結局仲間割れから事がばれて、悪漢共々死刑になるという話。
[iv] 張少軒　張勲のこと。1917 年 7 月の復辟の立役者。

## 29　「迷魂薬」[i]

以前『七俠五義』を読んで、いわゆる「迷子(ミーズ)」〔薬を言う〕というものがあって、飲んだら「牛子(ニューズ)」〔かも〕になってしまい、酔い覚ましの材料になるということを知って、とても怖かった。庚子〔1900 年〕以後わたしが南京で兵隊になった時、下関の保甲局[ii]長に会ったら、彼が言うにはスリを捕まえると連中にいつも持っている迷薬を試してもらい、そして彼自身もこの薬の処方を知っているのだということだった。彼にその処方を伝授してくれとは言わなかったけれども、飲めば人を昏睡させる薬は要するにあり得るのだ、と推測した。

最近北京・天津では人さらいで大騒ぎで、新聞によれば、人さらいの身の回りから警察は多くの「迷魂薬」を差し押さえたそうで、これは全く「人の聴聞を駭(おどろ)かす」事である。人さらいが背中をポンと叩くだけで、人は気を失うという。まったくよく分からないが、この迷魂薬はまさか背中から潜り込むのだろうか、でなければ、きっと嗅ぎタバコのような毒薬で、たいていは鼻の穴から潜り込むのだろう。今度たくさんの迷魂薬を押収したのだから、官庁は大いに人さらいに実験させて、そして専門家に頼んで薬を化学分析してもらい、いったいどんな物なのかを明らかにして、われわれがデタラメに推測する手間を省いてもらいたい。

この薬は化学分析できない、なぜなら霊魂はもともと玄妙なもので、それを錯乱させる薬も不可思議であり、科学が力を発揮する対象ではないと言う人がいる。東方文明の発祥地の中国では当然言い分が通る。又ある人は言う、もともとこんな薬はない、これは一種の暗示に過ぎない。中国人の大多数は心臓の穴に痰が詰まって錯乱して、何時でも何でもいい加減にやり過ごしてしまわないものはない。ひとたび人さらいの騒ぎに遇うと、背中にポンと（本当でも幻でも）感じれば、錯乱性が大いに発せられて、菓子切る庖丁を持ったものも駆け出し、指揮刀を差したものも駆け出し、ひどいのは門から出ない秀才まで駆けたり喚いたりして、東に一束迷魂薬、西に一甕孟婆(モンポ)の湯(くすり)で、騒ぎも亦楽しからずやとなって、結局いったい何事が起こったのか分からない。鶏の毛と辮髪を切るのが流行った中国では当然こうした事はあり得るのだ、と。

わたしは迷魂薬については疑いなしとできない、人さらいがいることは信じるけれども。――しかしながらこれについても人さらいの愚昧拙劣を憐れまずにはおれない。実際中国では人間を売買するのはもともと正当な職業なのである。ちょうど骨董屋がそうであるように。前清の末に周玉帥が禁止を上奏したが、それは弊政の一つで、光復〔辛亥革命〕後早々と禁令は取り消された。だからいまもし人手が要りような人は、薬の調合であろうが飯炊きであろうが、決まった費用さえ出せば、直接にも間接にもすっきりと交易でき、「あれ」になんとか薬など飲ませなくとも、堂々と家に連れて帰れ、社会でも誰一人ノーと言うものはいない。人さらいがもしこうした職業に就きたいならば、正式にあれらの家長と談判すべきで、あるいはくず物買いのようにトントンと鼓を敲きながら戸ごとに買い取ればよいのだ。いま彼らが元手もない商売をやっているのは、これは明らかにコソ泥のような行為で、まして迷魂薬などとは、まったく赤っ恥の連中である。人さらいの罪は重い、だがみんなは知らねばならない、彼らの罪は――少なくとも中国ではこうである――人道に反することにあるのではなく所有権（長上が持つ子女の発売権）の侵害にある。

これは実に彼らが神からも人からも共に憤られる点である。もし彼らが資本を出して買い取ることを承知し、家長にも利益を分配するならば、写真の薬剤を製造する工業を順調に成長させる[iii]ばかりか、何の危険もなくなる。彼らがこれをやることができなければ、まことにその愚や憐むべしで、ほとんど彼ら自身がまず迷魂薬を飲んだのかと疑われることになろう。

附記　背中にすでにポンとやられて迷魂薬が染み込んだがまだ連れて行かれていない人たちの誤解を避けるために、一言蛇足の声明をしておく、上に述べたのは多くが決して本当の話ではない。

（民国十二年六月）

※初出：1923 年 6 月 7 日『晨報副刊』

---

[i] 「迷魂薬」　人間が死んで地獄に行く前に飲まされる、この世での事を全て忘れてしまう薬。孟婆茶、孟婆湯と言うものとほとんど同じ。又引伸して理知をなくす薬。

[ii] 保甲局　十戸を甲とし、十甲を保とする、住民の自警的組織。それを通じて支配を徹底させた。

[iii] 写真の薬剤　売買の対象者を写真に撮って売り買いするから薬剤の需要が増える。

## 30　「鉄の算盤」

「鉄の算盤」が北京にやって来たそうだ。そこで北京商会は慌てて通告を出し、北京の商店・銀行はあわてて「米を撒いた」、――だがわたしのところでは耳を以て目としているので、実際にはこの米がどんな撒きかたをされているのか知らない。ちょうど「鉄の算盤」がどんな算法をするのか知らないように。

十二、三歳の頃、杭州の佑聖観へ行って、殿外の真ん中に一挺大きな算盤が掛かっているのを見たことがある。商務印書館発売の棍棒の先にそびえている棕櫚の毛*よりもずっと大きく、思わず驚いてぽかんとした。一緒に行った下僕の話ではこれは「人に千算あるも、天には一算のみ」という意味を示すのだそうな。わたしが商会の警告のニュースを聞いた後、まず思い出したのがこの算盤だった。今度北京に来た奴はたいてい小さくて精巧なものだということははっきり分かっていたけれども。なぜならもしそんなに大きいのなら、たやすく警察に捕まるばかりか、運搬にも不便だろうから。

「鉄の算盤」というような思想は、世間ではごく普通で、決して中国に特有のものではない。およそ野蛮民族ならみな模倣類推の効力を信じているから、いわゆる感応魔術（Sympathetic Magic）があり、模倣の動作によって、ほんとうの事物を引き出そうとするので、豊作や雨乞いの儀式などは皆その例である。商人諸君はふだんは一挺の木の算盤によって、パチパチと弾けばそれ相当の銀が入ってくる。そのことから推測すればもし誰かが鉄のを使ってこのように勘定すれば、金庫の銀をごっそり持って行ってしまうこともできる。これは決して杞人の憂ではなく、感応魔術の原理にぴたりと合うのだ。道理でみんなはあのように慌てているのだ。ところが近頃文明人を自称する貧乏な友人が、どうしてもこんな事があるとは信じないのである。試しに訊いてみた。人が鉄で小さな算盤を一挺作って、パチパチと弾いただけで金庫の銀が勘定できないとはどうして証明できよう。なのにずっと反対なのは、これではあまりに武断すぎるではないか。

だが上に述べたのは玄学的な面での話で、科学の面では当然別の解釈があるはずだ。先きの「反宗教同盟」の友人たちが出て来てこの問題について一言二言話してもらいたいものだ。だが彼らは長い間うんともすんとも言わない。たといもっと大きな問題、例えば同善社や宗教大同会などのような問題に対しても、やはり一言も声を上げない。わたしの推測だが、それらが国粋だからというのではないらしい、あるいはそれが決して宗教ではないからというわけなのだろう。

ついでに言うなら、原始の民の心理は、自動的に動く機械の類に対してとても恐怖を感じ、その中に魔力が潜んでいると考える、――だから電車も当然「鉄の算盤」と同様怖いのである。（民国十二年六月）

※初出：1923 年 6 月 18 日『晨報副刊』

---

* 棍棒の先にそびえている棕櫚の毛　未詳。広告用の筆の模型か。

## 31　「再来」

イプセンが作った戯曲に、遺伝の怖さを述べたものがある。名を『重来』（Gengangere）[i]と言い、意味はつまり僵尸（キョンシー）である。祖先の悪い思想や悪い行為が、ちょうど僵尸の出現のように、子孫の身の上に再現されるからである。この戯曲は先に『群鬼』と訳した人があるが、中国には古来「重来（ちょうらい）」という言葉があり、僵尸を指すわけではないけれども、ちょうど原文と合うので、この方が恰好の訳語だと思う。

わたしはここでイプセンのその戯曲を評論したり、あるいは古今中外の僵尸の物語を話そうというつもりはない。いずれもとても面白いことではあるけれども。いま話そうとするのは、ただ中国の現在の社会における「重来」の多さである。

われわれは先ず反問しよう。どのようなものが「重来」でないか。民俗上の学説では、死人が腐乱したり、あるいはミイラになった者はみなそうではない。だがこれはほんとうの僵尸を指して言うのであって、喩えて言うなら、凡そ偶像破壊の精神がある者はすべて「重来」ではない。老人は当然「原来」である。彼らの僵尸のような行動は人を驚かすけれども、要するに当然の事とすることができ、珍しがって彼らのことを言う必要はない。怖いのは、オスヴァルのような、青年の「重来」である。だからこれは世界の悲劇になったのだ。

中国の青年の多くがオスヴァルのように酒を飲み女を弄び果ては発狂するとは言わない。これはむろんあり得ないことである。だがわたしは多くの青年が「旧礼教を代表して話をする」ことを知っている。実はこれは同じように悲しむべき事なのだ。違うのは、オスヴァルは彼自身の不幸を知っていて、発病の時に備えてマリファナを飲むが、われわれのはまさしくそれが一つの「重来」であることを自ら喜び幸いとしていることである。

われわれの幽鬼の祖先は男女の結婚の意義を理解せず、彼らはもっぱら父母のためにあるいは聖賢のために結ばれたのだと思っている。だからすべてが父母や聖賢の考えに適合しなければならず、当事者である二人はまるで干渉できない。現在では少なくとも青年の一部は理解しているはずである、結婚は純粋に当事者の事であり、そのほかの一切の閑人には口を挟む資格はなく、非難の権利がないばかりか、たとい称揚でもまったく必要ないということを。ところが豈図らんやそれを大いなる誤りで然らずとなす者がいるのだ。ごく普通の結婚でも、あれこれ細々と人心を正し頽風を挽回する話をし、まるでわたしの祖父の三十年前の教訓を聞いているかのような状態を見るのは、まことに「意表の外」に出る。「青年はもともと親父の息子」とは言うものの、結局一代の差があり、幾らかの変化はあるはずだが、いまは却って親父自身が「舎（からだ）を奪い」に又やって来た様子である。

古人が礼教を重んじたのは、あるいは別に理由があるのかもしれないが、最大の理由は性意識の過剰と抑制力の過少である。これは野蛮民族の実例を考察するだけで明らかである。道学者の品行の多くが不潔であることも、極めてよい例証である。現代の青年はまったく性教育を受けていないから、彼らが古い道学者の旧套に陥ちこむのももともと怪しむに足りない。だがそれは中国の不幸だと言わざるを得ない。極端な禁欲主義はすなわち形態を変えた放縦であり、そして伝

統道徳の擁護も同時にその中の不道徳を保守することであるから、神聖な恋愛を説く者はすなわち恋愛に夢中になることを不潔な性欲と見なすことに本性を表し、結婚を解消し再婚することを非難する人も決して蓄妾買婢には反対しない。わたしはこれは決して度はずれた刻薄な言葉ではないと信じている。

人間世界最大の呪詛は肖子順孫〔親に肖た息子と従順な孫〕という四文字である。現代の中国はまさにこの呪詛の下に押さえつけられている。（民国十二年六月）

※初出：1923 年 6 月 14 日『晨報副刊』

---

[i] イプセンのこの戯曲は、日本では『幽霊』と訳される。「重来（ちょうらい）」とは重ねてやってくるという意。祖先の悪分子が子孫に重ねて現れること。いわゆる隔世遺伝。

## 32　病院の階段

北京の協和病院*は、胡適博士の紹介によれば、東洋では設備の一等完全な病院であるそうだが、わたしには入って拝観する縁がないから、一言賛辞を呈することはできない。だが胡博士の言葉に間違いがあるはずはない。

わたしはふだん一週間のうち必ず三、四回はそこを通る。通るときには一二病人を見る。付き添いできた人に両腕を支えられたり、引っ張られたりしてきらびやかな玉の階段を登ってゆく。わたしは見るたびに、胡博士の言葉を思い出し、設備の上ではどうもあまり完全ではないらしく、まだ病人を運ぶ器具が欠けていると思う。たとい西山のような籠であっても、要するに病人自身が這う（実は這うとも言えない、というのは多くの人はまったく足もあげられないのだから）ようにして登るよりは少しはましだろう。

わたしはそこで又東の文化と西の文化との違いを推測する。西方の人間は誰も重病にはならないらしい、あるいは重病になってもこんなにたくさんの階段を登れるのかもしれない。東方の人間はそんな才能はない。

あるいはこれは軽い病気の人専用なのかもしれない。重病になった時には、病院に入るのではなく、医者を家に呼んで診てもらう。そうなればもう引っ張りあげたり引き降ろしたりして側の人間が見ても辛い思いをすることはない。この理由があるいは正しいのかもしれない。病院に入れないし、医者も呼べないのに重病になる人は、やっぱり引っ張り上げたり引き降ろしたりするに任せるしかない。たとい側の人間が見て辛い思いをしようとも。しかしながらわたしは又この目で一人の老婦人が、自動車からみんなに抱きかかえられて出て来て、階段を引っ張り上げられたのを見たが、これは例外とすることにしよう。（民国十二年八月）

※初出：1923 年 8 月 26 日『晨報副刊』

---

*北京の協和病院　1917 年ロックフェラー基金の援助で建てられた近代的病院。ここで言う階段は王府井大街の帥府園を東に望むと突き当たりに見える漢白玉製の、左右両側から登れるようになった半円形のそれである。

## 33　ロマンティックな生活

わたしは以前どうも中国人の過ごす生活は無味乾燥の単調な生活だと思っていたが、いまようやく自分は間違っていたと思うようになった。中国人の生活は決して単調ではない。実は異常にロマンティックなのだ。今回銅元票*の騒ぎを見て忽然と思い至った。わたしは少なからぬこうした騒ぎを見て来たけれども、今日こそまるで神助があったように、豁然と全部わかった。

歴史学者のヴァン・ルーンは、カルディア〔Chaldea　いわゆる新バビロニア〕人は十進法と十二進法を兼用すると言う。残念ながらわれわれは現在時刻を計算するほかはただ十進法しか用いない。中国人はみんな彼にとても共感して、まるでとても十進法を使いたくないみたいだ。というのは十進法はまさに非常に単調な計算法であるからだが、カルディア（西洋の学者には中国人はカルディアから移って来たのだと言う者もあるけれども）から十二進法は学ばない。だから彼らは独自に一から九までの進法を発明して、自由に応用する。例えば日常の収入支出は、一元が十角に値し、一角は十分に値し、一分は〔銅貨〕一枚に値する、日々此の如しでは、何の趣味があるか。現在一元を改めて十一角一分に値するとし、一角は九分に値するとし、一分は一枚七八九……に値するとし、そして紙幣十枚は又八七六から二十枚に値するとする、そこで計算すると十角は九角に等しく、五十枚は二十枚に等しい。世界で最も単調な数字をすべて奇妙幻覚なものに変えてしまう。まことに極度に強大なロマン性がなければこんな成績はあげられない。しかもこれら単調な数字のロマン化によって、みんなは奔走呼号して押し合いへし合いの闘争をし、生活の上にも多くの変化と趣味を増やす。これはなんという複雑な生活であろう！このような生活に対してまだこれを単調と称するなら、世界のどこに単調でない生活があろうか。

次に、わたしはついでに言わねばならない。今度の銅元票の騒ぎ及び中南銀行などの紙幣の取り付け騒ぎを見て、わたしは又極めて大きな安心を得た。つまり八月十五日以後の大恐慌は来るはずがないということである。もしほんとうに来るなら、みんな四、五日なんとか凌げばそれまでだ。銅元や現銀がなんの役に立つか。現在のあのような取り付けは、現金に変えて節前節後ゆっくり使うための準備である。あるいは彼らは現金に換えて紙銭を買って在庫を燃やしてしまうとすれば、それはやはり憂うべき現象だ。だが目下紙の値段が上がったという話は聞かないから、みんなは誰も節季を過ごすことにさよならする気はないのだと分かる。われわれもしばらくは安心してよい。宗教大同会で飯を食ってる先生方の予言はなんの価値もないだろう。ただ「天の聴は是れ民の聴」だから、わたしは八月十五日以後に必ずしも空前のなんとかはあるとは限らないと推測するのだ。あるとしても要するに前の銅元票騒ぎの続きに過ぎないだろう。（民国十二年九月）

※初出：1923 年 9 月 25 日『晨報副刊』

---

*銅元票　補助貨幣の銅元、つまり銅貨を紙幣にしようとした。銅貨の値打ちはその日その日に相場が立っていつも一定だとは限らない。それで一部で取り付け騒ぎが起こった。

## 34　同姓同名の問題

『青光』の姓名問題号で「仲賢の言葉」を見つけ、上海城内にわたしと同じ姓名でしかもどうやら同じ籍貫らしい「儒医」がいることを知った。仲賢先生の指摘を受け、又代わって声明してくれたことには、わたしは彼に感謝しなければならない。しかしわたしの姓名が他人と紛れるのは、別にこの儒医が初めてではない。だからこの小文を書こうと思ったのだ。

それは「五四」の年の春だった。わたしは東京の書店から一冊北大法科の周作仁君に宛てた（Nicholson）の『経済学』巻一を受け取った。値十……元で、わたしの勘定から引いてあった。わたし自身はこんな書物は読めないし、又要る人がイライラしながら待っていることを恐れたので、それを返送せず、法科の周君に手紙を書いて、わたしのところに取りに来るように言った。ところがなんと一ヵ月待っても、杳として消息がない。そこで又広告を出して訪ねてやったところ、ようやく一枚の返信を得た。何かの理由で、その本はいらなくなったが、その責任はすべて書店にあるというのだ。別に方法がないので、『経済学』を返送して、その曲折を説明し、前後三ヵ月かけてやっとこの紛糾にかたをつけた。これがわたしの姓名が人と同音なばかりに、「バカを見た」*物語である。幸いにその周君はまもなく外省に去り、彼が北京に戻って来るまでは、わたしはたぶん安心して『経済学』の代理受け取りの小使いをしなくて済むだろう。

「五四」以後、教育は完全に停滞し、学校は開学できない形勢にある。この時突如故郷の友人がわたしの友人に手紙を書いて、わたしがいつ北京を発って、上海のどこにいるのかと訊いて来た。彼は新聞から切り取った記事を同封して証拠としたが、そこには上海のなんとか拳術会が某所で会を開き、会長の周啓明が演説をした云々とあった。わたしが拳を打てないことは、その友人も知っていた。しかし中国の習慣では、会長になるには必ず拳を打てるという必要はないのである。だから彼はわたしが拳術会の会長になってはからずも演説をやったのかと疑ったのである。わたしは一通返事を書いて、わたしは決して北京を出ていないと声明したのであった。しかし故郷ではわたしがまだ拳術会の会長をしていると信じている人はたぶん少なくないだろう。いまわたしは又「人を活かすこと無数」の儒医になった。あるいはこのために仲賢先生のようにわたしが「医理に精通している」のかと疑う人が出て来るかもしれない。わたしとしては医はわからない上に、さらに儒でもないのに、理由もなしにこんな肩書きを手に入れたのは、実にびくびくものである。だがこれはわたしにとって実際上なんの差し障りにもならなければ、喩えば彼の医書が間違ってわたしのところに送られてこず、わたしの手紙が間違って彼のところに行かなければ、なんの問題にもならないし、自然に任せて、それぞれがそれぞれの事をやればよい。

姓名が同じだからと言って、他人に改名を要求するのは、もちろん不可能であるし、自分が改名するのも、その必要はないようだ。もし年から言えば、おそらくわたしが譲歩しなければダメだろう、というのはわたしのこの名号は二十二年しか使っておらず、他の人と比べればずっと後だろう。（ただそう推測するに過ぎないのだが。）しかしわたしは使い慣れ、変えるのは面倒である。――しかしながら例外もある。もしわたしが突如奇想を発して、医書を読み始め、しかも北京城内に「壺を掲げ」〔漢方医の看板〕、本格的な儒医になったならば、その時は同業に対する道

義の関係上当然別の名前にしなくてはダメであろう。（民国十一年十二月）

※初出：1922 年 12 月 3 日『晨報副刊』

---

*原文「肩了一回“水浸木梢”的故事」　平湖方言・海寧方言らしく要するに呉語で、紹興方面でも使ったのかもしれない。「木梢」は「木頭」のこと。水に浸った木材は見掛けよりずっと重い、それを軽いと思って担ぐこと。文表の意はそういうこと。

## 35　別名の解釈

近ごろ文章を書く人はたいていが本当の姓名を使うようになったが、相変わらず別名を使うものもいる、——わたし自身もその一人である、——その理由はわたしの考えでは次の三つに分かれる。

その一で最も普通なのは恨みを招くのを恐れる。古人に「怨毒の人に於けるや甚だしいかな」という言がある。現在ではもっと何度も言い訳をするのを面倒がる。わたしの友人は社会上多くあるギクシャク*の理由を求めて、一種の「私怨説」を発明した。これを執って研究すれば、往往にして適合する。彼が公表した「お辞儀主義」がすなわち「私怨説」に基づく処世法である。この文章によって少なからぬ怨恨を招いたけれども。もし誰かがお辞儀しようとせずにしかも又恨みを招くのを恐れるならば、彼は別名を使って隠れるしかない。これも大目に見るしかないところがあって、匿名で人の弱みを責めるのとは違うけれども、どうもあまりに勇気がなさすぎるきらいがある。

その二は変化を求める。定期刊行物の編集を担当する人々は、いつも多くの文章を書かねばならない。もしいつまでも同じ名前でいたら、今日は某甲、明日も又某甲、前が某乙、後ろも又某乙では、読者の興味を削ぎかねない。だから一つ二つ別名を使って変化を加える。別名を使うことに最も反対される胡適先生にも「天風」など二、三の変名があることを思い起こすだけで、こうしたやり方が已むを得ないものであることが分かる。

その三は「聞達を求めず」である。この言葉はあるいは少し奇怪に聞こえるかもしれないので、少し説明を加えるべきだろう。近ごろ中国の批評界は大いに発達を遂げて、批評家は雨後のキノコのように至るところに現れた。特に漫罵ができる者が容易に名を成し、まことに「一度目覚むれば名は天下に満つ」であるが、バイロンと違うところは、いわゆる名を成すは実はただ「著名」（Notorious）なだけである。ある人々はあまり「著名」なることを喜ばない、しかしながら又ものを言いたくて我慢できず、「著名」になって、「批評（あるいは評隲と言い、あるいは平論と言う）家」どもと一緒くたにされないように懸命になる。そこで別名を使うしかなくなる。わたしが下した評語「聞達を求めず」は褒め言葉のようだけれども、すこぶるツボに嵌っているのだ。

わたし自身は他人を嘲弄しないし、文章も多くは書かないし、まして口を極めて漫罵はしないし、「批評家」と尊ばれる資格はないから、もともと別名は使わなくてよいのだ。——だからわたしが別名を使うのは理由がないわけで、ただ自分の whim〔酔狂〕でしかない。（民国十二年十二月）

※初出：1923 年 12 月 28 日『晨報副刊』

---

*原文は「齮齕（きげつ）」ないし「踦嚙」。『漢語大詞典』・『佩文韻府』等にもない。仮にそう訳しておく。友人とは劉半農のこと。彼には「作揖主義」〔お辞儀主義〕という有名な文章がある。

## 36　別号の使い道

何日か前林玉堂〔語堂〕先生の「ユーモア」を提唱する文章中で、名前がなんとか然という人を取り上げられていたが、わたしはそれを聞いてどうしても「耳に残」って仕方がなかったので、出て来て少し説明しなければならない。近ごろ雑感を書いてなんとか「然」という名の人はわたしの他に「浩然」先生が一人おられるだけだから、わたしは少なくとも五割は話をする資格がある。わたしは林先生に別に抗議をしようというのではない。ただ別号を使う意味を少し説明したいだけなのだ。

わたしがふだんこの名前を使うのは、姓を陶名を然としているつもり、（古に計然というのがある、）だが、みんなを騙せないから、これが別号でしかないのは、もう言うまでもない。この出典は、つまり「宣南」の陶然亭にあることも、極めて見やすい、――つまり金心異たちがぶん殴られたところである。[i]*この別号がなんの役にたつかについては、あまり大きな意味はなく、別号のつもりというに過ぎない、つまり比較的固定したほんとうの姓名の代わりである。

それではみんなはきっと訊くだろう、なぜほんとうの名を使わないのかと。この問題については、幾つもの堂々たる答案がある。だがわたしは真面目に言って、面倒を避けるためだと答えることができる。各位は中国がものごとの転倒した国であることをご存知だろう。「字を書くのは右から左へ、飯を食うのにスープは最後に飲む」、老人が恋愛を語り、青年が礼教を維持する国である。われわれが話をするのに少しでも油断すると、大いに後生の怒りに触れ、たとい「馬鹿者」と排斥されなくとも、――これは滅多にない幸いで、――偏激と指弾されるのは必定である。わたしと排行の同じ浩然先生はすでに日本人だと鑑定されており、わたしもたぶんまもなくインド人に変わってしまうだろう。なぜならわたしはあまり「亡国奴」タゴールを駆逐することに賛成でないからである。もう一点、いつも関係のないことを言って青年を「激悩」させるほかに、わたしは又少し不真面目な話をするのが好きだから、たっぷり肉欲のある二三十歳の道学先生を雷の如く怒らせてしまい、聞いただけで思わず恐くなるからである。みんなが宗教を滅ぼして朝飯にしようとしているときに、わたしは個人が宗教を信じないのは構わないが、宗教はどうしたところで滅びないと考えている。みんなが排日している最中に、わたしは日本の文化にはそれなりの特殊な価値があると思っているし、また特にあの「女郎屋式」の絵画や歌曲が好きなのである。ああ、悪人の好むところは、善人の憎むところ、「寄って集ってコテンパンにやら」れない者は、けだし稀である！別号を使うのは、それによってこの難題を解決するので、某国人と鑑定されるけれども、「呉吾には自ずから呉吾の責任がある」の例を引いて言い逃れをすることができる。こうした蝉の抜け殻式の計はもともと正当なやり方ではないが、われわれ中国では実に必要な方便の奥の手であるのだ。

中国人は笑い話を聞くのが好きだが、（当然三河県の女中の笑い話、）「ユーモア」あるいは「アイロニー」（irony）についてはまったく理解の能力がない。三年前の六月三日北京八校の教職員が新華門で軍警に殴られて負傷し、政府は公文を発表して自分で負傷したのだと言った。わたしは十日の『晨報』に「ぶつかって怪我をする」という雑感を書き、その一節でこう言った。

「三四年前、浦口・下関間の小型の渡し船一隻が、江心に停泊中の中国の軍艦の舳先にぶち当たって、たちまちに沈没し、旅客は一人も亡くならなかったそうである。（たぶん乗船の時に点呼して数を報告してあって、調査ができる帳簿があったのだろう。）一二年経って、招商局の汽船が、また長江で当時の国務総理が乗っていた軍艦の舳先にぶつかり、すぐさま沈没して、若干の値打ちのない人間が死んだ。年月と両方の船名、死者の数、わたしはみな覚えていないが、ただ上海で追悼会が開かれた時、一副の輓聯に、「未だ必ずしも同舟みな敵国ならず、図らざりき吾輩亦清流」とあったのを覚えている。

これによって、ぶつかって怪我をするのは実は中国ではよくある事であることがわかる。完全な責任については、当然怪我させられた方が負う。……」

こうした話にはなんの深みもあり得ないが、結果がどうだったと思いますか、ある青年が手紙を寄こし大いに罵倒して、政府の犬と言った。もし本当にそうだったら、まさしく「人の酒を飲んで、人の悪事を暴く」という諺そっくりで、しかもなお面白味がある。残念ながらわたしはこんな名誉職を得て、実際「人の子にも当らない」のだ。だがその時は別号を書いていたので、この犬という肩書きも彼が被っただけで、わたし自身は楽々悠々自適であった。

これが別号のよい点である。――しかしながら、「呉吾」先生は結局法とするに足らず[ii]、ああした人々の言も恐れるに足らず、われわれは今後やはり林先生の仰るように、ほんとうの姓名を使って中国人のあまり理解しない笑い話をするのかもしれない。（署名陶然）（民国十三年五月）

※初出：1924 年 5 月 28 日『晨報副刊』

---

[i] 林琴南の小説「荊生」参照。

[ii] 「呉吾」先生　五四新文化運動の中で、胡適から中国思想界の道路掃除人と評された呉虞は、狭斜の人物に贈る詩を作っていた。その詩の存在を又辰という人に『晨報副刊』誌上で指摘され（1924/4/9）、さらに XY なる人物からそれに対して、そんないやらしいヘボ詩を作ったのは“打倒孔家店の老英雄”ではなく、“孔家店の番頭”だと揶揄罵倒された（1924/5/29）ことに対して、呉虞は『晨報』記者に宛てて弁明の手紙を寄せた。それは 1924/5/2 の同紙に載った。そこで呉虞は「呉吾の詩に至っては自ずから呉吾が責任を負うから、それを呉虞に拘わせる必要はない。それは西瀅の文は、自ずから西瀅に責任があって、陳源に拘わせる必要がないようなものである。もし呉吾はすなわち呉虞だと指定されるならば、わたしも遁辞は弄さない」と言う論法ではぐらかした。呉吾と呉虞は音が近い。すぐ上の周作人の文、「この犬という肩書きも彼が被っただけで、わたし自身は楽々悠々自適であった」というのも、この論法を応用したのである。なお呉虞の詩文集は『呉虞集』（田苗苗整理　中華書局 2013）にまとめられている。

## 37　文士と芸人

わたしは他人が自分のことをどんなあだ名や称号で呼ぼうと恐れはしない。丹毒を患っている同郷の一人が囈言の中でわたしのことを傲慢で鶴のようだと言った。ある族叔はわたしが生まれた夜彼はその目で一人の老僧が表門から入ってゆくのを見たと言った。だからわたしは鶴とか老和尚とか言われてもなんともない。誰かがわたしは丘八だとか丘九だと言っても、わたしは認めることができる。なぜならわたしは確かに何年も「野鶏学生」[i]、つまり「兵隊」をやったことがあるからだ。

しかし最近出現した二つの称号だけは怖い。つまり「文士」と「芸人」である。

芸人とはどうも芸術家のことらしい。たぶん西洋の「アーティスト」（artist）を訳したのだろう。だがわたしには一種先入観があって、日本の芸人という熟語を見慣れているせいで、どうもこれを「アーティースト」（artiste）の意味だと思ってしまう。これは俳優のようなものだから、この言葉についてはあまりいい気がしない。わたしの古い頭では、中国の娼優隷卒はどれもみな類似した人物なのである。さいわいわたしは筆を振るって蘭を書いたり石膏を塗ったりできないから、こんな尊号を奉られる日は来ないことに安心していられる。

古文は何日かは読んだことがあり、白話も少しは喜んで書く、そこで文士という肩書きの危険性が増える、（いま現在ではまだそんな光栄には浴していないけれども。）わたしがこの名前を恐れる訳を言うとなるとすこぶる面白い。というのはわたしの意想の中での文士は今回はユダヤにあるからだ。つまり『新約』に言う「グランマティウス」（Grammateus）である。マルコによる福音書を開いて調べると、第十四章の一節に次のように言う。

「二日を過ぎれば是れ過越の祭りなり、又是れ除酵の祭りなり。祭司長と文士は如何にして詭計を用いてイエスを捉え彼を殺すかの法を考う」と。[ii]中国の文士はむろん別の種類の高雅な人物である。だがこの名前はユダヤ人に悪用され、実際すでにそれほど芳しくはなくなり、あるいは改称するに越したことは――うーん、一時には思いつかない。百科事典を参考にしてからにさせてもらおう。わたし自身は、まだしも文童と呼ばれた方がよい。「終覆（さいしゅうしけん）」は受けていないけれども、――残念、すでにこの術語の意味を理解できるひとも滅多にいなくなった。これは実に科挙廃止の流弊の一つである。最後に一言声明しておく、この童の字は資格〔文童　県試合格者のこと〕を言うだけであって年齢を言うのではない。古人の句に云う、「老童歌嘯す水雲の間」とは、その例である。（民国十四年四月）

※初出：1925 年 4 月 3 日『京報副刊』第 108 號

---

[i] 「野鶏学生」　野鶏とは正式でないもぐりを言う。周作人の出た江南水師学堂や陸師学堂は兵学校であるので、正式の学校とは差別されて、そう呼ばれたのであろう。

[ii] 日本語の文語訳では次の通り。「さて過越と除酵との祭りの二日前となりぬ。祭司長・学者ら詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと企つ」と。

## 38　思想界の傾向

現在の思想界の情況を見て、将来の趨勢を推測するに、思わず深い杞憂を抱かざるを得ない。というのはわたしから見れば、これは国粋主義勃興の局面であり、その必然的な二つの傾向は復古と排外である。その国粋派は必ずしも明堂の復興やあるいは攘夷を実行するとは限らないが、思想的にはこれらの傾向はすでに顕著である。『四存月刊』などの旧勢力の残余は、勘定に入れなくてよい。最も重要なのは新しく起こった事件である。北京・上海各所で孔門の礼楽を提唱する人が出たり、それから朱謙之君が「古学」を講じたり、梅〔光迪〕・胡〔先驌〕諸君の『学衡』、……最後は章太炎先生の講学である。太炎先生の学問については、わたしは極めて尊重するものである。だが彼は現在では専門の教授に適するだけで公衆への講演には不適であると思う。でなければたやすく復古運動の本営になってしまう。たとい彼の本意がそうではなくとも。われわれは国故〔文化遺産〕を整理しなければならないが、必ず現代の新しい学説新しい方法によってでなければ、成績は上がらない。例えば文学の研究なら、われわれは外国の文学批評の新説に依らざるべからずで、もし中国の旧説によるならば、載道の文は当然文学の正統になって、小説戯曲はすべて玩物喪志であり、少なくともやはり文学のうちには入らないだろう。太炎先生の講学はもちろんよいことである。だがわたしが憂慮するのはその結果必ずしも国故整理の前途に十分な助力にはならず、ただ多くの復古の種を育てるのが落ちで、とても残念に思われてならないことである。聞くところでは上海にはすでに次のような言論があるそうで、太炎先生が国学を講演するので、白話新文学がすべて無価値なものであることが分かると言うのである。これによってもわたしの杞憂が全く根拠のないものでないことが知れる。現在の情況からすると、二年を出ずしてみんなは国粋に身を投じ、古い衣冠を着け、古い文字を使い、礼を定め音楽を作り、あるいは参禅煉丹をし、あるいは撃剣を習い、あるいは扶乩占卜を治め、あるいは駢文律詩を作り、共に東方化の至治にいたるだろう。わたしの予言は最もよいのは当たらないこと、しかも当たらない可能性もある。というのは反動というものは徹底的な勝利ができず、その間に圧迫された新勢力が自然と反抗の運動を起こすから、場合によっては古い衣冠を着けたと思ったら、たちまち脱がざるを得なくなるかもしれない。だが現在事柄そのものについて言えば、この国粋主義の勃興は否定しようのない事実である。

最後に一言説明を付け加えておく。現在のあらゆる国粋主義の運動はたいていが新文学に対する反抗であるが、以後はいささか色彩を変え、国家の伝統主義となると推測する。つまり一種の異文化に対する反抗の意味を含むのである。これがよいか悪いかはしばらく言わないが、これも事実であるとわたしは信ずる。（民国十一年四月十日）

※初出：1922 年 4 月 23 日『晨報副刊』

## 【附録】仲密君の「思想界の傾向」を読んで[i]　　Q.V.

昨日の新聞に仲密君の「思想界の傾向」が載った。わたしはそれを読んですこぶる感想を持った。仲密君はあまりに悲観的すぎるように思う。彼は「現在の思想界の情況は、……これは国粋主義勃興の局面であり、その必然的な二つの傾向は復古と排外である」と言う。仲密君は又「現在の情況からすると、二年を出ずしてみんなは国粋に身を投じ、古い衣冠を着け、古い文字を使い、礼を定め音楽を作り、あるいは参禅煉丹をし、あるいは撃剣を習い、あるいは扶乩占卜を治め、あるいは駢文律詩を作り、共に東方化の至治にいたるだろう」とも言う。こうした悲観的な推測は、どうやら誤っているようだ。

仲密の根本的な間違いはすでに過ぎたあるいはまもなく過ぎようとしている情況を将来の傾向とみなしていることである。「復古と排外」の国粋主義は、当然将来にはなく、過去にある。「古い衣冠を着け、古い文字を使う」国粋主義は、ほとんど過去のものになってしまった。たとえば「金心異」先生が湖州絹で作った深衣を着て役所に行ったのや、仲密先生が十何年か前『域外小説集』を訳した時に「古い文字を使う」嫌疑を犯したことがあったのなどだが、これらはみんな過去になってしまった。

「礼を制定し音楽を作る」聖賢に至っては、近ごろパリの毛唐が送った羊皮紙を断りはしなかった。まして辜鴻銘先生はかつておっしゃった、「四存」の捲簾格[ii]は、「忘八」と格好の対だ、と。崇古の辜鴻銘先生を以て、「四存」の聖人をこんなに蔑視させたのだ、ならば「四存運動」の畏るるに足らざることは、また明らかではないか。

「参禅煉丹をし、あるいは撃剣を習い、あるいは扶乩占卜を治め、あるいは駢文律詩を作る」に至っては、やはりすべてすでに過ぎ去ったかあるいは過ぎ去ろうとしている事であって、将来の趨勢と言うことはできない。「駢文律詩を作る」について論じてみるとする。わたしは将来は白話文と白話詩の作者の増加しかなく、「駢文律詩」の作者の増加はあり得ないと予言できる。かりに現在「復古」の聖人が出て、現在の女学生はみな三寸あるいは四寸の纏足にすべしと、命令を下したとしても、仲密先生、あなたはこの命令が実行できると思いますか。それが実行できないのは、これらの女学生がすでに久しく纏足の美を認めないからに過ぎない。今時でも綿を詰めて天足の振りをせざるを得ない多くの女性がいるけれども、纏足開放の趨勢はすでに未荘の趙秀才が辮髪を巻いている時代を過ぎたようである。（この典故は『阿Q正伝』の第七・八章。）白話文と白話詩の趨勢もすでに「辮髪を巻く」時代を過ぎたようである。現在はまだ「綿を詰める」時代を脱していないけれども、われわれは謝冰心・汪静之諸君が決して駢文律詩を作りに戻らないと断言できる。最近の『学衡』雑誌には胡適之君が古体詩を作ったという悪いニュースが出ているようだが、この消息がたといほんとうだとしても、たいがい昨日北京大学の学生が蟒袍や補褂〔いずれも清朝の官服〕を着て「盲人仮装競走」をやったような事に過ぎず、『学衡』の同人を楽観させるに値せず、また仲密君を悲観させるにも値しないものだ。

仲密君はもう一つ大きな間違いをしている。つまり「不思想界」の情況を「思想界」の情況と看做していることだ。現在では「参禅煉丹をし、あるいは撃剣を習い、あるいは扶乩占卜を治め

る」人々が、まさかほんとうに「思想界」の人々ではあるまい。彼らはフィルムをピントの合っていない所に置いて撮った写真を捧げて、真心から呂祖の真容だとして、喜んで叩頭礼拝する。このようなバカでも「思想界」の雅号に見合うのか。

仲密君の挙げる例に朱謙之君の「古学」を講ずるのと、梅・胡諸君の『学衡』、章太炎先生の講学がある。これらすべてわれわれを悲観させるに足りない。朱謙之君はもともと「古学」を講じただけで、彼の『革命哲学』とまだ完成していない『周易哲学』は、ともに「古学を講じ」ている。彼はもともと時代に合わせて新派に変わったわけではないので、われわれも彼が時代に背いて復古するのかと疑う必要はない。梅・胡諸君の『学衡』もそうである。梅・胡を知っている人は、みな彼らは相変わらず七、八年前の梅・胡であることを知っている。彼らが代表する傾向は、決して現在と将来の傾向ではなく、実は七、八年前――ないしは十何年前の――傾向に過ぎない。不幸にして『学衡』は冷蔵庫に何年も置かれて、ようやく一九二二年になって出てきて、かくて仲密君の誤解を引き起こした。

太炎先生の講学については、さらに近ごろのよい事件である。仲密先生が「その結果……ただ多くの復古の種を育てるのが落ちである」と憂慮する。これは本当に思い過ごしである。太炎先生が当時日本で講学された歴史を、仲密君は知っている。東京で当時聴講した弟子の中には、もちろん黄季剛および亡くなった廉心孚先生がいたが、中には銭玄同、沈兼士、馬幼漁、朱逿先の諸君もいたではないか。仲密君は又太炎の講学によって起こった上海の言論を取り上げている。だがわたしの知るところでは、上海の新聞界にこの度起こった言論は決してなんら盲目的な復古論調を示すものではない。太炎先生はある時の講演でちょっと白話詩と白話文を批評されたが、次の日にはすぐに邵力子と曹聚仁両君の駁論が出た。曹君はすなわち太炎の講演のために筆記者を務めた。これはさらにわれわれの疑念を打ち払うのではないか。

最後に、わたしは自分自身の思想界に対する感想を持ち出したい。

> われわれは梅・胡諸君に『学衡』を止めさせることはできないし、また太炎先生の講学を禁止することもできない。われわれはもちろん新しい種が伝播することを望むが、胡椒を甘くしたり、甘草を苦くしたりすることを望むことはない。
>
> 現在の情況には、決して「国粋主義勃興」の事実はない。仲密君の挙げた多くの例は、いずれもみな退潮のわずかな戻りであり、楽章の終わりエピローグでしかない。
>
> たといこのわずかな戻りが果たして大波に変わり得ようとも、たといエピローグの後に果たして天をも揺るがす大音響があるとしても、われわれを憂慮させることはない。
>
> 文学革命の健児たちよ、努力して前進せよ！文学革命が一つあるいは十、百の章太炎の講学に耐えきれないならば、それでもまだ革命軍の体を成すのか。一九二二、四、二四。

---

[i] これは胡適の文章である。1922 年 4 月 27 日『晨報副刊』に掲載。

[ii] 捲簾格　灯謎の一種で、下から読めば謎が解ける。この場合「四存」を逆に読むと「存四」で「忘八」〔アホバカ〕と対になる。

## 39　気に入られない思想革命

『努力』週報が停刊になった。これは残念な事である。だが胡適之先生の公開状の中で、月刊あるいは半月刊に改め、しかも「将来の新たな努力ですでにできるだけ思想・文学上の事業をやることに決定した」と言う。これは又とても喜ばしい事だと言わざるをえない。

わたしは文学革命の事業に賛成するものであり、特に思想革命に賛成する。だがわたしはあらかじめ説明しておかねばならない、思想革命は最も気に入られない事業であり、ただみんなの踏んだり蹴ったりの罵倒は受けても、感謝を受けることはあり得ないはめになるものだと。政治運動をする人は、成功すればもちろん大いに利点があるが、たとい失敗しても、少なくとも同じ派閥からはやはり擁護と感謝を受ける。ただ思想革命の鼓吹者だけは孤独な行人で、せいぜい四、五人の同伴者がいるだけ、荒野の叫びは、無駄な叫びでなければ、熟睡している人たちを起こし、むやみな打撃を食らうだけである。民党の人は孫中山の信用を得ることができ、天津派の人は曹仲三[i]の賞識を得ることができる。敵方は彼らに反対だけれども。思想改革者となっては両方に気に入られず、曹仲三は彼を打とうとするし、孫中山も彼を罵倒しないとは限らない。甚だしきは旧思想の犠牲者である一般民衆も彼を常軌に背くものだと言って重罰を要求する。中国は現在政治が統一されていないのに、思想・道徳が統一されているから、それを少しでも動かそうとすると、老人に若者、男に女、南方北方の人々が一斉に立ち上がって反対し、名教の罪人にされてしまうことをあらかじめ覚悟しなければならない。『新青年』が正しくその前例である。陳独秀は『嚮導』をやり、胡適之は『努力』をやったが、一部の人間の不興を買い、『新青年』誌上の何篇かの思想的な文章のために、二人は今に至るも全国旧派の眼の上のたんこぶであり、秋瑾事件と関係のある「張譲老」[ii]が最近経子淵が浙江第四中の校長になることに反対し、電文の中でも陳・胡の罪は大にして悪は極まれりとまで言っている。わたしは決してこれらの話で胡先生を脅かし、彼にこんな気に入られない事はやめろと勧めるのではない。それどころか実際は彼が身を挺してこの水浸しの材木を担ごうとすることに、非常に感服しているから、この何行かを書いて、この件に関するわたしの歓迎と憂慮を表すのである。

思想改革を取り上げようとすれば、勢い必ず習慣的な旧道徳に攻撃を加えなければならないが、これは決してわれわれこの「礼儀の邦」の人間の受け入れられるところではない。年寄りがそうばかりか、青年の中にも多くの多くの「年は老いざれども心すでに老いたる」先生方がいるから、反対はもっと元気が出る。もしもこれがただわたしの杞憂にすぎないなら、これほどよいことはない。恐れるのはわたしの予言が結局当たることで、----不幸にしてわたしの予言はかつて何度も当たったのである。あるいは別の問題ならまだそれほど重大なことにはならないだろうが、性の倫理の改革を言うならば、必ず心老たる青年（老年は言うまでもない）の迫害に遭うだろうことをわたしは確信する。……身を売った豚の子議員はまだよい、心老たるこそ我を殺す！願わくば「新たなる努力」よ、冒険努力せよ！（民国十二年十月）

※初出：1923 年 10 月 27 日『晨報副刊』

[i] 曹仲三　曹錕のことを言うらしい。　曹錕（1862～1938）、字は仲珊、天津の人。直系軍閥の首領、議員を金で買って第五次の民国大総統になった。その金で買われた議員を猪仔、豚の子と言う。曹仲三は又別にその人がいる。袁世凱の武将を務めた。「三」と「珊」は音が近いので誤ったのだろう。

[ii] 「張譲老」　未詳。経子淵（1877？～1938）は、浙江上虞の人。東京高師を卒業、中国革命同盟会に加入、浙江両級師範学堂の校長、のち国民革命に参加、中山大学副校長などを歴任、教育者であった。

## 40　問星処（ほしうらないしょ）の予言

東安市場に「問心処」というのがあり、すこぶる名流・要人の信任を得て、その占いはとても効験があると言うが、わたしは教えを請うたことはないから、代わりに証明することはできない。わたし自身の予言はかなり当てになると思うので、そのうち「問星処」を開設し、打って出ようと思うが、今はまず成績を一二宣伝して、自画自賛的に鼓吹しても構わないだろう。

壬戌〔1922 年〕の夏の間にわたしはかつて中国は取り締まり思想を実行するだろうと予言[i]したことがあり、以後又思想界の趨勢は復古的反動に傾くだろうと宣言した。当時「何之」先生（原名はラテン語の縮写であるが、今は仮に意訳とし、四書の成語を採用した。『世界叢書』には出来合いの訳名があるけれども、五字もあって、長ったらしいので、使ったことがない。）が反対を表明した、しかしながら事実は雄弁にまさり、「何之」先生とわたくしも共に「ブラックリスト」に入れられてしまう、しかも城門失火して殃（わざわ）い池魚に及ぶで、『天風堂文集』は『一目斎文集』のせいで禁止され、『愛美（アマチュア）の戯劇』は『愛の成年』のせいで連累を被り、最近では「幾道厳復」の『社会通詮』――実はジェンクスの政治史も違反書目に入れられてしまったそうだ。たぶん社会主義の嫌疑を受けたのであろう。何年も前日本の警視庁は内田魯庵の訳したシェンキエヴィッチの『二人画工』のなかの恋人がしょっちゅう Kiss をしようとするので、それを禁止した。ロシアの検察官は菓子屋の広告の中に「四民の自由選択のご贔屓に預かる」という言葉を見て、カンカンに怒り、強制的に改ざんさせた。いまそれに民主立憲の大中華の盛事を付け加えたならば、独ならずして偶ありとなるばかりか、まだその上鼎足にして三と揃うことになる。これは決して多くの諸公がそうであるだけではなく、青年でさえもそうであることは、かのタゴールに対する厳しい情況を見ただけでわかる。もしその手に実権があれば、たぶんタ翁は駆逐出境させられなかったとしても、『ギーターンジャリ』はおそらく没収禁止を免れなかっただろう。こうした一等のハイカラな運動は、根本精神において礼教を維持する反動と変わるところがなく、つまり取り締まり思想である。思想が取り締まれ、一尊に定められるかどうかについては、親父も少年もみな同じように分からず、又考えたこともないのだ。

三ヵ月前北京では「偉大なフィルム」『自由魂』が上演され、三 K 党の忠義が提唱され、わたしは中国に三 J 党が出現し、猿がゴリラの真似をする芸当をやるのではないかと恐れたが、果たせるかな近日の新聞には上海で三 K 党の機関部が捜索され、アメリカ籍の二人と五人の中国人が捕まったとある。だがわたしは白状しなければならない。わたしはやはり「不幸にして言中（あた）れり」だったけれども、今回の神卜は少し間違っていた。わたしの星象の上では結局これがアメリカの三 K 党の支部であることは見出せなかったが、――なんと中国人がアメリカ人の代わりに有色人種を仇敵視して殺戮する会党を組織するなどとは思いもしなかった！中国人は由来すこぶる秘密結社の嗜好を持っている。家族制度がすでに破壊され、収拾がつかず、別に組織しようとしても、親父やら伯父やら叔父やらが騒ぎ立て、いかにも事ありげに一騒動やらかすのは、歴来会党の多い左証とすることができる。だがこれらの秘密団体は当初はそれぞれに正当な目的を持っていた。青幇（チンバン）・紅幇（ホンバン）の滅清、「安慶（！）道友」[ii]の安清〔清の支配を安定させるの意か〕などだが、後に

なって次第に忘れられただけのことだ。三 K 党に至っては、有色人種の排斥を職志とするのに、面の皮がこげ茶で目が石のように硬い中国の友人たちが訳も分からずまるで市場にでも行くように靡くのは、天下の奇観を極めると言うべきである。この奇観はわたくしの予言の中に先ずその兆しは見えていて、星術が神秘微妙でないと言うことはできない。たとい少し出入りはあっても、すでに世界でも珍しいことで、十分に預言界で誇るに足るものである。

しかしながら、わたくしがどうしてほんとうに神術を使えよう。わたしが恃むのも光明を与えてくれる一つの星に過ぎない、――星は他でもない、つまり一部の『綱鑑易知録』がそれである。昔バクーニンは言った、「歴史の唯一の用途は人に二度とそうなってはいけないと警戒させることだ」と。わたしはその言に反して、「歴史の唯一の用途は人に又こうなるぞと知らせることだ！」と言おう。仮にもこの意味が分かれば、国民の未来を予知することができ、「百世といえども知るべし」である。わたしはこの星の光の指示により、中国国民はしばらくこのように馬鹿丸出しでゆくだろうと予言する。しかしこれ以後ももっとひどくなるとは限らない。なぜならすでに馬鹿さ加減はここまで来ているのだから。もうこれ以上馬鹿になりようがないだろう。（民国十三年七月）

※初出：1924 年 7 月 5 日『晨報副刊』

---

[i] 予言　「思想界の傾向」を言う。本書同文参照。したがって次の「何之」は「胡適」のこと、「何」も「胡」も疑問詞で、「之」「適」は「行く」という意味が掛けてある。同じく『天風堂文集』は『胡適文存』、『一目斎文集』は『独秀文存』を言う。「何之」につけられた自注については、胡適の先の文章の署名が「Q.V.」であったことから、シェンキエヴィッチの小説『クオヴァディス』（*Quo Vadis*）に引っ掛け、それを意訳して「何之」、つまり「何(いずく)にか之(ゆ)かん」と言ったのである。その中国語訳『你往何處去』は確かに商務印書館の『世界叢書』に入っている。ただ「四書の成語」と言うけれども、「何之」は『儀禮』に出るので四書ではない。

[ii] 「安慶（！）道友」　秘密結社哥老会の一派で、安徽省安慶の水手や塩の密売人によって組織されたと言われる。だがなぜ安慶に（！）符が付いているのか、陳独秀が安慶の出身であるからか、それとも後出の「安清」との呼応による単なる駄洒落か、未詳。

## 41　読経の将来

わたしは職業的な星占い師ではなく、又天文学会員でもない。わたしの予言は不幸にしていつも的中するのだけれども。天機を漏らすのを恐れるために、わたしはふだんあまり話をしない。いま聖パウロの子孫も中国に占いを売りに来ているのを見ると、夷を用て夏を変える憂いがあるばかりか、やはり底抜けの盃のように大きな損害の一つに属する。異端の排斥と帝国主義のために、特別に融通無碍に世間に出たのだろうが、思うに又我が都人士の喜んで聞くものでもあろう。

わたしは諸君に補助貨幣で二角を寄付してくれと頼む必要はなく、名を揚げるためにまず最初の予言を宣布しよう。これは読経の将来という問題についてのものである。わたしの真正の祖伝の神卜の爻象から見れば、この経は必ず読まねばならないものだ。民国十五年以後は各国の学校内で頭で輪を書きながら狂ったように“子曰（のたまわ）く”と叫ぶ声が聞かれない処はなくなるだろう。一日と十五日には学宮に勢揃いして九拝の礼をして、『四書味根録』を上海の二大書局が競争で発行し、『角山楼類腋』[i]の商売も大当たりをするだろう。十六年ごろには最も勢い盛んな時期で、十七年からは次第に衰え、以後は三・六・九の年に揺り戻しはあるものの、逐次逓減し、三十年になれば煙も火も消えて、儒教会は改めて三官菩薩を奉るだろう。（以上の経過は定命である、ただ干支の数字には出入りがあるかもしれない。というのは番号がはっきりしないのはいつもの事であるから。）この予言には二重の根拠がある。その一は内的なもので、玄学的神秘的で、素人の理解できるものではない。その二は外的なもので、科学的で解りやすいもので、簡単に説明ができる。みんなは読経の盛業が艮の方角に発祥したことを知っている。[ii]だがこれは経が大いに読まれるであろうことの兆候とすることはできない。というのは一人の人間が顎でこき使う力は結局有限であって、しかも艮にも邁進の象がないからである。われわれが頼りとするのは民気――大衆の気勢と気運である。ここ何年かの民気の趨向を察するに、衛道愛国にある。帝号を回復する運動は、これを尊王と言う。直脚鬼（がいこくじん）を追い出せというスローガンは、これを攘夷と言う。キリスト教を非とする、これを異端を攻めると言う。新文化を罵倒する、これを邪説を退くと言う。これらはいずれも聖人の陰魂の啓示であって、むろん学芸上の国粋、東方文化、伝統主義等々の提唱と言う必要はない。ひっくるめるなり纏めるなりして言えば、これは全て上流社会の教会精神の復活を示し、熱狂と専断はその自然の結果である。尊孔読経はあるべき形式の表現の一つであり、その他の方面でも言うまでもない挙動がある。だがこの運動は盛大だけれども、やはり何年もの命はない。というのは儒教公会は年代が久しく伝播も広い組織であるが、ただほんとうに聖職を受けた祭師はすでにとても少なくなっており、このとても少ない何人かの正真正銘の祭師たちが生きている間は、大成殿でのミサは挙行できるが、――光陰は一日一日と絶えず過ぎ、祭師たちは一人又一人と次第に「二気の良能」[iii]に化することを免れない。わたしが推算するに民国三十年になると最後の茂才公がたとい十五で泮〔儒教の学宮〕に入ったとしてもすでに知命の年を過ぎていて、勢力は薄弱で、もう風浪は興せない。彼らの学校出の徒弟に至っては、もともとその教派の忠臣ではなく、たいていが運動して嬌妻にありつくとやはり落ち着いてしまって、二度と騒ぎはしない。神道はわれわれ中国人の伝統であり、まことに廃れざること江河万古の流であっ

て、決して変わりはしない。――もし中国人が福の神を信じない日が来るとすれば、その日には世界の大変動が来るだろう。上の予言は真実であって嘘ではない、品質保証である。万一効験がないなら、どうか民国三十年の元旦には西安市場にやって来てわたしのこの「問星処」[iv]の看板をぶっ壊してもらって構わない。（民国十四年二月）

※初出：1925 年 2 月 14 日『京報副刊』第 60 號

---

[i] 『角山楼類腋』　清の姚培謙撰の類書、つまり百科事典。清の金澂撰『四書味根録』は四書についての解説の俗書だが、『類腋』がそれと並列されるわけは未詳。袖珍本の『類腋』を見たことがあり、受験参考書として使われたものか。

[ii] 読経　儒教の経典四書五経を小学教育の段階から読ませようとする運動。特に張作霖の文化政策以来盛んになった。「艮」とは八卦の一つで、方角では東北を指す。張作霖の根拠地である東北三省を言う。又意味としては「止」で「進む」の反対である。

[iii] 「二気の良能」　「鬼神は二気の良能」。『中庸』にいう「鬼神」についての宋の儒者張横渠の説。陰陽二気の働きを言うが、ここでは要するに「鬼神」の代名詞、死ぬことである。

[iv] 西安市場の「問星処」　本書「問星處の予言」参照。西安市場は東安市場に対して言った架空の場所。

## 43　『孟子』を読む

直隷省長を奉ずる教育庁は令もて学校を開かば即ち読経せ著(し)む、中（？）学校は応に『孟子』等を読むべし、因れ。わたくしは直隷省の治下におらず、かつ年長けて学を失し、決して学生にあらざれば、教育令に従う必要なきに似たり。ただ大人先生方の聖道を鼓吹し、聖経を表章さるるを聞けば、密かに思うにその中には必ず道理あらんと、故に僭越ながら中学生の例を引きて最初に孟子の書をば読まんとす。しかしわたしは私塾で「四書全書」を読んだ時にこれも諳んじたことがあり、しかも本全部を丸々諳んじることができたのだが、三十年経ってすっかり忘れてしまった。現在読み返して、字句は元のままだが、意味は却って新しい。いや、前に読んだ時は実際意味というものがなかった。子輿〔孟軻の字〕氏は何と言っても亜聖である。彼の言うことのいくつかは確かに悪くない。例えば、

「仁を賊(そこな)う者、之を賊と謂う、義を賊う者、之を残と謂う。残賊の人は之を一夫と謂う。
一夫紂を誅せしを聞くも、未だ君を弑するを聞かざるなり。」〔梁恵王篇〕

「君の臣を視ること草芥の如くんば、則ち臣の君を視ること寇讎の如し。」〔離婁篇〕

この二節は現今の民主中国でもまだとても意味があり、君主専制の時代には言うまでもない。孟子はこのために東亜においてはいささか苦しみを舐めることを余儀なくされ、中国では一度このご老体を孔子廟から追い出し、日本の神道は彼の書物の輸入を禁止し、およそ孟軻の七篇を積んだ商船は途中で沈没せねばならなかったけれども。今では、日本の学者たちも民本主義とやらを語るようになり、さらに夷人の汽船も来て、もう海竜王を恐れることはなくなったから、『孟子』の禁も自然と解除され、中国では彼は又とっくに孔子廟に戻ってしまった。わたしはそれがどの朝代のどの年の事か忘れてしまったが。

孟子はまた古書から引っ張って来て当時の諸侯を説教することを好んだ。その大胆は敬服すべきのみならず、彼の説教はやはり永久の価値を持っている。少なくとも中華がまだ様になった民国に変わっていない時においては。

「『湯誓』に曰く、時(こ)の日害(いつ)か喪(ほろ)びん、予(われ)　女(なんじ)と偕に亡びん！と。民之と偕に亡びんと欲すれば、台池鳥獣ありと雖も、豈能く独り楽しまんや？」

「東面して征すれば西夷怨み、南面して征すれば北狄恨みて、曰く、奚(なん)ぞ我を後に為(す)るや！と。民の之を望むこと、大旱に雲霓を望むが若きなり、市に帰(ゆ)く者は止まらず、耕す者は変わらず。……」〔ともに「梁恵王篇」に見える〕

これは実に現在の軍閥にとっては最も良い訓戒である。孫伝芳がもしこの意味を理解することができたなら、南昌・上海の多くの冤罪で亡くなった亡霊に押し倒されずに済んだだろう*。今は当局者が聖道を提唱している時だから、もしこれによって多くの軍人・政客に『孟子』を読む機会を与えれば、功徳無量であるばかりか、人民の幸福・国家の前途にも大いに裨益するところがあり、まことに極めて大きな善挙である。（民国十六年三月）

※初出：1927 年 3 月 19 日『語絲』第 123 期

*孫伝芳（1885～1935）　山東歴城の人。民国の軍閥の一人。北伐軍に敗れ下野したが、それまでの酷薄な行為から処刑された軍人の娘によって銃撃されて殺された。

## 44　新文化に反対する一通の手紙

伏園兄：

江紹原先生があなたに宛てた手紙の中に、わたしがとても同意することばがあります。つまり韓女史があの変な手紙を受け取ったのは、彼女の父が手紙を書いた人間と交渉すべきだ、あるいは学校に処理するよう要求すべきだと言うことです。しかし韓女史が発表に責任を負いたいという以上は、むろんその手紙を公表するのは当然彼女の自由であって、われわれも余計な口を挟むのはよろしくありません。この「変な手紙」を載せるについては、江先生から見れば、すこし北大に申し訳ないと思っているようですが、この意見にはわたしは賛成しかねます。これは実際何の大した事でもないのです。楊先生の事件はただ教員の身分で知らない女子学生に通信ししかも発言にいささか不注意な点があったことにあり、結果は「北大で教えられなくなった」で、この件はおしまいです。学校自身にとっては何の関係もありません。まさか北大が「監督不行き届き」のために自ら処分の論議を請求すべきものでもないでしょう。江先生が北大を愛護する盛意にはとても感服しますが、わたしはこれは少し神経過敏ではないかと思います。

あなたは「この事は校長が口を出す必要はないし、社会が断ずる必要もない」と言われたのには、わたしは極めて賛成です。一歩退いて言えば、北大が楊先生の辞職を認める（当然強制すべきではない）のはあるいはまだしてよい事かもしれません。だが今日の風聞では他の学校もみな免職処分にしているそうですが、わたしはこれはとても不合理だと思います。わたしも楊先生の挙動はあるべきではなく、あまりに馬鹿げていると思いますが、結局何も法律や道徳を犯してはいないのですから、人格がないと決めつけることはできませんし、こうした過重な懲罰を加えることもできません。わたしは真似して見知らぬ女性に手紙を書こうとは思いませんから、いまこの時に予め自分のために余地を残しておきます。実際このような偽道徳の冷酷な教育界にあってはまことに寒心に堪えず、万一うっかり一言余計なことを言い余計なものを一目見ようものなら、衆矢の的にならないことを保証しがたく、変じて名教の罪人になってしまいます。わたしはほんとうに中国の教育界がどうしてこのようにパリサイ人の気に満ちているのか、どうしてこのように健全な思想と独立の判断が欠けているのか分かりません。これは実にタゴールと文化侵略が一緒になるよりももっと恐ろしいことです。

それにまたこの事件の発生前後にはかなりの大学生が中に入って騒いだということです。これも悲しむべき現象です、つまり現代青年の品性の堕落です。事前にデマを振りまく者がいて、便所で啓事の GG などを書き[1]、事後にはビラを貼り、檄文を発し、北大全校の不幸だ、全国女子の不幸だと指弾し、また楊先生の手紙は教授式の強盗行為であり、女子学生を威嚇し騙し漁猟る（？）手段だと称する者がおり、大いに此を滅して朝食し、衆と共に之を棄てんとするおもむきがあります。抒情の一種の逆りは青年期にはよくある事であり、了解できないわけではありませんが、逆りには逆りの美しさがなければなりません。それがあって始めて詩の趣味があり、サロメや少年ヴェルテルのように、人に低徊鑑賞させることができるのです。今回のは残念ながらあまりにも醜い、彼らがやったのはどういうことでしょう？思わず楊先生の手紙にある言葉を引いて評定

としてしまいます。「ああ！これでも最高学府の学生と言うのだ！」古人に言あり、「吹皺す一池の春水、卿が底事にか干らんや」[ii]と。彼らはこんなに騒ぎましたが、実際は楊先生の手紙よりも、もっと「変」なのです。もう一つ、たとい彼らの措辞が少しは妥当であっても、このような他人の閑事に口出しする風気はやはりよいとは思いません。わたしの考えでは社会的制裁の厳正さは文化の進歩の高低と比例します。原始社会および現在の山中海辺の村では、個人の言動飲食がほとんど一つとして群衆の監督の下にないものはありません。文化が次第に高くなると、個人は各自で責任を負って自由行動ができます。「各人自ら掃く門前の雪、他家瓦上の霜に管わる莫かれ」、これでこそ文明社会の気象であります。中国は五四以来、大衆運動・社会的制裁を高唱しますが、今日になって本質が変わりますます激しくなりました。みんなは自分の責任を忘れて、他人の事柄に干渉し、それで自分では一等の新文化だと思っているのは、まことに憐れむべき者です。わたしは現在最も緊要なのは個人の解放を提唱することだと思います。何事であれ個人自身が責任を持ってやり、自分で解決する事は、暇人がはたからごちゃごちゃ口出ししてはいけません。あなたはこういう事は社会が断ずる必要もないとおっしゃったのは、まさにわたしの考えでもあります。

わたしは、あの自分では毫も過失がなく、鳩のように潔白だと思い、他人を攻撃することを天職だと考えている人々を最も嫌悪します。むしろ過失のある人と隊伍を組み、彼らが自ら過失を知ることができるだけでよいのです。なぜならわたしも決して全く過失のない人間ではないからです。

わたしはこの件によって二つの教訓を得ました。つまり多数の信ずべからざることと女性の畏るべきことです。（民国十三年五月十三日、陶然。）

※初出：1924 年 5 月 16 日『晨報副刊』

---

[i] GG　未詳。

[ii] 古人の言　南唐の詞人馮延巳に「謁金門」の詞があり、「風乍ちに起り、吹皺す一池の春水云々」と言う。皇帝の李璟がそれを揶揄って「吹皺す一池の春水、卿が底事にか干らんや」と言ったという。

## 45　速達に代えて

万羽兄：

今回の愛国運動[i]は盛大極まると言えましょう。あなたまでも白抜きの小旗を掲げてあんなに遠く向こうまで行ってしまいました。わたしが「あなたまでも」と言う意味は、あなたはふだん比較的平静だということです。決してあなたが愛国のプロではないのだから、こんな大それた事をやる資格はないと言うのではありません。この点は了解願いたいと思います。しかしあなたはそこへ行って、おそらく何人もの志士を見つけられなかったでしょう――むろん、プラカード、講演、募金勧誘、物品検査、人が買ったランプの笠を叩き壊すなど、（当然仇貨ですから）そういう事はなんでもありました。しかしながら城内の紳士商人の代表はきっと相変わらずの面付きだったでしょう？彼らは銭を語るのでなければ、稚老・鶴老〔呉稚暉・蔡元培〕のことです。あるいは相変わらず頭を尻にたとえ、三伏だというのにまだとんがった紗の帽子[ii]をかぶっていたりする、それはやはり憎むべき些事ですが。こんな連中の中で、あなたはどんな結果を得ることができましたか？だからわたしはあなたの今回の努力は少なくとも半分は無駄ではないかと恐れるのです。

わたしは自分のこうした運動に対する冷淡さが少しも減らないことを残念に思います。わたしは歴史家ではありませんし、遺伝学者でもありません。だが丁文江先生のいわゆる譜牒学をすこぶる信じ、中国の国民性について根本的にいささか懐疑をいだいています。ル・ボン（G.Le Bon）の『民族発展の心理』および『群衆心理』（英・日訳本による、前者は日訳があるのみ）はわたしにすこぶる影響があり、わたしがあまり群衆を信じないのはこれと関係があるかもしれません。バクーニンは言います。歴史の唯一の用途は我々にもうこのようになってはいけないと教えることだと。わたしは歴史を読む長所はまたこうなるぞと予想できることであると思います。わたしは歴史上かつてなかった事は中国では今後もあり得ないと信じます。将来の舞台で演じられるのはやはり同じ何幕かであり、役者と着物と観客が変わるに過ぎません。五四運動以来の民気の作用は、曠古の奇聞だと訝り、国家がまさに興らんとするの兆しだと思う人々もいますが、実はやはり古已に之ありで、漢の党人、宋の太学生、明の東林と、前例は甚だ多く、現在の情況からすると明末と特によく似ています。門戸を立てて凌ぎ合い、驕兵悍将、流寇、外敵、その結果は――要するに文芸復興ではありません！孫中山は必ずしも崇禎が転生して復讐に来たのではありません。わたしは今の様々な役者の中には、少なからぬ幾社・復社、高傑・左良玉、李自成・呉三桂たちの後身がいると思います。アーウィン夫人は彼女の息子がその父と同じように女中にちょっかいを出しているのを見て、「僵尸！」と叫びます。わたしたちは近頃の情況を見てどうして同じような恐怖と驚愕の声を発しないでおれましょう？仏教はわたしには解りません。だが、この「業」――種性の恐ろしさは、わたしも痛切に感じます。たとい自然の因果で、どんなに訝り、がっかりしても役に立たないとは言え、やはりどこにも期待や楽観すべきものがあるとは思えません。あなたは高山[iii]に中国が良くなることを希望すると言いましたが、わたしはあなたに賛同できません。あなたの熱誠と好意は認めますが。

しかしわたしがなんで中国が良くなることを希望しないことがありましょう？だが良くなる兆候は見えません。だからやはり希望できないのです。良くなる兆候は第一に勇気です。古人は言いました、「恥を知るは勇に近し」と。中国人は現在恥を知りません。わたしたちは大いにその国恥を語りますが、「一致対外」に限られています。これはつまり卑怯無恥のやり方です。三年前某校で講演し、国恥に関してわたしは次のように言いました。

「わたしは国恥は語ってよい、しかも語るべきであるとも思います。しかしこのいわゆる国恥とは決してもっぱら国家の権利の国恥などではありません。つまり一国の国民がその人たるの資格を失った羞恥を指すのです。このような羞恥こそが国恥なのです。……

中国の女性の纏足、中国人のアヘン吸い、人身売買、すべてが真正の国恥であって、外国に愚弄されるよりもずっと恥ずべきです。纏足し、アヘンを吸い、人身売買する中国人には、たといビスマーク、モルトケのような人材の力で、強制によって一切の国恥問題、つまり租界の失地回復からいわゆる藩属の問題までを解決したとしても、これらはすべて光栄とすることはできず、中国人の人たるの資格がないという羞恥は依然として存在します。もちろん、纏足し、アヘンを吸い、人身売買をする国民は、どのように強権を崇拝したところで、結局強くなれるのかどうかは、やはり別問題です。……」

これらの意見は現在でもなんの変わりもありません。わたしは外敵に反抗する必要はないというのではありませんが、自分自身に反抗することの方がずっと重要だと思うのです。というのはこれは恥ずべき恥辱であるばかりか、自分が悔悟しなければ決して他人に抵抗することさえできませんから。だから中国がもし良くなろうとするなら、第一に覚醒すべきです。まず自分には人たるの資格がないことから人に愚弄されることの恥ずべきことを知る、それから自己の醜態を見定め、痛切に懺悔をし、伝統の謬れる思想・悪習慣を改革する勇気を持つ、そして自立を求める、こうして始めてわずかだが希望の萌芽があります。要するに中国人に自ら頬を打つ勇気がなければ、全ての革新は夢想であります。というのはすべての革新は皆懺悔より生まれるものだからです。わたしたちは中国人に定期的に本格的に懺悔大会を行ない、古本と対証するように自分の非を認め悔悟し、旻天に号泣させようというのではありません。わたしはみんなが手を伸ばして胸や顔にある多くの瘡やイボにさわることを願うだけです。今この時の様子によれば、国粋を守り国光を誇ることを愛国とし、中国が所有する一切のものはすべて良く、中国が行う一切の行為はすべて良いとしている間は、中国は改変できず、良くはなりません。たといもう一度壊滅するに至らなくとも。革命はあり得ません。朝代が変わることはあり得ますけれども。赤化もあり得ません。擾乱殺人奪略はあり得ますけれども。おかしいのは日本人が漢族は革命の国民だと称し、英国人が中国は赤化をすると言うことです。彼らは中国の事情についてほんとうにまるで何もわかっていないのです。

近ごろ雪辱問題で平伯と西諦とが大げんかをしました。あなたはどう思われるか知りませんが。わたしの考えは平伯と近いです。彼が言うことはいささか「敵方の報告」[iv]と似ていますが、これも奇とするに足りません。バーナード・ショウやラッセルたちの意見は英国から見たもので、どうして華人と同じ鼻から出たものでしょう？平伯は今ではむろんショウやラッセルの諸

公と名を争うのは難しいですが、彼自身の譴責の精神は同じように評価すべきだと思います。

ミスター西替羌はまもなくチベットに発ちます。彼は毎日あなたが帰って来るのを待っていました。あなたの尊厳に関係する秘密を奉告しようと急いでいました。いま密かにあなたに知らせておきます。あなたがその時になって慌てふためかないように。その事とは次の通りです。ある日わたしの甥っ子がわたしたちの人物批評をやりました。彼は言いました。「あの新聞社の小僧は最も憎たらしい、彼はこのようにして（手真似で)、“おい！小僧！小僧！”だってさ……。」彼自身は三つ半にしかなりませんが、あなたを同僚だとみなし、あなたが多年蓄えた髭は彼の目にはないのです。こんなに大胆なのはまことに敬服すべきです。あなたに対してはいささか失敬ではありますけれども。——連日の大雨で、苦雨斎の外には泥の堰堤を築きました。なんとか幸いに水浸しを免れました。あの夜半に跳ね回って疑古君〔銭玄同〕をびっくりさせた老ヒキガエルが、又出てきてグアグアと大鳴きして、去年の事を思い出させました。その頃あなたはちょうど黄河の船の中にいましたね。草々。民国十四・七・二七。

※初出：1925 年 8 月 10 日『語絲』第 39 期

---

[i] 今回の愛国運動　イギリスによる上海の五三〇事件への各地での抗議活動をいう。

[ii] 紗の帽子　原文「紗秋」、意味不明。「紗の帽子」とは訳したものの三伏なら紗の帽子でよいのではないか。

[iii] 高山　未詳。

[iv] 「敵方の報告」　原文「敵報」、未詳。

## 46　四項の陳情書

半農兄：

　あなたが栄えある副刊記者の任[i]に就かれることは、広告を見る前からとっくに知っておりました。というのは何日も前にあなたが電話して寄稿せよと言ってこられ、わたしが手助けするよと応じたからです。理屈としては早く花輪でも贈って、祝賀の意を表すべきところですが、何週間もそのままにしていたのは、実に申し訳ないの至りであります。でもわたしが奉賀しないのは、全く怠惰のせいだけではなく、半分はやはり道理があるのです。なぜでしょう？これには二つ理由があります。その一つは、副刊記者の災難のためです。この事はすでに衣萍居士[ii]が言ったことがあるので、多言は無用なのですが、ただ孫伏老[iii]が副刊をやって「天怒り人恨む」ことになって、一度などは賢明な読者から国籍を「詐称して」いて、「杞天の慮有り」と認められたのを見たからです。その二は、ある一種以外の副刊記者はもっとやりにくいためです。北京の知識階級の話では近年中国の読者が災いに遭うのは、副刊があまりに多すぎるからだというのです。ちょうど土匪や逃亡兵と同じように、民の暮らしが立たないようにしているから、排除しなければダメで、しかも排除の責任はある一種の副刊にあって、「逼死」作戦を実行し、人民を水火の中から救い出して座布団の上に安んじてやるというもので、けだし我が祖先軒轅皇帝が蚩尤を討ち取った意を汲むのでしょう。目下某交換局長（この名の決め方は実はいささか狭すぎるのだが、わたしが責任を負うことはない、というのはみんなの知っての通りこれは孤桐先生が開設した局だから）自らは督戦せず、あるいは（わたしの希望だが）「逼り」かたがまだそれほど酷くないのかもしれません。しかしこのご時世――おお、このご時世実にやりにくい、ちょっと油断すると局長の部下に逼られて、水平線下の地位に安住しようとしたってできません。こうした幾つかの原因で、副刊記者という宝の位も大総統と同じでなにかやれそうでやれないもののようです。だからわたしも躊躇して、ただちに四六駢儷体の電報で奉賀しなかったのです。

　わたしがこの手紙をあなたに書いたのは、もちろんもっぱらお詫びのためですが、ついでに一つ陳情し、自分の幾つかの意見を献上しようとも思ったのです。しかしわたしにどんなよい意見があるでしょう？わたしたち何人かは苦労に苦労を重ねて新聞を一つやり、自分では人の金は使っていない、人の言葉で話していない、あるいは少しは特色があると思っていましたが、しかしこれは根っからダメで、名人の批評[iv]ではこれは北京の『晶報』だと言うのです。だからわたしにたとい意見があっても、「太陽が屁股(しり)を晒す賦」の亜流にすぎないということになりましょう。あなたに献上したところで何の役に立ちましょう？しかしながらひっくり返って考えると、太陽に尻を晒して何が悪い？ましてあなたは、わたしたちとグルになって、『何典』の類を翻刻したのですから、博士の部類には入りにくい。今人の言に、「愔愔 愔愔を惜しむ」というのが有り、わたしはさらに意見献上の必要を感じました。願わくば貴刊が「日に就(な)り月に将(すす)み、緝(つづ)けて熙(あき)らかにして光明に」いたり、次第に太陽に脊梁を晒す気象のあらんことを、されば豈休せざらんや！

　いまわたしの四不主義を左に列挙し、説明を加えます。採択施行されんことを祈り、そうなれ

ば幸甚であります。

一、「赤化の宣伝」はいけないこと。こうした危険が至大であることは、煩言を要しませんが、ただ一つ説明しておかなければならない点があります。あなたは経済学という学問にはたぶん門外漢で、わたしとほとんど変わらず、おそらく「鄴架」[v]にはマルクスの著作は見当たらず、この邪説を宣伝するという可能性は絶少でしょうから、わたしの警告は蛇足のようですが、われわれは知らなければなりません、われわれの民国ではこの解説が少し違って、現在通行する最も広義の意味に照らして論ずべきだということを。もし読者がこの字句があまりに新しすぎると嫌うようでしたら、やや古い「国事を談ずるなかれ」と改めてもかまいません。

二、章士釗と段祺瑞を担いではならないこと。こうした説はいささか失敬なようですが、この二人は大虫(とら)類を代表するものでしかなく、個人を指定するものでは決してありません。又「車旁軍[vi]はいけないこと」という一条もここに付け加え、別に専門の項目を立てるには及びません。

三、太陽に尻を晒すのを恐れてはならないが、むやみに晒してもいけないこと。この条の意味は「あまりに紳士気取りでいてもいけないし、又あまりにゴロツキ風であってもいけない」と言うに等しいということです。これはわたし自身の文章訓の一つでありますが、なかなか確実に実行することはできていません。おそらく紳士気取りが多いからでしょうか？

四、恋愛を軽蔑してはいけないこと。当然副刊上に恋愛を語る詩歌・小説・論文を嫌って載せないではいけません。ただうまく書いてありさえすればよいのです、——決して副刊記者のことを言っているのではありません。天下の人はたいていが健忘で、年寄りはまるで生まれた時からすでにハゲ頭で歯抜けのようですし、中年はおっかさんの腹から出た時にはもう乙種常礼服を着ていて、幼少時代がないみたいなのは、とても変てこでおかしい。以前張東蓀君が『学燈』（？）で、彼が最も嫌いなのは青年たちが口を開くや結婚問題を話したがることだと言っていましたが、その頃わたしは友人に、張君自身にとってもう問題になっていないから、いまさら語る必要はないのだろうが、いままさに問題になっている青年たちが結婚の問題を語るのはおかしくない、それを嫌う人はあまりに自己中心主義を免れないと言いました。(あなたの同業者でラテン系の言語学教授でデンマーク人の Nyrop 老先生の変な本『キッスとその歴史』の英訳本には、俗諺が一つあって、ドイツのか他の国か忘れましたが、いま書物の山の中に探すのも億劫なので、いささか曖昧ですが仕方ありません。その言葉に「わたしは人がキッスをするのが一番嫌いだ、自分の分がなければ」とあります。これはもう一つ別の解釈としてよさそうです。）わたしはあなたが彼らが（決して「彼」を代表とするのではありませんが、ただ「彼女」はたいていいまのところ話してみようとはしないでしょうから、しばらく省略します。）恋愛を語るのを許容できるよう、もしよく書けていたら「栽培」賜っても構わないし、妹よ兄さんよ〔恋人同士の呼びかけ〕というのが少し多くても、ひどい欠点でないようなら、どうかあなたの尊眼を見開いて、大目に見てやってもらいたいものです。この一条は確かに無駄話で、あなたの意見はたぶんもともとそうであって、しかもわたしよりも少し寛大であるかもしれません。でもすでに思いついたので、やはりここに書いて、現在の恋愛反対大同盟に対して佩服できない真意を表明することにしました。わたし自身についてはまだ老と言うことはできませんが、そうした文章はたぶん書くには及ばないの

ですから、記者先生はわたしのこの陳情を確かに大公無私だと信じてよいわけです。

わたしの陳情はこれでお終いです。最後に又ついでに一言記者先生に尋ねたいと思います。衣萍居士の分類では、わたしはどの類に分類されるのでしょうか。他のはともかく、元老類にだけは入れないよう希望します。というのは元老は時には力になってもらう時もありますが、実際はいささか老執事の性質があり、彼の話は、呼びかけにしろ訓戒にしろ、人間の道理がありません。これは実に味気ない事です。もう一つ、俗諺に、「見る見る上座に登り、だんだんと祠堂に入る」と言います。これもわたしの嫌いなことです。だから要するに、どうかわたしを第一類に入れないでください。それから衣萍居士と立ち会って第二類を「親友」と酌量改名してください。十年来閑話を共にしてきた資格で以てここに付け加えます。それなら何とか無理にでもやっていけるでしょう。民国十五年七月三日、豈明。

※初出：1926 年 7 月 10 日『世界日報・副刊』第 1 巻第 10 號

---

[i] 副刊記者　鮑晶編『劉半農研究資料』（1985 年天津人民出版社）によると、劉半農は 1926 年 6 月中旬『世界日報副刊』の主編に就いた。

[ii] 章衣萍がどこで言ったのか未詳。

[iii] 孫伏老　孫伏園が『晨報副刊』を主編したことだが、「国籍詐称」して「杞天の慮有り」とされたことについては未調査。

[iv] 名人の批評　ここにいう「自分たちの新聞」とは『語絲』のこと。魯迅の「髭の話から歯まで」（『墳』）に次のようにある。「『吶喊』を繰っていて、ようやく思い出したのだが中華民国九年の双十節の何日か前に「頭髪の故事」を書いたことがあり、去年、間もなくもう丸一年になろうとする、そのころ『語絲』はまだ世に出て間なくであったので、わたしは又雑誌のために一篇「髭について」を書いた。実に章士釗のいわゆる“況（はなはだ）しき毎に愈いよ下る”〔正しくは“毎下愈況”、下る毎に愈いよ況（はなはだ）し。『荘子』に出る言葉〕気味があったのだろう、――むろんこの成語は、決して章士釗先生がはじめて書き違いをしたのではない。ただ彼は旧学に長けていることを自認していた上に、わたしは又ちょうど裁判で係争中であったので、彼のせいにしたのだ。当時の話では、――あるいははやりの“流言”であったかもしれないが、――ある北京大学の名教授が憤慨して、髭から始まって、そのまま下にゆけば、いつかは尻を言うことになろう、ならば上海の『晶報』とおんなじだ、と思ったそうだ。なぜか。これは今典に詳しい人々でなければ解らず、今時の“束髪の小生”ではなかなか容易ではない。『晶報』にかつて「太陽が屁股（しり）を晒すの賦」というのが載ったことがあるからだ。尻と髭とは共に人間の体の一部である。こっちを言った以上、あっちを言わないわけにはいかない。ちょうど顔を洗っている人を見て、敏捷で聡明な学者ならすぐに、その人がそのまま洗っていけば、やがてきっと尻まで洗うことになるだろうと想像できるのだ。だから gentleman であろうと心掛けている者は、災を未然に防ぐために、当然背後から一発嘲笑を浴びせるべきであったのだ。――もしこの他にまだ深意があるとしても、それはわたしには分かるはずもない。」魯迅が言う「北京大学の名教授」「敏捷で聡明な学者」「gentleman であろうと心掛けている者」は同一人であって、したがってまた周作人の言う「名人」と一致するは

ずである。本人が噂と言い、流言と言っているのだから確かな証拠はないのかもしれないが、この「名教授」は当時『語絲』派と対立していた『現代評論』の陳源を指すものと思われる。

『晶報』は民国期上海の代表的な小型商業新聞。はじめ『神州日報』の副刊として発足したが、のち分離独立して、娯楽から社会・政治に至るまで広範囲に何でも載せた。当時は倡優妓女の噂話などを載せるイエロー・ペイパーと見られていたのだろう。

[v] 「鄴架」　唐の鄴侯李泌の家は、蔵書家で有名であった。そこから「鄴架」は蔵書家の書架に対する美称となった。

[vi] 「車旁軍」　望文生義だが取り巻きというほどの意か。同じ語彙は「『憶』の装丁」にも出る。

## 47　苦しみを訴える

半農兄：

ご贔屓に預かり文章を書くことは、当然大変ありがたいことで、またお手伝いもしたいのですが、今この時実はわたしにはとても辛いのです。どんなに忙しいとか、あるいはどんなに億劫とか、そのため物が書けないなどと言うのでは決してありません。わたしは実際やっぱり好事の徒の部類に属しているので、いままでも揉め事を喜んで、友人たちの戒めを受けてきました。そのまま今に至るもこの癖を改めることはできず、テーブルの上には相変わらず紙筆を備え書きなぐる用意はしてあります、――でも、何でも言うことができるか？わたしは『酒後主語』のはしがき[i]で次のように言ったことがあります。

「現時の中国人の一部はすでに発狂しており、その他はすべて痴呆症を患っている。ただ近ごろのなぜだかわからないあの執拗で凶悪な惨殺は、確かに少し異常である。しかるに身をもってその衝に当たる民衆はまるで麻痺しているか、あるいはそれでも快適に感じているようで、相当マゾヒズム（Masochism）の気味がある。簡単な一言で言えば、みんなはすべて変態心理の友人なのだ。わたしもおそらくは痴呆症の中の一人なのだろうが、ただ比較的軽く、時にはまだ少しは気持ち悪く思う。遺伝の霊妙さのおかげで、自然とごく微々たるものだが、しかし、ああ、それこそ憂患の基であることを誰が知ろう？このご時世、癲狂と痴呆症の同胞の中では、どこに気持ちの悪さを表明する余地があろうか。君がもしも……」

そうです、あなたがもしも快適快適と何回か言おうとすれば、結果はおそらくあなたをもっと不愉快にするでしょう。人類の最大の弱点の一つは自ら非凡と思う幻想であります。空虚な想像で現実を覆ってしまい、現在住んでいるところが黄金世界だと思い、大いにその白昼夢の話を語るのです。これもいささか何とか狂の一種に近いでしょう。わたしはこうしたやり方には賛成できません。だから事実に基づき、切実に考慮し、現今がいったいすでに三大自由の時代なのかどうか、我々にそのような豪奢な生活が許されるのかを見てみたいと思います。わたしの答案は「いいや」です。最も良いのは自ずと『四書味根録』などの経典に標点を打ち考訂し講授しあるいは誦読することです。でなければ女郎買い博打打ち芝居気違いもまだ分に安んずる方に入りますが、物を言うとなってはあまり相応しくないようです。老兄が蔡〔元培〕・胡〔適〕・丁〔文江〕・張〔？〕・陳〔独秀〕の諸公および中国のゾラ・フランスなど公正且つ「硬い」人物がみなうんともすんとも言わないのを見ただけで、現在がどのように言論の自由に不適であるかが分かるでしょう。ましてわれわれ本来が水平線以下の人間については、その困難はむろんもっと想見しやすいでしょう。

「国事を談ずるなかれ」という禁戒は、民国初年からすでにあったそうですが、以後は当然遵行されることになります。輦轂の下で何日か空気を吸ったことのある公民は誰もがすでにこの憲論の尊意を理解しており、決して決して茶館の寝椅子の上でなにか南口北口に関する消息を漏らすことはあり得ません。しかも現在も話せるような国事などありませんし、たとい危険をおかして一言二言批評しようとしても、どのニュースが当てになるのか分かりませんから、まるで「談

ずるところを知らず」なのです。中国人は平和を酷愛するそうですが、それなら止戈弭兵（せんそうはんたい）に関する事は大々的に議論してよさそうなものですが、しかしながら「爾今現在」は不適切なようです、というのはいまこの時殺人を止めるのはいささか何かの嫌疑がかかるからです。王聘老[ii]などの諸善士が久しく口をつぐんでいるのを見れば、了然たるものがあります。だとするとこの方面の文章でさえやはり書かないほうがよろしい。熊妙通水災督辦は南方で演説して、赤化に反対するのに最もよいのは宗教だと言いました。これによれば宗教を談ずるのがむろん最も適当であることになります。わたしも少しは原始宗教を語るのが好きです。わたしは宗教学者、あるいは教徒ではありませんが。――しかしわたしは天津の新聞社事件[iii]を忘れることができません。くだらぬ事の巻き添えになってあなたがやられ、新聞社は潰されることを望みません。なんでわざわざ苦しい目に合うのですか？このご時世、たぶん新文化運動なんかの悪影響でしょう。一篇の文章を読んで大きな誤解をしないで済む人があまり多くなく、往往にして「意表の外」に出る事があるのは、筆を執る人間は注意しないではおれません。人を罵倒するのは、これはまだよろしい。どうせ老虎[iv]およびその徒党は永遠に人間世界から跡を絶つことはないのですから。その時々に一人を捕まえて罵倒するのは、それほど難しい事ではありません。どのみちわたしは虎類の仇ですから、いつか連中とやりあって食われてしまうでしょうが、今はやはり「善士になり」たくはありません。しかし、『世界日報』副刊の空気はあまり人を罵倒することを歓迎しないように思います。これはあるいはわたしの錯覚かもしれませんが、わたしがそう感じているからには、やはりあえてこの統一を壊したくはありません。確かに、わたしのこの癖は長らくわたしの宿病となっていて、わたしが……の正人君子と揉めさえしなければ、わたしの名誉もきっとぐんとよくなるでしょうし、いつも祖父の家訓の中の「有用の精神が下賤な役者に消耗される」という戒めを思い起こし、出来るだけ謹慎して、人を罵倒しないことを芝居を見ないことと同じ程度にもって行こうとするのですが、残念なことに修養が足らず、まだそこまでいけないのは、実に慚愧の至りであります。さて正伝に帰りまして、要するに人を罵倒する文章を新聞社に寄せるのは適当ではありません。しかもわたしはすでに今後も少し謹慎してこんな馬鹿な事はやらないようにしたいと言っているのですから。残った一件は古人にお世話になるしかありません。これも決して容易な事ではないのですが。ひとに「スリ」と言われるのは何ともありませんが、読む本がなく、よい材料がないのが実に苦しいのです、――王褒の「僮約」[v]はどうも持ち出すのに都合が悪いのです。ここまで言うとすでに言うべき事はありません。総括の一句はただ次のようです。

「わたしに文章を書かせようたって、あなた、実際書けやしません。嘘だと言うなら、雷様が五発頭のてっぺんに落ちまする。どうぞどうぞお許しください、（拱手の格好で）済みません、済みません。」

中華民国十五年七月二十八日、内右四区、豈明叩頭。

※初出：1926 年 7 月 31 日『世界日報・副刊』第 1 巻第 31 號

[i] 『酒後主語』はしがき　本書所収。

[ii] 王聘老　王士珍（1861～1930）、直隷正定の人。字は聘卿。清末民初の軍人・政客。袁世凱政府の陸軍総長をやり、張勲の復辟に参与、その後国務総理になったが、軍閥間の勢力争いの中で翻弄され、引退後の晩年は慈善事業をしたと言う。「善士」と言うのはそれから来たのだろう。

[iii] 天津の新聞社事件　未詳。この年 1926 年の 4 月馮玉祥の国民軍によって段祺瑞の北京政府は倒れるが、すぐに直隷・奉天連合軍が態勢を立て直し、国民軍を北京から追い出し、権力を握った張作霖は“赤化を宣伝した”廉で『京報』の社長であった邵飄萍を逮捕銃殺に処した。ここは「天津の」と書いているが、暗にこの事件を言っているのではないかと思われる。この文が 7 月 31 日の『世界日報』副刊に発表されたすぐ後、8 月 6 日には同じく張作霖によって『社会日報』の編輯林白水が銃殺され、翌 7 日には『世界日報』主編成舎我も逮捕されている。そうした軍閥政府の恐怖政治の下で魯迅は 8 月 26 日北京を離れて南下する。この文が書かれた当時の北京がどのような雰囲気であったかよくわかる。

[iv] 老虎　段祺瑞政府の司法・教育総長であった章士釗を言う。

[v] 王褒の「僮約」　前漢の王褒、字は子淵・四川資中の人、宣帝の諫大夫。詩文が何篇か伝えられている。「僮約」はその一つ、僮とは奴僕のこと、したがって僮約とは奴僕の決り。王褒が用事で四川の灌県のある寡婦の宿に泊まり、奴僕に酒を買いにやらせようとした所、奴僕は大杖を担いで今は亡き主人の墓の天辺に登り、ご主人様がわしを買われたとき、ただ家守りをすることを言いつけられただけで、他家の男子のために酒を買いにゆくことまで約束はされなかったと喚いた。王褒はカンカンに怒って、お前は売られたいのかと言った。寡婦はこれは人と悶着ばかり起こすので、誰も買い手がないと言う。王褒は自分が買うことにした、そこで奴僕はわしを使いたいなら、全部証書に書いとくことだな、証書にない事はやる事はできん、と言った。そこで王褒は証書を作って一万五千で彼を買った。証書には、百役二言あるを得ずとあり、朝早く起きて掃除をすることから始まって、奴僕のすべきありとあらゆることが書き連ねられ、奴教えを聴かざれば当に笞一百すべしで終わっていた。それを聞いた奴僕は言葉もしどろもどろ、頭を振って叩頭し、両手で胸を打ち、目から涙が落ち、鼻汁が一尺も垂れ、ほんとうに王大夫の言うようにするぐらいなら、早く黄土の畔に帰り、みみずに髑髏に潜られた方がマシだ。早くそうなることを知っていたら、王大夫のために酒を買いにゆき、あえて悪さをしなかったのにと嘆いた。と言う故事である。ここはなんでも書くと言う約束はできぬ、むしろ何も書けないということであろう。

## 48　何ぞ必ずしも*

半農は一昨日「ほんとうのことを言った」ために、天大の大禍を起こした。わたしは十年の老友の誼で彼のために仲裁に入ろうとして、わたし自身もちょっとした小禍に引っかかったのだけれども。というのはわたしがもし自由批評家の言うように「われら青年の創作・青年の思想に対してはロをつぐんで取り上げない」ようにするなら、そもそも取り上げないだけですでに罪になるのだ。まして半農は「真っ向から棒喝を食らわし」て大いに罵倒したではないか？しからば半農の罪が逃れられないのは言を俟たない。静かに自由批評の節鉞（“Fasces”）のご降臨を待つ以外他にどんな方法があろうか？仲裁など又何の役にたつか？わたしがこうしたことを書くのは、個人の意見を発表するに過ぎず、半農のほんとうのことを言うについてちょっと批評したりあるいは勧告したりするだけだ。

「ほんとうのことを言うと」という副刊は、読んだあとおいておいたが、たぶん後になって何か物を包んだのだろう、見当たらない。うまい具合に半農は「誤解を免れるために」の中ですでに前篇の正しくない語句を改めていて、内容を新たに書いているので、今それによって述べてもよいだろう。半農の五項目の意見は、もっと簡単に書き出すと、次のようである。

一、書物を読まなければならない。
二、書物は全部を読まなければならない。
三、文芸をやるには着実な修練を要する。
四、態度は誠実でなければならない。
五、批評は事実に基づかなければならない。

この五項目の意見についてわたしは別に異論はなく、みな賛成できると思う。しかし、わたしは半農が特にかなりの気力を費やして、かなりの危険を冒してこの五条の議案を提出したという事に対しては、実はあまり賛成できない。第一に、これら「老生の常談」をどうしてまた持ち出す必要があるのか？喩えば「書を読むにはまず字を識るべし」、「飯を食うにはよく噛むこと」などなどの話は、実際平凡極まる。中に一定の道理は含まれていて、字を識らなければ本は読めないし、噛まずにガツガツ食っては消化に悪い、証拠は目の前にある。だがこうした常識を持ち出して丁寧に勧告するのは、やはりあまりに馬鹿げている。第二に、半農がそういうことを言う用意がわたしにはあまりよくわからない。まさか半農は本気で「大学教授の身分に博士の肩書きを加えれば」青年を指導する（あるいは提携する）義務があるはずだと信じているわけではあるまい。しかもさらにこうした指導を希望してどんな効力があるのか？大学教授も一種の職業に過ぎない。彼はただ自分が担任する学科と学生について責任があるだけで、そのほかの活動は全て個人の興味であり、急進であろうが鈍進であろうが、青年と提携しようが提携すまいが、どちらにしても彼の自由であって、聘任書に規定はない。博士については、もっと関係がない。これは一つの名称に過ぎなくて、その人がある種の学問について相当の成績を挙げたことを示すのであって、決して凡そ「息子」と名のつく者は通例として親孝行すべきだというように一種の意義を含んで、彼には青年を指導しなければならない義務があると言うのではない。思うのだが、半農は

必ずしもこんなに低能ではあり得ないし、こんなにくだらない指導に熱心であるわけがない。もう一つ、指導は完全に無用であること。もし誰かが激励が青年に有益だと信ずるなら、これもいささか低能を免れない。ちょうど罵倒が青年に有害だと信じるように。一人の人間が青年（十五から二十五歳まで）になると、遺伝、家庭・学校・社会が、すでに彼を割り振ってしまっているのであり、あなたに天大の才能、花を生ずる筆と舌先があったとしても、彼を百分の一二も変えることはできない。たとい彼が五厘一分変わったとしても、それも彼本来の傾向によるのであって、あなたの訓導の賜物だと考えてはならない。キリスト教はむろん西洋で何百年もの久しきに亘って伝わったが、結果は誰もそれを体得実行するものはいない。耶蘇教を信奉すると自称する英国の行為、五三十以来の上海、沙基、万県、漢口各地での蛮行を見ただけで、教訓の力はどんなに弱いか、あるいはまるで力がないかが分かる。だから聖道を高談する人はもちろんその愚や及ぶべからずで、鳴り物入りで文学や思想革命を語るのも、いささか迂闊だと思う。蒋観雲がルソーを詠じて、「文字功を収むる日、全球革命潮」と云ったのは、つまりこうした迂闊思想の表れである。半農にこんな大志があって、その教授博士の青年を指導する天職を執行することはないだろう。ならば、こんなことをなんのために言ったのか？思うに、これはたぶん単に感想を述べたまでだろう。普通の人間の資格で、どんな事が気に入りどんな事が気に入らないかを見て、これがよいあれが悪いと言うのは、当然のことである。もし誰かがそうではないと思うなら、その人にそうではないと思わせておくだけだ。あるいは罵倒に仕返ししなければならないのなら一度罵倒する、これが最も「素朴にして真誠な」やり方である。半農の文章がもしもっぱら感想を述べるためならば、このようにすべきで、‘誤解を免れるために’の必要はない。というのは誤解というものはどうしても免れることはできない、しかも例によって免れようとすればするほど多くなるものだから。要するに、半農の五項目の意見に対しては同感であるが、これを何か献上物にしようとするなら、バカ夫子の気を免れないと思う。最後に、どうか皆さんが討論して解決してもらいたい、そうなれば実にこの一挙は余計であったと思う。民国十六年一月十六日夜。

※初出：1927 年 1 月 22 日『世界日報』副刊第 7 巻第 19 號

---

*「何ぞ必ずしも」　題名は「なんでそんな必要があるか」という意味。劉半農は自分が主編であった『世界日報副刊』の新年の文章に「ほんとうのことを言うと」という一文を載せた。それは青年たちの書く文章が正確な事実も押さえずに人を罵倒することに傾きがちなのにいささか業を煮やしたのか、上から目線のかなり高飛車な物言いであった。それに対して反論が出だしたので、劉半農はついで「誤解を免れるために」という文を載せた。それがかえって火に油を注いだのか、結局この件で何十人という人がそれぞれに意見を述べた。これについて劉半農は三篇の文章を『半農雑文』第一集の最後に収録しているので、それを読めばあらかたの見当はつく。「ほんとうのことを言うと」「誤解を免れるために」「“ほんとうのことを言った”結末」である。『世界日報副刊』やその他の刊行物に載った何十人かの言論がどんなものであったのかが確かめられないので、確定的なことは言えないが、劉半農の文章及び関連資料から見るに、発言者の数の割に中身のない論争で、文学論争史にも残らないものであったようだ。反面当時の中国言論界の程

度が窺われる。ただこの事件のせいで劉半農は『世界日報副刊』の主編を半年やったばかりで退任することになる。

## 49　溥儀君に致す書

溥儀先生：

わたしの友人胡適之君の話で、あなたが文学好きの青年であること、そして二年前「帝号を取り消さねばならないのなら、優待費は受けないと言って」、思想もすこぶる開けていることを知りました。早くに奉告したいことがありましたが、その時はまだあなたは宮城の中におられ上諭を下されていましたし、わたしも又皇帝たちにどのように書いてよいものやら分かりませんでした。だから取り止めたのです。今あなたはすでに宮殿を出られましたので、ようやく半日の時間を使ってこの手紙を書いて差し上げます。

まずわたしの友人の銭玄同君と共にあなたにおめでとうを言わねばなりません。あなたの今回の宮城退去を祝うのです。これはもちろんあなたにとっては宿願を果たした事になり、とても愉快でしょうし、わたしたちにとっても一面では革命の願望を満たし、一面では又あなた個人に対する恐縮を消し去ることになります。あなたが宮城におられては、われわれは復辟の種を残すのではないかと心配であるばかりか、革命の事業もそのために未完成であると思います。あなた個人について言いますと、一人の青年をいつまでも城壁の中に監禁するのも、とても不安に思います。張国燾君が衛戍司令部優待室に住んで、陳独秀君が警察庁の優待室に住んで、章太炎先生が銭糧胡同に優待され、毎月五百元の優待費をもらっても、みんなは四苦八苦して救い出し、彼らを解放しようとしました。なぜでしょう？人々が必要とするのは身体と思想の自由であって、決して「優待」ではない、――優待されることはすなわち自由を失うことだからです。あなたは宮城に押し込められ、大通りを自転車に乗る自由さえない。われわれは直接には責任を負いませんが、聞けば済まなく思います。今あなたはこうした囚われの生活から離脱し、自由の天地に帰ることができるのですから、われわれは実にあなたのために喜んでおり、かつ自分でも心安らかに感じるのです。

わたしは銭君の意見に賛成です。あなたが少し勉強を補習され、高級中学に入り、大学を卒業されたら外国に留学されるよう希望します。だがわたしにはまだ特別な意見があります。あなたに対して言いたいのは、学問の種類の問題です。愚見によりますと、あなたはヨーロッパにゆかれてギリシア文学を研究されるのが最善です。他人のために研究する学科を決めるのはとても危険な事です。本人の性質や趣向と必ず一致するとは限りませんから。しかしわたしには一つ別の理由があり、それを言えば参考になるでしょう。中国人は近ごろ大いに東方文化と西方文化を語ります。しかしながらある一つの文化を専門に研究する人はついにありません。だから語っても要領を得ないのです。いわゆる西方文化とは結局どの国を標準とするのか、東方文化とは結局中国をそれともインドを主とするのか。現代の情況はもちろん重要ですが、重要なのはもう少し遡って推究する、その来源を探り当てることのようです。思うのですが、中国のも、インドのも、それにヨーロッパの根源であるギリシアの文化も、すべて専門に研究する人があるべきです。彼らの結果を総合して、それから比較を行い、はじめて議論の可能性が出てきます。一切の受け売りの引証は全く当てになりません。東方文化を研究するには別に適当な人がいますが、ギリシア

文化については足下にお願いするに越したことはなく最適だと思います。文明とはもともと人生に必要な奢侈であって、「手から口へ」の人々が作れるものではありません。われわれはたっぷり酒肉を盛れる碗皿があって、はじめて碗にいくつか花を描くことを思いつくのです。もし終日ゴミの山で石炭粒を選っているなら、どうしてそんな事をする時間がありましょう。ギリシアのは又最も貴族的な文明のようで、現在の中国ではさらに容易くは理解できません。中国の貧乏人は石炭殻を選るのに懸命で、金持ちはお金を外国の銀行に預けることにしか余念がありませんし、知識階級（当然全体ではありません）は群衆の位牌を奉じて、「応制」の詩文を作る準備をしています。実質的には食べられるものは宝物で、名目的には平民的なのが聖旨で、このほかはすべて見る価値もありません。これもまさに当然のことで、みんなは餓鬼のように糟をがっついているのですから、どこに「嘉湖の上菓子」[i]*を作ろうなどと考える暇がありましょう。食べても腹一杯にならない茶菓子などはむろん言うまでもありません。なんとかしてみんなにご飯を食べさせることはまことに速やかにやるべきことですが、一方茶菓子に関する研究も大事です。というのはわれわれの希望はみんなが飯にありつくばかりか、茶菓子を鑑賞できる日が来ることでもあるのですから。ここまで考えて、あなたのことを思い出したのです。あなたは少なくともそうした精美な文明を理解する可能性があるはずだと思います、——かつて皇帝であったことがあるのですから。わたしは決して笑い話をしているのではありません。俗語に「皇帝になったら仙人になりたがる」と言います。文明を作るのは実はつまり仙人になりたいという気分です。でもなるのは地仙であって、享受するのも塵世の清福でしかありません。これがすなわちギリシアの「神の人」の理想です。あなたは本格的に三年皇帝をやり、又本格的ではないが十三年やりました。今になって又帝号の取り消しを願われています。すでに南面の生活に飽き飽きしたこと、仙人になりたい資格が十分にあることが見て取れます。わたしはあなたが地中海のかの仙島を探検されることをお勧めします。きっととても良い結果が得られるでしょう。英国かドイツに留学されるのが最も良いと思います。それから当然アテネに行くべきです。学成って帰国される時には、われわれはあなたを北京大学に来てギリシア文学の講座を担当（あるいは創設して）されるよう紹介できることを希望します。最後に一言申し開きをしたいと思います。わたしは当初民族革命を信じる人間でした。言い換えればつまり排満を主張しました。だが辛亥革命——特に今年帝号の取り消し以後は、満族に対する感情はずいぶん良くなりました。しかも時には満人の方が漢人よりもずっと良いところがあると思います。というのは彼には大国民の態度があり、漢人の中の北方の家奴の気象と南方の毛唐の下僕の気象がないからです。これはわたし個人の主観的な話ですが、あなたがわたしのこの幻想を打ち破られないよう希望します。

民国十三年十一月三十日、周作人。

この手紙をようやく書き終えて、新聞を見て溥儀君がすでに日本大使館へ出奔したことを知った。彼が出奔した理由は知らないが、本当に残念だと思う。英国人や日本人にくっついてこのように奔走しても、結果は彼にとって何のいいところもない、——ものの解る漢人（弁髪があるのは数に入れない）だけが満人と彼の友人であることを、残念ながら彼は知らない。彼

にまだそういった人々の手から自由になる日が来ることを希望して、この手紙はそのまま発表する。別の面では、彼らは外国人で、彼らが中国の災厄に対してそれを幸とし楽とするのは怪しむに足りず、何もわれわれが口を嗄らして連中と喧嘩することはなかろう？われわれはすでに大同の迷夢を打ち破ったから、自分だけが頼りであることを自覚すべきである、……残念なのは中国国民の中にあまりにも外国人が多すぎることである。十二月一日添え書き。

※初出：1924 年 12 月 8 日『語絲』第 4 期

---

[i] 「嘉湖の上菓子」　原文「嘉湖細点」、これについては『周作人先生のこと』（方紀生編）に内田誠氏の「嘉湖細点」という文が参考になる。「我々は北京の空の美しさや穏やかな日の光りに就て語つてゐるうちに、いつの間にか北京の菓子のことを話しあつてゐた。“北京には余りよい菓子はありません。菓子は南方によいのがあるやうでして蘇州、杭州上海あたりにはすぐれたものがあるのです。その辺には、松の実や胡桃の実の上と下に粉をつけたものがある。それをうすく切つてたべるのですが品がよく腹がはらないのです。腹がはらない方が菓子らしい菓子と言へませう。南の方には茶食といふ言葉があつて、日本のお茶うけといふほどの言葉なのですがその菓子はそれに当るものなのです。…”（点心といふのは空腹を抑へるといふ意味があるのかもしれない。先生の説はなんだかさういふ風にとれるやうな気がした。）“よく菓子屋の看板に嘉湖細点といふことが書いてありますが、嘉興湖州細点といふことなのです。それだけその辺の菓子は有名なのですね。……”亦“北京には、奶酪（ナイロウ）とか、杏子や棗の餡、胡麻などをクリームで巻いた奶捲児（ナイジュアル）とか、さういつたクリームで作つ菓子があるでせう。あれは蒙古、ことによつたら張家口辺りから来るのかも知れません。……”周先生の菓子の話はなかなかにつきないのであつたが、菓子は日本の菓子が形がよくて美しいし、又うまい。油気がないのがその特徴だといふのが先生の結論だつた。それはたしかにさうだ。北京の菓子は豊富にうまさをもることだけが目的としてつくられてゐた。（後略）」浙江省の嘉興・湖州（今は呉興）近辺の菓子を言う。

## 50　女のズボンを論ず*

紹原兄：

あなたの「スカートはズボンよりも長くなければならない」という提案は、わたしは当然賛成で、すぐにでも民国新礼の草案に編入してもらいましょう。だがわたしたちはここで一言声明しておくべきで、この礼の制定はすなわち趣味（この二字は少し語弊があるかもしれません。というのは心理学者がそれを「味覚」としてしまう恐れがあるからです。）に着眼したもので、けっして「華靡の習いを挽回しよう」と志すものではありません。『婦女週報』と『婦女雑誌』で何とか教育会連合会の議決案を見たのですが、女子学生は「決まりにより一律に制服を着用すべし」、そして制服については、「袖は必ず腕と等しく、裙は必ず脛に及ぶ」とあり、一目でわれわれの新礼とすこぶる陽虎が孔子と似ている趣があります。実際には截然と違うのですが。原案の全文は皆申し分ありませんが、今はその一部分を次に節録するしかありません。

「衣は以て体を蔽い、亦以て身を彰かにし、衷より災を為さざるは、昔の賢の戒むるところ、矧んや女生に在りては、衆流の仰望するところ、末節と曰うと雖も、関する所実に鉅いなり。……甚だしきは或いは故さらに寛短を為し、豁敞と脱露にし、袖を揚げて肘を見し、歩を挙げて膝を窺わしむるは、殊に容儀を謹み瞻視を尊ぶの道に非ず。……」

『婦女週報』（61 期）の奚明先生はこの衛道の大文に対して批評を加え、極めて絶妙な言い方で、もうわたしの余計な話を待つ必要はありません。彼は言います。

「教育会会員の諸公は当然衆流の一流でもあり、仰望もきっと久しいことであろう、……仰望の結果は、“故さらに寛短を為す云々”の十六字の評定を加えることになる。その中でも特に諸公の心をとろけさせるのは、見えたところの肘と窺ったところの膝である。本来肘と膝も男女にかかわらず共にあるもので、奇とするに足りない。だが諸公は地面から頭を“仰いで”上を向いて“望む”ために、肘膝からその肘膝より上の肘膝でないものを窺い見るので、“殊に儀容を慎み瞻視を尊ぶの道に非ず”と思ってしまうのである。」

奚明先生の話は確かに間違ってはいません。教育会諸公の考えは実に李笠翁が言ったように「秘器を掩蔵し、家珍を愛護する」にあるだけです。笠翁は人が窺い見て心をとろけさすのを恐れ、諸公は人を窺い見て心をとろけさす。その用意は違うが狙いは同じであって、ともに野蛮思想の残留であります。野蛮人は常に自己を客観と見なし、自己の行為の責任を外物に押し付けます。子どもや狂人もみなこうした傾向があります。つまり文明社会の中でもまだ遺留があって、シュレーダー（Th.Schroeder, Ellis の著『夢の世界』第七章に引用）の言うように、現代が文芸・科学・美術などの大作を禁止するのは、すなわちこうした原始思想に基づいて、猥褻はその物に在って猥褻を感じる人に在るのではないと考えます、もし本当に禁止が必要なら、禁ずべき対象はまさしくその人に在ることを知らないのです。教育会諸人が「豁敞脱露」を取り締まるのは、まさに肘膝の蠱惑力を恐れるからです。これが古のれんの野蛮思想が、われわれ新開店の看板を盗めない所以であります。玉石混交を避けるために、この引札を添えざるを得ません。どうかご贔屓の方には玉璽を見分けて、間違わないようにしていただきたいものです。

わたしの考えは、衣服の用は体を覆うつまりそれで体を彰かにするのであって、だから美と実用は同じように注意しなければなりません。ある部分は露わにし、ある部分は隠す、いずれもそれによって身体の美を彰かにするのです。もし或いは隠し或いは露わにして、逆に美を損なうならば、それは取るに足りません。裙（スカート）の下は片方のズボンの裾を出そうが両方出そうが、要するに美しくなければ、自ずから糾正の列に入るべきです。

「西洋の女性はズボンを穿かない」問題は、わたしはこの事についてまだ調査と考察を欠いていますので、今回開陳するところがないのは申し訳ありません。　　民国十三年十二月七日。

※初出：1924 年 12 月 15 日『語絲』第 5 期

---

*『語絲』に発表された題名は「女褲心理之研究（致江紹原信）」。『語絲』の同じ号に江紹原の周作人宛の手紙が載り、これはそれへの返信である。当時中国の女性はズボン（褲）の上にスカート（裙）をはくのが普通であった。

## 51　国慶節

子威兄：

今日は国慶節です。しかしわたしは少しも国慶のような気がしません。この何竿かのボロボロの旗を除いては、国旗の色*ももともと良くありません。市民はそれに又雑色の布切れを縫い合せ、紅黄藍はたいていが正色ではありません。しかも猫も杓子も何か事があると、北京人はやたらに国旗を掲げ、まるでなっていません。国旗を掲げれば掲げるほど醜く、人を不愉快にします。章太炎が知ったならこれは国旗を侮辱するものだと言うかもしれませんが、わたしはこのごちゃごちゃした市街いっぱいに掛かったボロボロの国旗を眺めると、なぜだか知りませんが――要するに国慶ではないように思えるのです。しかし、北京人がもし旗を掲げなかったら、まだいかにもそうらしいかもしれません。ここで一言声明しておかねばならないでしょう。わたし自身は京兆の人間で、あるいは京兆宛平の人間だと言うべきかもしれません。

去年の今日は故宮博物院が開放しました。確かあなたと徐君と一緒に拝観にゆきました。今年は開放せずに、歴史博物館が開放することになったそうです。これはとても妙です。歴史博物館は午門の楼上にあり、われわれ平民はふだんは登れません。（これはもともと「俘虜献上」の場所だったと思い至りました、）今回開放して十五年の国慶のお飾りにするのは、唯一の適当なお飾りだと言えましょう。しかしわたしは結局行きません。理由は？言えません。でも街中の五色旗の下の馬鹿面を見たくないのがその一つです。

国慶節の良いところは一日休みになることです。今年は間が悪く日曜日です、まずいのも程があります。　　十日十月民国十五年。

※初出：1926 年 10 月 16 日『語絲』第 101 期

---

*当時の国旗は国民党が政権を握る以前で、まだ青天白日満地紅ではなく、辛亥革命後の五族共和を象徴した紅黄藍白黒の横縞の五色旗であった。もとは革命同盟会での議論で漢・満・蒙・回・蔵の各族を象徴するとされた。章太炎は国民党の青天白日旗に対してこの五色旗を擁護した。

（「五色旗」　出典：IPA「教育用画像素材集サイト」）

## 52　国語ローマ字

疑古兄：

あなた方の Gwoyeu Romatzyh〔国語ローマ字〕は間も無く教育部より発表されるそうですが、これはわたしが十二分に歓迎を表明するところです。

前回新聞で一つのニュースを見、まるで教育部が注音字母*を廃止してローマ字に代えると言っているようでした、あとで又誰かが本当に文字革命をしようとしていると信じて、大いに反対したということでした。天下にはこのように低能な人が本当にいるのですね！この時世に、この教育部が、ローマ字で字母に代えようと主張することなどあり得ましょうか？これは一体どこの話ですか！わたくしはまだもう少し高能なようで、一目見てそれがウェード式の改正綴り法だとわかりました。やっぱり「古已に之あり」でもって中国の文字を表記するものではないですか？だがとても便利で、文字の上にハネを加えることも要らないし、数字を添える必要もない、しかも教育部を通しての発表で、綴り法を統一することができます。これらは皆とてもよろしい。だがあまり感心しない所もあるように思います。わたしは門外漢なので、一字一字について可否を言うことはできませんが、ただその中の中華教育改進社の第 4 巻第 4 号の小冊子に 7 条の特色のうちに挙げられている三・四の二条についてはともに英語と近いことを言っていますが、いささか疑いがあると思います。なぜ国語ローマ字が英語と近いことが特色なのでしょう？この理由はきっと中国人には英語を読む人間が多いからではないかと思います。しかしこれは実際に何の役に立つのでしょう？ふつう英語を読める人はたいていが英語の綴り法を正統だと信奉して、世界にはまだ別の読み方があることを知りません。そして国語ローマ字の字音も又大半は決して本当に英語と一致することはありません。だから読む時にはやっぱり間違いを免れません。例えば北京（ベイジン）という一語にしても、ふだん英語に倣って「庇鏗（ビーコン）」〔現在の拼音：bikeng〕と読みますから、そうなれば国語ローマ字の綴り法〔beeijing〕も「皮尽（ビージン）」〔現在の拼音：pijin〕と読むでしょう。「黎（リー）大総統」が「賴（ライ）」大総統と読まれることもむろん同じです。思うのですが誰か新しい綴り法を学びたいという人があれば、その人に少し時間をかけてしっかり学んでもらわなければなりません。うまくやろうとしたり手を抜こうとしたりしてはいけません。でないとうまくやろうとして反って拙いことになって、それから取り繕おうとしても、もっと面倒になります。ましてこの国語ローマ字は英語を学ぶ人の専用に供するものではありません。文中言うところによればもっと押し広めようとしているのですから、ましてや一方面だけに引っ張られる必要はないようです。――実は、国語ローマ字は大半がウェード式と同じですけれども、別に英語と近いわけではありません。ウェード式の音は本来決して必ずしも英語に基づいているのではないようです。だから英語がわかる人がこの綴り法を見ても、字母がわかるだけですが、この点はフランス語・イタリア語などがわかる人にも同じように便利で、英語だけに限ったものではありません。要するに、わたしはこの国語ローマ字に賛成です。ただその発音は決して英語に似ていない、たとい似ていても特色などになるとは限らないと思うだけです。なぜならこれは決して英米人が使うためのものではないからです。例によって好きなように申しました。あなたのご意向はどうか知りませんが。

民国十五年十月十八日、Jou Tzuohren.

※初出：1926 年 10 月 23 日『語絲』第 102 期

---

*注音字母　漢字の読み方を統一するために作られた音を表記する字母。1918 年に公布された。「ㄅㄆㄇㄈ」（b、p、m、f）のように漢字の扁旁から採った記号を用いて、その組み合わせによって、字音を表記した。日本語の片仮名の方法と同じ。声調符号はその韻を表記する部分の頭にー／∨＼の四種の符号をつけて表した。これは現在大陸に通行する拼音（ピンイン）符号のやり方と同じ。あるいは漢字の右肩に 1 から 4 までの数字をつけて表記した。国語ローマ字は 1928 年に公布された表記法で字母にアルファベッドを用い、声調は字母の組み合わせによって示したので、符号は不要となった。それが文中に「ハネも数字もいらない」と言っている理由である。

53　郊外

懐光君：

　燕大*が開学してもう一月余りになります。わたしは毎週二日城内から出なければなりません。海淀への道はもう行き慣れました。午前八時に家を出るとすると、行程は次の通りです。つまり十五分で高亮橋、五分で慈献寺、十分で白祥庵南村、十分で葉赫那拉氏墳、五分で黄荘、十五分で海淀（ハイディエン）北の簍斗橋に到着。今年の北京の秋は特別によく、郊外の秋色はもっときれいで、わたしは寒風の中人力車から鼻煙色〔チョコレート色？〕の西山を遠望し、近くは林の後ろの古廟や沿道の微かに黄ばんだ草木を見、思わず二、三十分の時間を過ごしました。最も気に入ったのは大柳樹南村と白祥庵南村の間のS字型の大通りで、眺めると本当に絵のようで、いつまでも見飽きません。だがこれは空漠とした人のいない所を言ったまでで、市街となると、例えば西直門外あるいは海淀鎮は、とても不愉快です。中でも海淀が特にひどい、道路は凸凹で汚いし、両側の溝はゴミと住民がぶちまける煤球児（メイチュウル）〔豆炭の類〕の灰でいっぱい、全く誰も管理する人のいない景色です。街では三々五々灰色〔軍服の色〕の人々に逢います。学校および商店の入り口にはいつも赤い紙が貼ってあり、何とか団・営・連〔連隊・大隊・中隊〕などの字が書いてあります。こうした情況はわたしが最初城外に出た時が最も甚だしかったのですが、今では少しましになったようです。しかしまだ全部なくなったのではありません。通るたびにいつも不愉快になり、これは占領地のようで、自分の本国を歩いているようではないと思われます。この目で見たことはないのですが、いつも欧州大戦の時のベルギーなどがあるいはこうではなかったかと瞑想されます。あるいはもう少しよかったかもしれません。海淀の蓮花白酒はとても有名で、わたしも一瓶買ったことがあり、値は高い（あるいは城内の人間を騙しているのかもしれませんが）のに味はもう一つで、わたしは飲む気になれません。わたしはどうしてもやっぱりブランディだと思いますが、この頃は機械製酒税とかができて、値段が跳ね上がり、とても買えたものではありません。――城外の道にはもう一つ嫌なものがあります。それはあのタバコの大看板です。わたしはタバコを吸うことに必ずしも反対ではありませんし、たとえ看板を立てるにしてもダメだというわけではありませんが、ただきれいにしてほしい、少なくとも醜くなければよいのですが、その看板ときたらどれもこれも皆醜いのです。その名前にしても多くは粗悪です。古い粉挽き小屋（Old Mill）をなんで「紅屋〔赤い建物〕」と訳さねばならないのでしょう、勝利の女神（Victory）に至っては、たいていの人はそれがニケ（Nike）であることを知っているのに、「大仙女」と言うのは、人知れぬご苦労と言うほかありません。わたしは中国の映画の訳名の変てこさを連想し、中国の民衆の知識と趣味は実にまだ何とも下劣であることを感じました。――このような粗悪な看板を占領地のようなところに立てるのは、極めて相応しいのでしょう？　　民国十五年十月三十日、溝沿にて。

※初出：1926年11月6日『語絲』第104期

*燕大　燕京大学。1919 年創立のアメリカ・イギリスの基督教会による総合大学。1952 年に解体され、跡地にいまの北京大学が入った。当時北京大学は城内の馬神廟にあった。

## 54　南北

鳴山先生[i]：

以前こんな話を聞いたことがあります。三家村の塾の先生が生徒に論を作らせました。題目は「南北の争いは何時より起これるかを問う」。生徒たちは『綱鑑易知録』をすっかり引っくり返したが、とうとう見つけることができず、ある聡明な生徒が断定の言葉を下して、「それ南北の争いは何時より起これるか？けだし始めて南北ありし時より起こるなり」と言って、九十点をもらいました。某秀才はそれを見て、これは黄帝が蚩尤を討って始まると言いましたが、塾の先生は賛成せず、涿鹿の戦いすなわち蚩尤討伐は、（一説では蚩尤はつまり赤酋の古文だと言う、）北方での戦争であり、南方とは関係がないと言って、そこでこの問題はとうとう解決しませんでした。

近ごろこの南北の争という声が又起こりましたが、実際はあの塾の先生の研究と同様に虚妄であって、全く正しくありません。粤軍が漢口を下してのち、南方が北方人を仇として殺すと宣伝する人が出てきましたが、後になって又劉玉春が惨殺されたというデマがとび、南北仇殺の証拠だとされ、至る所で宣伝されたのは、まことに陰謀の能事を尽くしたものでした。わたしは中国人民は完全に統一したものであり、地理に南北はあるが、人民に南北はないと信じます。歴来異族の侵略と群雄の割拠のために、何度も南北対立の怪劇が演出されましたが、一度機会があれば、併合が復活し、その間百年の別離があっても、なんの亀裂の痕跡も見えません。これは歴史上の事実であり、中国の国民性の統一と強固を証明できます。わたしたちは各省の友人を見て、ふだん感じるのはわずかな習慣と嗜好の違いだけで、たとえば華伯は蟹（彭越？）が好きだとか、品青は魚が嫌いだとか、次鴻は酢[ii]が好きだとか、（だがこれも晋人に限ったことではなく、お宅の「不」先生もそうです、）性情・思想に至ってはいずれもそれほど大きな違いはなく、絶対になんの隔たりもありませんから、近ごろ広東と北京の政府は反対の立場にありますが、広東人は相変わらず北京に来ますし、われわれ京兆の人間も広州に出かけられ、とても話が通じますし、頭には根っから南北の意見などありません。むろん、北京から南方人を見れば、彼らを蛮人とか豆の皮とか言いたくなりますし、北方人も南方からは訛り丸出しと言われます。だがこれは普通のあだ名に過ぎず、わたしたちが品老を治安会長と呼び、某君を疑威将軍と言うように、ちょっと冗談を言ったまでです。ほんとを言うと、われわれ北方人は自覚がやや遅く、民国建立の事業にはそれほど力を出していません。多数の兄弟たちも又多くが反動の戦争に加担しました。これはどうも本当のようです。でもこれは量の問題であって、質のそれではありません。三一八の逮捕状は、五分の三が北人で、反動運動の主要な人物も多くは南人でした。張勲・段祺瑞・章士釗・康有為……など皆そうです。要するに、民国以来の混乱は、土地と人とでは清算ができません。思想によって清算すべきものです。これは両地方の人の戦争ではなく、思想の戦争なのです。南北の戦いは、民主思想と酋長思想との戦いと改めるべきです。現在河南一帯の酋長主義者はあくまで地盤戦争説をとって南北人民の戦争だと言って、様々な宣伝をし、「騒ぎを挑発し」、国民相互の敵視を引き起こそうとしていますが、その魂胆は実は哀れなほど凶悪なのです。われわれ京兆の人間は平和を酷愛し、そうしたニュースを聞いて、実際はそうあってほしくないと思い、ただ

黄帝の霊が、この不肖の子孫たちをお護りくださり、彼らも道理が分かって、安居楽業し、もう手管などを使って騒がないようになれば、どんなによかろうかと、願うだけなのです。先生は四川に隠居されて、おそらくこうした不愉快な事をご存知ないと思います。それはとてもよいことです。いつ平水にお戻りになりますか？不尽。

民国十五年十月三十一日。

※初出：1926 年 11 月 6 日『語絲』第 104 期

---

[i] 鳴山先生　未詳。平水に帰ると言うから、紹興平水の人なのだろう。

[ii] 太原、すなわち晋にはよい酢ができる。

## 55　豚を飼う

持光君：

今日燕大の図書館で英文の新聞を見たら、孫伝芳が九江で五十名の学生を処刑した、又某地では十名の学生に死刑の判決を下したとありました。思わずギリシアの悲観詩人パラダス（Palladas）の小詩を思い出しました。

Pantes toi thanatoi teroumetha kai trephometha
Hos agele khoiron sphazomenon alogos.

大意は、われわれは皆管理され、養われている、一群の豚のように、死神に思いのままに殺される、と。――だが、死神は異物で、人間はどうすることもできません。人間が人間を豚とみなすのは、全く驚きです。昔には「人彘」の典故がありますけれども。草々、不宣。

民国十五年十月七日。

※初出：1926 年 10 月 16 日『語絲』第 101 期

## 56　宋二の写真

何日か前衛戍司令部が事を起こした兵士を銃殺し、おまけに彼を見せしめに梟首にし、中和園*の門口に掛けました。わたしはその時賢者を責める意義を引いて、先生に一通手紙を書いて、銃殺するなら銃殺するでよろしいが、ただ頭を切り落として、このすでに雅観を欠いた北京の飾りにすることはないと言おうと思いました。焦眉の急のことで忙しく、ついに書かずじまいでした。今日新聞でまた宋二が刑場にゆく写真を見て、思わずギョッとして身を引き締め、わたしの意見はいささか時勢に背いていて、すこし「人の好む所を悪む」のを免れないように思いました。

普通一般の市民は総じて喜んで殺人を見ます。強盗に、「人が首を切られるのに何が面白い！」と説教されるのも無理はありませんが。だから天橋に行く台車の後にはいつも大勢の健康で快活な市民がくっ付いています。でもこの機会は一時のもので、残念ながら誰もが見られるわけのものではありません。それで切り落とされた頭、あるいは一枚の死体の写真に対して、仔細に鑑賞し、気持ちを慰めるのもないよりはましでしょうし、少しは知識欲（？）を満足させ、仲間外れになった恨みを埋め合わせることができます。こうしたよい方法は現代のいわゆる文明国にはなく、たぶん世に稀な東方文明の一部分でしょうか？わたしがどうして民意に反してあくまでこうした芸当の取り消しを主張しましょうか。ただ自分には十分な国粋の修養がなく、衆とともにこういう面白い展覧を楽しむことができないのを恥じるばかりです。　　民国十五年十月末日。

※初出：1926 年 11 月 6 日『語絲』第 104 期

---

*中和園　北京の芝居小屋。

## 57　肉饅税

中央公園の長美軒は雲南貴州料理の店である。だから彼らのハムはすこぶる旨いのだということだ。だがわたしは食べたことがない。ただハムの屑で作った肉饅は食べたことがあり、しかもなかなかいけると思った。それに高くない、一個二銭しかしないから。今日は仕事がなかったので、又公園に潜り込んで、ついでに長美軒で肉饅を五個買った。合計大洋で一角である。ところがなんと、店員はどうしてももう銅貨四枚出せ、これは四つの特別税だ。芝居見物、女郎買い、料理屋、宿屋、いずれも一割が要る。だからわたしは洋一分〔銀一分〕出すべきなのだと言う。わたしは自分は芝居見物や女郎買いをするわけでなし、ただ何個か肉饅を食べるだけだ、なぜ税金を払わなければならないのかと言った。彼はそんなことは知らん、払うのはどうしても払わなければならないと言った。仕方がないので銅貨四枚を渡すしかなかったが、実際は四厘余計に損したのである。この税金は何に使うのかと聞いてやったが、彼も言葉に詰まって、たぶん赤退治のためだろうと言ったが、彼も保証はできなかった。わたしはコノテガシワの林の下のベンチに腰掛けて、肉饅を食べながら、どうにも合点がいかなかった。この時世肉饅一個食べるのも容易ではなく、税金を逃れられない。しかし考えを変えた。これがもし本当に赤退治に使われるなら、われわれ京兆の公民も喜んで出すべきだ。――なぜなら赤禍はどうか、洪水猛獣である、白福はどうか、天上楽土であることを、京兆の公民は最もよく知ることができるからである。（民国十五年十月）

※初出：1926 年 10 月 30 日『語絲』第 103 期

## 58　奴隷の言語[i]

ステプニャック（Stepniak、荒野の子という意味である。彼は本分に安んじない人であり、革命を語る反逆者であるが、天は見そなわして、後にイギリスで汽車に轢かれて死んだ！）は「ロシアのユーモア」の序で、シチェドリン（Shchedrin -Saltykov）がいくつもの諷刺の比喩を作ったのは、専制時代には言論が不自由であったからで、人民は隠喩の法を発明し、字間行間に考えを表明し、それを称して奴隷の言語と言った、と述べている。おう、おう、これはなんと重大な発明だろう！現在の中国人がもしこうした技量を物にすることができるなら、ずいぶんとどれだけ利益を得られることか。少なくともかなりの危険は避けることができる。そうだ、奴隷の言語、これこそわれわれが大急ぎで学ばねばならないものだ。もし君が物を言いたいのならば。

しかし、よく考えてみると、中国自身もとから奴隷の言語は持っている。これは国産品であるのみならず、まだ十分何にでも役に立ち、ずっと相応しく、ずっと提唱する価値がある。東欧はけっきょく西方文明の地であり、その奴隷の言語の中にもひそかに反逆の気を含んでおり、確実に赤化の嫌疑があり、教えとするに足りない、だが中国は完全に東方文明であり、奴隷の心は百合のように白く潔白無比である。彼の言葉は私娼の顔のように白くそして――無恥である。天恩だの、お引き立てだの、政席に侍して減膳だの、われわれの総長だの、孤桐先生だの、全く切りがない、切りがない！どうだ、この親しそうなこと！道理であちらの結果は笞五百に流刑一万里、こちらはお褒めの大枚一千元だ[ii]*。その利害は顕著、賞罰は明白。奴隷の言語を研究して安心立命を図ろうとする者は、どこからどうすればよいか、すでに煩言を待たずして分かるはずではないか？　　（民国十五年六月）

※初出：1926 年 6 月 28 日『語絲』第 85 期

---

[i] 「奴隷の言語」　民国十五年六月当時の『現代評論』派との論争に関わる文章だと思われる。「奴隷の言語」とは北洋政府の要職にあった章士釗におもねった『現代評論』を指す。『語絲』掲載時の題目は「われわれの閑話十八」で、『談虎集』収録に際して「奴隷の言語」となった。

[ii] 大枚一千元　北洋政府から『現代評論』に官費が支給されていたことをいう。

## 59　京城の拳骨*

偶然騾馬曳きが言うのを聞いた。二十六年前は今よりまだ少しはよかったと。時は庚子の年〔1900 年〕である。時を同じくして愛国者たちは叫んでいた。みんなは異人に注意しさえすればよい、拳骨ときてはずっと京城のがいいから、（案ずるにこの典故はたぶん『笑林廣記』に出るのだろう。）ちょっとぐらいお見舞い申されても構わない、と。いわゆる国家主義を調べてみると現今最もハイカラなもので、指導者が著名な“馬鹿も底抜け”という人物ではあるが、要するに間違いのないものである。しかし私は疑問に思う。われわれはなぜ異人に気をつけなければならないのか。まさか虐待されて、奴隷になるのが怖いからではあるまい。今ではわれわれは庚子の訓練を受けたし、しかもいまになって思い返してみても比較的それほど不愉快には思わない。ということは外国の奴隷になるのは京兆の人にとっては必ずしもそれほど恐ろしい事ではないということだろう。拳骨も要するに同じことだ。「継母の拳骨」はお見舞い申されたくはないが、おっかさんの拳骨だって歓迎するということでもない。愛国者がこれが分からないようでは、連中の言うことは皆馬鹿話で、――もしそれが無心であるならまだ低能ということで済むが、故意なら、それこそ奴才の見本だ。　　丙寅〔1926 年〕端午の後三日、京兆の豈明。

※初出：1926 年 6 月 28 日『語絲』第 85 期

---

*京城の拳骨　『語絲』では題目を「われわれの閑話十九」とする。京城とは都、ここは北京。事はいわゆる拳匪の乱を言う。

## 60　拝脚の討論

この一月はほとんど病気続きであった。実際はちょっとした病気に過ぎず、ちょっと風邪を引いたのが、しつこく三度も繰り返した。少し良くなったかと思って、仕事場に行って一日か半日仕事をすると、又あらためて罹り、前よりいっそう鼻詰まりがひどく、頭もずっとくらくらし重くなった。この二週間は全くなんの仕事もせず、孫中山先生の葬儀にさえついに行けなかったから、他のことは推して知るべしである。家ではする事もなく、「統計学」も繰っていると厭きてくるし、小説などもともと好きではない。だからほんとうに十二分に退屈であった。うまいぐあいに聖賢祠に住んでいる友人の乙丙君が見舞いに来て、出たばかりの新聞雑誌をかなり貸してくれ、わたしはそのお陰でこの何日もの暇を潰すことができた。これは感謝しなければならない。

これらの定期刊行物のうちに『心理』第三巻第三号があり、わたしが最も愛読したもので、たぶん「三生縁ありて、一見して故(しりあい)の如し」とでも言うところだろう。張耀翔先生*の「拝髪主義と拝眉主義」一篇はとりわけ精彩ある著作で、すでに五へん以上反復して読んだ。張先生の研究の結論は、たぶん――きっと間違ってはいないと思うが、「髪は歓情の神であり、眉は哀情の神であるから、それを崇拝する」というのである。この点に関してはわたしは何も申しあげかねる。しかし、大胆になることを許されるなら、張先生が中国人は脚を崇拝しないと力説されることについては事実と合わないように思う。（たとい学理に符合するとしても）張先生は「もし中国人に脚癖なるものがあるならば、詩詞によらなければ、どこにその情を表すのか？」とおっしゃる。お答えしよう、「女人の小脚にその情を表すのだ」と。中国の女性に纏足が多いという事実は張先生も承認なさると思う。そして女性は男性が小脚を愛好するから纏足する、これも火を見るよりも明らかな事実である。三月の北京の新聞には証拠となるいくつもの文章があるので、抄録して張先生にご覧いただいてもよかろう。

「小脚狂」　　慎思

知り合いの同郷の者は、長らくこの四通八達、風気大いに開けた北京にいて、高等教育まで受けているので、彼は当然思想のやや新しい人のように見える。それがなんと我が「意表の外」に出たのだ！

ある日わたしはこの同郷と道を歩いていた。途上三、四人の女学生と出会った。とても器量がよかった。彼は彼女たちを見て、言った。「なかなかの別嬪揃いだ！特にあの桃色の着物を着たのは、眉は春山を鎖し、目は秋水を含み、年は二八を過ぎず、確かに処女だ……ああ、残念ながら大足だ！」

またある時彼と話をしていて、彼は言った。「君は知らんだろうがもう一人美人に逢ったんだ。本当に愛嬌たっぷりで、とても可愛いんだ！彼女の金蓮を見たが、あれほど小さいのはないよ！歩く時なぞ、くねくね、ゆらゆら、全く魂がとろけてしまうぜ！しばらく眺めていたが、懐に抱きしめて接吻できないのがなんとも無念、でも北の方へ行っちゃったよ。」この話を聞いてこらえきれずに大笑いしたが、またとても厭らしい感じがした。これがおそらく「小脚狂」なんだろう。

諸君、こういう「小脚狂」は我が友人一人に止まらないのだ。（戊の図書券一枚贈呈）――十日の『晨報』「北京」に見える。

「名言録」

中国のタゴールと号する辜湯生先生〔辜鴻銘〕は、かつて審美に関する談話を発表された、「中国の女性の美は、完全に纏足という点にある。纏足をすれば、足と腿の血脈がすべて上向きに蓄積され、太股と臀部が自然と発達し、婀娜として飄逸な風致が現れる。」――十八日の『京報』「顕微鏡」に見える。

張先生は「拝足と纏足とはなんの関わりがあるか？」と疑われ、纏足は拝足の結果であることを承認されない。その理由は「既にこれを拝すれば、則ち当に之を毀傷すべからず」という点にある。しかしわれわれは、「拝脚」という言葉は学術上の訳文であって、ただ崇拝――異性の脚を愛重することしか言わず、決して線香蝋燭を点して叩頭拝礼するわけではないことを知らねばならない。その次に男が小さな脚を愛重するので、女性は人工的に脚を縛って小さくし男に提供し、毀傷するのと拝するのが同じ側の人間ではないことである。また毀傷とは第三者の客観的な言葉で、当事者には一種の飾りと見なされるに過ぎない。刺青・鼻輪・ブラジャー・コルセットなどすべて同類の例である。こうしてみると、之を排して之を毀傷する、言葉を替えれば、即ち之を愛してこれを修飾する、決して衝突するところがない。中国の婦女はおそらくまだ三分の二が纏足であろう。その原因は「でなければ男が誰も欲しがらない」からである。こうした情況は、文章上であれ学説上であれどのように確実切実に弁証されようが、事実上中国人は相変わらず暫くは世界において唯一の拝脚――しかも毀傷した脚を拝する民族であると称されざるを得ない。わたし自身は大小の足を拝さないし、少数の教授や学生たちもこれを拝さないし、そして「文明の女子学生」は特に「その裙（スカート）を高くし履（くつ）を革にする」けれども、もし科学的な統計が纏足女子の総数がどんなに激減したかを明示することができなければ、われわれはたとい一日なりともこの悪名を逃れることはできない。ちょうどわれわれが福壽膏（アヘンゾ）を吸わなくとも、ただ同胞の多くが阿芙蓉（アヘンゾ）癖を持っているがために、やはり阿片気狂いの国民という称号を忍受せざるを得ず鬱憤の晴らしようがないのと同じである。われわれは国民の文化程度は平坦ではなく、ピラミッドのように、山型になっていることを知らねばならない。文化の頂点を測量するには最上層の少数の知識階級を基準としてよいが、もしその堕落の程度を計算しようとするときには下層の多数の愚人を基準とすべきである。たとえば、また脚の話になるが、中国は最近思想が進歩し、二十数年の天足運動を経て、学界はすでにほとんどすべて天足になった、（ハイヒールを履く「洋式纏足」もいるけれども、）――しかしながら大多数は依然として拝脚教徒である。以上述べたことはすこぶる公平であると信じている。「女子学生」たちを抹殺していないし、また街中ひょこひょこ歩いている伯母様お姉様（願わくばこの中にわたしの姪たちの世代が入っていないことを）方の苦心と成績を見えないものとして完全に埋没させることもやりかねるからである。“女偏の君”たちはわたしを諒解してくれることはできるだろうか？“人偏の君”たちとなると、あまりそのように諒解はできないと思う。少なくとも張先生と彼の側に立つ諸君は必ずしもわたしに同意して、彼らが拝脚

国民の名を負う義務があることを承認しないだろう。わたしは引き受けるしか他に手がない、わたしは「鑑賞」したことはないけれども。わたしはエリス博士に対して抗弁しかねる。彼が中国の拝脚主義について知っているところはわたしよりもずっと多くて詳しいようだから。

一九二五年三月三十一日、宣南の斗室にて。

※初出：1925 年 4 月 4 日『京報副刊』第 109 號

---

*張耀翔先生　（1893～1964）湖北漢口の人。心理学者。『心学文集』（上海人民出版社 1983）がある。1922 年中国で初めて世論調査を行ったと言う。

## 61　拝髪狂

新聞によれば孫伝芳と丁文江[i]は上海でさかんに革命党を捉えているそうだが、これはどうにもしょうがない、――連中は軍閥ではないか？軍閥の愚昧凶暴はその本分であり、なんの怪しむところがあろう？しかしながら一般の上海灘の国民も連中にくっついてゆく。報道では社会的に断髪の女性に非常に注目が集まっており、これを女革命と言うのだそうだ！ああ、世間知らずの上海灘の友よ、君らはほんとうに少しの進歩もなく、むざむざとこの十五年を過ごしてきた。いまだに記憶にあるが以前は辮髪のない人を見るとみんなはそれを革命党だと言ったが、後になって軍政府が一声号令をかけると、自分のも切ってしまったのに、今また断髪の女性を見てなんのかの言うのは、まったく「どういう心理かわからない」と言う他ない。辮髪は満清の徴であったから、それを切りさることは多少でも反抗の意味を含んでいた。女性の頭髪はまさか孫・丁の権威の表示であって、それを毀損することは反逆になるということではあるまい。女性の皮膚・髪・衣服装飾に極めて大きな刺激を感じるのは、不安になろうがあるいは狂喜しようが、いずれにしても少し変態であるか、あるいは色情狂的ですらある、もし彼らの興奮が言動に現れるならば。中国人は大半が少し変態である。そして上海はまたほとんど色情狂の地域である。しからば諸公が「革命女」に反対なのは至極当然なわけである。張耀翔[ii]君は言わなかったか？中国人は拝髪狂であると。（民国十五年十一月）

※初出：1926 年 11 月 13 日『語絲』第 105 期

案ずるに、一年過ぎて、上海では今女性の断髪が大流行だという。今昔の感に耐えないではないか？　　民国十六年十一月再記。

---

[i] 丁文江　（1887～1936）江蘇泰興の人。字は在君。地質学者。胡適の友人。軍閥の孫伝芳に上海市長の職に任ぜられ、孫伝芳の青年虐殺に手を貸したことになったのであろう。

[ii] 張耀翔　上文「拝脚の討論」参照。

## 62　女子学院の火事

十一月二十二日北京女子学院[i]の宿舎が火事になった。火傷した学生楊立侃・廖敏の二人は、救急治療が遅れたために、相継いで亡くなった。当学院の責任者任可澄・林素園がどんな責任を負うべきかはわたしはべつに言おうとは思わない。この事件は自ずと直接関係する人が始末するだろうし、われわれは当面黙っていても差し支えないだろう。その次には多少とも気骨のある人ならむろんどのように責任を取るかはわかっているから、他人の指弾を待つまでもない。もし面の皮が厚ければたとい彼を指弾しても無駄であり、彼はどうせ「笑罵するならすればよい、お役人様の俺が自分でやる」のだから、人がなんか言っても無駄になるだけだ。――わたしは現在の情況はまさしく後者ではないかと疑っている。もう一つ、研究系[ii]の新聞や週刊誌の類が三一八に学生が惨殺された事件を借りて国立各校の校長を攻撃して段・章の加勢をしてからは、わたしはいかなる人を攻撃することについても極めて慎重な態度を取っている。おそらくちょっと油断して、千百分の一でも若輩に似たならば、もうわたしの半分の人格も保てるものか。だから今度の任・林が明らかに責任を逃れようがないことは、研究系以外は同意しないものはないけれども、ただわたしはなお一言も言わないつもりである。ただ別の面からざっと一二の感想を述べてみよう。

この惨劇を聞いて真っ先に感じたのは、その一は現在の文科の学生に科学の常識が欠けていることである。もし楊・廖の二人がもう少しアルコールの性質を知っていたなら、今回のような惨禍は起こらなかったはずである。これは教育者の責任であって、以後文科の学生には適当な科学知識を持たせ、実際の生活に適応できるようにすべきである。同時に理科の学生にも少し芸術の趣味を持たさねばならない。これはすでに「賊が門を出てから門を閉める」話であるが、要するに閉めなくて「門を開いて泥棒にお辞儀する」よりはましだろう。

その二は、又痛切に現代の医療制度の欠陥を感じた。女子学院の当局が金を惜しんだがために、人命を藁のように扱ったのは、もちろん言い訳ができないが、資本主義の病院制度もそれ相当の責任を負わねばならない。道理からいえば、病院は公益事業の一種であり、人民の生死に直接関係があることは、他の事業よりも特に重いから、国家によって設けられ、一律に平等に国民がその利益に預かれるようにすべきである。それでこそ理に合うのだが、今の病院は営業であり、完全に金銭の交易であり、どんなに危険が差し迫った病気でも、要求したお金が先に払われなければ、みすみす人を見殺しにする。ちょうど水に溺れている人に救命の値段を掛け合うように、平然としてその科学者としての冷淡さを保つのである。本国人の医者も十分堕落しているが、キリスト教国の白人種のやる大病院は、あるいはそれ以上及びもつかない程度かもしれない。現今の資本主義の世界では、これはあるいは当然かもしれない。上に想像した公益の病院は共産社会以外ではあり得ないのだが、共産主義は今この時の中国では厳禁であり、前の衛戍司令、海甸にきっといくつもの「徳政碑」のある王懋帥の二十一（？）か条によれば、主従を分かたず悉皆死刑に処さねばならないのだから、われわれは慌てて口を閉じ、もうそれを語ってはいけない。任・林はいずれも赤化討伐の巨頭呉子玉〔呉佩孚〕先生の幕僚だから、このご時世連中のやり口はきっとすべて正しく、「礼儀廉恥」に合っていて、彼に反対しようとすればおそらく謀反して上を犯

す嫌疑を免れないだろう。徹底して言うと、今一人の学生として、火酒で火傷して、ゆっくりと病院に担がれ、彼女が自分から死んでゆくのにまかせる、これはたぶん彼女の本分であり定命なのだろう？むろん、これはまだ感謝すべきである、なぜなら彼女は運が良く、決して赤化討伐の兵乱に死んだのではないから。

民国十五年十一月

※初出：1926 年 12 月 4 日『語絲』第 108 期

---

[i] 北京女子学院　北京女子師範大学で紛争が起き、いわゆる女師大が取りつぶされ、女子学院に改組された。その時の教育総長が貴州出身の政客任可澄で、学院院長を兼務、師範部の責任者が林素園であった。彼らは改組の際、武装部隊を引き連れて、前代未聞の学校の武装接収を行なった。

[ii] 研究系　梁啓超・湯化龍らが 1916 年に憲法研究会という政治結社を作った、それがいわゆる「研究系」で、1920 年代を通じて段祺瑞ら皖系軍閥の後ろ盾の役を果たした。新聞では『晨報』がその言論機関となった。

## 63　男装

前に京津日文報に載った、錦州の女性任閣臣が、男装して応募して奉天軍に入ったが、誰も見分けがつかず、後月経中に行軍して、はじめて明らかになり、長官の耳に入り、優遇して故郷に帰らせたというのを読んだ。読んだ当時はただ少し grotesque な感じがしただけで、そのほかに何の考えもなかった。わたしはこうしたロマンティックな事柄については、あまり興味がないからである。

しかし多数の同胞にはこれは一種の美談、風流事であって、低徊詠嘆に値すると思われた。そこで新聞の文芸欄はもちろん賑やかになった。いまはただ錦県の白雲居士の「郷人の従軍女子任閣臣に題す」詩四絶を挙げて例としよう。その詞に云う。

風雨亭中の女丈夫、千秋の侠骨　青蕪に葬られ、
裙辺画くに懶たり孤山の景、大半の春愁　鑑湖に付す。

見ずや当年の魯国の娃、周夫人の事盡く誇るに堪う、
者番(このたび)の巾幗の英雄の伝、儂(わたし)は頭一名(だいいっとう)を把りて姓を花と記す。

荒涼たり三百年来の事、能く干戈を執るに又卿を見る、
板蕩たる中原に胡騎入り、夫人好しく為に堅城を築く。

天を仰いで空しく唱す木蘭の歌、古剣年々老いて磨かず、
数遍鬚眉たるに弟子無く、兵書直ちに合(まさ)に宮娥に教うべし。

実を言うと、こうしたことにわたしはあまり賛成できない。必ずしも自分が兵隊をやったためではない。わたしは兵に対して少しも反対ではない、しかも成人が兵隊になるのには賛成である、だが娘たちにはやっぱりやめておいた方がいいと勧めたい。早く髪を梳いて勤勉に脚を包み、家の世話して息子を生むという人生観は、わたしもいささか時代遅れだということは知っている。「このご時世」、彼女らも少しは「軍事知識」を持ち、護身して家系を保つためにどのように鉄砲を使うかを知ることができるようになるべきだとは思う。愛国については、当然われわれは女性のこの権利（それとも義務？）を奪うことはできないし、彼女らにもおのずから適当なやり方がある。それは孤独な道だけれども。隊をなして突撃するのは、やはり男たちにやらすのがよい。どうせ彼らは多いし、一つの主義のために戦おうというのもいるし、何元かの金のために戦おうというのもいる。木蘭という女性はいささか当てにならない。おそらく烏有先生の令嬢だろう。他の何人かの歴史上の奥さんたちも耳に心地よく言われているだけで、詩の材料にはなるが、国家にとってあまり役に立たない。ただ某所の女性ソフィア*だけはほんとうに敬服する価値がある。彼女は一八八一年四月十六日に死んだ、すでに四十六年が経っている。

白雲居士が風雨亭の鑑湖女俠〔秋瑾〕を引き、又胡騎などと言うのは、いずれもいささか不似合いなようだ。又女が男装をするのは、男女別ありの教条に違反し、区々たる断髪よりも事情はさらに重大であり、理としては厳罰に処してこそ、人心を正して風化を維持するに足るのに、礼教を維持する官憲がかえってこれを優遇するのは、一体どういう事であるか？（民国十五年十二月）

※初出：1926 年 12 月 11 日『語絲』第 109 期

---

*ソフィア　ソフィア・リヴォーヴナ・ペロフスカヤ（1853～1881）。アレクサンドル二世の暗殺者。クロポトキンの『ある革命家の思い出』の中に回想がある。清末の革命党の間ではよく知られた存在であった。

## 64　頭髪、名誉と程度

八月二十日の『世界日報』は、「欧陽晩瀾は女子附中が断髪の女生徒の受験を拒否したことはないと言う」と載せたが、結果は受験を拒絶するという事はなく断髪の女生徒を取らないのが事実であると云う。次の当該女子附中の主任の談話をご覧あれ。

「以前断髪の生徒で受験した者は、程度が皆あまりよくなかった。……学校の生徒で中途で断髪にしない者がいないわけは、本校の学生はふだんから名誉を愛し、学校が斉一を教えとしている以上、学生もまた少数の人間だけが人と違っていることを望まないからである。」

頭髪が名誉と程度にこんな関係があったのだとは、まことにわたしの見識を啓発してくれること少なくない。断髪は不名誉な事である。なぜなら校則は煌々として、そこでは禁止しているから、順民から見れば当然疑うべきものはないのである。しかし程度は？まさかこれがほんとうに頭髪と神秘的な関係があって、烏雲頂を覆えば則ち経書爛熟し、青糸(くろかみ)地に墜ちて英算全て忘るとでも言うのだろうか。奇なる哉怪なる哉、亦復異なる哉！然りと雖も！これは殆んど異とするに足りず、古すでに之有りであった。旧約聖書の「士師記」第十六章に云う。

「サムソンは彼女に言った。いままで誰も剃刀で俺の頭を剃った者はいない。というのは俺が母の胎内を出ると神にナジル人として捧げられた。もし俺の髪を剃ったなら、俺の気力は俺を離れて、俺は弱くなって他の人と同じようになる。

デリラはサムソンを彼女の膝で眠らせ、人を呼んで彼の頭の七ふさの毛を剃らせた。そこでデリラは彼に打ち勝ち、彼の力は彼を離れた。デリラは言った。サムソン、ペリシテ人があなたを捉えに来た、と。サムソンは眠りより醒め、心の中で言った、前と同じように出かけて体を動かそうと、だが彼はエホバがすでに彼から離れたことを知らなかった。ペリシテ人は彼を捉え、その目をえぐり、彼をガザに連れて行って、銅の鎖で彼を縛った。彼はそこで牢屋の中で碓を引いた。」

そうなのだ、彼女ら小娘が二本のおさげを切った、すると『女児経』の信徒たちは彼女らに打ち勝ち、彼女らの名誉と程度は彼女らを離れてしまったのだ。アーメン！　（民国十六年八月）

※初出：1927 年 8 月 27 日『語絲』第 146 期

## 65　男子の纏足

陶奭齢(とうせきれい)著の『小柴桑喃喃録(しょうさいそうなんなんろく)』巻下に云う、「先府君は八座〔高級官僚〕を以て家居され、一敝袴十年易えず、綻び補いて幾ど完処無し。朱少傅は衡嶽に里居して侍養す、官すでに三品、客至れば或いは身自ら行酒す。近時一二の貧士、偶々科名を猟(かす)めたれば、輒ち天物を暴殄し、滋味を窮極し、服飾起居、華煥ならざる無し。袒(じつ)衣褻服〔共に肌着〕、紅紫爛然たり、梳頭裹脚[i]に至っては、亦僮奴をして代りて為さしめ、両手を閑却して何の用たるかを知らず。」もともと男子の纏足は明代からすでにそうだったのだ。――『鏡花縁』の林之洋の故事を証拠として引いて、唐代から始まると言う人もいるけれども。女性で纏足する者は無論であるが、たとい北京で見る纏足をしていない女性でも、わたしはどうも彼女らの脚は少し異様だと思うのである。平底のつま先の丸い靴を履いていても、細く小さくて全体とバランスが取れていない。北京の男もどうやら好んでぴったりした靴を履き、しかも自分の脚には特に気をつけるようだ。連中が布のハタキで懸命にその靴をはたくのに、チョッキや西瓜帽の上の埃には少しも気を止めないのを見るたびに、そのことは分かる。初めは奇怪に思ったが、後で友人に聞いて、やっとはっきりした。こうした男子は誰も布のようなもので脚を包み、細く小さくするのを美しいと思っているのだ。纏足しない女性が脚を包んでいるのは、これから類推すれば、より当然である。中国は拝脚主義の民族である。張耀翔先生[ii]がどんなに反対したところで、要するに極めて確実で動かすべからざる事実である。だが拝脚ということでは、おそらくほんとうに足の美しさを理解できるのは世上で古代ギリシアと日本人に及ぶ者はない。彼らが履いているサンダラ（Sandalia）と木屐（Geta、日本語では下駄と云う）を見れば分かる。だが彼らが愛するのは天足、自然のままの足であって、中国人が賞識するのは却って「文明脚」、人工的に製造した粽や餅式の様々な金蓮でしかない。民国十六年十月。

※初出：『談虎集』

---

[i] 裹脚　足を纏足用の長細い布で縛ること。

[ii] 張耀翔先生　本書「拝脚の討論」参照。

## 66　銅元の玩味

今日郵便局に行って切手を買おうとして、ポケットから銅貨を出した。ふと見ると新鋳の「双枚」*〔一銭銅貨、二銭銅貨の二銭銅貨と言うようなもの〕であった。新しい「中華銅幣」はもともとありきたりの物であるが、文字が皆ぼやけている。今回の一枚は比較的特にはっきりしていたので、注意を引いたのだ。わたしはそれでポケットに入れ直して持って帰った。家に帰って取り出して仔細に鑑賞してみて、はじめて裏側の上の方に「民国十三年」と横書きしてあり、真ん中は「双枚」の二字であるのが見えた。正面の真ん中の「中華銅幣」の上にまた四個の読めない満洲文字が横に並べてあり、下側は一行粗悪な字体の英文で、THE REPUBLIC OF CHINA とある。この銅貨の裏を見て実際何の好感もえられず、やりきれず鬱憤晴らしをしたくなった。

わたしにはこの満洲文字がそこに書かれているのは何のためかわからない。それが表すのがどういう意味かにかかわりなく。もし五族協和の意を表すためであるなら、呉稚暉先生の古い名刺のように、蒙古・チベットおよびアラビア語を全て添えるべきである。――実際回族なら或いはまだアラビア語の解る人が多いだろうが、満族は太傅尹克坦先生以外は必ずしも満洲語が解る人がそんなにいるとは限らないと信ずる。銅幣にこの数文字を書くことにどんな意義があるのか、前清のやり方を模倣していると云う以外に他の説明は見当たらないようだ。これは奴隷性ではないとしても要するに惰性の現れである。

英語を書くのはさらにどういう道理なのか。まさか民国はイギリス人に取り分があるというのではあるまい、それともこの銅貨は英語国民の中でも通用するというのか？貨幣の流通はもともと本国においてのみであるのに、（中国の銀貨はまだ国内でも互いに通用できない、）どうして外国語を、それもまた英語を書かねばならないのか。これは香港の状態でなくて何であろう？もし礼儀正しく中国語の解らない外国人のためにというなら、価値を表すアラビア数字を付ければもう十分である。民族の存在と自由とは決して文字上の表示のみによるものではないから、わたしは貨幣や切手の上の英語を削りさえすればそれだけですでに中国の独立が勝ち取られるとは主張しない。中国がすでに本族や異族の強者の奴隷市場になっていることは事実上すでに言うを憚ることはない。自由を勝ち取るにはやはり事実について着手すべきである。わたしがここで言いたいのはただ中国人の頭脳がどんなにでたらめであるかが、銅貨や切手の上にも歴々として見ることができるということだけである。イギリスの文人ギッシング（Gissing）はペンクラブでイギリス製のバターの品質が次第に劣化するのはつまり民徳の堕落の徴だと嘆いたことがあるが、確かに言い過ぎではない。中国の新銅貨が朝鮮の光武八年（日韓併合前六年〔1904〕）の銅貨よりもずっと醜いのは、どうして人を寒心させずにおれようか。民国十四年四月。

※初出：1925 年 4 月 10 日『京報副刊』第 114 號

---

*新鑄 の「双枚」　「双枚図」　出典元：古董臺灣（https://gudongtw.com/20728.html）

## 67　二つの吉兆に非ざるの論

我が国の金持ちの近ごろの二つの挙動を伺うにみな吉兆ではないので、それを論じて見たい。二事とは何か？一つは門を出ての露払い、二つは家に居ての誕生祝い、これである。

古は、露払いの制度はけだし人民の自主的行動から起こって、君王の意向ではなかった。皇帝は最初術師との兼業であり、その力は雲雨を起こし、牛羊を繁殖させ稲麦を成熟させることができたので、民はそれを尊重した。しかしながらこの神通力はまた人を傷害するに十分であった。火事や落雷など、それに触れるものは死んだ。あるいは酋長が無くした火刀を拾い、火を打って煙管に着け、五人で回し飲みをするとか、あるいは道端に捨てられた御膳の余りを食べたりして、事が暴露ると皆恐怖のあまり忽ちにして亡くなった。福分が薄く神威を受けるのに耐えられなかったからである。人民は道に君主に会うとそれを避けたのも、その理由はこれに準ずる。後世になって人君たる者にはすでに此くの如き威信はなく、人民も別に慌てて回避する理由もないのに、いまや上から発動して、人民に回避を強要する。これが近代の露払いの由りて起こり、今日まで至っている理由である。その表面は威厳があるもののようであるけれども、その真相は則ち甚だ恥ずべきものである。古の露払いは、人民がその上を畏れたのであるが、今の露払いは、上にある者が人民を恐れているからである。金持ち諸人の心は以下の如し。「人民の予に甘心せんと欲すること久し。予時々刻々戒備せざる能わんや？もし予軽装にして朝に出ずれば、尸を乗せて夕べに返るは必定なり。――いな、あるいはすでにその肉を食われその皮に寝ねられんか？用心用心、人を我が車に近づけるな、人に我が道を横切らせるな。我をして衆と隔絶せしむれば、我それ僥倖にして免れん。」諺に言うあり。「白日に心に恥ずる事をなさざれば、夜半に門を叩かるるも驚かず」と。よくも言ったものだ！上にある者が心に恥じることなければ、何ぞ此くの如く慌てふためかん？いま此くの如きは、鼠の猫を恐るるに似たり。まことに左丘明の恥とするところを免れざるなり。

予幼き時殊に誕生祝いの説を聞くこと少なし。あるとすれば則ち必ず五十以上の整寿〔五十、六十とまとまった年齢の祝い〕にして、子女たる者によりて酒杯を奉じて祝賀せらる。これは宗法社会の礼法の一なり。但し未だかつて毎年奉行するはあらず。使者列をなし、学者班をなし、東奔西走して誕生祝いをなすは、特に未だこれを聞くことなし。それ人には必ず生あり、生にはそれぞれ日あるは、もと極めて平常の事にして、それを祝う用なし。整寿の祝いにしてすでに謂れなきに属せり、然れどもしばらくこれが説をなして云う、これは孝子順孫の心遣いにして、我が親の古希の上寿に上るを見て喜び、又崦嵫の日の迫るを慮りては懼れ、今のうちに祝賀し記念するのは、なお道理あるとなすを失せず。然れども散寿〔毎年の誕生祝い〕は何の取るところかある？英雄哲人なら、子孫なくとも世人はその言行を慕いて常にそのために祭祀宴会を設ける。だが亦年々歳々そうするわけではない。宗教の祖師を例外として。今我が国の金持ち諸人は明らかに宗教の祖師にあらざるに毎年必ず誕生祝いをなし、自ら祝い、他人が代わって祝い、互いのためにするのは、皆意義がない。ただわたしはここで一解釈を得た。即ちこれによって中国人の気運の短促を悟ったのである。中国人が毎年必ず誕生祝いをするのは、つまり汲々として影を顧

みる意味を表すのみならず、十年に一祝ではほとんどもう間に合わないので、一年永らえただけで大吉とするのである。これを古代に求むれば、すこぶる晋人の曠達の風があり、それは西国ではいわゆる世紀末の情調なる者ではないか。この種の思潮は詩酒丹青の上に表れれば美しくないことはないが、もし弥漫して上下に及べば、世を挙げて皆偽のデカダンとなり、目前の私欲のみを図り、国の滅亡も首を伸ばして待つ者である。吉兆にあらずと言うも、あに情にも理にも適った論にあらずや。

案ずるに、この文は又仿宋刻本『尚豈有此理』（即ち『豈有此理』三集）巻一に見える。読む者は以て参考にすべし。一九二五年四月一日、西国のバカ節、疑今山人識す。

※初出：1925 年 4 月 13 日『京報副刊』第 117 號

## 68　壁を取り壊す

三月二十七日北京の各新聞は、大総統令を載せた。「流伝する古物、徴するに足る文献は、ひとり金石図籍の考証に関する者のみならず愛護を加えるべし。たとい宮観林木は、締構〔設置経営〕これ困難なるとも、伐採は戒むべし。かつて当該主管部署は保存方法を擬し、よって毀傷・販売等の諸弊を防がんとせしも、ただ事に因って制を立て、未だ通行の定章あらず、積むこと久しければ〔悪弊の〕玩(しき)りに生ぜざるを保し難し。あらゆる京外各地方の従前の建築樹植及び一切の古物の今に至るまで存在する者は、応に如何にして防護保存すべきか、当該主管部署に著(めい)じて彙集成案し、専章を重訂し、通行遵照を呈請(じょうしん)せしめ、並びに税務処に著じて古物の輸出を禁止する方法を決定せしめ、海関(ぜいかん)に飭令(めい)じて切実に監察せしめ、以て政府の古を今の模範とし、力て国粋を維持せんとするの至意に副わしむべし。ここに令す。」

内務部が至る所城壁を取り壊し、さらに日・月壇の古柏を伐採して売り払おうとした時に、好人政府がこの命令を下すことができたのは、賊が出てから門を閉める気味があるけれども、それでもまだ幾分かは評価できる。しかし、わたしがおかしいと思うのはその中の「京外」の二字である。これからすると、「京内」はその内に入っていないではないか。それなら内務部（つまり「当該主管部署」）は伐採販売できるわけで、この一家だけで、他に分けないのだから、他人は倣ってやるわけにはいかない。内務部はこの保証を得て、存分に「やりたい放題」にでき、京内の宮観林木を取り壊して売却し、給料に当てるお金が無くなる心配はないが、苦しむのは平民だけだ。わたしは景山の後ろを通ったが、東側一帯の赤壁の多くはすでに取り壊され、残った壁の北側の多くの民家は、後壁が取り去られたので、完全にむき出しになった。あるものは葦の莚で覆ってあるが、あるものは何もなく、ただ三間か二間の空き部屋が、残塼断瓦の中に屹立しているのが見えるだけ。梁は皆露わになり、三方の壁だけが残り、火事場の後のようでなければ、強奪の後に似ている。ただ壁にはまだ吉祥語の書かれた赤い紙が残っていて、数日前まではかつて生きた人間がその中に住んで居たことを示しているだけだ。ああ、受けた者は心傷つき、見る者は目を傷ましむ。図らざりき、赤化反対の京都でこうした現象に出会うとは。しかしながら、これは内務部の政事であり、又大総統令も許しているし、泰山は移すべきも、この案件は動かすべからざるなりである。小民の露の宿を、先朝の露はどうして辞したのだろう。旦那の吹きっさらしでの食事は、どうしてこの風が増長してよいものか？小人に非ざれば以て君子を養う無し、聖訓は昭らかに垂れてある、どうして違うてよいものか。（民国十六年三月）

※初出：1927 年 4 月 1 日『語絲』第 125 期

## 69　宣伝と広告

近ごろ南北では宣伝とかいうものが盛んである。いったい宣伝とはどんなものか、わたしは知らないが、はかるにたぶん広告の類ではなかろうか？もしそうであれば、わたしは信ずることができない。なぜならわたしは広告が最も嫌いだから、とりわけタバコと映画の広告はである。例えば誰かが、もしその人のバッジを買ったなら、いつかわたしに金持ちの何十畝かの田んぼを分けてやると言っても、わたしは信じないで、赤賊になるだろう。同時にもし誰かが、自分は仁義の師で、志は礼教の維持にある云々と言っても、わたしは同じように構わないか、あるいはフンと言っただけで済ますだろう。諺に、事実は雄弁に勝ると言うが、白紙に書かれた黒い文字は、いくら貼られても、いくら送られても、いくら売られても、結果は何の役にも立たない。もし事実に副わないならば。われわれ街にいる人間は知らないが、民百姓の記憶はすこぶる良く、何でも彼らの心に記憶されていて、どう言ったところで彼らを騙せやしない。例えば広告だが、大仙女にしろ、三砲台にしろ、どちらもわたしを誘って、一本吸ってみようかという気にさせないし、「一五一公司」の門外の「梅蘭芳のタバコをどうぞ」に至っては、――うーん、この言葉、なんといやらしい！かけらでも趣味のある人間なら、誰がこの看板を見て顔をそむけずにまだその上何か教えてもらおうなどと思うか。（民国十六年四月）

※初出：1927 年 3 月 19 日『語絲』第 123 期

## 70　素人の按語

蔡孑民〔蔡元培〕先生がヨーロッパから帰国され、すでに三日に上海に着かれた。「上海四日午前十二時國聞社電」は、蔡先生の軍閥、政客・学者、学生界、共産の諸問題についての談話を発表し、北京の『晨報』が五日の新聞に大字で掲載したほか、十三行もの記者の按語を付けており、その最後の五行に云う。「今（蔡が）入国するや、すぐに以上の重要な談話を発表したのは、まさに歴年研究に心を潜め冷眼にて観察した結果であって、大いに国人に詔示するに足り、且つ知識階級の注意するところとなる。」わたしは知識階級だという自信はないけれども、何も必ずしも注意するとは限らない。だが当該談話が既に「国人に詔示する」からには、わたしは国人の資格で以て自ずから一度黙誦する義務がある。既に誦してみれば、思うところなき能わず、すでに思うからには言うところなき能わず、かくてこの数十行の小文を書き、小報に発表してわたし個人の按語とすることになった。

まず最初に声明しなければならない、わたしは一個の素人であると。多くの物について、経済・政治・芸術および宗教など。原始的宗教思想については少し興味を感じるけれども。しかしながらわたしは決して臆病なのではないから、一個の素人として様々な問題について素人の話をする。たとえば蔡先生のあの有名な「美育を以て宗教に代える」という主張には敢えて附和しない。他のことはいずれも解らないが、ただ奇異に思うのは、後になって代れる物がなぜ最初から分かれて発達したのか、最初は違う要求によって分離発達したものが後になってどうして又代れるのか。わたしはここでこの主張に反対しようとは思わない、ただ一例を挙げ、わたしがどんなに素人が閑話をするのが好きかを示すだけだ。さて又もう一つ別の例にしよう。

蔡先生のその談話は、わたしから見れば、実にごく普通の「老生の常談」であって、必ずしも潜心とか冷眼とかの結果ではないが、『晨報』記者があのように手を打って嘆賞する、その理由はわれわれには知り難い。というのはその副題にはっきりと二行「政客学者が軍閥に依附することに反対し、学生界の現象に極めて不満」と標明するからである。この二つの意見はごく普通の老生の常談で、われわれは蔡先生に言われなくても知っている。電文が簡略で、蔡先生の考えを具体的に説明していないので、結局われわれあるいは『晨報』記者の考えと合うのかどうかは分からないけれども。要するにこれは老生の常談であるから、われわれは余計な論を挟まなくともよい。わたしが注意すべきと思うのは、副題には見えない共産主義に関する談話である。國聞社の電報の原文は次のようである。「共産については、その主義には賛成するが、ただ主にクロポトキンの互助手段を採るのであって、マルクスの階級闘争には反対する。」

わたしはここでまた声明しなければならない、（これは全く面倒である、）わたしは決して共産党ではないが、ただ共産思想者である。つまり蔡先生のいわゆる“その主義に賛成する”のである。マルクスの本の表紙が赤か緑かは見たことがないが、クロポトキンのは少し読んだことがある。ただ「アナキスト」にはなっていない。わたしは現在少し知識のある人なら（いわゆる知識階級ではない）共産主義に賛成しないものはないはずだ。ただ次のような人々を除いて。軍閥、官僚、資本家（政客・学者も）。宣教師は、中国にはいないから、これは問題にならない。だが実

はわたしの考えでは、およそ本当の宗教者なら一人として共産主義者でないものはないはずである。宗教の目的は生命の保存である。それがここに生きているもののであろうが、あるいは来るべき生命であろうが、それにはかかわりなく。浄土、天国、蓬莱、ユートピア、無何有の郷はすべてこうした共産社会であって、時間空間において遠近があるに過ぎない。共産主義者はまさに彼らとよく似た宗教者であって、ただ地上に天国を建設しようとして、彼らよりも少しせっかちなだけだ。だからわたしはキリスト教徒の会が共産に反対するのが分からない。これは矛盾していて訳が分からなくなるからである。要するに現代の空気を吸う人々の中には、武力財力によって特権を占有し、現状を維持しようとする少数を除いては、たいていみな共産主義に賛成するものである。蔡先生のこの声明はそうした人々の代言とすることができる。しかし主義は同じでも、手段となると様々な言い方がある。蔡先生の主張には自ずとそれ独特の理由があり、それには関わらなくてよいが、わたしには少し別の意見がある。言うのも恥ずかしいが、わたしは階級闘争についての正確な定義をまだ知らない。ふだんは望文生義で見過ごすのだが、『互助論』はざっと繰ったことがあり、まだその大意は覚えているようだ。もしわたしの望文生義の解説があまり間違っていないとしたら、これと互助とは何の衝突もないようだ。というのは互助は実は階級闘争の一種の方法であるからだ。クロポトキン自身も互助は天演の一因子であるが、決して唯一の因子ではないと認めている。彼は人生は決してもっぱら生存競争にのみ頼っているのではなく、互助にも頼っている、しかし互助も生存競争であり、平和な時には相互扶助、危険な時にはすなわち協同しての対敵であることを証明しようとした。互助を主張するものは、虎狼は互いに食い合わない、だから人類も互いに戦いあってはダメだと考える。動物が同類を限界とするのは、同類はたいてい利害を同じくするからである、（食物を争い配偶を争う時は例外とする、）だが人間の同類は全部が全部利害を同じくしない。だから互助の範囲も縮小し、同類同族から転じて同階級となる。これはもともととても自然な事である。蔡先生がもし異なる階級も互助ができ、かつこのような互助から共産に達することができるとお考えなら、それはあまりにも理想的すぎると思う。世の中にはあるいはトルストイや、有島武郎のように主動的に財産を放棄したいとする個人もいるかもしれないが、これは世界でも稀有な現象であって、全体がそれに倣うことを期待することはできない。日本の日向地方の新しき村はもっぱら共産的生活である。だがその平和で感化的な主張をわたしはどうしてもいささか迂遠だと思う。会員個人の自由に対する尊重という点では極めて敬服すべきであるのだけれども。わたしはどうしてだか無政府主義者のあのような楽観的な性善説をあまり信じない。階級闘争がすでに絶対確実な事実であり、決してマルクスが捏造したものでないのは、ちょうど生存競争がダーウィンの創始したものでなく、つまり生物があって以来すでに実行されているのと同じである。こちらの階級がたとい闘争しなくとも、あちらの階級がとっくに闘争しかけてくる、こうした情景は至る所に見て取ることができ、われわれが賛成するか反対するかなどの余地をゆるさない。要するに、わたしのような素人から言えば、この階級闘争というのは決まったものである。一方が耳口王*の聖人であるか、あるいは向こうが「財産奉還」（日本の皇室社会主義を主張する人の言うように）するか、あるいはこちらが身を捨てて彼らに食われたいと思わない限りは。これはむろんいずれも不可能である。少なくともわたしが

見るところでは。ならば結局階級闘争しかない。詳細な闘法についてはわたしは素人だからあまりよく知らないが、互助もその中の方法の一つである。蔡先生はいまの中国が世を挙げて尊崇する人であって、わたしは彼を批評すべきでないのだが、わたしには決して国民党と徹底的に悶着を起こす某系ではなく、蔡先生の「某籍」に属するものであるという自信があり、いくらか言ったところで「騒ぎを挑発する」嫌疑はないはずだから、大胆にもこの素人にして真面目な按語を発表する次第である。民国十五年、二月九日。

※初出：『談虎集』

---

*「耳口王」　「聖」の字を分解したアナグラムだが、何を言わんとするのか、どこに出典があるのか未詳。

## 71　臥薪嘗胆

役者の劉漢臣、高三奎が芝居を借りて赤化を宣伝した廉で、すでに一月十八日夜十一時半に天津で銃殺され地方の不安を治めた。わたしは旧劇については完全に門外漢であるから、利用できる赤化劇がいくつあるのかも知らないが、ただ当役者らは当日「臥薪嘗胆」とかいうのを演じたそうで、あるいはこの芝居がよくなかったのかもしれない。だがわたしは一月十八日の『国民晩報』に孫聯帥〔孫伝芳〕に関する事が載ったのを思い出した。それは「毎食わずかに漬物と豆もやし炒めをおかずとし、夜眠るのに夜具を延べず、往々にして着たままで稲わらの上に眠り、……すこぶる臥薪嘗胆の様子あり」と言うのだが、これ又赤化討伐の方面に属するようだが、何の障碍もあり得ない。あるいは当役者らは他の芝居によって死んだのか。わたしが腑に落ちないのは彼らがやった赤化劇は一体何だったのかということである。役者についてはもともと倡優隷卒の類である、一人や二人死んだところでごく当たり前の事であり、むろんわざわざ突き止める値打ちもありはしないのだ。（民国十六年一月）

※初出：1927 年 2 月 5 日『語絲』第 117 期

## 72　革命党の妻

当北京の日本語新聞は上海フランス租界ブルニエドモンモラン路〔現馬当路〕慈安里の住民銭剛が十五日晩に捕えられ、次の日銃殺されたことを載せた。新聞が書いた逮捕時の様子がなかなか面白い。それによれば銭氏が帰宅してちょうど扉を叩いた時、突如二人が進みより、ピストルを取り出し、騒ぐなと威嚇し、そのまま連れて行こうとした。銭の妻が戸を開いて出て見ると、二人の銃を持った私服の男が彼女の夫を脅迫しているのを見て、てっきり人さらいの土匪だと思って、すぐに追いかけ一人の手からピストルを奪った。別の一人がすぐ二発発砲して、銭の妻の右頬と腿に当たり、昏倒して、巡査に病院に担ぎ込まれたが、傷はすこぶる重いと言うことだ。その二人は淞滬戒厳司令部の密偵で、彼らの逆徒への捜索逮捕の手段は実に精巧を極めている。わたしは銭剛がどんな人か知らないが、思うにわたしの友人潘起莘君の学生銭江だとは限るまい。北京の某夕刊にはそう書いてあったけれども。わたしはまた銭君の妻がもうよくなったのか、それとも亡くなったのかは知らない。同じ日の新聞にはまた多くの「浙江紳士」が省長に具申する電文が載っている。名を連ねている第二はすなわち徐錫麒であり、第一はむろん章太炎である。わたしは思わず十九年前に安徽で殺された徐錫麟烈士を思い出した。彼は殺された、しかも心臓肝臓まで恩銘の衛兵に食われてしまった、(話ではのちに改葬した時に調べて見ると肋骨が幾つにも折れていたということだ、) 彼の妻は別に負傷しなかったが、彼の弟は浙江紳士となってしまった。わたしは思ったのだが、およそ革命党なら妻を持つのは不幸な事だ、そして兄弟があるのも別の不幸だと。(民国十六年一月)

※初出：1927 年 2 月 5 日『語絲』第 117 期

## 73　孫中山先生

孫中山先生がついに亡くなられた。社会的には通例なら棺を蓋うて論定まるなのだろうが、きっと毀誉褒貶が喧しく、すぐには片が付きかねるだろう。われわれは孫中山先生に対して恩も恨みもないし、味方の党の者でもないし又相手方の派の者でもないから、何か言うとしても比較的公平で確かだろう。だから質朴なだけで華もないこの記念の文章を何行か書くことにする。

わたしは孫中山先生を神だとは思わない。だから彼にも欠点があることを認める。――ギリシアの神ですら欠点はいっぱいあるのだ。そしてまさにそのためにこそ親近感があるのだ。われわれは無理して彼のために弁解しようとすることはない。どうせ弁解は無用だし、弁解しなくとも差し支えない。というのはわれわれは全体として彼の大きさを見出ださなければならず、枝葉末節を問題にしてもしようがないからだ。武者小路実篤は詩集『雑三百六十五』の中でこんな小詩を書いている。

一本の大木は、
その全体を見なければならない、
虫食いの葉を探すようなことをしてはいけない！
なあ、子どもよ！

われわれもそのように見るべきなのだ。孫中山先生を見てまず感服するのはその四十年にわたる革命事業である。細かく彼の伝記を繙いて、博引旁証して賞賛を加えることはいらない。ただこの中華民国という四文字こそ最大の証拠と記念なのだ。民国が倒れない限り、彼の栄誉も続くのだ。およそ民国の人民なら、誰一人彼を忘れるはずはないのだ。正確に言うと、中華民国の下二字は今まだ実現しておらず、できたのは上二字に過ぎない。――辛亥の時のいわゆる「旧物を光復する」である。段芝泉先生が復辟を打倒し、それに又溥儀を大連に放逐したけれども、中国にとってどんな災難が加わるか知れたものではない。わたしは一度も孫中山先生に会ったことはないが、終始民族主義者である。したがって彼がたとい三民五権など他の政治上で主張もなく成績もあげなかったとしても、この中国人の頭から豚のしっぽを引き抜いたという一件だけでも、われわれの感激と尊重を呼び起こすには十分すぎるように思う。わたしは先に恩も恨みもないと言ったが、それにも語弊がある。われわれは誰一人として光復の恩を受けないものはないからである。事業というものはもちろん多くの人が実際にやってこそ成功するのであるが、多くの人の中で誰か一人が呼びかけ主になってやる者がなければ事も成就しない。孫中山先生はつまり中国民族解放運動の中でのそういう人なのである。

孫中山先生は年も若くはないし、重要な事業の一部もすでに完成したから、いま死んでも、ちょうど他人が言うように「理に適い心安らか」ということになるのだろう。まだ完成を見ない仕事はむろん後の者が担い引き継ぎ進めねばならない。もともとこのご老体ばかりに頼って、百二十歳まで長生きしてもらって後輩たちのために幸福な生活を謀ってもらうことはできない。しかしよく考えて見ると、孫中山先生のために悲しまざるを得ないのは、もう少し本当のことを言えば、中国は民族革命さえまだ実際に完成していないのである。溥儀が逃げて遺老たちと謀反を企

んでいるのは言うまでもないが、多数の国民ですら臣下として憧れ、私かに松花江の妖魚が「小皇帝」として君臨するよう願ったではないか！孫中山先生は歓迎の声の中に迎えられ、哀悼の声の中に中国の首都北京で亡くなられた。全国の尊崇を一身に受けたと言ってよい。だが「平心にその実を考えて」みると、商会は歓迎に反対して皇帝の尊号の復活を建議したし、都会の人間はまったく満清の時と同じように「孫文」を謀反者の一味とみなし、知識階級ですら言論界において敵視の意見を吐露し、見出しや語気の間に早く死ねばよいという底意を滲ませたのである。ああ、これは何という世界だろう！昔イエスは精神の革命をしようとして、ついにユダヤ人がローマの総督を脅迫して十字架に磔にされた。孫中山先生が革命によって群衆の恨みを受けられたのは、奴隷たることに慣れた中国民族の中ではあるいは当然のことかも知れない。孫中山先生は革命のために満清あるいは洪憲政府の手に死なず、安然と北京の一室に寿を終えられたのは、先生を愛惜する者にとっては大幸でないわけではないが、別の面から見るとまた先生のために無限の悲哀を感じないわけにはいかない。

中国人が最も歓迎するものは、おそらく売国奴以上のものはないであろう。彼らを紹介して異民族の奴隷にしてくれるからである。その次が自分が彼らを踏みつけ彼らを奴使できる暴君になることである。正史や野史を開いてみれば、実に久しい年代そうであって、奴隷中毒がにわかには断ち切り難いのも、あながち不思議ではない。――だが今後はもうそれが猛威を振るうに任せてはならない。いまこのままでゆけば、民国が実現しないどころか、中華でさえもすこぶる危険で、『孫文小史』は絶対に再版の機会がないとは言えない。わたしはとうてい預言者のパウロではないから、もともとこんな「パンの歌」*を書いて世の中に警告することもない。だが「心に危うしと為す所敢えて告げざるをえず」で、みんなに注意を促したいのだ。孫中山先生を崇拝するものはむろん三民五権に力を入れて進めるだろうが、わたしの意見は今はまだ民族主義に特に重きを置き、国民の奴隷の習気と惰性を払拭しなければ、万事は進歩しない。でなければ相も変わらず窓の女壁の花で、身を売って日を凌ぎ、孫中山先生が満人の手から救い出したのに、まもなく何処かの国の足下に這いつくばることになるだろう。「不幸にして我が言中たらん、聴かざれば国必ず亡びん！」〔出典未詳〕　民国十四年三月十三日。

※初出：1925 年 3 月 23 日『語絲』第 19 期

---

* 「パンの歌」　『新約』コリント書第 11 章 23～30 節にパンはキリストの肉であり、葡萄酒はキリストの血であることを言う。それと関係があるのだろうが、詳しいことは不明。

## 74　偶感

一

李守常〔李大釗〕君が四月二十八日死刑を執行された。李君は身を以て主義に殉じたのだから、当然何の悔恨もないだろうが、彼と少し親戚の誼、郷土の誼、世間の誼がある人は一種の哀痛あるを免れない。特に彼の遺族の困窮については、新聞紙上に報じられるように、識らない人であっても見ればやはり悲しい思いをするだろう。――不思議なのは、李君は共何とかの首領だそうだが、その身後は此の若く蕭条としていて、畢庶澄や馮文龍*が数十百万という金を擁するのとは月とスッポンの違いである。これは両間の奇事であり謎でなくて何であろうか？

同じく死刑に処せられた二十人のうちには張挹蘭君一人もわたしの知っている人である。彼女が捕らまる半月前、わたしに一度会いに来たことがあり、また手紙を一通寄こして、『婦女の友』に文章を書き、女師大の記念会で演説してくれと頼まれたこともあった。今思い出すとまことに済まないことで、少し忙しかったせいでこの二件ともやらず仕舞いであった。彼女が国民党の職員かそれとも共産党員なのか、彼女が死に値する罪を犯したのかどうか、これらの問題は今は談じなくてよいが、これだけはほんとうである、彼女がすでに絞首刑にされ、その老母を捨て去ったこと。張君にはまだ二人の兄弟があり、老母を奉養することができる。これはさして心配をしなくともよさそうだ。そして、――老母はすでにお年であり、(わたしが情理に背いて本当のことを言うのを許されたい)、世にある日も限られている。この悲しみを引き受けるのも長くはあるまい。まして洪・楊〔太平天国〕以来老人が経て来た事は多く、中国にはどんな事でも起こり得ることはご存知で、あるいは彼女は鍛えられた堅忍不抜の精神でこの苦難を受け止められるだろうか。

附記　わたしは二つ小説を思い出した。一つはアンドレーエフの『七人の死刑囚の物語』、一つはソログープの『老屋』である。しかし思い出しはしたけれども急いで手に取って読んだわけではない。その勇気がなかったし、一つは人に借りられていたから。民国十六年五月三日。

---

*畢庶澄や馮文龍　畢庶澄は山東出身の軍人、奉天系軍閥の張宗昌の部下となったが、上海に出て蒋介石と連絡がついたところを、張宗昌の密偵に察知され、山東に帰ったところを、護衛の馮文龍と共に射殺された。1927 年 4 月 4 日のことである。

二

新聞の報道では王静庵君が昆明湖に身を投げて死んだということである。一人の人間が生きたいと思おうが思うまいがそれは全くその人の自由であって、われわれは何の褒貶も加えることはできない。われわれは王君の死が中国の幼稚な学術界にあっては極めて惜しむべき事だと思うけれども。

王君の自殺の原因は新聞でも明瞭ではない。ただ何か時局に対する悲観だと言うに過ぎない。ある人は国民党の軍隊を恐れたためだと言い、また友人たちが辮髪を切るよう勧めたからだとも言う。これらはいずれも確かではなかろう。国民党の軍隊がどうして彼を殺すのか、辮髪を切ることなどまして生死を以て争うことはない。思うに、王君は頭脳明晰な学者でありながら遺老となって経学をやった。その結果は思想の衝突と精神の苦悶である。これがあるいは自殺の――少なくとも悲観の主な原因ではなかろうか。王君は国学者であるが、彼はまた西洋の学問もやったことがあり、文学と哲学の意味を知っており、決してもっぱら古人の徒弟をやる人ではない。だから二十年前われわれは彼に対して大変な尊敬と希望を持ったのだ。それがどうしたことか、王君はまったく何の関係もない「徴君」とかの資格で忽然として遺老になり、その後はさらに「廃帝」の師傅の職に就き、一方学問上では「樸学家」〔経学者〕の殻の中に潜り込み、まったく哲学と文学を放棄して経史をやることになった。これは『静庵文集』と『観堂集林』にその変化を見出せる。（たとえば『文集』には『紅楼夢』を論じた文章があって、彼の軟文学に対する理解が見られる。研究思索の面では『集林』の論文の方がより成熟しているかも知れないが。）王君のような理知の発達した人に、自分の生活の矛盾と仕事の偏りが見えないはずはない。あるいはまったくこれらすべてが彼の趣味の傾向と相反して一種の苦悶を感じたのかも知れない、――そうだ、少しでも美的感覚を持っている人なら決して自分からこんな辮髪を一本残しておきたいと思うはずがない。いたずらに情勢に引っ張られて抜け出せなくなり、ついに進退維(ここ)に谷(きわ)まって、破滅の道へと歩み出さざるを得なくなった。一般のバカで卑劣な遺老は、辛亥の時には「盗　湖北に起こる」とか、「国門を見るに忍びず」等々と大言しながら、相変わらず北京天津に出入りし、さらに故宮に行っては鹿「司令」に叩頭謁見して宦官のためにとりなしをしてやっている*。この連中はまったく良心というものがないのだ。それでこそ恬として恥じず鼠や蝗のような生活ができるのであり、まともな人間の絶対に真似できるところではない。しかるに王君は迂闊にも彼らに従い、ついに身を以て殉ずることになったのは、やはり悲しいことである。諺語にいう、その始めるや簡なり、その終わらんとするや鉅なり、学ぶ者はそれ此れを鑑とせよと。学術芸文を治める者はひとえに自己の本性によって、堅持勇往すべきであって、政治的意見に関わってその方向を改め、結局は二重の生活をすることになり、身体と心が分裂し、破滅に陥ることがあってはならない。これはとても大事なことである。

この文章を書き終えて、本日の『順天時報』を見ると、王君を保皇党と言い、「今夏清帝の安危を思い、煩悶に絶えず、遂に自ら昆明湖に投ず、誠に屈平と輝映を競う」とある。これを読んで初めはいやらしいと思ったが、継いで「髪が逆立ってきた」。ひどいものだ、日本人のでたらめさは類を絶している。日本の保皇党は万世一系を保持せんとするために、中国の復辟の宣伝と、叛徒遺老の顕彰にこれ務め、いまや王君に辮髪があるがために同志に引き入れ、その忠勤ぶりを褒めるのも、まさにそういう魂胆からに他ならない。しかしながら、わたしは王君と二、三回会ったに過ぎず、わたしの言うこともわたしの想像の中の王君に過ぎない。事実に合うかどうかは、敢えて信ぜず、深く王君を知るものの判断を待たねばならない。もしも王君にして誠に日本人の言う如くであるならば、わたしは自ら誤りを認め、この文はすぐさまゴミとして焼き捨ててよい。

民国十六年六月四日、旧の端午の日、北京にて。

---

*バカで卑劣な遺老　すべて王国維の義父にあたる羅振玉の所業。

三

自分の知っている青年や友人の横死、しかも大抵はいわゆる最も公明正大な清党運動の中での死を、耳にすることは、たいそう痛ましい事である。青年の男女が革命のために死ぬのはもとはと言えばごく当たり前のことであるが、なかに知った人がいれば、やはり自ずと悲しみを覚える。だがこれは正に戦場で死ぬようなもので、ほんとうは怨む筋合いのものではない。というのは敵を殺すことができなければ敵に殺されるのは世間の通則だからである。だが国民党から追い出されて銃殺や処刑されるのはまた別の事である。燕京大学出身の顧・陳の二君は、わたしの知っている中で文章や思想の面でとてもよくできた学生であった。福建・浙江地方で国民党のためにずいぶん努力したのに、『燕大週刊』の報告によると、すでに左派のレッテルを貼られて殺されたと言う。北京大学の劉君は北京で一度捕まったが、幸い放免されて南方に逃げた。ところが最近新聞で、上海で「共産党」捕まるという報道を見た。英語から訳された名前を見たところ、おそらく彼女ではなかろうか。その吉凶はどうかわからない。ふつう南京と北京では少し違うと思われるが、青年学生は駆け出して世故も知らずに行動するが、結局は同じように大難に遭い、あるものは北方から逃げ出して網に罹るのは、痛ましさを感じざるを得ない。南方の殺人者はどういう心理状態なのかについて、われわれは知ることができない。ただ驚きを感ずるばかりだ。もしもこれが軍閥の常態なら驚きも消えてしまおう。みんなは沈黙に帰るしかない。こうして沈黙がついに中国の南北を統一するのだ。七月五日、北京にて。

四

昨夜友人が話に来て、一月前の『大公報』に載った呉稚暉が汪精衛に宛てた手紙のことを言った。江蘇浙江で粛清された人をいたぶって、まったく身を殺して仁を成す気概がない、どれも叩頭をして命乞いをし、ぶるぶる震えて可哀想であったとか云うものである。本来生を好み死を憎むのは人間の常情であり、たといほんとうにそのようであっても、哀れみこそすれ喜ぶべきではないのであって、決して嘲弄の種としてはいけない。まして事実は決してみながみなそうではない。友人の知るところでは、そのまた友人のところで馬という人の寄越した遺書を見たが、文字は皆とても落ち着いたものであったと言い、また上海からの知らせでは、北京大学の女子学生劉尊一は殺されたが、彼女もごく悠然としていたという。このほかわれわれの知らないものはまだ多い。呉君は南方で殺人を扇動するばかりか、その毒舌を振るって死者を侮辱する。こうした残忍な行為は髑髏に漆を塗って飲器とすることとほとんど何の違いもない。文化のある民族は、仇

討ちでも死ねばそれまでで、死体を陵辱し、死後に悪名を加えるごときは、極めて堕落した野蛮な人間でなければ望まないところだ。呉君は根っからの中国人である。われわれは彼の上に永楽・乾隆の亡霊を見て取ることができる。ここに遺伝の恐ろしさが十二分に現れている。そして中国と文明との距離もまだ何万里あるか分からないことも。

わたしは友人の話を聞いて感慨を禁じ得なかった。ちょうど一カ月前、敬仔君が河北より手紙を一通寄越し、わたしと呉公の問題を討論した。わたしは一枚返事を書き、その時は発表するつもりだったのだが、あとで連中はすでに総司令について下野したと聞いたので、中止した。いままた引っ張り出して、ここに前半分を引き写すことにする。

「我々はふだん世故に通じず、軽々しく衆生を信じ、その真相を見るに及んで、幻滅を感じ、憤怒失望し、あげくは呵責するが、実はまた大いに可笑しいのであって、その見識の幼稚さを自ら表明しているに他ならない。俗に言う、“見るところ少なければ、怪しむところ多し、ラクダを見て馬の背腫れたりと言う”と、痛ましいかなこの言や。それがし前に『甲寅』『現代』*を読みて、これらの紳士はかくあるべからずと思い、そこで“気分を害して”、批判を加えしが、のちになりて稍悟りて、これこそまさに本相にして、我輩の訝りは世の中をよく見ざるが為なりと知りたり。いま呉老先生またかくの如し、千年の老尾すでに顕るれば、なんぞ更に吾人の指弾を要せん。直ちに趨りてこれを過ぐれば可なり。……」

わたしは友人の憤激の言葉に同感する（ただし彼は決してC何とかではない。彼のために一言弁明しておく）が、わたしは相変わらず自分の手紙の中の冷静な意見を信用している。だが中国のこの伝統的な酷薄卑劣な根性はあってはならないと思う。特にこの革命の時代にあっては。クロポトキン（？）の言うロシアの女革命家〔ソフィア・ペトロフスカヤ〕の態度にわたしは最も敬服する。彼女と何人かの同志は爆弾を抱いて皇帝の暗殺に向ったが、後で別人の爆弾が先に投げられ、アレクサンダーは地に倒れた。彼女はところが爆弾を抱えたままこの瀕死の負傷者を助けに行った。この時彼女の目には、彼はすでに敵ではなく苦しむ同類であったからだ。（彼女自身は当然逮捕され、同志とともに処刑された。）しかし、これは中国人に理解できるであろうか。（民国十六年九月）

---

*『甲寅』『現代』　『甲寅』は章士釗の主編する雑誌、当時は『甲寅週刊』。『現代』は陳源らの『現代評論』。

※初出：1927年5月14日『語絲』第131期

## 75　人力車と斬罪

胡適之先生が上海で演説され、中国がまだ人力車を容認しているのは文明国とは言えない所以だと言われた。胡先生の演説は『順天時報』の日本人でさえ敬服したから、それが間違っていないのは先ず疑いを容れないだろう。だがわたしは疑う。人力車はほんとうにそんなに野蛮で、文明的でないのか？工業による血の搾取は肉眼では見えないから、措くとしよう。売淫は、やはり人力車を曳くことより文明的でないようなのだが、ところがみんなは許容している。人力車を許容しない文明国でさえこの種の事業は特別に許容しているが、これは一体どうしたことだ？北京の新聞は婦人が貧窮のために洋車を曳く記事をよく載せ、慨嘆しているが、婦女が売淫することについては不思議とも思わず、我が国のために礼教を維持してくれる『順天時報』の第五面には「傾国傾城の美女、多情多義の女“紅喜”」などといった文字が毎日のように載っているから、売淫は聖道と合致――いや、少なくとも衝突しないことが分かる。この点は誠にまったく訳が分からないのだが、どうか胡先生に解決を賜りたいものである。

江蘇・浙江の党内粛清の内容をわれわれは知ることができない。伝聞する誣告や拷問は「共産党」のデマかもしれないが、しかし人殺しの多さは要するに確かだろう。わたしの貧弱な記憶の及ぶところでも、『青天白日報』の記者二名が逃亡兵といっしょに斬首され、党内粛清委員が寧波に行って共産党員二人を斬首、上海では五人を銃殺にして名前を布告せず、また十人を銃殺してうち六人が共産党員、広州では共産党員百十二人を逮捕、そのうち十三名は即時銃殺、……粛清の方法も少なくない、銃殺のほかにまだ斬首まである。胡先生は文明的と思われるかどうか？斬首という処刑法は大清朝が用いたもので、確か清末の偽維新の時になってすでに廃止になっていたように思う、――これはちょっとはっきりしないが、しかし孫中山先生が造られた民国には、こんな野蛮な処刑法は絶対にない。これはわたしが保証できる。思うのだが、人力車はもとより廃止すべきだが、首も斬らないのがよい。たとい斬首が文明的ではない部類に入らないとしても、それで文明的であることを表示できるわけではないだろう。むかしトルストイはパリで犯人の首が落ちる瞬間を見て、一切の殺人の非を痛感した。胡先生は当代の明哲であられるから、やはり同感されるであろう。ただ残念ながら殺人はいつもあるけれども、結局人力車の多さには敵わず、いつ何時至る所にある。それで胡先生が出かけられてもただ文明的でない人力車は目に入るが、あまり文明的でないような斬首は目に入らないのだろう。これは吾輩が甚だ遺憾に思わざるを得ない点である。

特に奇妙なのは、去年一月呉稚暉先生は孫伝芳が赤化の罪名で江陰の教員周剛直を斬首したために、大いにその公憤をぶちまけられ、「恐らくは赤ならざらん、血に染めてこれを成すか」という文を書かれ、北京の新聞にも載ったが、今回は沈黙されたことだ。この老先生は必ずしもこうした殺し方にまったくは賛成ではなかろう。たぶん労使調停のために忙しすぎて、もうこんな暇つぶしに構っておれないのだろうか、とも思う。――それにしても奇妙である。（民国十六年七月）

※初出：1927 年 7 月 16 日『語絲』第 140 期

## 76　呪詛

『古城週刊』第二号の短評欄に、この前天津の党内疑獄の犯人が何人か処刑されようとしたところ、万に上る人間が処刑場で見物しようと待ち構えていたが、その主な理由はその中に女性の犯人が二人いたことであると述べている。短評には記者が路上で聞いた話も載せている。

甲：「あんたは今度も上権仙〔天津の処刑場の地名〕に赤だすきを見にゆくんじゃないのかね？」

乙：「そうだよ。おまけに二人もおばさんがいるってことだし、もろ肌ぬぎになってバッサリやられるなんて、ほんとおもしろいよ。」

これは実に中国民族の野蛮で堕落した根性をそっくりそのまま表している。わたしは、中国人の天性はもっとも淫殺を好み、もっとも残酷でしかも卑怯だと言ってきた。――外国のゴロツキにそう言って冷笑嘲罵されたくはないが、自分自身はそれを承認したい。帝国主義者に支那はこれだから俺たちが分け合って食うべきなのだとは言われたくはないが、中国民族には滅んでも余罪があることを認める。これは実に天性の奴隷性を持った族類であり、残酷で卑怯で、彼らが必要とするのは圧制と被圧制であり、人を殺すことができる強者、そして人を殺して見物させてくれる強者を崇めて主人とすることしか知らない。わたしは、それで孫中山は実になんとも迂遠であったと思う。口で三民主義あるいはプロレタリアート専政を唱え、民衆は我々の側につく各派の友人だと考えたのは、誠にその愚や及ぶべからずである。――連中が君たちに要求するのは、ただ一つ、肌脱ぎになってバッサリやられるのを見物するのはとても面白い、ということだけであるのだ！（民国十六年九月）

※初出：1927 年 10 月 8 日『語絲』第 152 期

## 77　どう言えばよいか

十九日の『世界日報』に六月の長沙通信が載っていて、湖南省当局が共産党員を検査する詳しい情況が記されている。その一節に次のようにある。

「鄔陳氏という者が、その息子がシーワイ（青年共産党）であった関係から、逮捕入獄させられたので、洋々数千言にも上る「安宅を曠しうして居らず正路を捨てて由らざるの論」を書き、真っ先に提出し、マルクスを病理家〔病人〕であって、生理家〔健康な人間〕ではないと批判したほかに、文末にその略歴まで添えた。……各当局者はよってその文を褒め、その情を憐れみ、寛大な処置をして釈放した。」

なんと中国ではまだ族誅の法が生きていたのだ。初級中学の一年生が CY であった関係から、その母まで逮捕しようとした。湖南は中国のもっとも急進的な省であるのに、どうして古人が言う「人を罪するに妻子に及ばず」という老生の常談さえ実行できないのか？わたしはこのニュースを読んで冗談さえ出なかった。ただ極めてまどろっこしい極めてくだらぬ上の二、三行しか書けない。――わたしは承認する。これはわたしが語ったもっとも面白くない話だと。ほかにも南から来た友人が話してくれた東南の党内粛清の時の虐殺行為があり、それを聞いてくだらぬ話をする勇気もなくなったけれども。これらの話はわたしの心にのしかかり、ほんとうにどう言っていいのか分からない。ただ小さい頃に李小池の『思痛記』を読んだ時とちょっと似た感じがする。

たまたま陳錦[1]の『補勤詩存』を目にした。巻五の「東南壬申」新楽府の十五「青狸奴」に云う。「誰か知る造物の工みに報を施すを、今にまさか官兵の到れば、玉石を分かつ無く崑炎に附し、人に逢えば一様に顚倒に供さんと説わんや。天の佳麗を生ずるは独り何の辜かあらんに、暮暮朝朝毒痛を忍ぶ、婦女の明らかに党悪に非ざるを知るに、天の妻孥を罰戮するに堪うべけんや！」陳君は先祖代々先生の家柄で、もともとお堅い老儒であり、孝廉でもって郡県の長官となったが、賊軍に従った婦女に同情して、この「節に冤死する也」の楽府を作った。その最後に云う、「天心乱に厭いて嬌小を憐れみ、落花地に満ちて罡風掃き、二千余人同に死亡す、（原注に、金陵の賊敗れ、同時に自尽す婦女二千余人、と）国殤算無く哀鴻少なし。」詩の出来はよくないけれども、事の是非を論じて順逆を論じないその仁恕の精神ははなはだ佩服すべきものである。わたしは、中国人には特に乱党を殺す嗜好があると思う。満州清朝の革命党殺しであれ、洪憲の民党殺しであれ、現在の共産党殺しであれ、是非曲直にかかわりなく、要するに皆殺せば非常に元気が出るのである。まるで中国人は殺人という事を害を除くための消極的な手段とするのではなく（もしもそれが有効ならということだが）、殺人を目的にし、その機会を借りて思う存分その残酷淫乱な本性を満足させているかのようだ。他の国民についてはわたしも彼らは必ずこうではないと保証できないが、これは中国では根の深い遺伝病であり、上は皇帝将軍から、下は学者ゴロツキに至るまで、深く重く伝染していないものはなく、将来中国滅亡の根はまさに此処にあるのであって、決して他の帝国主義などのせいではないと、わたしは確信する。最も奇怪なのは知識階級の呉稚暉が突如その殺人狂ぶりを露わにしたことであり、そしてまた知識階級の蔡〔元培〕・胡〔適〕諸君が身は上海にありながら、見て見ぬ振りをすることである。こうした現象は、中国人が特に人

殺しを好むという説以外に、説明のしようがない。しかし、人の好むところを憎むのは、人の性に逆らうことであって、むろんとても危険なことであるから、ある人々の沈黙についてはよく理解できる。しかも、われわれにしたところで、もともと何ぞ必ずしもしかせんやである。以前非宗教大同盟が一世を風靡した時、わたしはもともと何の教徒でもなかったが、ただああいうやり方はよくないと思ったものだから、少々余計なことを言った。その結果みんなの怒りに触れて、こてんぱんにやられた挙句、共産派の首領から資本主義の走狗だとまで言われた！今度の無駄話も、危うく前回の轍を踏みそうになった。『新鋒』では居庸関外の忠実な同志からすでにその通信欄でこれは赤化だと言われており、びっくりした山叔老人〔周作人のペンネイム〕は慌てて火山から下りる始末である。そうだ、われわれもお手本としてよく学び、ほんとに瓶のようにしっかり口を閉めるとよいのだ。火山の上は危険である。ならば火山の麓に降りよう、噴火すれば同じように危険だが、要するに火山の上に立っているより少しは明哲保身だろう。中国には七十二かそれとも八十一かの旧火山があるそうだ。どこへ行ってもその辺りからは離れられない。だが山のてっぺんに居るよりはよしとせねばならんだろう。どう言えばいいのか。言わないのが一番、これが百点の答案だ。だがやれるかどうか、これはわたし自身でも決められない。東安市場に行って学者たちが信用している問心処[ii]で尋ねてみなければならない。おっと、尻尾がこんなに長くなった、「止まれ！」だ。民国十六年九月二十日、京師にて。

※初出：1927 年 10 月 1 日『語絲』第 151 期

---

[i] 陳錦　字は晝卿、号は補勤。山陰の人。道光己酉（1849）の挙人。知県を歴任、山東候補道となる。詩集に『補勤詩存』がある。

[ii] 「問心処」　本書「問星処の予言」を参照。「心」、「星」は類似音。

『談虎集』上巻終

# 『談虎集』下巻

## 78　双十節の感想

本年の双十節にはある友人といっしょに中央公園に光社[i]の展覧会を見に行った。途中いくつもの事に出会って、少しばかり思うところがあったので、いま次に並べてみる、読者の中にわたしと同感の人がおられるかどうかは知らないが。

今年の双十節は北京ではことのほか鄭重であった。どういうわけだか知らないが、八日から旗を掲げ、ずっと三日もかけていた。相変わらず汚いボロボロの五色旗だったけれども、鄭重を示すには違いなく、いつもの国慶節よりはずっとにぎやかであった。これにはすこぶる喜んだ。わたしが初めて北京に来た年は、ちょうど張辮髪〔張勲〕元帥に出会って、この目で銃弾が頭の上を飛ぶのを見た。何ミリメーター逸れていたのか知らないが。今年は、みんなが国旗に対してこんなにも尊重することを知るようになった。たとい市民たちに詩人の情熱がなく、それを恋人とかお母さんと呼ぶことはなくとも、要するに三日も掲げるようになったのだ。どんな軍閥であれ、口々に我が中華民国と呼ぶようになったのだ。こうしてみると、中華民国は――少なくとも中華民国という名前は保存でき、わたしが最も恐れた復辟という事はもう発生することはなくなった。これがわたしの喜んだ理由である。

中央公園の表門を入って、びっくりした。（友達もびっくりしたと言った。もっとも彼が驚いた理由はわたしのとはちょっと違うけれども。）出入り口の真ん中にいくつかテーブルを並べ、上には印刷物が積んであり、三人の女史（確かそのうちの一人は断髪であった、）と二人の先生が、忙しそうにいろんな印刷物をかき集めては、そばで手を広げて待っている人々に渡していた。人類というものは模倣性に富んでいて、かつほんとうを言うと、欲張りの性質を持たないものはない。だからわたしも近寄って手を伸ばし、友達もむろん手を出した。しばらく待って、それぞれが一握り握って、欣欣然として鉄柵の門を入った。右側に警官が一人立っていて、「しっかり仕舞って、地面に散らかしちゃいかん！」と注意した。わたしは一声「へい！」と答えたものの、彼が注意した意味が敬惜字紙にあるのか、それとも何なのか分からなかった。そういう物を手に入れたものだから、われわれは光社を見に行かないで、ひとまず露天の茶店に腰を下ろして、龍井を飲みながら、それらの紙片をよくよく研究して、それが三四方面軍団の宣伝部の出品だと知れた。種類がとても多く、わたしは幸運にも十種手に入れ、友達は八種しかなかった。わたしの十種は三類に分けられる。双十節の類が四、閻錫山の類が五、それに農民に告ぐの類が一である。宣伝文については今はしばらく控えて公表せず、単にわたしがびっくりした理由がなんであったかを述べよう。それは他でもない、その何人かの青年はどうも皆自分のよく識った人のように思ったのであった。ちょうどわたしの友人が感じたのと同じように、まるでその二人の女史はひょっとしてわれわれの学生であるかのように思われたのであった。これは当然ほんとうだとは限らない。要するにずいぶん長らく冷や飯を食ってきたので、少し頭がぼんやりして、このような錯覚に陥

ったのだろうか。――そうだ、あとでテーブルの側に坐って通り過ぎる青年を一人一人見ていると又表門にいた何人かのように思えたりし、そこで自分の老眼の見誤りだと気付いたのであった。友達は、最初に見たときはある青年や学生たちが太和殿でビラまきをしたことが頭に浮かんで、それでびっくりしたと言った。だがわたしはその事は考えなかった。むろん太和殿に行ったことがなかったためだが、半ばはわたしのほうが世故に長けており、これははっきり違う事だと知って、連想さえしなかったためである。実を言うと、これはわたしが友達よりも少しは賢い点なのだ。

最後はやっぱり光社の写真展覧会を見に行った。そこで何人もの芸術家と会釈し、ちょうど Dr.Shen の作品を見た時だった。何気なく振り返ると、思いがけずふと「ガラスを隔てて」それが見えたのだ！（厳侯官〔復〕の『英文漢詁』によれば、「凡最の名」Collective Noun で「魍魎」の属と為す、ただ単数でのみ用いる。[ii]）理事会の裏窓から見ると、端門の西側、石畳の道の側の何間間口かの建物の前で、一群の人がちょうど晩餐を取っている。たいていが長衫を着て、あるものはソフトを、あるものは西瓜帽をかぶり、身分もまちまちであり、見たところ大抵が店の手代のようだが、こんなところで野餐とは、やっぱり奇妙だ！まさか国慶節だというので「ピクニック」でもあるまい。――いいや違う。当地の友達が教えてくれたのだが、これがつまり政府の公僕、国民の監督で、上海灘のいわゆる偵探であり、中世英語では Spie と称するのがそうである。おう、おう、わたしは今日はほんとに運がよい。いろいろ世間も見たし、いいことにも出会った。ところで光社の展覧物はこの中に入ってない！もともとこういうことだったのだ、今度馬君の部屋で本屋の番頭に会ったら、神経過敏になるだろう。言動には特に慎重にしなければならないかもしれない。本屋の番頭にはちょっと失礼になるかもしれないが、実際二粒のソラマメのように見分けがつけにくいから、明哲保身のためにはそうせざるを得ないと思う。街を歩くとなると目に入るのは皆こんな連中で、とりわけ敢えて国事を妄談せず等々が、一番だ。

日が経つと感想もだんだん薄らいで行く。特別なのは不愉快な印象で、いつまでたっても薄らいでなくなるということがないけれども。しかしいい方のは比較的長く残る。張若元帥〔張学良〕の部下の女宣伝員は断髪であり、宣伝文は口語であり、なかなか進取の気象に富んでいるように思われる。北方の断髪禁止、口語禁止の政令は、おそらくいわゆる旧派の行為でしかなく、とても成功するとは思われない。そこまで考えるとなんだかまた楽観できそうな気もして来たではないか。

民国十六年十月十二日夜。

家に帰ってから、宣伝文一揃いを三日三晩かけて研究した。宣伝部の諸君が、わたしが彼らの飯茶碗を奪おうとしているのではないかと疑うのを恐れずに言えば、実際それほど出色でもないし、それほど振るわない。この点については、かの日本人の北京漢語新聞――Notorious な『順天時報』を推さざるを得ない。『順天時報』が日本帝国主義の機関紙で、もっぱら本国の軍閥政府の口舌であることは誰でも知っている。だが日支共存共栄のためならば、喜んで他国の反動勢力のために尽力し、名誉な（？）宣伝員になる。さすが教育があり訓練を受けているだけあって、これら忠義の「外臣」の仕事は時に内臣よりもつぼに嵌っていて

効果がある。ここ何日かの新聞を見ても、「某方のニュース」を相当馬力を入れて載せている。浦口の各所はそれによればすでに皆勝利し、そのほかにもどこそこも「まもなく」占領されるだろうと言う。これらは皆官報には見えないもので、忠勇な『順天時報』だけがひとりこのように命を捧げて尽力できるのは、誠に慶賀の至りではないか。その社長及び主筆は実際それぞれ勲五等を贈らるべきで、洪憲朝の某博士の例に倣って、外臣の列に加え、「入籍教授」と相対すれば、まったく聖代の盛事である。ただ残念ながらお歴々が見当たらず、勲功は高いのに褒賞が薄い恨みは免れない。――そこでまた宣伝部の募集条項のことを考えた。月給が二十から七十元というのは、いかにも少なすぎる。まさか宣伝の効果がそれほど振るわず、当の『順天時報』と比すべくもないからではなかろうな。

十四日附記。

※初出：『談虎集』

---

[i] 光社　写真マニアの劉半農らが組織した北京の写真愛好家のグループ。

[ii] 「凡最の名」とは総体としての名、集合名詞。「魍魎の属」とは周作人がふざけたもの。

## 79　『酒後主語』はしがき

現時の中国人の一部はすでに発狂しており、その他のものはすべて痴呆症を患っている。最近の何のためだかわからない執拗凶悪な人殺しを見るだけで、確かに少し異常である。しかるに身をもってその衝に当たる民衆の方はまるで麻痺しているか、あるいはそれでも快適に感じているようで、相当マゾヒズム（Masochism）の気味がある。簡単に一言で言えば、みんなはすべて変態心理の友人なのだ。わたしも恐らくは痴呆症の中の一人なのだろうが、ただ比較的軽く、時にはまだ少しは気持ち悪く思う。遺伝の霊妙な働きのおかげで、これは自ずとごくごく微かなものだ。しかし、ああ、それこそ憂患の基であることを誰が知ろう。このご時世、風狂と痴呆の同胞の中で、どこに人が気持ち悪さを表明する余地があろう。憤懣があるとしても、腹に収めておくしかない。それが出てきそうな時は、唯一の方法は上等の老酒で以って流し込むしかない。子どもの時に老祖母に有無を言わさず仙薬を飲まされた時と同じように。このご時世人が酒を飲みたがるのをほんとうに咎めることはできない。だがお定まりの通り、酒を飲めば酔うし、酔えば話をしたがる、これは如何しようもない事である。ただタブーを冒さなければ、ご禁令に触れる言葉がなければ、たぶん言うに任せたって差し支えはないだろう。要するに素面の時に言うことよりもいくらか筋が通らないだろうが。わたしは『語絲』のために文章を書こうとしたが、結局書けず、こうした酒後のとりとめもない妄想を書き留めて、当面を糊塗しよう。前朝に名を『茶餘客話』*という本があった。今それを引き合いに『酒後主語』としよう。　民国十五年七月二十六日燈下に記す。

※初出：1926 年 8 月 9 日『語絲』第 91 期

---

*『茶餘客話』　二十二巻補遺一巻　阮葵生撰　一九五九年中華書局明清筆記叢刊本がある。

## 80 「土のままごと」小引

柴を塁(かさ)ねて屋木と為し、土を和(こね)て盤筵(テーブル)と作す。路徳延「孩児の詩」*

児童の遊戯が犯罪とみなされ、その報いは少なくとも頭上に二発という時代があった。いまでは、開化した家庭や学校で、遊戯はともかく容認されている。だがわたしにはそのうちこのような時代がやってきそうに思われる。その時大人は児童のために厳かに「砂の山」を、聖堂を築くように築くだろう。

わたしは随時詩文を抄録して、小さな友達に贈り、基壇を建築する一片の石にして、いささか彼らに対する義務の百分の一でも果たそう。これらのものは高雅な大人先生たちから見れば、当然「土の飯、塵の羹」であって、決して聖経や賢人の伝記の高遠さ、四六文・八股文の微妙さには及ばないが、児童にとってはここからわずかな趣味を汲み取ることができると確信している。わたしのこの何篇かの小文は、もっぱら児童および児童を愛する父兄たちのために書いたもので、あれら「道徳を蓄え文章を能くする」人々とはもともと何の誼もない。

残念ながらわたし自身はすでに子どものころの心情を忘れ、専門の児童心理学にも門外漢であるから、選択と表現上多くの欠点を免れないで、児童にはなじめないかもしれない。これはわたしが最も済まなく思うところである。　一九二三年七月十日。

原注：砂の山（Sand pile）〔*the Story of Sand Pile*〕は、アメリカのスタンレイ・ホールの論文に見え、『児童の生活と教育の各方面』に収めてある。〔*Aspects of Child Life and Education.* G.Stanley Hall, Appleton and Company,New York, London,1921. pp.142-156.〕

※初出：1923 年 7 月 10 日『晨報副刊』

---

*路徳延「孩児の詩」　晩唐の詩人路徳延の詩。「孩児の詩」五十韻は宋末の趙與時『賓退録』巻六に見える。ただしそれより早く宋の計有功の『唐詩紀事』巻六十三に「小児の詩」としても見える。『全唐詩』六十九は「小児の詩」として収録。路徳延は天祐年間に河中節度使朱友謙の幕下で掌書記を務めたが、この詩で朱を謗ったのだという。

## 81　小書

冬休み中に旧稿を整理して、『苦雨斎小書』とでもいったものを編もうとしたら、二冊にもなってしまった。その一は『冥土旅行』およびその他の三篇、その二は『マカールの夢』である。『冥土旅行』を読みかえしてみて、中国で言えば漢の桓帝・霊帝時代のギリシアの作品がなんと現代の『マカール』と同工異曲で、違うのはただコロレンコがかつてシベリアの政治犯で、ルキアノスが人に読書を教える「哲人」(Sophistes) であったことによるぐらいでしかないのに気づいた。人間性の前では、二千年の時間はほとんど何の威力もない。しかしながらわれわれの青年たちはまるで気後れしてしまって、古典文学を読もうとしない。古代の聖徒が女人に対したように、堕落することを恐れ、誰かが上古の詩文を一篇訳しでもしようものなら、またほとんど反革命の嫌疑を被る。思うのだが、どうして本当にこうなってしまったのか。わたしに言わせれば、古典文学のあるものは、現在の文士に比べればもっと勇敢明智で、あるいはもっと革命的かもしれない。試しにツキジデスの『歴史』、ユーリピデスの戯曲を読んでみれば、彼らの思想・態度が欧州大戦時のハウプトマンたちよりも上にあることが分かるだろう。これはその一例である。中国の青年は現在 20 世紀の人を自称し、前代を軽蔑するが、しかしどの時代（中国のではない）の文人であれ、誰でも彼らの師匠になり、彼らの浅薄で狭隘な習気に頂門の一鍼を食らわすことができるのである。旧時代の思想にはむろん正しくないものがあり、これはわれわれの智力によって見分けなければならない。もしわれわれが多くの光陰を費やして教育を受け、その挙句そんな判断力もないとすれば、そうした教育がすでに破産しているのでなければ、きっとわれわれ自身が低能であることは疑いない。

民国十六年二月十日。

※初出：1927 年 2 月 19 日『語絲』第 119 期、掲載時題作「無題」。

## 82　古文の秘訣

明の陶奭齢（とうせきれい）の著『小柴桑喃喃録（しょうさいそうなんなんろく）』二巻は、自序によれば「柴桑老人が子姪に訓える所以の言を録するなり」だそうである。その書はまるで『顔氏家訓』を真似したみたいだが、別に何の大した大著述でもない。十年前郷里で、いささか「郷曲の見」を発して、明清の越人の著作を集めていたころ、これが陶石梁の著書であったし、又崇禎八年（1635）の刻本でもあったから、大路口の古本屋からそれを家に持って帰ったのだ。今日偶然取り出して読んでみると、上巻の第五葉に次の一節を見つけ、なかなか面白いと思った。

“元末の閩人林弋（りんよく）は文を作るのに好んで奇字を使った。けれども普段習いつけないものだから、文を書く時辞書を調べて文字を易え、人が読んでも分からなくした。しばらくして、誰かが尋ねたが、弋自身も判らなかった。むかし自分勝手に草書を書いて、書き終わって甥に渡して清書させた。甥は読めないので、文字を指して訊ねた。ずいぶん睨んでいたが、怒って言った。何でもっと早く聴かんのか。いわゆる熱写冷めて識らずというやつで、ともに可笑しい。”

わたしはそこで徐文長の話を思い出した。明刻の湯海若の選集二巻を見たことがあり、名を『問棘郵草（もんきょくゆうそう）』と言い、徐渭が批釈し、張汝霖が校正したものである。『牡丹亭』の文章の美しさは誰もが知っている。“良辰の美景は奈何なる天ぞ”という何節かは幼いころに熟読暗唱したが、いま彼の真面目な詩文を読むと何とも古臭く通じない。上巻に一篇「士の不遇に感ずる賦」があって、ぜんぶおかしな話だが、徐文長は題目の下に“離騒に逼（せま）れり”という三字の批注をつけて、賞賛の意を表している。ところが文末では次のように注しているのである。

“古字を以て今字に易え、奇語を以て今語に易えるに過ぎず、道理を論ずるが如きはただ些子（わずか）に有るに過ぎざるのみ。”

しかしこれは貶めた言葉などではなく、実はただどのようにして古文を作るかという奥義を発したまでである。というのは彼は篇首の批語のなかで次のように言っているからである。

“古字があるが今字がない、古語はあるが今語がない時にはこうするのだ。”ここにわれわれは古文を書く人のいくつかの意見を読み取ることができる。（一）いま文を作るにもこうしなければならない、なぜならば昔はそうしたのだから。（二）文を作るには古字古語に重きを置き、道理は緊要ではない。（三）その方法は古字を以て今字に易えることにある。わたしは古文は作れないけれども、これは確かに今までの古文を作る門外不伝の秘法であると深く確信する。いま偶然に四庫に収めない二部の「閑書」に折りよくもそれを見つけた。ここから推測して秘訣を手に入れたなら、誰でも屈原に逼り杜甫に逼ろうとしてもなんの困難もなくなるだろう。わたしは専売特許で儲けを独り占めしようと思わないから、こうして公にして、いささか後学の役に立てようとするわけだ。

最後にわたしはこれによって又一つ副産物の大発見をした。つまり古文を作るものはすべて文章を書くのであって話をするのではないということ。当初は古文を作るのも話をすることだと思っていた。われわれが文章を書くように、古文家は“おい、劉二、ぼくにご飯をおくれ！”という一句を“咨(ああ)、汝劉仲よ、予に餮盛(しせい)せよ”に改作するだけだと。ところがいまになってやっとそうでないことが分かった。彼らがこのように言うのは、決してほんとうにご飯をくれと言っているのではない。(そう言ったところで劉二にはもともと分かるはずもない)、実際はただ古人にそういう言葉があったから真似しただけに過ぎないのだ。最初に言ったのは話をしたのであり、考えを表現したのだ。彼がどんな語句を使おうと関係なく。二番目に言ったのはつまり文章を作ったのだ、猿が人の真似をするように。われわれは本当の古文を鑑賞することができる、それがどんなに古かろうが。しかしこうした偽古文を見ると、たとい吐き気がしなくとも、身体中が気持ち悪くなるのは、つまりこのせいなのだ。(民国十四年三月)

※初出：1925 年 3 月 23 日『語絲』第 19 期

## 83　新名詞

革命家は文学革命を主張し、国語を改造する責任を文人に分配したが、実際彼らはもちろん新文体を作ることができるが、新名詞を作るということになると大半がまだ新聞記者の仕事で、文人の力量は決して大きくはない。しかしながら世上の新聞記者はたいていが教育者とよく似ていて、みな幾らか低脳である。だから成績はそれほど芳しくなく、時には俗悪極まる。たとえば「モデル」と「スター」という二つだが、もともとごく普通の名詞で、一つは人体描写の模型を言い、一つは芸術界の名人を言って、けっして映画に限らない。しかも古典文学の Aster の連想から、又別に一種優美な意味を持つ。だが上海の新聞記者が一度使うと、全然意味が変わり、モデルはパンツを穿かない娘になり、当然 Atelier（美術教室）内に限らないし、スターは映画の女優で、しかもいささか悪意がある。われわれの東隣の文明先進国日本でも、この点に関してはあまり大きな進歩は見られない。十七、八年前文学上の自然主義という名称は、道学者の反対で俗化し、のちにはほとんど野合の代名詞になり、ここ近年になってようやく収まった。一方英語の音訳の新名詞が突如流行し、たとえば新式の女性は Atarasiki Onna とは言わず、Modan Gaalu と言い、ことに俗悪笑うべしである。その他労働節などは Meedee と称し、恋文は Labuletta と称するなど、枚挙に遑がない。流行の通俗雑誌に、その名を Kingu というのがある、（たいてい雑誌の「王」とでも言うのだろうか。）こうした俗悪な名詞の社会における勢力は推して知るべしである。自国の言葉に使えるのがあるのに必ず音訳で、訳が又必ず英語を唯一の正統とするのは、まるで不可解である。英語を学んでも筋道が立たず、教育を受けても教化されるところがない、日本の前車の轍には大いに注意すべきである。最近東大の藤村博士が中学では英語を廃止せよと主張したが、わたしは極めて賛成だ。これは根本を治す方法ではないけれども、根本を治すにはみんなの理性を発達させねばならないが、又これは高遠な理想であって、おそらく実現の日はあるまい。

民国十六年五月十六日。

※初出：1927 年 6 月 4 日『語絲』第 134 期

## 94　牛山の詩

志明和尚が打油詩一巻を書き、題して『牛山四十屁』としたことは、わたしはとっくに知っていたが、書はまだ見たことがなく、ただ『履園叢話』*巻二十一に録する一首を見たに過ぎない。最近石成金の『伝家宝』を調べていて、第四集に一巻の『放屁詩』を発見した。つまり志明の原本であったわけだが、刪訂を経ていて、四分の三しか残っていず、『履園叢話』の一首も削られ、見つからない。この一巻の詩をよくよく見たが、別に大して変わったところもなく、ただいわゆる寒山詩の一派で、気楽なことを言っているに過ぎない。中にそれでも何首か面白いのはあるが、わたしから見ればどれも『履園叢話』の一首には及ばない。――その詞に云う。

春は猫兒(ねこ)を叫(な)かせ猫は春に叫く、他(かれ)を聴くに叫けば叫くほどに精神(げんき)なり、
老僧も亦猫兒の意あるも、敢えて人前に一声を叫かず。

このことから、石成金の選択はあまりあてにならず、おそらく選んだことは選んだが却って比較的よい十首をみんな削ってしまっている。（民国十六年三月）

※初出：『談虎集』

---

*『履園叢話』二十四巻　清の銭泳撰。中華書局本（1979）がある。『伝家宝』は日常家用百科事典の類。近刊もある模様。志明和尚についてはほとんど詳細がわからない。

## 85　旧詩呈政[i]

北京は最近又恐怖時代に入った。青年たちは故なくして咎めを受けることを恐れ、びくびくと日を終えることもできない。ただわれわれのような年寄りだけが、すでに「不惑」を過ぎているばかりか、天命をも知ることができるので、まだ危邦乱世に安居して、いささか世故を増やすことができるのだ。ちょうど天気が鬱陶しい時に乗じて短い文を一篇書き、満足感激の誠意を表そうとしたのだが、腰痛が治らないのはどうしようもなく、思うようにはならない。七年前の旧詩を一首写し、題目の一字を改めて[ii]、閑話とし、いささか責を塞ぐしかない。

民国十六年四月九日。

智人の心算
「二五が十、」
他の人の算盤では皆こうだ、
『筆算数学』[iii]でもこうだ。
しかしわたしが計算するとどうしても十一になる。
まさか間違っているのはわたしではあるまいに？
二十四史はいい本だ、
中にはいろいろ興亡の事跡が書いてある。
だがわたしから見れば一部の立志伝に過ぎない。
劉・項両人は天下を争い、
漢の高祖が結局成功したのではないか？
河を塞ぐのは危険な事だ、
昔の聖人はかつてそう言った、
わたしも隣の老ピョートルが洪水に流されるのをこの目で見た。
しかしわたしは今度はもう流されない、
きっとあの老頭兒（ロートル）の件の手[iv]をつかってやるのだから。

民国十一年六月二十日の旧作。

※初出：1927 年 4 月 16 日『語絲』第 127 期

---

[i] 「呈政」　政治家に呈すという意。
[ii] 「一字改む」　1920 年 6 月 20 日作の「愚人的心算」を「智人的心算」としたこと。
[iii] 『筆算数学』　美國　狄考文編　三巻　上海美華書館印や北洋陸軍教練処印などがあって、清末に教科書として使われた模様。
[iv] あの老頭兒（ロートル）の件の手　未詳。

## 86　エリスの詩

衣萍君が一冊エリス小伝を贈ってくれた。ゴールドバーグ（Issac Goldberg）の書いたものだ。彼には他に一部大きな伝があるが、これは「リトルブルーブックス」の第213冊で、たった六十ページだけれども、すこぶる要領を得ている。われわれはいまエリスの研究と批評しか知らないが、彼はほかに小説一部と多くの詩を書いたことがあるのだ。南アフリカの女流作家シュライナー（Olive Schreiner）は、かつてエリスはキリストと妖怪との中間における一つの交叉であると言ったが、ゴールドバーグはもっと適切に、彼の中には一人の叛徒と一人の隠士がいると言う。これがすなわち心の中にいるその叛徒であって、彼にロシアの女性ソフィア・ペロフスカヤ（Sophia Perovskaya）を記念する詩を書かせたのである。ソフィアは暗殺事件によって一八八一年四月十六日に「法を正〔処刑〕され」た。詩の大意に云う。

「彼女はそうした人々とその運命を共にしようとはしなかった、
世界を罪悪の巣にしようとする人々と、
だが彼女は彼らの報酬を、その奇妙な王冠の棘を受け容れようとした。
彼女は敢えて生命の自由を開くパンから、
逆に生命の酒を生み出し、人々と共に飲もうとした。
歴代支払われなかった負債を償おうと努力した、
一人のツアールを死地に置くまで、
彼女は死んだ、生命の故のために。
英雄と烈士はもとより愛され、苦を受けている。
ちょうど地下の鉄工場から出る火花のように、
彼らは天空に投げられてその最も暗い夜を照らす。
歴来そうであったし、また永久にそうであろう、
この憂患の世界の鉄牀の上に
神が人間の心を捉え鉄鎚を加える時までは。

『新民叢報』の時代には、『世界十女傑』というパンフレットの伝播によって、ソフィアの名は人口に膾炙したが、最近では知る人は少なくなったようだ。確か董秋芳君が訳した『自由を争う波』*の中にソフィアについて述べた文章があったと思うが、探すのも面倒である。

民国十六年四月十日。

※初出：1927年4月16日『語絲』第127期

---

*『自由を争う波』　ゴリキー作。ちょうどこの時期（1927年4月）に北新書局からロシアの他の人の作品と合わせて未名叢刊の一冊として『自由を争う波及びその他』の名で出版された。

## 87　マタイ神父〔マトヴェイ・コンスタンチーノフスキー〕

わたし自身は自分が批評家でないことを知っているし、同時に中国の多くのいわゆる批評家に対してもあまり信用を置いてない。彼らはデタラメしか言わず、全くなにも知らず、単に一つの「素直な信仰」（“Simple Faith”）を持っているだけだ。チェコのヤンコ・ラフリンが著した『ゴーゴリ評伝』*を読むと、ゴーゴリが晩年マタイ神父を盲信したことを記した一章に次のような一節がある。

“ゴーゴリはパレスチナから帰ると、マタイ神父に会いに行った。イワン・シェガーロフはこの名人について研究し、二人が初めて会った情況を記録しているが、とても奇妙で、ほとんど信じがたい。

「お前は何教だ？」神父はゴーゴリを見て厳しく訊ねた。

「わたしは正教です。」

「お前は新教ではないのか？」

「いいえ、わたしは新教ではありません。確かに違います。わたしは正教です。……わたしはゴーゴリです。」

「わしから見ればお前は一匹の豚に過ぎん。お前はわしに神の恩恵とわしの祝福を請わなかった。こんな正教徒があるものか！」この敬虔なマタイ神父はこう答えた。

こうした記載を我々は無条件に信ずることはできない。しかし、慎重な考慮ののちに、われわれは、こうした情況はたぶんあり得ただろうと言うことはできる。マタイ神父についての伝説は一つだけではないけれども、われわれは総合して次のように言うことができる。彼がそのような原始的な性格であるのは、全体によって形成されたものである。彼が一方向にしか行かないのは、彼の内的生活がまだ分化していないか、あるいは単純なせいであるかにすぎない。これはまさしく彼の偏狭さが、その考えと道徳方面を強固にさせているのである。彼の考えと道徳は確かに厳しく酷い。彼は独断的に自分は、その厳しい生活の上で堅忍不抜だと信じているが、彼の禁欲主義はそのまま精神における権力志向の変相であるかもしれない。”

ここに言うのは宗教的狂信者であるが、思想・文芸の面でも同様にこうした人間はいる。マタイ神父がゴーゴリに対して言った言葉はほとんど現代のいわゆる批評家たちに共通の口吻である。わたしはほんとうに疑っている、まもなく文芸と学問はほんとうに信仰を必要とするのではないかと。（民国十六年二月）

※初出：1927 年 2 月 19 日『語絲』第 119 期

---

*ヤンコ・ラフリン『ゴーゴリ評伝』　Janko Lavrin , *Gogol* . George Routledge & Sons, 1925. p.234~5.

Soon after his return from Palestine, Gogol met Father Matthew personally. Ivan Scheglov, who has dedicated several interesting pages to the study of this figure, gives us an almost incredible account of the first meeting between Gogol and the reverend Father.

"What is your religion?" was the priest's stern question when Gogol was introduced to him.

"Orthodox."

"You are not Protestant?"

"No, I am not Protestant. Certainly not. I am Orthodox…… I am Gogol……"

"In my eyes you are simply a swine," retorted the pious Father Matthew. "What kind of Orthodox Christian are you if you do not beg of me God's Grace and my pastoral blessing! …… "

Such records must not be accepted without reserve. Yet with all due caution we can say that the quoted scene is quite likely to have taken place. Although the reports about Father Matthew vary, we can sum up his general characteristics by saying that he was one of those primitive natures who are made of one piece, and who go in one direction simply because their inner life is not differentiated at all. It is their narrowness which makes them strong in their will and in their morals. Both his will and his morals were, in fact, ruthless. He was dogmatically sure of himself, unflinching in his severe way of life; but his very asceticism might have been a disguise for his spiritual lust for power.

## 88　道学芸術家の二派

わたしは最もあの「不道徳な」詩人ヴェルレーヌ（Paul Verlaine）を愛する、とりわけフランス（France）の小説に描くあの老犯罪者を。わたしは本当に命令したい、「ガスタス、天国に来い！」と。もしわたしにこんな権力があれば。しかしながらわたしはこのためにあの道学者、およびあの道学的「芸術家」（Pharisaic “Artists”）どもが嫌になる。こうした道学芸術家は二類に分けられる、同じように嫌だが。わたしが最も嫌うのは、これ以外にはただ役者でもないくせに高い声で芝居の一くさりを歌いたがる人間たちである。（だがわたしの耳目の及ばぬところで歌うのに関わる気はない。）この二類とは具体的にいえば、（1）『情波記』[i]派と（2）「嬌寓に贈る」[ii]派ということができる。

『情波記』の著者はどんな人か、今は言うことができない。というのはわれわれは個人を評論するのではなく、ただ彼に「済みませんが」ちょっとこの派の思潮の代表になってもらうだけだ。この派の教条は、もし男女に関係があれば、それはすべて女が悪いので、男は分として当然である、現在の社会が男子がそうであることを許しているが、女は古から云う「城を傾け国を傾ける」とと、又「禍の水」とも云う。もし後になって女が男を嫌になって捨てるなら、男は二人の間の秘密をばらすぞと言って、彼女を恫喝して戻って来させることができる。夫は妻の綱であり、そして女は貞操を失ったからには当然社会の侮辱を受けなければならない。彼女に貞操を失わせた者さえ当然その中に入っている。こうした態度は毛筋ほどの芸術味があると言うに当たらないが、しかし道学味なら十二分にある。道学というのはつまり社会公衆の規定し許可するところに従って行動して、自ら満足を感じ、そしてそれを利用して人を損じ己を利することを言うのである。いわゆる拆白（ナンパ）党の存在の理由もここにあるが、彼らが芸術家だと自称しないのが、少し違うだけだ。こうした『情波記』派の思想が消滅しないなら、新しい性道徳がそだつ希みは薄い。なぜならそれは伝統の生きた代表であるからだ。

「嬌寓に贈る」の妙詩をみんなはかつて忘れたことがあったろうか。それは伝統のもう一つの生きた代表である。だからまたほんとうの老舗の道徳学者でもあるのだ。みんなはあるいは訊くかもしれない。あのような猥褻な詩がどうして道学的なものなのかと。言っておくが、猥褻にわたしは決して反対ではない。しかもまだ幾らか歓迎の気味さえある。しかしいい猥褻でなければならない。つまり一つは芸術趣味があること、二つはそれが反道学的であって、現行の礼教の権威に抵抗するものであってこそ評価できる。もし現社会の許可するところに従って猥褻な話をするのであれば、それは『情波記』が男性の権利を利用するのと同じく卑劣な道学根性である。詩の「雑事還た『秘辛』を続ぐに堪えたり」という一句を見ただけで、道学味を示していて余りがない。楊升庵が『雑事秘辛』を書いたから、その続きを書いてみようというのだ。最初に敢えて書いたものは芸術家であるが、くっついて行く者は意味がなく、それは冒険でなく、甘い汁を吸っただけだ。野蛮な社会では男女の私情に対する懲罰は極めて厳しいが、それでも敢えて試みようとする人は、情に殉じたと言える。その勇気もなくて俗に随って妓女に戯れたり妾を囲ったりするのは、卑怯な漁色たるを免れない。この比喩は芸術にも応用できる。われわれは『雅歌』あ

るいは『雑事秘辛』あるいは『沈淪』は芸術作品だと認めるが、伝統的ないやらしい詩は門外に拒絶し、それに『情波記』の類と同じくいわゆる道学芸術の項目の下にお帰り願わざるを得ない。近ごろの青年には革命の気が欠乏していて、たまにやや新しいかあるいは激烈に似た言行があっても、よく見ると何のことはない伝統思想の変相なのだ。上に述べた両派の思潮は即ちその一例で、特にその誤りを指摘したのは、「あるいは世道人心に裨益する無きにあらずとしか云う。」（民国十四年三月）

※初出：1925 年 3 月 23 日『語絲』第 19 期

---

[i] 『情波記』　『新文学史料』1998 年第 4 期「周作人与『情波記』」に詳しい。

[ii] 「嬌寓に贈る」詩　胡適から文学革命の道路清掃人とまで言われた呉虞が、北京の娼妓嬌玉に迷って多くの詩を作って『順天時報』に載せた。嬌玉と嬌寓は近似音になる。彼女の姓は庾であったらしく、呉虞の詩では「庾嬌」とする。いま田苗苗整理の『呉虞集』（中華書局 2013）に「庾嬌詩」として見ることができる。

## 89　風紀の脆弱

わたしは馬糞紙と糊でできた小箱を一つ持っている。中には新聞から切り抜いたいろんな妙文が仕舞ってある。長篇大作では聖心主筆の「孫文は真に死にたり」という批評とか、かけらのような文章では「当該辜鴻銘」の纏足美論とか、なんでも揃っていて、退屈な時の暇つぶしとか腹が立った時の材料捜しに供するのである。今日は何事もなくやっぱり開けてみることになり、思わず何年何月か知らないが上海の新聞のちょっとしたニュースを見つけた。その文に曰く、

「女児の銭湯に入って入浴するを禁ず

淞滬警察庁は昨日通達を出して、案ずるに保安隊長陳偉の報告によれば、密かに淞滬城一帯の銭湯を査察するに、いつも十歳前後の女児が、中に入って入浴する、年齢幼稚に属すると雖も、結局は銭湯の風紀に関わりあるに属し、まさに区に命じて禁止等の事情を請いて此れに拠るべし、よって例外を除き、通達の施行を直ちに承知し、布告を油印して、各銭湯内に張り出し、一律に禁止せらるべし。もとより施行の状況を具に上申し検査に備うべし、」と。

われわれ「七歳にして席を同じうせざる」礼義の邦ではこれはごく当たり前の事であり、もともと特に切り取って保存しておく値打ちもないのだが、わたしが感心したのは陳偉隊長の二句の文章である。「年齢幼稚に属すると雖も、結局は風紀に関わりあるに属す」とは、なんとも老練円満に言ったものだ。「属」の字が重出しており、「関・紀」の二字も平仄が合わず、「結局は風紀に関わるありと為す」と改めた方がよいけれども。これは文章についてであって、意味となるともともとよくわからない。風紀とはどんなものかがわたしのおそまつな頭では完全に分からないからである。物理学に属するものか、それとも化学に属するのか。ほんとうに「真っ黒けの皮の提灯」で、何が何だか訳が分からんの至りである。以前人が、「誰と誰とが仲良くて、……風紀事件になった」と言うのを聞いただけで、男女が仲良くなることは社会の風紀と密接な関係があることは分かったが、――どうしてあちら側とこちら側がうまく釣り合えば(つまり風紀上において)、たちまち欠陥が現れるというその微妙な感応の理由がもう一つよく分からなかった、――だが今ようやくそれがもっと神秘的なことが分かった。十歳前後の女児が銭湯に入って風呂を浴びると、風紀上危険が発生するのである。全くこの風紀なるものは以前よりももっと柔らかく、もっと脆く、もっと傷みやすいものになったようだ。これはなぜか。まさか風紀が淞滬警察庁の保安隊の厳格な保護を経たために、甘やかされた子どものようにいよいよひ弱になってしまったのではあるまい。

友人の三放君は真面目な紳士である。彼はわたしが分からないのを見て言った。「この公文の意味は何も分かりにくいところはないよ。銭湯の中の男たちが十歳前後の女の子を見ればどうしてもその気になって、色々悪さをすることになるから、それで風紀と関わりがあることになるのだよ。」わたしは彼の言うことは本当だと信じるが、しかしそうなると却って訳が分からなくなる。というのはわたしはまだ中国の男がそこまで堕落しているとは信じがたいからである。(これは多分わたしの楽天的に過ぎる欠点なのだろう。)十歳前後とは、十歳を中心として、一歳少なければ九歳だし、一歳多ければ十一歳ということではないか。これに準ずれば古の聖王の礼法はもう二

つから四つも多いのだから、とっくに「傷みやすい品」のうちに入っていなければならないけれども、普通の感じからいえば、彼らはじっさい「子ども」である女にすぎず、決して「女である」子どもではなく、普通の人間からすれば決して性的対象とは見なさない。今もし保安隊長の言が確かだとすれば、事実上確かに風紀と関係がある。つまり中国人の変態を証するもので、すなわち「小児性愛」（Paidophilia）の傾向があるのであって、そうした病気を持つ国民は人間世界において長く存在できるであろうか。わたしはこれが道学者の誇大な言葉であることを願っている。そうなら一個人が少し変態なだけで、民族の前途においてそれほど大きな障碍にはならないからである。しかしながら上は古人の伝統を考え、傍に同胞の言行を考えるなら、一人だけにその責任を負わすことはできず、結局は中国人の道徳があるいはすでに十歳前後の女児が銭湯に入るのを禁止しなければ風紀が維持できないまでに堕落していることを認めざるを得ない。ああ、なんとも心寒からしめることではないか。（民国十四年四月）

※初出：1925 年 4 月 7 日『京報副刊』第 111 號

## 90　シャーマニズムの礼教思想

四川の督辦が風化を維持するために、姦通罪を犯した学生を銃殺し、以て明白な教戒を示した。

湖南省の省長が雨乞いのために、半月あまり公館に戻らず、つまり、『京報副刊』で某君が言うように、「奥さんと寝なかった」。

フレイザー博士(J.G.Frazer)はその著書『プシュケーの仕事』(*Psyche's Task*)の第三章「迷信と両性の関係」で、「彼ら（野蛮人）は想像して、ただある種の性的行為をやるか禁忌するだけで、直接に鳥獣の繁殖と草木の成長を促すことができると考える。こうした行為と禁忌は明らかに全て迷信であって、まったく希求する効果を得ることはできない。これは宗教ではなく、ただ魔術にすぎない。つまり、彼らは目的を達しようとして、神霊に懇請する方法を使わず、ある間違った物理感応の思想に頼って、直接に自然の力を操縦しようとする」と言う。これが趙恒惕〔湖南省長〕の雨乞いの心理である。感応魔術の理論によって言えば、その道に反対して実行すると正しいのかもしれないけれども。

同書では又次のように云う、「多くの蛮族の心には、すでに結婚あるいはまだ結婚していないかにかかわりなく、人間の性的過失は、決して単に道徳上の罪であってただ直接に関係する少数の人々に関わって来るばかりではない。彼らはこれが全族に関係し、危険と災難に見舞われると考える。なぜならこれは直接に魔術的な影響を起こし、あるいは間接的にこうした行為を嫌悪する神霊の怒りを引き起こすだろうからである。それればかりか、彼らは常にこうした行為は全ての穀物瓜果を損ない、食料の供給を断ち、全群の生存を脅かすと考える。およそこうした迷信が盛んな所では、社会の意見と法律は性的犯罪を懲罰するに特に過酷であって、他の文明的民族が、こうした過失は私事であって公事ではないとし、道徳的な罪であって法律的な罪ではなく、個人の終生の幸福には影響するかもしれないが、決して社会全体の一時の安全に類を及ぼしたりはしないとするのとは比べようがない。逆に言えば、およそ社会が極端に厳格に親族姦、既婚姦、未婚姦を懲罰する所では、我々はこうしたやり方の動機が迷信にあることを推測することができる。言葉を換えて言えば、およそ一つの部落あるいは民族に、害を受けた者自身にそうした過ちを罰せさせずに、社会が特に厳格に処罰する。その理由はたいてい性的犯罪が天行を擾乱するに足り、危険が全群に及ぶと信じていることによる。したがって全群は自衛のために着実に抵抗せざるを得ず、必要な時にはこうした犯罪者を排除消滅しなければならないのである。」これがつまり楊森〔四川督辦〕が風化を維持する心理である。もちろん、姦通を捕まえる愉快さも嫉妬心と関わりがあるが、極小部分でしかない。合法的な売淫と強姦はもともと社会的に認められているから、普通の風化維持の原因は多くはこの神秘の「物凄さ」――エーゲ海の「タブー」と訳せるようだ――によるものである。

中国は礼教によって国を建てる、至聖先師〔孔子〕を尊崇する儒教国だそうだが、実際は国民の思想はまったくシャーマニスティック（Shamanistic の方が道教的と言うよりもっと正確である）である。中国は決して無宗教国ではない。国民の思想には魔法の分子が宗教のそれよりずっと多いけれども。礼教を言う者の喜ぶ風化という言葉は、わたしはとても神秘で、極めて大きな

超自然的意味を含んでいると思う。これは明らかにシャーマニズムの術語である。最も礼教を言う川・湘〔四川・湖南〕の督辦・長官の思想は完全に野蛮であることは、すでに上述の如くであるが、京城の「君師主義」の各位はさてどうか。言うまでもなく、すべて同じ穴の狢である。彼らの思想はどのみち両性の関わりを出ない、しかもこの関わりの中には、宇宙の存亡、日月の満ち欠け、家国の安危、人民の生死がみなこれと繋がっているのである。女子学生が一ヶ月、しばらくそう言っておこう——斎戒沐浴しさえすれば、風化は完うされて中国は保たれる。でなければ七七四十九以内に必ず陸沈するだろう。これが野蛮なシャーマニズムの思想ではなくてなんであろう。わたしは中国を理解しようとすれば礼教を研究すべきだと、そして礼教を理解しようとすればさらにシャーマニズムから入るのでなければならないと確信する。民国十四年九月二日。

※初出：1925 年 9 月 14 日『語絲』第 44 期

## 91　郷村と道教思想

（一）

郷村改良の最大の阻止力は、郷人たち自身の古い思想にある。この古い思想の主力は道教思想である。

いわゆる道教とは、老子の道家者流を指すのではなく、張天師が教主となり、道士たちが祭司となる、太上老君派の拝物教を指す。普通中国の宗教を語る人は、儒釈道三家があると言うが、実は儒教の綱常はとっくに崩壊して、仏教もただ輪廻・因果のいくつかを残して道教と同化した信仰がまだ民間に流通するだけであり、国民の思想を支配するものはすでに完全に道教の勢力となっている。われわれは「儒教」に不満で、それは中国に害を残すと言う。このことばはまったく理由がないわけではないが、事実に照らしてみると、中国人は確かにすべて道教の徒である。何人かの「業儒」の士類はまだ子曰く、詩に云うなどと喚いているが、彼の守護神は実はすでに孔孟ではなく、梓潼帝君、伏魔大帝といった物になってしまっている。面子を保つ士類のいない郷村では、この情況は自然ともっと顕著である。『新隴』雑誌では、陝西甘粛の人民はどうしても皇帝が忘れられず、「あんたが連中に出会ったら、連中は紫微星はいつ下界に降りてくるかと訊くのでなければ、徐世昌が天下を治めるがうまく治めるのかと訊くだろう」と言う。わたしは彼らの保皇思想は、決して「率土の濱は王臣に非ざるは莫し」あるいは「三月君無ければ則ち弔う」などという経訓から来たものではなく、彼らの根拠はただ「真命天子」[i]ということにあるのだと思う。これは玄穹高上帝が派遣したものであり、紫微星、弥勒仏が下界に降りたものだから、それでこんなに尊重するのである！中国の郷村の人間は皇帝に佩服する、これは確かであるが、それはすべて儒教の影響だと言うのは、確かではない。彼らの教主は『春秋』の大義を講ずる孔夫子ではなく、天下はこれより太平だと予言する陳摶老祖なのである。

わたしはよく理学者の家庭で、生員の息子が挙人の親父を殴るのを見るが、殴った後、二人はやはりそれぞれ儒業を以て自任する。だからわたしは儒教の綱常はすでに崩壊したと言うのだ。郷村では、むろん言うまでもない。郷間には目蓮戯という俗劇がある。その中の一節を「張蛮親父を殴る」と言い、張蛮の親父は、「前はわしがオヤジを殴った時は、親父が逃げ出せばそれでお終いじゃった。ところが今では奴がわしを殴ると、わしが逃げ出してもまだ追いかけてくる」と言う。これは民間の道徳が退廃していることを示すものである。しかし一面「終わりを慎み遠きを追う」はすこぶる凝っていて、相続の問題については特に注意している。少しでも産業があれば、たとえ「手から口へ」の貧乏な連中でも、同じように心を砕く。『新生活』28 期の「ある可哀想な親父」では、老人が苦しい仕事をして親不孝な息子を養う、彼の理由は「もしあれを追い出したら、いつか自分が死ぬ時誰が紙銭を焼いてくれるのか」である。孔子はもともと「祭るに在(いま)すが如くす」と言った。だがその後の儒業の人間はすでに多くが道教の精霊崇拝に戻って、若敖氏〔血統が絶えた氏族〕の霊鬼が飢えることを恐れるようになった。郷村の相続問題は、完全に死後の生活の問題で、族姓の血統といった大道理とは別に関係がなくなっている。

この他にもまだ多くの道教思想の悪影響がある。鬼神・魔術・奇跡等の事を信じることによっ

て、作り出される様々な悪い結果、例えば宗教事件、偽皇帝、洋学校の焼き討ち、防疫及び統計調査への妨害、喧嘩械闘、練丹養蠱、お札と呪いの治療などなど、いずれもとても明らかで、余計な事を言うまでもない。だが一つ、以前は愚民政策を取ったどの皇帝もできなかったのに、道教思想が製造に成功した事がある。つまり「命」と「気運」を信じることである。彼らが五星連珠が太平の兆しであることを信じ、又紫微星がすでに下界に降りたことを信じる以上、彼らに民主政治を語り、政府は人民の公僕だと語ったところで、どうして彼らに理解できよう。又もし資本家はすべて福の神の転世であり、自分の困窮は定命の金欠のためだと信じるなら、又どうして彼ら資本家に対して不平を持とうぞ。項羽が秦を滅ぼしたのは、決して彼が重瞳の異相を持っていたからではなく、実はただ彼が、「彼取って代わるべきなり」と言って、自分を秦の始皇と同じように見なしたために、皇帝の権威が消えてしまったのである。中国はいま至る所が大乱の源であるのに、それが始まることを恐れないのは、この「命」という迷信があるがためである。人間が命を信じれば、自然と分に安んじ、上を犯して乱をなすことはないが、同時にまた進取もない。「上流社会」の人間は高枕で安心していられるが、全部あるいは部分的にでも社会を改良しようとする人間の努力は、やはり多くが徒労になり、なんの成績もありえなくなる。

以上はわたしの郷人の思想に対する意見である。解決の方法については、まだ考えられない。原始的な拝物教の変遷についてみれば、二つの道がある。その一は、そのまま発達して行って、進化して一神の宗教になる。その二は、科学思想に圧倒されて、次第に消滅する。だから第一の路によって、キリスト教でもってそれを消滅させようとする人がいるが、それはもともと良い方法なのだが、あまりにもかけ離れていて、容易くは融合せず、マスクを変えるに過ぎず、多神は教門の聖徒に分配され、事実はやはり旧日の信仰となるだろう。第二の道はもっと徹底している。しかし科学思想を灌輸する方法も研究しなければならないところが多く、専門の人間の援助を要するので、ここでは言うことができない。一九二〇年七月十八日、北京にて。(『新生活』第三十九期)

(二)

上の文は六年前に書いたもので、その日はまさに長辛店の大戦闘で、重砲の音が天を震わしたのを、まだはっきりと覚えている。それが誰と誰が戦ったのかは、しかし忘れてしまった。京畿の戦争はそれほど多く、それほど変わり方も早いからである。なんでもすぐ変化する。『新生活』もとっくに停刊し、変わらないのはただ国民の道教思想のみである。以前礼教の根本は性の恐怖の迷信による、つまりシャーマニズムから出るとわたしは言ったが、そのように今の軍閥・学者が共同で提唱するのも実は道教思想である。旧稿を取り出してみると、まるで今日書いたようで、それで我慢できずもう一度載せることにした。だがわたしの考えは少し変わった。上の文の末尾に言った二つの方法はどちらも不可能だと思う。改めたいのは、「徹底する」のは決してない事である。布教式の科学運動は役に立たないし、最もよい方法はやはりただ教育を普及させ、国民の理性に訴えるしかない。残念なのは、今の教育の理性を発展させる力はあまり当てにならないよ

うで、国民の理性も発展の希望がとても少ないことである。思わずイギリスのフレイザー（Frazer）教授の『プシケの仕事』（*Psyche's Task*）の中の「社会人類学の範囲」[ii]という文章の中の言葉を思い出したから、それを少し引き写そう。社会人類学はまた文化人類学とも言われ、専門に礼教と伝説といった類を研究する学問である。彼によれば研究には二つの方面がある。その一は野蛮人の風俗思想であり、その二は文明国の民俗である。彼は現代の文明国の民俗はほとんどが古代の蛮風の残留であり、つまり現今の野蛮風俗の変相である、なぜならば大多数の文明の衣冠をつけた人物でも心の中は相変わらず野蛮なのだからと説明する。彼は言う。

「わたしが今説明したいのは、なぜ知識を得る機会のある人民の中に、さまざまな政治的、宗教的、道徳的な迷信が残留しているのかということである。その理由は次のようである。そうした高等思想は、常に上層に発生し、まだ最高級から最下級の心まで浸透することができないのである。こうした浸透は大抵が緩慢で、新思想が底層に達する時には、（もし本当に達することができたなら）、それはもう古臭いものになっており、上層ではまた別のものに替わっている。もしわれわれが二人の同国同時代だが知力が相反した人の頭を開いて、彼らの思想を見ることができたなら、おそらくはっきりと違い、まるで二つの種族のようだろう。うまい言葉がある、人類は梯子式に前進すると、つまり彼らの行列は横並びではなく、一人一人がバラバラに進行する、みんなは首領にくっついて若干のそれぞれに違う距離をとっているのである。これはただ民族のなかでそうであるばかりか、同国同時代の個人の間でもそうなのだ。ちょうど一つの民族がいつも同時の他の民族を追い越して行くように、同一の国家のなかの一個人も絶えずその同僚を追い越していき、その結果およそ迷信の拘束を脱することができた者は民族の中の最も先進的な人間となり、一般の早く行けない者はやはり迷信がその背中にのしかかり、その足を縛るままになっている。さて比喩を押しのけて、直に言うならば、迷信が残留するわけは、それらはすでに国内の物の分かった人から憎悪されているけれども、別の一部の人の思想感情とはまだしっくりと行っていて、彼らは上級の同胞から訓練され、文明の外皮を纏ってはいるけれども、心の中ではまだ相変わらず一個の野蛮人なのである。だから、例えば大逆や魔術に対する野蛮な刑罰、凶悪な奴隷制は、この国では、近代に至るまでずっと許容されていた。こうした遺風は二類に分けられる、つまり公的あるいは私的にと。換言すれば、つまりそれが法律内に規定されているか、あるいはひそかに施行されているかを見るのである。法律が黙許しているかにどうかに関わりなく。先ほど挙げた例は前項に属する。そんなに以前のことではなく、巫は英国ではやはり公衆の前で生きたまま焼き殺されたし、反逆者は公衆の前で腹を裂かれたし、奴隷の所有は合法的な制度とされ、まだもう少し長く残留するだろう。こうした公的な迷信の本当の性質がなかなか人に気づかれないのは、まさにそれが公的なものであるので、進歩の潮流に一掃されるまで、どうしても多くの人がそういう迷信を擁護し、保安上必要な制度であって、神と人間の法律が賛同許容するものだと考える。

普通にいう民俗学は、たいてい私的な迷信を限界とする。文明国で最も教育ある人でも、ふだんほとんどどれほどのこのような野蛮な遺風がその門口に残留しているか知らない。前世紀になってようやく人間の発見があったのは、特にドイツのグリム兄弟の努力による。それ以後ヨーロ

ッパの農民階級について系統的な研究が行われ、ついに人を驚かす事実が発見された。各文明国の一部――たとい大多数でなくとも――の人民は、その知力が相変わらず野蛮状態にあり、文化・社会の表面ですらすでに迷信に破壊されているという事実が。ただその特種研究によってこれを調査した人だけが、われわれの脚下の大地がすでに目に見えぬ力によってどれほど深く穿たれているかを知ることができた。われわれは火山の上に立っているようだ。いつでも煙と火を噴き出し、若干代の人々が辛苦して築き上げた古代文化の宮殿庭園を完全に破滅させた。ルナン（Renan）はペストゥムのギリシアの廃廟を見た後、イタリアの農民の醜悪野蛮と比べて、言った。“わたしは本当に文明のために震えた。それがこのように限界があり、このような薄弱な基礎の上に立っており、単にこのように少数の個人に頼っていることを、たといこの文明が主宰している所においてもそうであることを見た。”

もしわれわれが我が国民が沈黙したまま断固として守っているこうした迷信を調べたなら、きっとびっくりするだろう。その生命が最も長いのはまさにそうした最も古い最も荒唐無稽な迷信であり、同じように誤っているもののやや近代的、やや優良とされたものなどに至っては、もっとたやすく民衆に忘れ去られるということを発見するだろう。……」

十分だ。引いて行くとあまりに長くなりすぎる。要するに、彼の言い方によれば、民衆は結局迷信の信徒であり、とてものことでは済度し難いのである。フレイザー教授はまた言う。

「実際に、われわれがどのようにそれを化粧したところで、人類の政治はいつも且つ至る所で根本的に貴族的である。（案ずるにわたしは語源に照らして“賢治的”〔賢人政治的〕と訳したい。）どのように政治の手品を使ってもこの自然律を避けることはできない。表面上はどうあろうと、愚鈍な多数は結局聡明明敏な少数者についてゆく、これが民族の救いであり、進歩の秘密である。高等な人智が低級なそれを指揮するのは、ちょうど人類の智慧が彼をして他の動物を征服させることができるようなものである。わたしは決して社会の趨勢がかの名義上の総督、王、政治家、立法者に頼っていると言うのではない。人類の本当の主宰は知識を発展させる思想家である。まさしくその高等な知識によって、決して高等な強制力ではなく、人類は一切の動物を主宰するのだから、人類の中では、これもかの知識こそ、社会のあらゆる力を指導管轄するのである。……」

これは唯一の慰めと希望かもしれない。

民国十五年十月二日、時に北京に戦争なし。

※初出：1926 年 10 月 9 日『語絲』第 100 號「酒後主語九」

---

[i] 「真命天子」　天命を承けてこの世に降った皇帝。

[ii] 「社会人類学の範囲」 *The Scope of Social Anthropology, Psyche's Task.* Macmillan and Co. 1913. pp.168～170, p.167.　なお 1909 年版はこの章を含まない。

Super-stition the creed of the laggards in the march of intellect.

I have been led into making these remarks by the wish to explain why it is that superstitions of all sorts, political, moral, and religious, survive among peoples who have the opportunity of knowing better. The reason is that the better ideas, which are constantly forming in the upper stratum, have not yet filtered through from the highest to the lowest minds. Such a filtration is generally slow, and by the time that the new notions have penetrated to the bottom, if indeed they ever get there, they are often already obsolete and superseded by others at the top. Hence it is that if we could open the heads and read the thoughts of two men of the same generation and country but at opposite ends of the intellectual scale, we should probably find their minds as



different as if the two belonged to different species. Mankind, as it has been well said, advances in *échelons*; that is, the columns march not abreast of each other but in a straggling line, all lagging in various degrees behind the leader. The image well describes the difference not only between peoples, but between individuals of the same people and the same generation. Just as one nation is continually outstripping some of its contemporaries, so within the same nation some men are constantly outpacing their fellows, and the foremost in the race are those who have thrown off the load of superstition which still burdens the backs and clogs the footsteps of the laggards. To drop metaphor, superstitions survive because, while they shock the views of enlightened members of the community, they are still in harmony with the thoughts and feelings of others who, though they are drilled by their betters into an appearance of civilization, remain barbarians or savages at heart. That is why, for example, the barbarous punishments for high treason and witchcraft and the enormities of slavery were tolerated and defended in this country down to modern times. Such survivals may be divided into two sorts, according as they are public or private; in other words, according as they are embodied in the law of the land or are practised with or without the connivance of the law in holes and corners. The examples I have just cited belong to the former of these two classes. Witches were publicly burned and traitors were publicly disembowelled in England not so long ago, and slavery survived as a legal institution still later. The true nature of such public superstitions is apt, through their very publicity, to escape detection, because until they are finally swept away by the rising tide of progress, there are always plenty of people to defend them as institutions essential to the public welfare and sanctioned by the laws of God and man.

Super-stitions either public or private.

Examples of public super-stitions.

It is otherwise with those private superstitions to which the name of folklore is usually confined. In civilized society most educated people are not even aware of the extent to which these relics of savage ignorance survive at their doors. The discovery of their wide prevalence was indeed only made last century, chiefly through the researches of the brothers

The wide prevalence of private super-stitions constitutes a standing menace to civilization.

Grimm in Germany. Since their day systematic enquiries carried on among the less educated classes, and especially among the peasantry, of Europe have revealed the astonishing, nay, alarming truth that a mass, if not the majority, of people in every civilized country is still living in a state of intellectual savagery, that, in fact, the smooth surface of cultured society is sapped and mined by superstition. Only those whose studies have led them to investigate the subject are aware of the depth to which the ground beneath our feet is thus, as it were, honeycombed by unseen forces. We appear to be standing on a volcano which may at any moment break out in smoke and fire to spread ruin and devastation among the gardens and palaces of ancient culture wrought so laboriously by the hands of many generations. After looking on the ruined Greek temples of Paestum and contrasting them with the squalor and savagery of the Italian peasantry, Renan said, "I trembled for civilization, seeing it so limited, built on so weak a foundation, resting on so few individuals even in the country where it is dominant."[1]

It is the earliest and crudest superstitions that survive longest, because they

If we examine the superstitious beliefs which are tacitly but firmly held by many of our fellow-countrymen, we shall find, perhaps to our surprise, that it is precisely the oldest and crudest superstitions which are most tenacious of life, while views which, though also erroneous, are more modern and refined, soon fade from the popular memory. For

numerical majority. In fact, disguise it as we may, the government of mankind is always and everywhere essentially aristocratic. No juggling with political machinery can evade this law of nature. However it may seem to lead, the dull-witted majority in the end follows a keener-witted minority. That is its salvation and the secret of progress. The higher human intelligence sways the lower, just as the intelligence of man gives him the mastery over the brutes. I do not mean that the ultimate direction of society rests with its nominal governors, with its kings, its statesmen, its legislators. The true rulers of men are the thinkers who advance knowledge; for just as it is through his superior knowledge, not through his superior strength, that man bears rule over the rest of the animal creation, so among men themselves it is knowledge which in the long run directs and controls the forces of society. Thus the discoverers of new truths are the real though uncrowned and unsceptred kings of mankind; monarchs, statesmen, and law-givers are but their ministers, who sooner or later do their bidding by carrying out the ideas of these master

The uncrowned kings.

[1] I say "*an* enlightened minority," because in any large community there are always many minorities, and some of them are very far from enlightened. It is possible to be below as well as above the average level of our fellows.

## 92　王と魔法使い

「この時現在の」黒い北京には、まだこのような余裕と余暇があり、五、六円も出してフレイザー（J. G. Frazer）の『古代王位史講義』[i]を一冊買って読むのは、まことにいささか奢侈に近いといえる。しかしこの支出が財布への影響がそんなに軽くはないとしても、何日かの灯下の読書はやはり少なからぬ悦楽を得ることになった。これは一九〇五年ケンブリッジのトリニティ・カレッジでの講演の原稿で、第三版の『金枝篇』（*The Golden Bough*）ではもっと詳細を極めていて、その第一部分「魔術と王の進化」二冊は、つまりもっぱらこの問題を講じたものである。だがその一部の大冊はわれわれが本当にちょっと嗅ぐにも嗅げない。だからこの九篇の講義で我慢せざるを得ない。まるで一粒禁煙丸〔アヘン禁煙の丸薬。実際にあるのかどうか未詳。〕を飲むように。それはわれわれに魔術（Magic）の大要、魔法使いがどのようにして酋長になったか、帝王はどうして神聖にして侵すべからずなのか、簡単に言えば、帝王こそ魔法使いの変わったものであることを、教えてくれる。この社会人類学上の事実はわれわれに少なからぬ啓示を与えてくれる。特にまだ天運を承けた皇帝を迷信している中華民国の国民であるわれわれにとっては。君とは何者か。われわれは今では黄宗羲よりもずっと明確に知っている。彼はもともと妖言で民衆を惑わす道士であり、風を呼び雨を呼び、死者を蘇らすことができると言い、一般民衆が彼を信頼し、又いささか彼を畏れ、次第に国師から位を改め国君となり、彼のお札や旗の類は神器と伝国の宝となった。どんなに能く聖能く神、允（まこと）に文允に武たる皇帝でも、一たび原形を照らし出されるや、ただの賽康節[ii]のような人間でしかない。まだ軍師にはなれるかもしれないけれども、要するに君師になる資格はないと思う。君は臣の綱であるというのは、今では時代遅れで、少なくとも知識階級では要するにこの点ははっきりしている。皇帝というものの発生はもともと偶然ではなく、当時の文化過程ではまさに必要且つとても有益であった。だがちょうど赤子のおんぶ紐のようなもので、少し大きくなると手足の束縛になり身に着けにくい。著者は第三講で次のように述べる。

「魔術という職業が野蛮社会の制度に影響を及ぼすと、たいてい統治権は結局最も才能のある者の手に帰す。これはつまり権力が多数から一人に転移したわけで、また民衆政治から――実はすなわち老人たちの少数政治から独裁政治に転移したのである。けだし野蛮社会は元老会議によって率いられるのであって壮年男子全体が管理するのではない。こうした改変は、原因がどうであれ、あるいは上代の主宰の性質がどうであれ、要するに有益なものであった。君主の勃興は、人類が野蛮状態から離脱する上でほとんど必要条件となった。世上には習俗と伝統に束縛される、君たちの言う民主的な野蛮民族のような人間はいないし、また他の社会のように進歩がゆるく困難な者もない。野蛮を最も自由な人類と考える旧説は、まさに事実と相反し、野蛮人はそれとはっきり分かる主人の奴隷ではないけれども、過去に対して、先祖の霊魂に対して、彼は完全な奴隷であって、過去と先祖の霊魂は生から死まで彼にくっ付いて、鉄棒を取って彼を統治している。およそ過去と先祖の霊魂がやることは全て模範であり、不文の法律であり、彼は盲目的に黙って従わなければならない。だから才智ある人にはわずかな古い習慣をも改革できる機会は

絶無である。最も腕の立つ人は最も弱く最もバカなものに引き倒される。誰も這い登ることはできないが、誰かは倒れることができて、自然と低級なものが基準になるからである。……人間社会が発展する勢力が一旦始動すると、（これはいつまでも圧力とはならない）、文明の進歩は比較的急速になる。一個人が崛起して大権を握ると、彼はその一生にかなりの改革をすることができる。これはそれ以前では若干年代の時間をかけてもやり遂げられなかったことである。しかももし彼が特別に智慧と精力のある人であれば、自ずとこうした機会を利用するはずである。たとい暴君のでたらめな行為思想でも役立つところがあって、かの重苦しく野蛮人の身を圧迫していた習慣の鎖を壊すには足りる。……

これは決して過言ではない。上古の専制政治は人類の良友であり、且つまた、聞けばいささかおかしく聞こえるが、自由の良友であった。最も絶対的な専制、最もひどい暴政の下でも、かの表面は自由らしく見えるが、個人の状況が揺り籠から墓場まですべて習俗という鉄の鋳型にはめられた野蛮な生活に比べると、もっと自由行動の余地がある、つまり自由に自分の思想を考え、自己の運命を決めるという。」

ハリソン女史（J. E. Harrison）はその『ギリシア宗教研究の結論』[iii]の「魔術師と神皇」という一節で、簡略に言及する。

「この改変は損失のようである。成人の民主団体の統治が一人の独裁君主に代わったのだから。しかし歴史は至る所で証明している、本当の自由は才能のある個人が崛起して権力を独占すると同時に発生するのであって、全部落の民治は一個の空名に過ぎず、実は元老専制（Gerontocracy）の暴政であり、何人かの老人が青年に訓戒を授け、彼らを脅迫して部落の伝統を受け入れさせるのである。」

元老政治が専制よりもっと有害であるとは、現今聖教を高唱し、若干の老人が中国を統治している時代にあっては、この言葉は思わず知らずとても耳に障るように思う。今ではわれわれは当然もう明主は夢想しないが、族長はさらに喜ばしいとは思えないし、国民大会も別の元老専政である。なぜなら最も弱く最もバカなのがまさしく老人の正統の子孫であるからだ。事実と科学は決してどのようにも楽観的でない。わたしはこの小冊を読んで思わず悵然となり、まるでアラビアの水夫シンドバッドのように、背中に山中の老人に乗っかられたように思うのである。

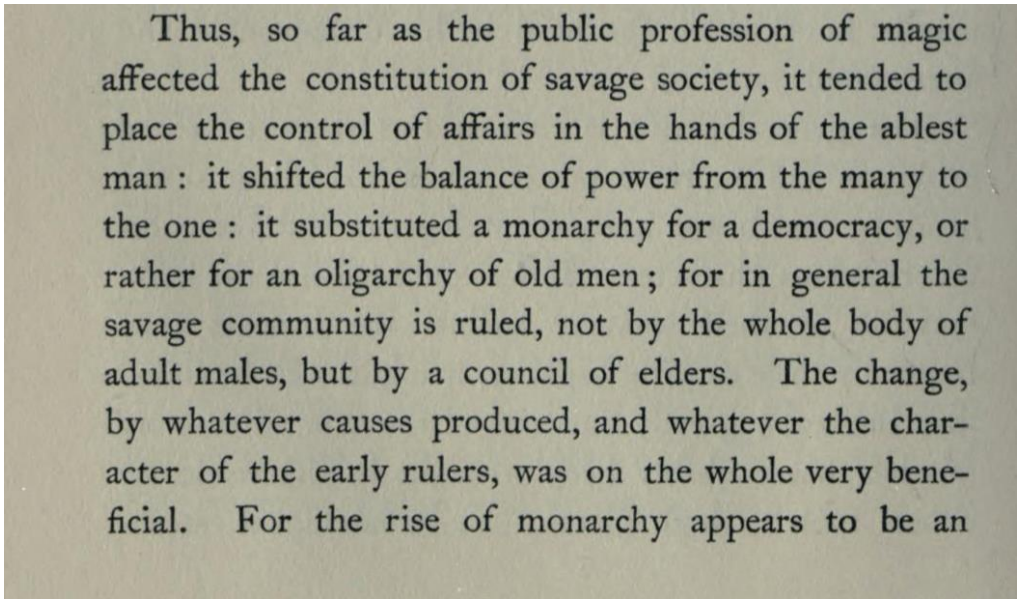
民国十六年四月二日。

注：水夫シンドバッド（Sinbad）の故事は『アラビヤンナイト』に見え、また単行の訳本もあり、『航海奇述』と言う。上海広智書局発行、シンドバッドの名はこれに基づく。

※初出：1927 年 4 月 9 日『語絲』第 126 期

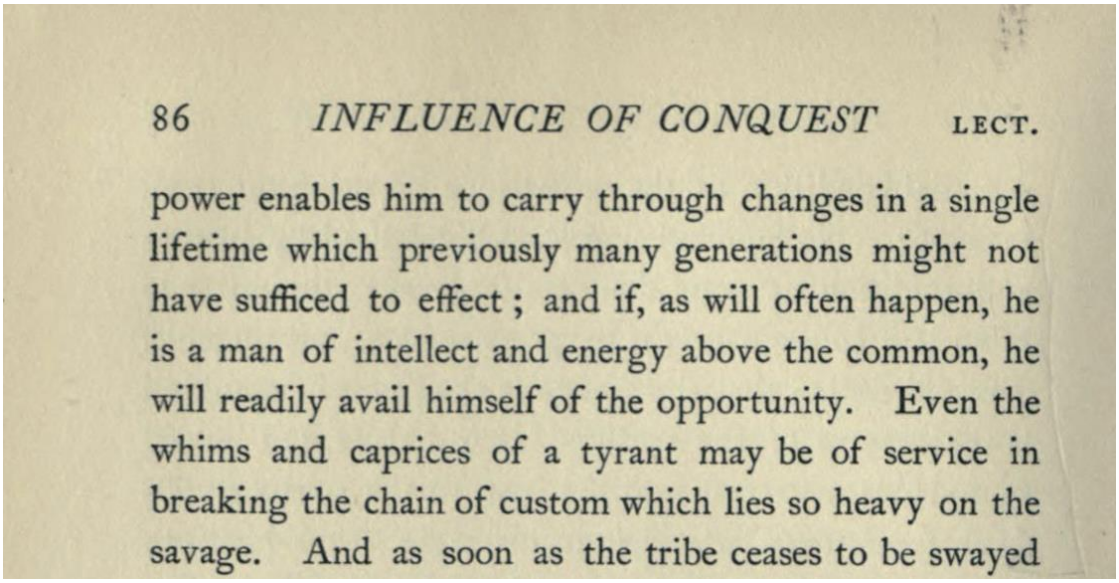
---

[i] 『古代王位史講義』　*Lectures on the Early History of the Kingship*. Macmillan and Co.1905. pp.84-87.



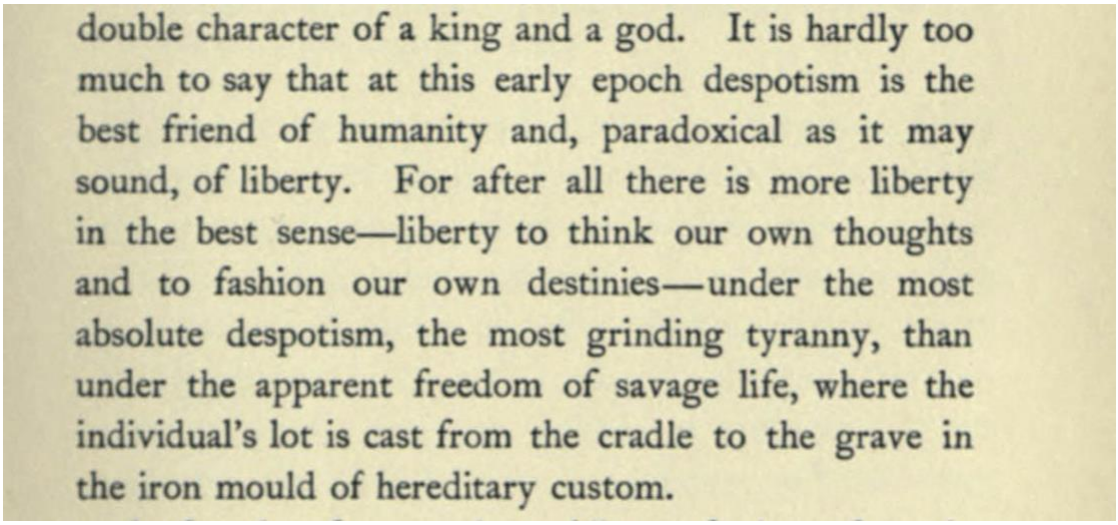
Thus, so far as the public profession of magic affected the constitution of savage society, it tended to place the control of affairs in the hands of the ablest man : it shifted the balance of power from the many to the one : it substituted a monarchy for a democracy, or rather for an oligarchy of old men ; for in general the savage community is ruled, not by the whole body of adult males, but by a council of elders. The change, by whatever causes produced, and whatever the character of the early rulers, was on the whole very beneficial. For the rise of monarchy appears to be an

essential condition of the emergence of mankind from savagery. No human being is so hidebound by custom and tradition as your democratic savage; in no state of society consequently is progress so slow and difficult. The old notion that the savage is the freest of mankind is the reverse of the truth. He is a slave, not indeed to a visible master, but to the past, to the spirits of his dead forefathers, who haunt his steps from birth to death, and rule him with a rod of iron. What they did is the pattern of right, the unwritten law to which he yields a blind unquestioning obedience. The least possible scope is thus afforded to superior talent to change old customs for the better. The ablest man is dragged down by the weakest and dullest, who necessarily sets the standard, since he cannot rise, while the other can fall. The surface of such a society presents a uniform dead level, so far as it is humanly possible to reduce the natural inequalities, the immeasurable real differences of inborn capacity and temper, to a false superficial appearance of equality. From this low and stagnant condition of affairs, which demagogues and dreamers in later times have lauded as the ideal state, the Golden Age, of humanity, everything that helps to raise society by opening a career to talent and proportioning the degrees of authority to men's natural abilities, deserves to be welcomed by all who have the real good of their fellows at heart. Once these elevating influences have begun to operate—and they cannot be for ever suppressed—the progress of civilisation becomes comparatively rapid. The rise of one man to supreme



86 *INFLUENCE OF CONQUEST* LECT.

power enables him to carry through changes in a single lifetime which previously many generations might not have sufficed to effect; and if, as will often happen, he is a man of intellect and energy above the common, he will readily avail himself of the opportunity. Even the whims and caprices of a tyrant may be of service in breaking the chain of custom which lies so heavy on the savage. And as soon as the tribe ceases to be swayed



double character of a king and a god. It is hardly too much to say that at this early epoch despotism is the best friend of humanity and, paradoxical as it may sound, of liberty. For after all there is more liberty in the best sense—liberty to think our own thoughts and to fashion our own destinies—under the most absolute despotism, the most grinding tyranny, than under the apparent freedom of savage life, where the individual's lot is cast from the cradle to the grave in the iron mould of hereditary custom.

[ii] 賽康節　未詳。ここは人名を示す傍線が引いてあるので、固有名詞であることは確かである。宋代の学者邵雍（字は堯夫、謚は康節）は『易』に造詣が深かった。「賽」は競う、占いにかけては邵雍とどっこいどっこいという意味。邵雍ばりの占い師という一般名詞が特殊化したものなのか。周作人の「往昔」の詩に「邵堯夫」というのがあって、その最後の聯に「後世の賽康節、幟を掲げて江湖を走らん」とある。ただし刊本の『知堂雑詩抄』は「賽」を「寒」に作る。なお明代の白話の色情小説『八段錦』には盲目の占い師の渾名として出る。

[iii] 『ギリシア宗教研究の結論』*Epilegomena to the Study of Greek Religion.* the Medicine-man and King-God. Cambridge University Press 1921. P.21.

It may seem at first sight to be of little consequence whether magical functions were distributed among a group of initiated men or focused in the "person of a single king." Possibly even the transition might seem a loss. For the dominance of a democratic body of full grown men we substitute a single autocrat. History has however shown everywhere that real freedom begins with the emergence of the gifted individual, the democracy of the whole tribe is but a democracy in name, it is really the tyranny of a gerontocracy, of the old men who initiate the young men and forcibly impose the tradition of the tribe. With the medicine-king arose a certain though very limited scope for the forces of personality and also, as the medicine-man was the depository of such experimental science as the tribe possessed, his elevation to the

## 93　雨乞い

北京の軍・民の長官が多くの和尚を率いて雨乞いをしたことは、各新聞が皆報じたことだ。『順天時報』はその上官僚紳士が並んでひざまづく写真を載せていて、褒めているのかくさしているのか分からないが、ともかく先日その新聞の衛道特刊、すなわち春の孔子の丁祭の写真を思い出させ、中日両国の帝制思想の濃厚さを感じさせた。

宗教的感情は永遠のものかもしれないが、宗教の形式は社会・時代の産物で、変化する。上古の時代にはただ家長のみが全権を握る人で、その頃の宗教も魔術でしかなく、彼自身が魔術師であり、自然を制御して生存を保障するのは全て彼の仕事で、その中の重要な一つがつまり「雨降らし」であった。帝制が成立すると、雨降らしの職務は酋長に帰し、（彼はもともと魔術師が変わったものであるから、）再び転じて祭司に属し、宗教が魔術に代わって起こると、雨降らしはもう完全には「感応術」の原則に従って太鼓を叩き水を撒いて雷雨を象徴したり、あるいは令牌呪文で強制的に執行するということはなくなり、コメツキバッタのように跪いて叩頭し、玄穹高上帝にご恩寵をおねだりすることになり、こうして自力の雨降しから一変して完全な他力の「雨乞い」となった。当初は家長の観点で、自然あるいはその霊鬼（Daimones）はみな彼と平等だと思ったが、彼には彼らを指揮制御する力があった。後からの観点では、臣民奴隷であり、鬼神は皇帝の親父であり、でなければ彼の伯父の兄弟で、要するにすべて主人を以て論じなければいけないことになった。帝制はかなりの所にまだ存在し、ある所ではすでに廃止になった。しかしその影響はまだ大きく、こうした主人・奴隷関係の宗教観念は十分堅固に存在する。日本は言うまでもなく、中国の大多数もやはりまだ天帝の摂理と跪拝の効力を信じている、――中華民国は天廷に対してまだ謹厳に帝制を守っている。（ある青年たちが名刺に小さな制の字を印刷する*が、それは別の問題で、ちょっとした粗忽に過ぎない。）ちょうど中国の従来の「会党」制度の大半が崩壊した家族主義の補償の要求であるのと同様に、民国以来勃興した同善社といった類いのものは、わたしから見れば、やはり多くは帝制に対する追慕の非意識的な表れで、復辟が絶望なので、現世以外に満足を求めるしかなく、天上から皇帝およびそれに付属する不測の恩威を探し出したものである。わたしは反宗教派ではないが、こうした君主制度の宗教儀式はあまり好きではない。無論どの教派に属していても。これは時に応じて改変できないだろうか。主僕隷属から変じて恋人のような関係になることはできないだろうか。ある人は言う。宗教的要求は第一には卑下である、と。これは無論そうである。だがわたしは思うのだが恋人の間の卑下は時にはとても充分ではないだろうか、しかも君臣よりもさらに自然でさらに徹底している、と。そうだ、男女の間の専制はおそらく暴君よりひどいだろう。だがこれは両方がそう願うものである。だから歯（とし）を没（お）わるまで怨みなしなのだ。人間にもし専制を好む本能があるなら、この方面で消し去ることができ、社会の帝制の空気も減少し、また善からざらんや。

附記　最後に言うところの専制は、ただSadisticとMazochisticの傾向を言うに過ぎない。合わせて声明する。

民国十六年六月一日。

※初出：1927 年 6 月 11 日『語絲』第 135 期

---

*小制字　親の喪に服することを制と言う。三年の喪に服していることを示すために「制」の字を名刺に印刷する風習があった。

## 94　再び雨乞い

六月三十日の『世界日報』は長辛店通信を載せている。「夏に入ってから、日照り続きで雨が降らず、秋収の望みがなくなりそう、昨日長辛店の紳士商人らは各界を連合して、三日の雨乞いをした。雨乞いの儀式は、寡婦二十四名、童男童女各十二名で、大籠に竜王を載せてデモをし、人を使って二人のバカに扮し、各商店は水で彼を撃ち、鼓楽天に喧しく、とてもにぎやかであった。」

前回は北京でも一度雨乞いをやった。儀式は多くの紳士商人が列をなして地面に跪き、多くの和尚が鳴り物入りでお経を上げた。今度やったのはもっと奇妙だ。寡婦が二ダース、童男童女がそれぞれ一ダース、バカが一組み、彼らの役割は説明がないけれども。案ずるに紳士商人は貴重なものだから、それが長跪して恩寵を請えば、自ずと天廷を感動させ、甘雨をお恵み下さるに足る、理由はとても充足している。だが長辛店の連中には、どういう意図があるのだろうか。スッポンに水をかけるのは、多分古代の雨乞いにヤモリ〔イモリではないか〕を用いた名残だろう。それは水族で多少とも龍王敖広と少しは関係があるから、ヤモリに一声ことづけてもらうことはできる。だがかの全部で四ダースの寡婦と童男童女はどうか。わたしの推測だが、これは「日照り」を代表するのではないか。経書には「大旱に雲霓を望むが若きなり」と言っている。あるいはかの大勢の人はそういう意味を表しているのではないだろうか。江紹原先生が夏休み中に少し時間を割いて雨乞いと性の問題を研究されんことを希望する。きっととても面白い結果が得られることだろう。　　民国十六年七月三日。

※初出：1927 年 7 月 16 日『語絲』第 140 期

## 95　「半分春画」

中国人の頭がどのようかは分からないが、理性が大半欠け、情趣は全くなく、彼に何を言ったところで、理解できないばかりか、反ってかき混ぜるだけで、めちゃくちゃになってしまう。両性に関わる事については特にだめだ。中国の多数の読書人はほとんどみな色情狂で、女という字を見ただけで目尻が下がり、獣相を表す。これはまさしく道学を講じた自然の結果であって、なんの不思議もない。だがこれによってある種の事柄、特に芸術上のものは、中国では具合が悪くなった。最も明らかなのがいわゆるモデル問題である。孫聯帥傳芳がかつて美術学校で「パンツを穿かない娘」を見ることを禁止したが、今ではいくつかの新聞の尻馬に乗った文筆屋も諷刺しており、こうした誨淫の悪化に不満である。風教を維持するのは無論間違いではない。しかしわたしから見れば、彼らは裸体画と春画を、裸体と女陰を一つの物だとしているようだ。これはどうしても連中の頭脳のあまりに単純なのに驚いてしまう。中流の人士がよく裸体画を称して「半春」と言うのを聞くが、やはり一証である。だがこういう人間はまだしも判断力があるようで、だからすでに半分と半分でない違いがあるのだ。最近天津の新聞で一篇の文章を見た。作者によれば、裸体の描写は中国には古すでにこれありで、『雑事秘辛』などはすなわちそれであり、現代の絵画とけだしかなり近いと。わたしの絵画史の知識は極めて浅薄だが、わたしの知るところでは裸体画で女陰の部分を細密に描いたものは聞いたことがない。インドのヨニ崇拝者、及び、かの、相愛者は、それは別の問題だから、論じなくてよい。一般の教養ある人間について言えば、女陰は美しいとは言えないだろう。強いて醜いとすることもないけれども。要するに美術上はそうした表現はとても少ない。率直に言うと、美術上に表現するのは女性美の裸体であって女陰ではない、魔術的な装飾、例えば西洋に通用する蹄鉄と前門外の某銀製品屋の火除けのお札のほかは。フランスの文人グールモン（Remy de Gourmont）が著した『恋愛の物理学』第六章「雌雄異形」の三に言う。

「女性美の優越は事実である。もし強いて説明を加えるならば、それは唯一の原因である線の均整にある。なお女体を美しいと思わせるものは、すなわち生殖器が見えないという事である。けだし物としての生殖器は、使う時はもとより多いが、使わない時は余計になるのも、やはり欠点である。この物を備えている理由は、もともと個人のためではなく、すなわち種族のためである。試しに人類の男子を見よ、動物と違って直立しているので、あまり適当ではなく、人と組討する時はたやすく敵の伺うところとなり、目に触れる場所では、特に余り物で、全身の輪郭美を真ん中で破壊する。もし女子であれば、線の諧調が男子に比べて実に幾何学的にさらに完全である。」

これに従えば、芸術上裸体の女性が美しいわけは、一つにはもちろん異性の牽引により、二つは線の均整により、三つはまた特別に生殖器が露わでないからである。中国人が裸体画を見て解剖書の局部図と同一視するのは、まことに常人と違い、目にX線があると言える。新聞には清の粛王の娘金芳蕤が性的倒錯だと報じて、みんなはとても面白がり、群起して語るが、実はこれも何も奇とするに足りない。中国の男子の多数はみな性的倒錯を患っていて、その程度は同一では

ないけれども、ともに「色情狂」（Satyriasis）の患者であることは疑いを入れない。

民国十六年二月二十六日。

※初出：1927 年 3 月 5 日『語絲』第 121 期

## 96　野蛮民族の礼法

三年前の筆記に次のような一条がある。イギリスのフレイザーが書いた『プシケの仕事』(Frazer, *Psyche's Task*) を読んだ時に書いたものの一つである。

「野蛮な礼法には親族に対して忌避の例がある。アフリカのバントウの諸部落の男子はみなその妻の母を避け、それが妻の一党に及び、お互い会うことはできない。このほかマサイ族などの諸族もそうである。アメリカのカリフォルニア半島及びチリの土着民、英領のギニアのカリブ人などもまた同じで、妻の一党のほか〔姓を異にする〕従姉妹に及ぶが、ただ異性に限られる。スマトラの土着民もまた妻の一党を避ける。その意図はたぶん災厄を未然に防ぐもので、著者はわざわざ欲しくなるものを見なければ心が乱れないと解している。バントウ族のアカンバ人はさらに娘が成長してから嫁にゆくまで、父がその娘を避ける。スマトラのルーブー人は舅と嫁は顔を合わせない。カロリン群島の土着民は、父と娘、母と息子、兄弟と姉妹が互いに避けて、同座しないし、杯盞も共にしない。男子は成長すれば外の Fel（未婚の男子の共同の宿舎〔若者宿〕）に泊まる。メラネシア群島の青年も外舎に泊り、その母と姉妹を避け、互いに名前をよぶのを避け、そして名前の一部（名前ではないが中にその一部が含まれている一切の言葉）もそれを忌む。母と息子は食べ物を親授せず、地面に置いて自分で取る。又スマトラのバッタ人の忌避の例もやはり同じである。著者はその著『族徽と外婚』（*Totemism and Exogamy*）を引いて言う、“バッタ人の忌避の習俗は、道徳の整粛から出るのではなく、まさに道徳の頽廃弛緩から出るのである。バッタ人は男女が一人で遇うと、すぐに私通が成立すると考える、……オランダの宣教師の報告ではかつて、こうした規則は跡づければでたらめに近いが、その土地では実に必要なのであると、言われた。”案ずるに中国の古代に定めた男女七歳にして席を異にす、授受は親しくせずと、『孟子』の、嫂の溺るればこれを援(たす)くるに手を以てすなどの文を考え合わせると、礼俗もまさに相近く、又今の婦女もなお多くがその名を言うのを忌むのは、まさに名は身体の一部であるからである。感応魔術の一部から全体に及ぶという律によれば、縁によって姦淫をなし易いのである。」

この筆記はもともと発表する考えはなかったのだが、最近浙江省の議会の誰かの書いた第一師範の男女共学の計画を検査した議案が、極力男女の隔離を主張しているのを読んで、各地の忌避の例を、彼らに参考までに紹介してやろうとしたのである。もし彼らがこのやり方がオランダの宣教師が言うように中国では「実に必要」なのだと認めるならば、わたしも連中とは多弁しない、だが最後に重ねて一言言明しておきたい。男女の隔離という模範礼法を実行しているのはスマトラの土着民たちである。

以上は民国九年の冬に書いて、『新青年』八巻五号に載せたのは、すでに七年前のことである。今この時になって、筆記を書いた十年ののちに、こうした礼法が中国には実に必要であると思ったから、重複を厭わずもう一度公布することにした、——今回は少しも諷刺の意図はなく、確かに真面目である。というのは、わたしは思うのだが、中国人はどうしてスマトラの土着民たちどころであるものか。

中華民国十六年九月十七日。

※初出：1927 年 9 月 24 日『語絲』第 150 期

## 97　ユダヤ人からカトリックまで

「彼女は父の畑に行って、
赤くて緑のリンゴを一つ摘み取った、
それでもってあのかあいいヒューを誘い、
部屋に引き入れた。
　彼女は彼を連れて一つの暗い門を過ぎ、
次々と九つの門を過ぎ、
彼をテーブルにおいて、
豚のように彼を捌いた。
　初めには濃い濃い血が流れたが、
それからは薄いのが流れた、
それから心臓の中の鮮血が流れ、
中にはもう残りがなくなった。
　彼女は鉛の延板で彼を巻き、
彼をぐっすり眠らせて、
聖母の井戸に投げ捨てた
三十丈の深さの井戸に。」

これは英国の叙事民歌ヒュー（Sir Hugh）の第 6 節から第 9 節である。全篇は十七節で、リンカーン地方で二十四人の男の子がクリケットをやっていると、球がユダヤ人の家に落ち、ヒューが中に入ると、ユダヤ人に殺され、その母が死体を求めて葬ると、お寺の鐘がひとりでに鳴って、空中に読経の声が聞こえたと云う。第 13 節は老母が息子を探すところを述べ、ことばはすこぶる凄惨で、最も世に知られている。

「彼女がユダヤ人の畑に行き、
彼がリンゴを摘んでいるのではないかと思う、――
もしお前がここにいるなら、わたしのヒューよ、
どうかわたしにものを言っておくれ。」

これは 1255 年（南宋の理宗の宝祐三年）の事だそうで、イギリスの詩人チョウサー（Chauser）が『カンタベリ物語』の中でも尼さんの口を借りて述べていて、それでもっと有名になった。この話は文学としてみれば、すこぶる面白いが、中には極めて野蛮な迷信を含んでいる。ユダヤ人がヒューを謀殺するのは、いったいなぜか。彼を十字架に釘付けにして、キリストを愚弄するのだと言う人もいるが、普通は男の子を殺して鮮血を抜き取り、過越の祭の子羊の代わりにするのだと言う。みんなは知っている「出エジプト記」に、エホヴァがイスラエル人の仇敵を殲滅するために、自分たちの人民に羊の血を門に塗って印として、彼が襲っても災害を加えないようにさせ、以後毎年この日の祭を行うようになったことを。今回は順番がヒューに回ってきて、無辜の

子羊の身代わりになっただけなのだ。このちょっとした話は大したことはないが、事実上では少なからぬ悲劇が起こった、ヨーロッパにはハンガリーやロシアのような半開化のところがあって、最近までまだユダヤ人がキリスト教の童男童女をさらって行って血を抜き神を祀るということが信じられ、何度も反ユダヤの惨殺行為を引き起こした。ユダヤ人が古代に人間を土地神を祀るのに使ったのかどうかは、わたしは知らない、あるいは使ったとも言えないかもしれない。だが中世以後はそんな事はなかったようで、少なくとも虐殺されたことについてはこのところ要するに証拠がなく、その責任は完全にキリスト教徒を迫害したものの肩にある。

キリスト教は博愛の宗教である。だがそれにも古い伝統があって、神がある時は極めて厳格で、しかも芝居に敵役がなくてはならぬように、悪魔というものを保存している。そこで魔法が聖道と対立し、文化上の一大障碍に変わる。「出エジプト記」二十二章十八節には、「魔法を行う女人は生かしてはならぬ！」とある。魔法があると信ずれば、自然と反魔法の運動が起こる。しかしその醜悪さも決して魔法をくだらない。もし世界に本当に魔法があると言うならば。英国のレッキー（W.E.Lecky）によれば、フランスの宗教裁判所はかつてド・ルースで魔法をおこなった者四百人を同時に処刑し、イタリアのコーマ省内では一年のうちに全部で千人を殺し、ジュネーヴ地方では三ヶ月以内に魔法をおこなった者五百人を焼き殺したという。この帳簿からすれば、ユダヤ人がヒューの血を絞ったと信じてリンチを加えた一件は、大した事ではないばかりか、むしろ当然だとなってしまう。

世界は要するに進化するのだ。近二三百年来思想は解放され、学術は発達し、宗教上の迷信も消え、その博愛という本領が現れ、現代のキリスト教はすでに中世のとはかなり違ったものとなった。しかし運命とは最も奇妙なものだ。以前は田舎の低脳な老婆やユダヤ人が魔法を行っていると言って探し出し焼き殺した人が、今では逆に魔法を行っていると指弾され、極めて大きな反対を引き起こしている。「洋鬼子（ヤンクイツ）」が心臓肝臓目玉をくり抜き薬にするという伝説が中国では何十年も流行り、今でもまだ福州の天主教教士が孤児を殺して薬に練ったというニュースが出て、当地の学生界がそれを信じて直接行動を起こしたばかりか、北京の新聞界でも深く信じて疑わないらしく、記事および論説まで載せて、憤激の意を表した。この事件は実際あまりに奇妙だ。キリスト教の中世における狂信的な迫害を思い出し、現在ひっくり返って消えぬ悪名を受けているのをみると、まさに「請う君甕に入れ」*という例の言葉にぴったりで、面白いと思うかもしれない。しかしわたしの常識（もちろん間違う時もあるが）からすれば、どうしても現代のキリスト教徒がほんとうに「孤児露」を精製することなどありうるとは信じられない。一方同胞がまだ人肉が薬になるなどと信じていることが、また身体中を不愉快にさせる。魔法があると信じる人間にしてはじめて魔法を行う者を死刑にすることができるし、自分から人が人肉で薬を作っていると言うのも、つまり自分から人肉が薬になると信じているのである。「国粋」の医書にどんなに天霊蓋・紫河車・紅鉛などの効用を称えていようと、スウィフト（Swift）がいかに貧しい父母に一歳になった子どもを燻製肉屋に売るよう勧めようが、梁山泊には人肉饅頭があろうとも、現代医学の上で孤児の肉が何か治病の効力を持つなどとてもではないが信じない、――もしわれわれ素人の話が信じられないなら、専門の医学博士に訊くがよい。十幾つかの死体をもって福州城に入ろうと

したのはいったい何のためか、これらの死体はいったい謀殺されたものかどうか、そういう事は当地の合法的な機関によってきちんと捜査解明されて、真相を明らかにされねばならず、今は速断できない。だが義和団以前の迷信がいまでも通行しており、しかもまだ一部の知識階級の信用をかち得ているというのは、怪現象、あるいは不祥の予兆と言わざるを得ない。こうした話を文芸の材料にすると、ヘロデ時代の「嬰児殺し」のように、面白くなくはないが、もし事実だとして、少しも疑わないで信用するなら、中国の知識階級の頭脳はあまりに幼稚でないとすれば、やはりあまりにも老いすぎているのだろう。民国十六年一月二十六日。

※初出：『談虎集』

---

*「請う君甕に入れ」　張鷟の『朝野簒載』に載る話で、周興と来俊臣は武則天の酷吏で知られた人物であるが、周興が密告され、武則天は来俊臣に内密で周を調べるように命じた。そこで来は周を呼んで、囚人に白状させるにはどうすればよいかを聞いた。周はそれは簡単だ、大きな甕を用意して囚人を中に入れ、周囲から火で炙るのだ、そうすれば簡単に白状すると。そこで来は大甕を用意し周囲を火で炙り、さあ君中に入ってくれたまえと言った。周はやむなく事情を吐いた。以後その人の法で以てその人を治めることを意味するようになった。『新唐書』周興伝にも記載がある。

## 98　反宗教運動

この運動がいまでもあるのかどうかわたしは知らない。もしあるなら、それを語ることができるし、ないなら、それを語っても構わない。どのみちあったのだから。

彼らがもし一切の宗教を非とするなら、それもなかなか風趣があり、筋も通る、ちょうど哲学の無政府主義のように。人間の宗教的要求がすべて消滅しうる日が来るのかどうかはわたしは分からないけれども。

彼らがもし一派の宗教を非とするだけで、しかもまた中外新旧をもって境界を引くなら、それは復古潮流の一支流の宗教方面での現れに過ぎない。

最近われわれは北京でエナメルペイパーに活字印刷された唐代の国師、インド密宗の不空和尚が旨を奉じて訳した『護国般若波羅密多心咒』を受け取った。その詞に云う、(北京音)「阿拉代咖代阿拉大咖代嗎哈普拉経 娘 八拉密特蘇哇哈。」「毎朝少なくとも敬虔に百と八遍誦唱し、次々と勧誘誘導すれば、難を免れ福を獲、功徳は思議すべからず」ということだそうである。こうしたエナメルペイパーのビラを撒く善人居士は自然と資本家の色彩を帯びるはずがないが、ただ科学に合うかと言うとおそらくはそうとは限らない。宗教を非とする者がこうしたことに少しの非難も加えないのは、それ（仏教）が古いために寛容にしているのだろうか。本来はやはり外来の異端なのだけれども。

同善社などなどの「道教」――李耳〔老聃〕先生の教派ではなく、Shamanism の意味として使う――の復活はみんなの知っている事実であるのに、宗教を非とする者は一矢も加えようとする気配がない。「孔教」も復活しそうで、公私立学校の中ではそのうち教会学校のように礼拝を強制され、一二クラスの「査経班」〔経書を暗記しているかどうかを検査するクラスか〕が設けられるばかりか、経書を唯一の授業とするだろう、小学から大学に至るまで。宗教を非とする者も耳にしているところではないか。『群強報』[i]にはすでにはっきりと記載されている、関外[ii]はすでにそうしていると。およそ事柄は必ず関外より関内に入って来ることは、歴史がはっきりと我々に告げている。（これは漢族の醜い奴隷根性である、）だから孔教も再び山海関から入って来ることは疑いなしである。宗教を非とする者と反孔先生はどう思っているのか。――吾過てり！吾が言にして信ならば、中国のいわゆる宗教を非とするのは実は復古潮流の一支流であって、しからばその運動の（非意識的な）目的はもともと槍を持って前駆して聖道のために露払いをするに過ぎないので、どうして戈を逆しまにして敵対するような事があろう！中国の非宗教運動はつまり孔教復興の前兆であって、わたしは敢えてこの大胆な予言を提げて民国十四年内の事実に挑戦したい。

民国十四年四月。

※初出：1925 年 4 月 2 日『京報副刊』第 107 號

---

[i] 『群強報』　民国期北京における有力な大衆向けの小新聞。

[ii] 関外　山海関より外、東北三省、元満州族の地。

## 99　反宗教について

一九二二年の春に中国に反宗教大同盟が起こり、「撃ちてし已まん」の気勢があったが、わたしはそれを見てよしとせず、いささか反対を表明し、一頃は世の笑い物になったが、いまでもまだ……の連中にはあてこすりの材料にされているが、わたしは決して隠してはいないし、いまでもまだそういう態度である。宗教は個人のことであり、信仰も個人の自由な行動の一つに過ぎないと思う。だがこの自由がもし政治法律の許可保護するところとなれば、同時にまた当然その掣肘を受けなければならない。一切の行動は他人を妨害しないときは自由でありうるが、この範囲を出れば相当の干渉を受けねばならない。これは世間の通例で、宗教もそうだと思う。もちろんそれが宗教であるがために特に優遇される理由もないし、またそれが宗教であるがために特に軽視される必要もない。たとえば一個人がエホヴァを信仰し、自分の教会で祈るのは、当然彼の自由であるべきだが、彼がもし道端で説教し、強迫誘惑して、人に入信を強いるなら、警察は当然禁止すべきである。一個人が家で三官素〔道教の精進料理〕を食べ、福の神・菩薩を拝むのは、不問にしてよいが、もしお札や呪いで人の病気を治そうとしたり、真夜中に神を祀って爆竹を鳴らしたりすれば、しょっ引いて取り調べなければならない。わたしは何の宗教信者でもないから、決して宗教を提唱しないが、同時に宗教を取り消すことは不可能だと信じている。わたしの考えはただ信仰を個人の行動の一つとして、別の行動と同じように政治法律の保障と制裁を受け、個人を満足させて他人を妨害しないようにと思うだけだ。前回江紹原君が馮友蘭博士の『人生哲学』を批評した時、紹原に言ったことがある。わたしはすこぶる馮博士の意見に賛同する者だ、違うのは馮博士が哲学を根拠とするのに対して、わたしはただ自分のこの最も平凡なわずかな常識に依拠するだけだと。

宗教を非とする者がもし迷信を除去し科学を擁護するために、宗教というそれ自身を排除撲滅しようとして、教会を没収したり、寺廟を破壊したりするなら、わたしは必ず反対し、やはりわたしのあの中庸を持ち出してこのあまりに理想的な破壊運動に代替するよう主張する。しかし、もしこれが積極的な目的であるというのではなく、今キリスト教に反対しているのは、ちょうど英貨不買等の手段と同じように、ただ反帝国主義の手段の一つだとするのならば、それはしかし別の問題である。英貨不買の理由は、決してそれがある一つの産品であるからではなく、英国の産品であるから、だから買わないのであって、今の反キリスト教の運動がもし反帝国主義の手段に重点を置き、決してそれが宗教であるために反対するのでないならば、宗教を非とする意見は相変わらず存在するけれども、そこでは中身が看板と釣り合わず、少しも役に立たないことになる。われわれはキリスト教自体はやはり博愛の宗教だと信ずるけれども、理論と事実は別のことで、英国は五卅以来、上海・沙基・万県・漢口などで次々と暴虐を繰り返し、恥ずかしげもなくキリスト教国を自称するのに、中外のどの教会も一つとして国境を打破して反対を表すものがいないのも、事実であるから、いま中国が華洋の帝国主義と死闘を繰り広げる時、一つの理論・一つの経書によって、中国人にキリスト教と帝国主義がもともとはっきりと別物だということを理解させることは、この時にあってはおそらく容易な事ではないだろう。城門失火して、殃い池魚

に及ぶ。キリスト教にとってはもちろん謂れのない厄災と言わざるを得ないが、仕方がない。しかもこの責任はやはり英国が負うべきで、少なくともヨーロッパ列強はその責任を分担すべきである。

わたしの言う反キリスト教運動とは、政治的見地から、組織的な、責任ある機関による、外国の宗教団体の事業の進行を破壊あるいは阻害することを指すのであって、福州や厦門一帯の反教事件などは、純粋に愚民の暴動であるから、当然この中には入らない。宣教師が孤児を毒死させたり、目玉を抉って薬にするなどと言うのは、すべて義和団時代の思想であるのに、いまもって流行り、しかもまだこのように大きな勢力を占めているのは、実に寒心すべきことである。この点に、現在政治的な反キリスト教運動の人は大いに考慮を払わないではいけない。この劇薬には確かに余毒がないわけではない。

一九二七年一月二十四日、北京にて。

※初出：1927 年 2 月 5 日『語絲』第 117 期

## 101　二匹の幽鬼

われわれのこころには Du Daimone が住み着いている。二匹の――幽鬼と言ってよい。わたしが幽鬼と言うのに躊躇するのは、連中は決して人が死んで化けた幽鬼ではなく、また宗教上の魔、善神と悪神、善天使と悪天使でもないからである。連中は一種の神と言うべきかもしれないが、それはどうもあまりに尊厳にすぎるようなのだ。だからやっぱり連中を少々貶めて幽鬼と呼ぶ。

この二匹とは何か。その一つは紳士鬼、その二つは流氓（ごろつき）鬼である。陽明学の友人によれば、人間には何かの良知があると言い、宣教師は霊魂があると言い、公理を維持する学者たちも良心に憑ると言うが、わたしはそんなものはどれもないように思う。あるのはただこの二匹の幽鬼だけで、そこで我々の一切の言行を指図している。これは一種の双頭の政治で、二人の執政はやはり意見があまり合わない。わたしは一つの鐘のようにその中間で揺れている。時に流氓が優勢になると、わたしは彼について彷徨い、大通りや路地の全ての秘密を何でも知ってしまう。アル中や、殴り合いの喧嘩や、侮辱罵倒や、できないものはなく、全く精神上の「ゴロツキ」になれる。しかしいままさに下品になろうとすると、流氓の「開天堂」[i]などの時のように、たいてい紳士が出てきて声高に「やめろ、すぐにやめろ！」と叫ぶ。すると言うも奇怪なことに、流氓はふだんは紳士など恐れないのに、下品になろうという時になって、紳士の一喝を食らうと、どうしてだかたちまち雲を霞といなくなる。しかし決して遠くには行かず、路地の入り口や突き当たりで様子を伺い、紳士がわたしを引き連れてゆくのを見ると、淑女たちへの話し方や接し方を学び、だんだんと綺麗な話をすることから威張りかえるようになり、そこでまたしゃしゃり出て罵り散らして言う。“Nohkoh dausangtzr keh niarngsaeh, fiauletong tserntseuzeh doodzang kaeh movaeh toang yuachu !”（案ずるにこの流氓文は大半が音はあっても文字がないから、いまは拼音を使う、文句も直訳できない、大意は「この馬鹿者めが、いい気になるな、いやらしいことを面白いと思いやがって」と言うもの）これで碁盤はまた全部ひっくり返る。そして流氓の専政がこれから次第に始まる。

ノルウェイの巨人イプセンに一句格言がある、「オール　オア　ナッシング」と。物事は何でも徹底してしなければよくない。ならばわたしに最もよいのはどちらか一方に身を寄せることのようで、「身を以て国に報ゆ」るようにやれば、きっと芽が出る日が来るに違いない。一言で言えば、つまりもし「受路足」[ii]の無頼になれなければ、水平線上の郷紳になるように学ぶのである。だがわたしは多分そうはできないだろう。両者についていずれもいささか捨て難いところがあって、紳士の態度と流氓の精神を愛しているのである。紳士は「スコップはスコップだと言う」[iii]　ことを承知しない。わたしはそれも正しいと思う。若しスコップと言えばブローカーの俗悪さが出てくる。しかし他の物にして言うことを承知しないのもおおいに間違いである。わたしは文章を書く時に電報記号の八三一一〔尻・女陰〕を使いたくないが、しかし口で言わないわけではない。ただもっとよい文字が使える、時にはもっと面白いかもしれないと思うだけだ。わたしはこの二匹の幽鬼に惑わされて、確実に少なからずひどい目にあった。だが紳士の臍の周りの大きな丸と流氓の「村婦街に罵る」式の言葉との間からも、少なからぬ教訓を得たのは、要するに喜ばしい

ことである。この二匹の幽鬼が取り決めをすることができたなら、いや、連中が結婚することができたなら、もし一人が女の流氓であれば、その間には理想的な王子が生まれ、われわれのためにいかなる元首にでもなってくれたらと願うのである。

〔民国〕十五年七月。

※初出：1926 年 8 月 9 日『語絲』第 91 期

---

ⅰ, ⅱ, ⅲ 「開天堂」「受路足」「スコップをスコップと言う」　いずれもスラングだと思うが、その意味は未詳。「受路足」は人から足蹴にされることを言うか。ヤクザとしての修行。

## 102　籤を引く

近日旧稿を調べて見ると、「わたしの一番」という小文があった。前半はすでに時期遅れで、役に立たないが、後半はまだ面白く、残しておこうと思ったが、いましばらく改めてここに録して、一節の閑話とする。

今日引き出しから祖父が己亥の年〔1899〕に書いた一冊の遺訓、名付けて「恒訓」というのを見つけた。第一章に次のような一節がある。

「少年の頃三日三晩芝居を見て、くたくたになって帰った。わたしの父が、おまえは有用の精神を下賤な役者ばらに消耗されるとは、何という馬鹿ものか！と叱った。それ以後歌戯宴席に逢うと、前訓を思い出して、何とか口実をつけてさっさと帰った。」

わたしはそれを読んで思わず慚愧を感じ、まるで自分がくだらない人間を相手にするなと警告されているようであった。正人君子であろうが文人学士であろうがそういう連中とやりあうのは、いずれも何の意味もなく、皆精神のむだ使いで、三日三晩芝居を見るのと同じような馬鹿である。わたしは賢孫などではないけれども、この一節の祖訓はどうあっても身に体して力行できるし、またしなければならない。わたしを下賤な役者から離し、わたし自身の勉強をさせてくれたのだから。

わたしの仕事は何だろう。神のみぞ知る。わたしが少し知りたいと思うのはいずれも野蛮人に関する事である。一つは古い野蛮、二つは子どもの野蛮、三つは「文明」の野蛮である。わたしはまだどれがいいのか、あるいはやはり籤を引くしかないのか分からない。籤を引く、籤を引く！……どれがよいのか分からない。もし神の考えが、わたしに最後の一つを引かせることであるなら、南無三宝！また元の局面に戻らなければならない、まったく馬鹿を見るではないか。……これはしばらく放っておこう、そのうちまた会うだろう。籤を引く、籤を引く！籤を引いてからにしよう。三番目の籤だけは引きあてないように。そうすることは馬鹿だから。

これは民国十四年九月二十七日の話で、いまではもう一年半がすぎた。籤はと言えば、やっぱりまた引かねばならない。こんどは最初のを引きたい、もしできればだが。

民国十六年三月二十日。

※初出：1927 年 3 月 25 日『語絲』第 124 期

## 103　わたしが国文を学んだ経験

今まで国文の教員をやってきたが、これは実際わたし自身でもいささかおかしいと思っている。というのはわたしは国文を研究したことがないばかりか、しっかり学んだこともないのだ。ふつう教員をやるのは次の二つの方法に他ならない。あるものは自分の該博な学識を傾けることであり、あるものは経験によって得た方法を学生に伝授するかである。しかしわたしはこの二つにも共にいささか不足である。どのように国文を学ぶかという点では、根っから経験がないし、わたしが持っている経験はこのように不規則で、教えとするには足りない。こうした経験は実際に人を誤ること浅くないが、話として語るには少しは意味があり、ロマンティックな趣味も少しはあるようなので、それを書いて、『孔徳月刊』の編集者に渡し、いささか責を塞ぐことにする。締め切り期限が迫って、もう今日一日しかなく、本当に別のテーマを思いつく暇さえなくなった。次回に書くとすれば、もっと早く手を着けなければいけない。これが肝腎これが肝腎。

田舎の決まりでは、子どもが六歳になると勉強に上がる。わたしもたぶんその頃に勉強に上がった。その日は、午前に、着物を整えて、上に「状元及第」などと書いた、腰鼓型の提灯を下げ、「聡明（ツォンミン）」という意味に掛けて、生葱（ツォン）を一本引っ掛け、「孔夫子」を拝して授業に出た。先生は秀才以上でなければならず、授業は『鑑略』の最初の二句の口授と、対句の授業、「元」と言えば「相」と対し、それでお終い。これは一種の儀式で、本格的な読書となると、人によって一二年と後になる。わたし自身は何時の年から読んだのか、もう覚えてはいない。ただ就いた先生はいずれも本家の人で、最も早いのが号を花塍という、老秀才で、彼はアヘン吸いで、終日ベッドに横になっていて、どうやっても彼が立っている姿を思い出せない。二人目は子京と号し、おかしな文章を作った。試帖詩の一句に、「梅開いて泥死なんと欲す」と云う、とても神秘的だが、あとで結局気が狂って自殺した。三番目の名は言わないでよいが、彼は革命党を殺し尽くすのを職志とするもので、言行の乱暴な人であった。光復の年〔辛亥革命〕、街を歩いていて、人が駆け回って「革命党が入城した！」と叫ぶのを聞くや、たちまち足が萎えて、もう立てなくなり、近所のものに担がれて帰った。以前試験を受けて、合格者張り出しの時自分の一つ前（座席）の人が合格したのを見ると、（彼自身は無論合格しなかった）、怒り狂って、家に帰ると庭の木犀を一株引っこ抜いた。しかしこの三人の先生からわたしは何も学ばなかった。十一歳になって三味書屋に入れてもらい勉強した。それが本格的な読書のはじめであった。読んだ本もまだはっきり覚えている。一冊の「上中」、つまり『中庸』の上半分で、多分「憂なき者は其れ唯文王か」あたりから読み始めた。教室での授業は午前は習った本を暗記し、習ってない本を六十遍読み、字を書く。午後は本を六十遍読み、夕方には対句の授業はせず、唐詩を一首講義した。実は、この先生の教授法はとても寛大で、生徒に対してもなかなか理解があった。わたしは教室で三年、打たれたり跪かせられたりした罰を受けたことがない。こうして十三になった年の年末、『論語』『孟子』『詩』『易』と『書経』の一部分を読み終わった。『経』は少なからず読んだことにはなろう、多いとも言えないけれども。だがわたしは要するに字もうまく書けないし、本も見て解らず、礼教の精義ときては特に何も解らない。ズバッと一言で言うなら、以前読んだ経はわたしに取っては何の益もない。

あとでまずまず文章が書けある種の道徳観念を養うことができたのは、全部別の面から来たものである。したがって読経救国を主張する人はまことに無意味もいいところだと思う。わたし自身はいくつも経を読んだが、(『礼記』『春秋左伝』は自分で読んで、だいたいは読んだ。今ではすっかり忘れてしまったけれども。) 要するにそういう事で、何の役にも立たず、損したわけでもないけれど、ただ若干の光陰は無駄にしたかもしれない。ちょうど十四の時杭州へ行って、もう教室にはいかず、ただ祖父の傍らで八股文と試帖詩を作るのを学び、ふだんは決まりで『綱鑑易知録』を読み、『詩韻』を書き写すほかは、好き勝手に閑書を読んだ。祖父は子どもが小説を読むのを禁じなかったからである。彼は翰林であり、気性も相当ひねくれていたが、教育については特別の意見を持っていた。彼は子どもが小説を読むのを奨励し、それは考え方に筋が通せるようになると考え、機嫌がよい時にはわたしに『西遊記』のことを話して聞かせた。孫悟空がどんなにいたずらだとか、猪八戒がどんなに真面目だとか、——他の小説も非難はしなかったが、最も賞賛したのはこの『西遊記』であった。晩年家に帰っても、やはりこんな風で、いつも一族が集まる座敷の前に坐って人と話をするのだが、とりわけ一人の弟（年も六十近いかという）を捕まえては特に反復して「猪八戒」を語るのだった。まるで何か諷刺の寓意が込められてでもいるかのように。それでこの聞き役はなかなかのことでは出てこなくなった。外に出ようとするときは、まず様子を伺わねばならなかった。もしそこに「猪八戒」の話をしようと待ち構えている人がいなかったならば、するりと門を抜け出すのであった。わたしはその頃には少なからぬ小説を読んでいて、良いのも悪いのもあった。紙の上の文字を読み文字が表している意味が解る、これはこの頃からようやく始まったのである。『儒林外史』、『西遊記』などからしだいに『三国演義』に行き、転じて『聊斎志異』に行き着く、これが白話から転じて文言にゆく径路である。わたしに文言を解らせ、ほぼ文言の趣味を知らしめたのは、実はこの『聊斎』であって、何かの経書とかあるいは『古文析義』の類ではない。『聊斎志異』の後は、自然と『夜談随録』などの偽聊斎で、一変して『閲微草堂筆記』に入る、こうして旧派の文言小説の両派に入門を終え、そこで自然と『唐代叢書』にたどり着く。間もなくして「庚子」〔1900〕になった。二年目になって、祖父はわたしの科挙への正途がすでに絶望的になって、例によって幕客あるいは商人になるしかないと思ったが、わたしはどちらもやりたくなかったので、「筆を投じて戎に従う」しかなく、江南水師学堂に入った。これはもともと海軍士官を養成する学校で、国文の道とは縁が遠い。しかし総辦の方碩甫観察は国粋をとても重んじた人だったので、入学試験もとても厳しかった。わたしはまだ国文の問題が「雲は龍に従い風は虎に従うの論」で、覆試が「百世と雖も知るべき也の論」であったことを覚えている。入学してからは、一週間のうち五日は洋文クラスで、英語・科学などを含む。一日が漢文で、一日の授業は、朝は射撃、午前八時から十二時までは二教科、十時のあと休憩が十分、昼食の後は体操かマスト登り、午後一時から四時まではまた一教科、放課後は兵式体操であった。漢文クラスの時もそうだったが、ただ洋式の講堂でなく中国式ので受けた。授業は午前中に論を一篇作り、余った時間には自由に本を読ませた。程度が少し低い者は論を作る他に『左伝』あるいは『古文辞類纂』を読まねばならなかった。こうした状況の下では、たとい予言者でなくとも国文には進歩などあり得ないことが分かった。だが時の運がほんとうに幸いした。われわれ

がちょうど時間を持て余し、暇つぶしの小説がなかった時に、翻訳界が次第に盛んになって来て、厳幾道の『天演論』、林琴南の『椿姫』、梁任公の『十五の小豪傑』〔『十五少年漂流記』〕は、三派の代表と言える。わたしはその時の国文の時間を皆こうしたものを読むことに使った。そして三者の中で特に林訳の小説が最も好きであった。『椿姫』から『黒太子南征録』まで、その間に出た小説はほとんど一冊として買って読まなかったものはない。これは一方ではわたしを西洋文学に引っ張り、また一方では次第に文言の趣味に目覚めさせた。林琴南の礼教の臭みと反動的な態度は結局嫌悪すべきもので、彼の擬古的な文章も時々悪札になって、容易に青年を堕落させたけれども。わたしが南京にいた五年は、まったく新小説を読む以外になにも国文の修養と言えるものはなかった。一九〇六年南京の督練公所はわたしと呉・周の二君を日本に派遣して改めて建築を学ばせ、国文とはさらに疎遠になった。かつて突如奇想を発して民報社に章太炎が「小学」を講義するのを二年ばかり聴きに行ったことはあるけれども。総括すれば、わたしの国文の経験はたったこれだけで、この中からも、人の参考になるような、学習の方法と過程などは探し出せない。一つの事実、つまりわたしの国文はいずれも小説を読むことから来たものであるということを除いては。もし何冊か普通の文言の本を読み、ちょっとした易しい文章を書くのが、国文を運用する能力があると言えるのなら。こんどわたしが学生に国文を理解させる番になったのは、いささか困ったものだ。わたしはこれはどのように理解するのかなど教わったことがないから、どうして人に教えられよう。もし是非とも教えなければならないとすると、彼らにどうかたくさん本を読んでくれと言うしかない。小説、曲、詩詞、文など様々。新しいの、古いの、文言、白話、本国の、外国の様々。もう一つ、良いの、悪いの様々。なんでも読まなくてはいけない、でなければ文学と人生の全体を知ることはできず、一種精練された趣味を鍛えることはできない。もちろん、これは乱読になってはいけない。誰かに指導顧問になってもらう必要がある。その次は別の面での学問知識を比例して増やし、次第に健全な人生観を養わねばならない。

書いたあとで一度読み返すと、上に述べたことが平凡極まりないことに気づいた。まことに「老生の常談」で、まるで笑い話に言う、絶対効果のあるナンキン虫退治の薬売りみたいだ。一枚一枚用紙で封をするのだが、一番奥の一枚に紙片を置いて、上にたったの二字「勤捉（せっせとつかまえる）」とある。しかしナンキン虫をやっつけるにはもともとせっせと捉まえる以外に別に良い方法はないのだ。だからわたしのこの方法はひょっとしてほんとうに文章の趣味を理解するのに絶対効果のある方法かもしれないのだ。一九二六年九月三十日、北京にて。

※初出：1926 年 10 月『孔徳月刊』第 1 期

## 104　婦人運動と常識

現在の中国人民は、男女を問わず、いずれも一様に常識を欠いている。大多数の教育のない人がそうであるばかりか、本国あるいは外国の高等教育を受けたいわゆる知識階級の友人も多くがそうである。彼らは一面に偏重した専門の学問はあるが、全体を融合する普通の知識がない。だから発する言論もいささか訳の分からないもので、結局は新しい瓶に入れられた古い「でたらめな」酒になってしまう。こうしてみると、中国の人民がまさしく同じように常識が必要であることは、決して女性に限らない。だがいまは「婦人運動号」に文章を書くのだから、まず女性の方面から論を立てよう。

婦人運動は中国でも芽生えたと言えよう。だがこんなにいい加減で、常識のない人々の中では、この運動は容易には開花しないと思う、実を結ぶについてはさらに言うまでもない。少なくとも中堅になる男女の知識階級が常識を養うまでは、これが成功する希望は少ない。婦人運動がどのようにして発生したかは、みんな知っている。女性に人間でありまた女であるという二重の自覚ができたからこそ、この解放の運動が起こったのである。中国ではどうか。みんなはいずれも人間であるのに、ほとんど誰も自分が人間であることを知らない。あるいは自分では「万物の霊長」であると思っている人間が、自分も相変わらず一つの生物であることを忘れている。このような社会では、決して真の自己解放運動は発生し得ない。わたしは個人が自分について一種の理解を持たなければ、しっかり考えを定めて正当な人間の生活を追求できないと確信する。ギリシアの哲学者ターレス（Thales）の格言に「汝自身を知れ」（Gnōthi seauton）と云うが、最も良い教訓だと言える。わたしが主張する常識とは、つまり人々に「汝自身を知ら」しめる道具である。

ふつう常識と言えば、どうしてもいわゆる実用主義の教育者の提唱するもの、たとえば契約書を書くとかあるいは贋金を見分けるとかの類で、女性についてならケーキを作るとかメガネの袋に刺繍をするとかだと思われる。わたしの考えははっきりと違う。女性がケーキの作り方を学ぶのはもともと悪くはない、（しかし男性も学んでまったく構わない、）だがケーキを作れるなどだけでは人間としての能事を尽くしたとは言えない。なぜならまともに人間であろうとするなら、まだまだ知らねばならぬ多くの事があるからである。もしそうでなければ、無意識に本能と習慣によって生きているだけで、決して充実した生活に対する要求は起こり得ない。真っ当な人生の常識は、わたしの意見では、次のいくつかが必要である。五組に分けて次に列挙し、併せて説明を加える。

A　具体的な科学

〇第一組　個人に関するもの

甲　理論的なもの

一、人体の生理

特に性の知識に注意する

二、心理学

乙　実際的なもの

一、医学の大体

二、教育

〇第二組　人類および生物に関するもの

甲

一、生物学

進化論・遺伝論

二、社会学

文化発達史

三、歴史

乙

一、優生学

二、社会科学

○第三組　自然現象に関するもの

甲

一、天文

二、地学

三、物理

四、化学

乙

実業の大要

B　抽象的な科学

○第四組　科学の基本に関するもの

一、数学

二、哲学

C　創造的な芸術

○第五組

甲

一、芸術概論

二、芸術史

乙

一、文芸

二、美術

三、音楽

以上大きな勘定書を書いた。一目見ると、まるで百科知識を無理やり頭に詰め込むようで、儒者の天地人に通ずることを主張するような、あるいはいささか頑冥を免れないようなところがあるが、実はさにあらず。この計画はもともと中学課程の考えと同じなのだが、学校の授業は往々にして原意を失って、専門の予備に変わってしまい、互いに妨害し合うことになって、どれも何の成績も上がらない。ここに言うのはその活用に重きを置いていて、また大要に過ぎないので、何の困難もなくてさらに大きな効果がある。たとえば第一組の人体の生理は、目的は学ぶ者に自身の体の構造と機能を理解させることにあって、なんとしても全身には幾つの骨があるなどと暗記する必要はなく、大体を理解して、痰は食物を裹めず、食物は火を裹めないことを[i]、あるいはどんなに「静坐」しようと、下腹の気は決して湧き上がって、頭のてっぺんから潜り出しはしないことが分かればよいのである。編集の上手な人がいて、100 ページほどの書物で生理の基本事項を説明できれば、そのほかはもっと簡略でも構わないから、この煩雑な項目も問題にはならない。

第一組の知識は個人そのものを主とし、心・身の二部に分かれる。生理はまた性の知識に重きを置くべきで、この道理は物の解る人はとっくに理解しているから、(バカな人間には結局わから

ない、）もう説明を加えることはない。

第二組は生物および人類全体に関わる知識であって、第一項の生物学は生物共通の生活規則、および進化・遺伝の諸説を述べ、併せて普通の動植物および人類学（形質の面の）を含む。第二項の社会学はつまり広義の人類学と民俗学を総括する。実は人類文化の研究であって、およそ宗教・道徳・制度・技術などあらゆるものの発達変遷はみなここに帰納し、範囲がとても広大である。そのもっぱら記録を事とするものが歴史である。以上二組の知識が最も肝要である。というのは我々との関係が至って密切で、切実な問題を解決しようとすれば、こうした知識を根底にしなければ不可能だからである。たとえば性の知識があれば多くの性に関する暗黒と過失を免れることができ、文化史の知識があって、道徳の変遷の跡を知っていれば、天地の大義などというものに惑わされ、一時代の習慣を万古不変の真理だと信じることはあり得ない。だから人生の常識の中で、この二組は基本的な知識だと言える。

第三組は自然現象に関する知識であり、第四組は科学の基本知識で、説明を加えるまでもない。以上の四組は AB 二部に分かれ、いずれも科学知識であり、それらの使い道は我々が自身および自身と関係する全ての自然界の現象と、人類がやってきた思想行為の跡を理解し、それから独立した判断によって自分自身の意見を形成することにある。これは科学的常識が理知の上で我々に与え得る最大の長所である。

第五組は特に一部をなす、芸術という一類である。それらの長所は完全に感情上のものである。芸術は未だ必ずしも常識の中での必需品ではないと、疑問を抱く人があるかもしれないが、わたしは決してそうは思わない。全人生における芸術の分子は実際とても強く、軽々しく見過ごすことはできない。わたしはかつて『北京女高師週刊』に載せた文章[ii]の中で次のように言ったことがある。「われわれの天性は何か取るところあらんと欲するが、同時にまた何か与えるところあらんと欲する。われわれに最も完全にこの欲求を満足させ得るものは、第一には文学である。われわれは文学の専門家ではないけれども、一様にこの欲求を持っている。喜悦や悲哀のような大きな感動の時に限らず、たとい普通の談話や訪問でも、この欲求の明らかな顕示だと言える。このために、文学は我々にとって、一つの研究としての他に、まだ重要な意義と密接な関係を持っている。自己を表現し他人を理解することは、われわれの現代の生活の中で、極めて重要な一部分であるから。」述べているのは文学だけだけれども、本来は芸術全体を含めることができる。いわゆる芸術の常識とは決して高深な鑑賞と批評ではない。ただ「芸術の意義を実際生活に応用し、みんなが少し文学の趣味を持つことで、みんなが文学者になる必要はなく、それぞれが自己を表現し他人を理解でき、言葉の上で通じるように国語を運用し、精神的にどこでも真情をもって他人と交わることができればよいのだ。」中国では、別の何組かの知識は、まだ容易に養うことができるかもしれないが、これについては十分難しい。また十分必要なのだけれども、今まで芸術をあまりに人生と遠く隔たったものと看做してきたので、この項目に関してはとても注意しなければならない。

こうした常識を養うには、中国以外の各国には大抵、ふさわしい書物があって何の困難もないが、中国ではそんなに順調にいかない。書籍には一冊として適当なものがないと言っても、決し

て言い過ぎではない。生理の教科書にはどれも一篇が欠けていて、科学者の人体に対する観念が想見できる。社会学の類では一冊も良書がない、言うも奇怪だが、厳幾道の一二の訳本の他にはついに文化の発達について述べた書物がないのである。エル・ウォードの編んだ『社会学』はアメリカでどんなに有名であっても、今この目的のためには適用できない。われわれが要求するのは一種の文化史大綱で、ウエスターマークの『道徳思想の起源と発達』、タイラーの『原始文化』のような著作で、簡要にして概括、われわれに文化の大体を理解させてくれる書物である。別の方面でも多分そうであろう。中国は専門の学者がいないとは言えないし、本来まだこのような「常識飢饉」の現象があるべきではないが、事実は要するに事実で、われわれも学者があまりにも専門すぎることに責めを帰さないわけにはいかないのである。ただ一角にかじり付いていて、融合貫通的に人文の全体を一瞥できないから、彼らの見識も要するにいささか枝葉末節的で、全ての人生の常識を供給するにはどうしてもあまり適合しないのである。中国にこうした常識叢書がなく、また全的な個人を養成する学校もない時に、われわれのこうした希望はもともと理想でしかなく、言っていささか気を晴らすのだが、もし外国の書物を渉猟できるなら、幾分かの目的は果たすことができる。これはなかなか容易な事ではないけれども、人間であるという大問題のためだから、むげに尽瘁するのを断るわけにはいかない。しかもわれわれはやはり好事の人々が出てきて、叢書を編み学校を建てることを夢想しているのだから、常識を養成するというこの主張もまるで当てのない高論だとすることはできないのである。

ここ一年来、中国の婦人問題の声は高まったと言えよう。恋愛問題を語ることを好まない人も、参政の類は語ることができると思っている。しかし一方ではまた頑固な反動が起き、女性は天がもっぱらケーキを作るために産んだもので、この道理は火を見るように明らかで、むろん何の問題にもならないと考えている。わたしも解放の運動をする女性のなかにも多数のまだ確実な自覚を持たない人がいることは認める。だが家政万能の学者に対してはさらに不満を表明しなければならない。結局彼らはどれだけ自己を理解しているのかが、やはり大きな疑問であって、女性を理解するかはむろん言うまでもない。わたしは彼らが何を根拠に、（おそらく西国の風俗か）女性はただケーキを作るべきだと断定するのか、特に何の権利があって女性に彼らのためにケーキを作るよう求めるのか分からない。これはほんとうに笑い話だ。もしもこれが日常生活の需要であって、誰もが知るべきだと考えているなら、こんなに丁重に提唱するには及ばないし、また常識の項目にも当たらないし、むろん人生の最高目的だとすることはできない。わたしはいま婦人運動を推進する女性と婦人運動に反対する男子がどちらもまず努力して常識を獲得し、自己とは何か、人と自然とは何かを知ってから、独立した判断によって実行に移すよう希望する。そうしてこそ効果がある。――しかしながら「ケーキ第一」の学者たちは、たぶん聴こうとするとは限らない。彼らはたぶん永遠に「自己とは何か」が解るはずもないだろうから。

（一九二三年一月）

※初出：1923 年 1 月 1 日『婦女雑誌』第 9 巻第 1 號

[i] 痰は食物を裏めず、食物は火を裏めない　未詳。「痰が食を裏み、食が火を裏む」と云う説が漢方にあるのかどうか。

[ii]『北京女高師週刊』の文章　『全国中文期刊聯合目録』（北京図書館 1961）では北京大学図書館が部分的に所蔵することになっているが、そこに掲載号が保存されているのか不明。この文はまだ文集等に収録されたことがないようである。

## 105 ケーキ作りを論ず

最近女子教育については二派の主張があるようだ。一派は女学生にはもっぱらケーキを作らせようとし、もう一派は作るべきではないと言う。この両派の人は自ずとそれぞれの理由があって、互いに引こうとしない。今しばらくそれには構わないで、わたし個人の意見を言うと、わたしはケーキ作りには賛成である。

本来ケーキというものはお菓子の中ではすこぶる美味しいものだ。店から買ってきたものはきっと値段も安くなかろう。それなら自分で作ることができたなら、極めてよい事だ。だからわたしは女学生がケーキを作る学説には賛成だ。しかし、声明しておかねばならないが、わたしは正統のケーキ学派ではない。なぜなら彼らの理由は旦那がケーキが好きなので奥さんはそれを作るべきだというのだ。少し格好をつけていうなら夫は妻の綱であるという思想の遺風である。これはわたしの終始反対するところである。わたしの主張は本来女性に限らない。男でもケーキを作れるようになるべきだし、ケーキだけでなく、飯炊き洗濯も男はやれねばならない。だが今は女子教育を語るのだから、その面だけで立論しよう。

わたしは別に教育を学んだものではないし、また中国の女性を熟知してもいない。したがって教育者や夫の資格で彼女らの欠点を述べ、教育上の救済方法を提議することはできない。わたしはただ傍観者の立場で、見聞きして得たところについて、真面目な話をすれば、現代の女性には確かにひとつ欠点があると思う。つまり知識の実用の欠落である。わたしは決して、世風日に下ると言って、古い婦人が新しいのに比べてよく有能だと思っているのではない。でたらめな経験と空っぽの知識は同じように無用である。もしほんとうのケーキ等々が作れるなら、一部の学校や雑誌の提唱に感謝する。おそらく新しい婦人の手並みも必ずしも彼女たちの老輩に及ばないということはないだろう。残念なのは人生というこの一大ケーキについて彼女らもその伯叔母たちと同様にお手上げであることである。彼女らが理解しなければならないのはこのケーキの作り方であると言おう。

人生を処理する方法は、思うのだが、誰かが立案して伝授できるものではなく、それぞれが自分で追求しなければならない。しかしそれに必要な常識は修得することができる。これは普通知識の獲得とその実用に分けて言うことができる。今この過渡の時代にあって、ただ伝統的な指導に頼って生活するのは、もちろんしばらくは何とか誤魔化せるだろうが、それはわたしが青年男女に希望するものではないから、議論する必要はない。そうした生活は、もしその個人の個性がそんなに発展せず、何の思想も持たないとすれば、あるいはすこぶる安全で快適であるかもしれないけれども。現代の新青年ために図るなら、人生の基本知識が必要であって、大要は次のいくつかの学科である。

一、自然科学類、なかに天文学、地質学、生物学の三種がある。

二、社会科学類、人類学の一種のみだが、歴史などが含まれる。

一目見れば、これらは皆専門の学問であって、中学課程にあるものではない。青年男女にこうした知識を得ることを要望するのは、夢の話ではないか。そういう情況をわたしは承知の上だ。だがわたしの考えは大意を理解しさえすればよいのであって、決して深く専攻することではないから、たぶんそれほど難しい事ではなかろう。わたしの空想の計画では、まず生物学から入り、生物の生理およびその一生の歴史が明らかになると、さらに進化説から生物変遷の跡を見、これを橋渡しに地質学方面にゆき、われわれが住んでいるこの大地の歴史および現状を研究し、それからはまた地球の太陽系における位置、併せて太陽

系と別の星々との関係を考え、こうして天文学に移ったことになる。これが右翼であり、左翼は人類学である。青年はまずここから民族の分類の情況を知り、さらに「社会人類学」の一部分に注意し、社会組織および文化・道徳の発達変遷を明らかにし、こうしてこの万物の霊長と称する人類の歴史の概ねを知ることができる。このほかは右翼ではまだ理化数学に入れるし、左翼では政治経済に入ることができる。だが上のような基本知識があって、応用することができれば、『女児経』およびその他はみな要らないばかりか、たとえ聖経賢伝を読まなくとも、一生何の過ちもなくて済むだろう。こうした常識の教科書は、もし適当な人が編集するなら、大した難事ではないと思う。あるいはたった二十万言もあれば四冊の本が書けるだろう。このほか単行の小冊子はむろん多ければ多いほどよい。ただ残念ながら中国人は編著という事には才能が欠けているようで、そうした知識を灌輸する刊行された叢書を見るに、上に述べた楽観的な話はいささか言い過ぎたことを免れないように思う。

われわれはこうした知識がすでにあるものと仮定したが、もし利用できないのであれば、やはりないも同然である。本来あらゆる知識は一つとして有益有用でないものはない。ただ人間がそれを使うことができれば。中国人はまだ奴隷性が退化していないので、因循を喜び創新を憎み、記憶をよくするが思索に欠け、新知識を獲得しても積んでおくだけで、活用することができない。古代ギリシアの哲人は言っている、「多識は智を増すことはできない」と、まさしく痛切な批評である。英国の故ブッチャー（S.H.Butcher）教授によれば、ギリシアの「多識」（Polymathie）という語は別の含意があり、ひと山の事実が、心に記憶されているが、未だ嘗て理知の整理を経ていないことを言うのだそうである。中国人の知識は大抵がそうで、よく言うのだがこれはまるで薬材店のようで、棚の上の多くの引き出しにはいろいろな薬が貯蔵されており、一つ一つそれぞれに区切られ、烏頭附子と茯苓の生地の間は壁で仕切られ、顧客が取りに来るのを待っている。中国人の脳の中もいくつかに区切られ、事実と迷信が同時に並存しているから、生理を学んだ人が教壇で頭骨が幾つから成っているかを教え、病気になった時はお札の水が下痢を止められ、石燕*が分娩を促進でき、静坐すると「丹田」のなかの気が横隔膜を突き抜け、顱頂骨から抜け出ると信じている。いまは一えに昔日の行為とは逆に、得た知識を融解貫通し、一つにまとめ、自己の人生観を組み立て、ふだんに新しく手に入れた知識と比べ、分裂や矛盾をなくし、それからこの常識を頼りに、全ての日常の事件と問題を判断すべきである。このようにやれば、必ず安心立命できるとは言えないけれども、快適であって煩悶はない、要するにこれはこうすべきである。そして通行する誤った思想、天地人は三才だとか、天上にはもっぱら本国を管理する神がいるとか、地球は宇宙の中心だとか、人身は不潔、性欲は罪悪、道徳は不変、金科玉条などがあるとか等々の謬見は、少なくとも免れることができる。わたしは文明史の研究についてはまったくの素人だが、およそ不必要な束縛と犠牲の減少は文明の確かな徴であり、これに反するものは野蛮であると、確信している。一民族の文明の程度の高下は、道徳律の寛厳と繁簡によって測ることができる、そして性道徳が解放されているかどうかは特に基準とするに足る。その根本の由因となると、もとより常識の完備、趣味の高尚にあり、これによって理知と感情がともに清明純潔の域に進む。中国は礼教の国と号するが、その実際を平心に考えると、社会的に主張される道徳は多くが伝統・迷信を根基とする過去の遺物なのだが、（今でも決して実行されず、ただこれを借りて過失を飾るか、あるいは文章を書く資料とするだけだ、）一般の青年はだれもぼんやりして弁別できない。これは嘆かわしい事である。だから常識の養成が目下の中国では一刻も忽せにできない急務であり、みんなが特に注意し、二度と自

分で自分を騙す「東方精神文明」のアヘンや酒の中に沈没しないよう願いたい。

最後に重ねて言うが、現代の女性は確かにあまりに知識が欠乏していて、知識の実用など言うを要しない。良妻賢母式の学校に「学んでいる」女学生は、ケーキを作れないことを心配しないが、そのほかはどうか。結婚、育児は当然可能である。今まで目に一丁字もなかった女人でもみな職を尽くせたではないか。まさかこれが学問となんの関係があるというのか。そうだ、言わねばならないが、どんな事でも学ばねばならない、単に本能と経験によるだけでは役に立たないのだ。聖書には言う、「子を養うを学んで而る後に嫁ぐ者は未だあらざるなり」と。これはまさに賢者の千慮の一失で、いまならひっくり返して、嫁ぎて而る後子を養うを学ぶ者は未だあらざるなりと言うべきである。良妻賢母になろうと言う人が、女人、男、と子どもがどんなものかを知らない。これが笑い話でなくてなんであろう。この問題は話し出せばとても長くなり、本文とは一部分としか関係がなく、今はもうこれ以上述べないが、ただ諸君に勧める。ハーバート夫人（Mrs. S. Herbert）の『両性志』（*Sex-lore*, A.&C. Black）と『児童志』（*Child-lore*, Methuen & Co.）の二書は一読するとよい。たとえ他の外国の両性および児童心理の書は読まなくとも。民国十五年七月二十日、北京にて。

※初出：1926 年『新女性』第 8 號

---

*石燕 『本草綱目』第十巻の「石燕」の項に、「石類なり、状は燕に類して文あり、円く大なる者を雄となし、長く小なる者を雌となす」とあって、「婦人難産なれば、両手に各々一枚を把れば、立ちどころに験あり」とする。

## 106　北溝沿通信

某某君[i]へ：

ひと月前あなたは手紙をくれ、薔薇社が周年記念に特別号を出すから、わたしに一篇文章を書くようにということでしたので、その間一カ月はある、暇を盗んだら書けるだろうと思ったので、承知の返事をしました。ところが、いま原稿締め切りの日が過ぎても、まだ一字も書いていません。あわてて君に手紙を書いて、書かなかった訳を報告し、どうか勘弁してもらうようお願いせざるを得ません。

文章を書く時間がないのは、予約の序文にしろ寄稿にしろ、半分はもちろん忙しいのと、半分はやはり怠惰のせいです、しかしながらこれは実は精神的疲労と言えるもので、変態政治・社会の下での一種の病理であって、必ずしも全部が個人の頑張りのなさによるとは限りません。もう一点、わたしは婦人問題については実は何も話すことがないと思うのです。婦人問題について、とても興味を持っていると言うより、切実だと言った方がよいかもしれません。というのはわたしの妻と娘たちはみな女性ですし、わたしは男性ですから異性の事については自然と惹かれます。そんなに密接な関係はありませんけれども。わたしは婦人参政運動にはそんなに賛成ではありません。これはただ一部の憲政国家でのみアピールできるのであって、たというまく行ってもあまり大した意味はなく、もし中国でなら多少の女政客と女陣笠を養成するだけだろうと思います。あれこれ考えてみて、婦人問題の実際は二つのことしかありません。つまり経済的な解放と性の解放です。しかしながらいま現在ではこれは話しようがありません。決して単に手の着けようがないというばかりか、まるで話すことがないのです。話せば怨みを買うのは免れませんし、ましてわたしは経済の事は全く何も知らないのですから、口を開くことさえできません。これがわたしが『薔薇』特別号のために文章を書けない理由なのです。

最近二部の書を読んで、とても面白く、人を深く反省させると思いました。それらの思想は消極的ですけれども、わたしをなんら悲観的にしませんでした。というのはもともと楽天家ではありませんし、わたしの意見もほとんどそれに近いからです。その中の一部はフランスのル・ボン（G. Le Bon）の著『群集心理』で、中国にはすでに訳本があります。わたしはまだ見ていませんけれども。わたしが読んだ最初のは日本語版で、十七、八年前です。今読んでいるのは英語版です。人がどんなに彼は反革命だと罵ろうと、彼の言うことはみな真実です。彼は群衆という偶像のヴェールと着物を全部剥ぎ取って、真相を人に見せましたが、これは実に感謝すべき、ふだんは感謝されないですけれども、仕事です。群衆はやはり今最も流行の偶像です。自分がやろうとする事はなんでも全て民衆の要求に応えるもので、昔の天運を奉承するに等しいとか、たとい真心から社会改造をやろうとする人でも群衆に対する単純な信仰を持たないものはありません。まるで民衆を理性と正義の権化のようにして、やる事業も必ず神祐を得た十字軍なのです。これはなんという誤りでしょう。わたしは群衆を信用しません。群衆はただ暴君と順民の平均でしかありません。しかしながらこれによっておよそ群衆を根拠とする一切の主義と運動も否認しないわけにはいきません。――これは反対するまでもありません。ただそれが可能だと承認することは

できないのです。婦人問題の解決は今ではまだ大きな別の問題に帰せざるを得ないようです。しかもこれはまた群衆運動の範囲を抜け出る事はできません。だからわたしは実際いささか茫然たるものがあるのです。婦人の経済的解放は切実です。だが方法は？処方箋は書かれていますが、薬はどのように配合するのですか。これはまるで居士が心を安養の浄土に遊ばせるようで、深くこうした境界の楽しさを悟るのですが、ただ阿弥陀仏は信じず、仏号を唱えて往生を求めることもしないようなもので、やはり結局はユートピアの空想家になってしまいます。しかし、このほかにはまた実際にしようがないのです。

もう一部の書はウィーンの婦人科の医学博士バウアー（B.A. Bauer）が書いた『婦人論』[ii]で、英国の二人の医者が訳したものです。医学およびその他の高等職業に従事する人と心理学・社会学の成年学生に専売すると声明してあります。わたしはどの資格があるのか知りませんが、書店ではわたしを Sexologiste と認めてくれ、一冊売ってくれたので、一通り読むことができました。オーストリアと女性はどんな深い因縁があるのか知りませんが、文人学士は婦人についてどうも特別に物を言いたいようで、このバウアー博士も例外ではありません。彼の意見はフロイトの影響を受けておらず、あの『性と性格』の著者ワイニンゲルに帰依しているようで、これは婦人および婦人運動にはあまり好意を持っていません。しかしわたしが読んでも何もおかしい所はないどころか、すこぶるそうだと思いました。わたしは自分でも女性に対して少しは理解があると思っていますし、根っから女嫌い（Misogyniste）ではありません。もちろん古代の教徒のように女人は悪魔だと言うのは好きではありませんが、特に女性崇拝者が、無理に女人を称揚して聖母だとするのは好きではありません。これは実際はゴロツキが貞女を要求するのと同じく憎むべきことです。わたしが賛同するのは混和説です。ワイニンゲルの主張する女人の中には母性と娼婦の二類があるとするのに、比較的近いのです。ここで説明しておくべきは、いわゆる娼婦型の女性は、名称上いささか語弊があります。というのはこれはそうした人たち、彼女の性的要求は種族の継続ではなく、もっぱら個人的な欲望の満足にある人たちを指すだけであって、普通の娼妓が経済的関係を主とするのとは全く違うからです。バウアーは女性の生活は終始性の範囲を脱することはないと考えます。わたしはこれは承認できると思います。それが女性の尊厳を損なうところがあるかどうかに関わりなく。現代の大誤謬は全て男子を以て基準とするところにあります。つまり婦人運動でさえこの圏内から逃れられません。だから男性化を解放の現れだと考える女性が出てくるのです。ひどいのは性に関する事柄さえ男子の観点を依拠とし、女性の被動性を賞賛し、女性の性心理上の事実さえ尊厳を失するものと考え、女性自身さえもが承認しようとしないことです。しかし、女性がこうした男子の基準下の性生活に屈服することの損害は、決して経済方面の束縛に下るものではありません。かりにバウアーの言うことが本当なら、女性のこの面つまり性の解放がもっと重要になるのではありませんか。バウアーの論調はすこぶる反女性的のようですが、わたしは大抵が本当だと思います。婦人問題についてより多く理解させ、文明世界ではこの性の解放が実に必要だと信じさせてくれます。経済的な解放よりもあるいはもっと難しいかもしれませんが。社会文化はいよいよ高度に、性道徳はいよいよ寛大に、性生活もいよいよ健全になるのに、人類のこの方面についての意見は最も頑固でなかなか変わろうとはしませんから、

こうした理想はまた白昼夢に近いことでしょう。

反女性的な論調はおそらく「天　粟を雨ふらせ、鬼　夜哭く」〔文字が発明されて〕以来すでにあって、女がお産をすることを憎むのはたぶん盤古が天地を開いてから遠くないでしょう。世人は女性に対して様々な誹謗中傷をすることを好み、あるものはとてもくだらなく、あるものはかなりうまく描けています。小さい頃に唐代叢書の中の『黒心符』を見たことがありますが、とてもよかったと思いました。三十年来再読はせず、文意もほとんど忘れてしまいましたけれど。わたしはそうした女性を悪く言う話も理解できますし、それらには様々な理由と経験があり、無病の呻吟ではないことも分かります。だが彼女らのために一言弁解しておきますと、“彼女らを責めてはなりません。これは宿世の仇敵です！”わたしは「『安士全書』の人生観」を奉ずる人間ではありませんが、「遠き報いは児孫にあり」という言葉を信じるものです。『新女性』発刊のときに原稿を頼まれ、「男子の果報」という題で一篇小文を書いて、この考えを説明しようとしたのですが、結局書かずじまいに終わりました。男子は何千年来婦人を奴隷としてこき使い、家庭・社会でさまざまな過酷な待遇を受けさせ、当初はあるいはすこぶる快適に思ったかもしれませんが、後になって次第に勝利の悲哀を感じ、不平等の待遇の中で養成されたそれ相当の習性が表に現れてきて、躬らその衝に当たる者は他でもない、すなわち後世の子孫なのです。まことに天網恢恢疎にして漏らさずで、他人は責められず、自分を恨むしかありません。もし救済の方法を講ずるなら、ただもう二度と原因の種を植えないことです。それに百年に上る時間の淘汰を加えれば、自然と転機が訪れるでしょう。普通のようにずっと天を怨み人を咎めていては、全くよい処がありません。しかし最後にもう一つ、この勘定書に入れられないことがあります。それはつまり宗教あるいは道学者が指摘する女性の狂蕩です。われわれは好例として、仏経の中の偈を一首引くだけでいいでしょう。原文は『観仏三昧海経』巻八に見えます。

若し諸男子有りて　年皆十五六
盛壮にして力勢多く　数は恒河の沙に満つ
持して以て女に供給せば　須臾の意も満たさず

これはつまり女人を悪魔のように見做すことで、またワイニンゲルの娼婦の説を思い起こさせます。我々は知らなければなりません。人生には少しの悪魔性があってこそ、生活には意味があるのだと、ちょうど少しの神性があるのと同様に重要なのだと。婦人の狂蕩に対する攻撃と聖性貞潔の要求とは、結果としていずれもゴロツキ（Roué）の変態心理の表現であり、実にあってはならないものです。ワイニンゲルは理論上理想の男女性（FM）を仮設していますが、事実上はいずれも多少とも雑揉していて、純粋な個体はないことは知っています。だから彼の説く母性と娼婦の二類も同じように混和して不可分なのです。分量の差異によって様々な形態はあり得ますけれども。娼婦は今では資本主義の原則に従って売淫で利を得る一種の賤業ですから、字面では侮辱の意味を持っているようですが、言い換えて、女性には種族の継続と個人の欲望の満足という二つの要求があり、それが平均的に発展しているのもあれば、一方に偏っているのもあると言えば、語気がとても普通であるばかりか、また極めて正当な事実でもあります。以前の人は女性を無理やり二面にみなし、あるいは崇拝したり、あるいは呪詛したりしましたが、今ではもともと一つ

であり、しかもその方がよいと分かっています。現代と以前の知識・道徳の違いはこの点だけですが、この点は極めて大きいのです。中国の多数の民衆（軍閥・官僚・学者・紳士・遺老・道学者・革命少年・商人・労農・その他様々な人などを含む）においては、おそらくまだ非聖非法とみなされ、許容されるとは思えません。古代のギリシアでも次のように言ったことがあります。一個の男子なら当然妻を娶り子孫を残し、妾を入れて奉侍させ、娼妓（Hetaira 原語の意味は女性の友人）によって悦楽を求むべきであると。これは家父長制時代の遠慮のない言葉であって、現代の新道徳の基準には合いませんが、男子の女性に対する要求は却って誠実に現れています。イタリアの経済学者ミッチェルス（Robert Michels）は『性の倫理』[iii]を著し（英訳が現代科学叢書の中にある）ヴェニス地方のことわざを引いて、女性には四つの相があるべきだと言います。つまり、

街上では淑やかに、（Matrona in strada,）
寺内では慎ましく、（Modesta in Chiesa,）
家中では切り盛りうまく、（Massaia in casa,）
□□では癲狂に。（e Mattona in létto.）

男子の永遠の女性はすなわちただ聖母と淫女（この仏教の訳語は上文で使った娼婦よりも少しはよいようだ）の合一でしかないことがわかります。ワイニンゲルの言うように、女性はもともとこうなのです、ならば理想と事実はもともと背反しません、これがよいことでなくてなんでありましょうか。わたしの孤陋寡聞を以てしても、中国のいったい誰がこう言ったかは知りません。（上海の張競生博士は除いて数に入れないでおくしかありません、というのは彼の言うところは冷静さと健全さが欠けているからです。）だが外国の学者の意見はたいていが是認するばかりかもうすこし女性の狂蕩を称揚する傾向があります。ただ間違いを矯正するだけで過度に硬直するに至ってはいませんけれども。古来の聖母教は崇拝が過ぎて、その結果家庭が熱気を失い、狭斜の巷が却って繁盛することになりました。主婦は儀式の名義のためにその尊厳をかろうじて保存していますし、またばあいによっては離婚が容易ではないことを頼りに、次第に夫との仲が乖離に向かい、生きた人間の楽しみを回復することがありません。これは結婚を生計の手段とみなし、性を門をノックする煉瓦〔入れば不用〕と見做すのと、違いはありません。ところが一部の女性で性の技巧に熱心な者はそれを利を生む道具と考えています。過ぎたると及ばざるとは、実際どちらもまるで体を成していないと言えるでしょう。わたしは中庸主義が一番好きですから、ここでもちょうどそれが適用できると思います。もし女性の本性によって平均的に発展させることができるならば、それは天理に合うばかりか、やはり人情にも適い、そして両性間の面倒な問題をも省くことができるでしょう。だがこれは現在ではやはり空想でしかありません。ただ婦人問題に注目する少数の青年が、特に女性が、女性に関して多く学術的な研究を行い、知識を得たなら、そこから実際的な利益を得られないわけではありません。ただそれは外国語の書物に求めねばなりません。中国の訳著には実のところ何もありません。ましてこれはまたたやすく「風化を傷つける」ということで禁止されるではありませんか。

わたしはバウアーの書を読んで、偶然こんな中身のない話を思いつきました。あなたにお応え

する文章となってはまだ書けません。そうしたことはまた材料にもなりませんから、ただ一声すみませんと言って、ここに書かなかったことをお許しくださるようお断りしておくしかありません。草々不一。

〔民国十六年〕十一月六日、署名。

※初出：1927 年 12 月 1 日『世界日報・薔薇周年紀念周刊』

---

[i] 某某君　松枝茂夫氏の訳注では石評梅女史だと言うことである。現代の女流作家。当時陸清晶とともに『世界日報』の副刊『薔薇週刊』の編集を担当していた。

[ii]バウアー（B. A. Bauer）『婦人論』　Bernhard A.Bauer; *Woman and Love*, trans.by Eden and Cedar Paul,Boni and Liveright,New York.1927。

[iii]ミッチェルス（Robert Michels）『性の倫理』　*Sexal Ethics.*（The Contemporary Science Series by edited Havelock Ellis. 1914, the Walter Scott Pubilishing Co.Ltd.) “physical basis of love” p.227.

## 107　抱犢谷通信

わたしはいつも小説家が羨ましい。彼らは一冊の日記を調べたり、古本の屋台から残抄本を買ったり、あるいは落花生を包んだ紙から一篇書き写してきては、自分の絶好の小説に変えてしまえるのである。わたしは今までこんな幸運に恵まれたことはないが、最近になって一巻きの文字を書いた紙を拾ったのである、――実はある友人が一昨年臨城付近で拾ってきたもので、数日前北京に来てわたしにくれたのだ。これは何枚かのバラバラの紙で、ただ自由箋に書かれたものは繋がる文章で、わたしが何箇所か添削して、発表し、併せて題目を加えた。これは自分が苦労せずに自分の作品とすることができた、最初のもので、まことに僥倖の至りである。

この原文の著者が名を鶴生と言うのは、一篇の初めに記している通りで、また別の紙片から彼が呂という姓であることが分かった。彼はたぶん「人質」の一人だろう、でなければ彼の文書が事件*の現場に落ちているはずがない。しかし彼が抱犢谷に行ってからの消息は結局不明である。孫美瑤が帰順してから解放した旅客の名簿には全部探したが呂鶴生の名は見つからない。彼の文章を見るに、すこぶる聖人を侮り法を蔑する気味があるから、きっとそのために匪賊から気に入られて、山砦で軍師になったのだろうと言う人もある。しかし孫団長が就任した時もそんな参謀や補佐官がいたことは聞かない。またある人は、あるいはその狂妄のために、匪賊に殺されてしまったのかもしれないと言う。これはすこぶる情理に合っている。本来強盗も礼教を擁護する者だから。要するに彼は抱犢谷に入って、もう現れなかったのだ。甲子の除夜に記す。

癸亥孟夏、鶴生。

わたしは娘のことでここ何日かほんとうに悩みぬいている。

わたしの長女は虎年生まれである。これは決して民間の迷信などには関係しないが、彼女が生まれてからわたしは非常に心配している。女の運命はとても苦しいもので、彼女もおそらく免れないだろう。わたし自身も決してよくはないけれども。わたしを育ててくれた祖母も虎年だ、――彼女は今年九十九歳であった、――彼女の最後の十年をわたしはこの目で見てきた。彼女の面長の敬虔な顔には一筋一筋苦痛の跡が刻まれている。祖父の怒罵の言葉からまたわたしは彼女の前半生の不幸を想像する。わたしの心の中の女人の一生の運命はつまりこの祖母の悲痛にして普通のイメージであった。祖母は死んだ、神よ彼女の魂を安らかにし給え！今わたしには虎年の娘がいて、（もう二人いる、生まれ年は別であるが、）思わず悲観し、また思わず迷信を信じてしまう。わたしは結局惰弱な人間であるけれども、しかるべき時には彼女らのために奮闘してやってみようと決心している。その障害が人力であれ天力であれ。彼女らがその曽祖母のようにならないように、わたしは苦心して彼女らを教育した。彼女らに人生の知識と技能を与え、穏やかにまた独立して生活できるようにと。彼女らの道徳の趣味を養い、清潔を愛すると同じように、自発的に貞操を愛するようにと。彼女らに恋愛はただ自主的にしか与えられず、売買できないことを理解するようにと。彼女らが幸せに一人の夫だけに出会うように、だがまた不幸にして何人かの男子を知ってもそのことを決して呪詛しないようにと願った。わたしの計画はやり遂げられた。

わたしは彼女らを祝福し、彼女らが生活を求めるようにと、出立させた。しかし実際にはこのように円満にはゆかなかった。

彼女らはかつて人生の幸福と不幸を嘗め、彼女らそれぞれの生活と恋愛を手に入れた。いずれも彼女らの自由及び責任であるから、われわれ父母たるものでも干渉する必要もないしまたできもしない。――しかしながらいわゆる社会がわざわざ気を使いにくる。彼らは父や夫よりも厳しく彼女らを監督し、デマを撒き、そして自分が作ったデマを信じて裁判にかける。しかしそうした事がたとい事実であっても他人の干渉は必要ではないし、別に何事でもないのである。わたしの長女は二十二歳になった。（彼女はわたしが三十四の時に生まれた。）いま処女であるのかないのか、わたしは知らないし、知る必要もない。もし彼女自身が何かの理由でわたしたちに知らせてくるのでなければ。わたしたちが彼女を養い育てたあとは、その体は彼女自身のものであって、一切彼女の責任で処理するのであって、わたしたちはむろん口を出す必要はない。たとい彼女の夫あるいは恋人であっても、――もしほんとうに教育を受けた紳士であるならば、やはりこうした意味のない事を問いただしはしないだろう。これはあるいは甚だユートピア的すぎるかもしれない。わたしは知識階級の中にもまだ寡婦を娶ることへの反対があることを知っている。だが要するにわたしは上に述べたことが正しく、もののわかる人は全てそうであるべきだと信じている。

文明とは何か、わたしには解らない。というのはわたしはそんなものを研究したことがないから。だが文明的な世界はどのようなものか、わたしには定義がある。わたし個人の幻想でしかないけれども。それは次のような境地だと思う。そこでは人生に不必要な犠牲と衝突はできる限り少なくなってゆく。わたしたちの野蛮な祖先、および野蛮な従兄弟たちが野蛮な所以は、つまり彼らの多くが不必要な犠牲と衝突をすることにある。彼らは両性の関係が天行人事に影響し、社会の安危と直接に関係すると信じているので、十二分に厳重に取締り、場合によってはほんとうに意表の外に出てしまうのである。いまではこれらは全て迷信だと分かったのだから、もうそのようにすべきではない。人はただそのために狂ったり低能になったりして社会に害を及ぼさない限り、そのほかのことは全て自分の責任であって、公衆とは何の関係もないと思う。あるいはこれはまた理想的な話で、少なくとも現在では実現し難いが、文明の趨勢は要するにこの方向に行くだろう。あるいはこれは適当な教養のない男女に言い聞かせるのは少し早いかもしれないが、他人の恋愛事件を談じる傍観者はこの道理を知らざるべからずで、努力して遺伝の蛮風を避けねばならない。

わたしはいま一歩譲って性の過失を認めるとしても、それはなされるべきではなかったと認めるが、やはり社会の厳格な態度は情理に合うと言うことはできない。たといそれが罪であっても、ただ彼あるいは彼女の配偶者を侵しただけであって、第三者に関わる事ではない。たとい第三者がはたから評論できるとしても、諒察すべきであって審判すべきではない。「彼女」にあるいはほんとうに「過去」があって、一人か二人の男を知っていたとしても、彼女の夫が許したからには、（あるいは彼が当初は意に介さなかったかもしれないが、）われわれは無論許さない訳がない。決して特に自分の娘であるからというのではなく。わたしはキリスト教徒ではないが、キリストを崇拝するものである。いつもわたしの心の前に現れてわたしを最も感動させるのは、イエスが宮

殿で「腰を曲げて指で地面に字を書く」情景である。「君らの中で罪なき者は、石もて彼女を撃つことができる。」ここまで読むと、ほんとうに偉大さと神聖さを感じる。そうしてまたあれら凶悪なご面相の聖徒たちは決して偉大でも神聖でもないと思う。わたしは聖人振って、あらゆる罪悪はすべて許せるとは言えない。ただ性の過失については要するに許すことができ、そして許さないでよいとする資格はないと思う。

かの偽君子――偽の道学者、偽のキリスト教徒、パリサイ人とサドカイ人らは、よくよくこうした閑事に口出ししたがる。これはわたしが最もいやらしいと思うことである。もし仮にわたしに一人の敵がいるとすると、生きるか死ぬかの戦いを挑みこそすれ、決して彼の家の中の流言を楽しもうとは思わない、まして他人の事なら言うまでもない。君ら偽君子がいつもこれを楽しみとするのは、一体どういうことなのか。君らは自分が伝統的道徳の前では完璧な人間であることを恃んで、聖廟の中に自分らの分け前があると信じ、傲慢にも君らの弟妹を侮辱して、「わしが審判をしてやる」と言い、せいぜいでも「わしが許してやる」と言う。われわれは審判すべきでないばかりか、たとい許すにしても相互に許しあうのでなければならない。なぜならわれわれ弱い人類はこの世界に存在する間、どうしても多くの弱点を持っている、この弱点によって、決して自分の長所によってではなく、人を許すのであるから。君ら偽君子たちは自分にも弱点があることを知らない、ただある種の機縁がまだ発露していないだけのために、われから衆人を凌ぐ徳性があると信じ、さらに至る所で人の過ちを探し自分が賢良であることの裏打ちをする。たとえば他人を低く踏みにじればにじるほど、自分の身分が高くなるという風に。そこで人の災禍を楽しみ、苛酷にも毛を吹いて傷を求める。君らの考えはただ力を尽くして不幸な弟妹を踏みにじり自分の救いの足しにしようとしているだけではないか！君らの仲尼やキリストはそのように教えたか。君らの心の中の淫念が淫婦に対して嫉妬や怨恨の念を起こさせ、石もて彼女たちを撃ち殺そうとし、いまに至るもまだ彼女を指差し嘲笑するのだ。これは何と哀れむべく厭うべき者だろう！君らは何を笑うのか。君らに笑う資格はあるのか。思わずわたしの愛読する小説家を真似て、あのように声を張り上げて懸命に罵倒し続けたい。「……

この文章は未完であるようだ。だが他人の文章だから、わたしが代って補うのは具合が悪い。文中の語気からすれば、ほとんど古人の所謂「老牛　犢〔こうし〕を舐む」の情がある。篇名を「抱犢谷通信」としたのも、文義掛け合って、まさしくうまく噛み合っている。編者また記す。

※初出：1925 年 2 月 2 日『語絲』第 12 期

---

*事件　臨城事件。1923 年 5 月 5 日匪賊の孫美瑤が 2000 名の部下と共に、津浦線の急行列車を山東省臨城に襲い、多くの外国人を含む乗客を根城の抱犢谷に拉致し、身代金を要求した。外国人がいたため国際問題となり、政府は軍を動員すると同時に孫を旅団長に就けるとの甘言で誘い、乗客を釈放させたが、釈放後孫を処刑した。この一篇はその事件を舞台に借りて小説仕立てにしたもので、「鶴生」と言うのはもともと周作人の渾名である。

## 108　「色欲を訶(しか)る法」あとがき

案ずるに右の文は『法苑珠林』巻七十五、十悪篇六・邪婬部二・訶欲類中に見え、初めに「仏説日明菩薩経に云う」という六字が被せられている。『閲蔵知津』の西土聖賢撰集下を調べると、「『菩薩訶色欲法』、一紙欠、南宜北藁。姚秦の天竺沙門鳩摩羅什訳。」とある。つまり上文の来源と説明である。わたしがこんなものを翻印した理由の第一は文章が実に流暢で、話も痛快に述べられ、「此の物の惑わす所と為らざるなり」であるからである。これはまことに地に擲てば金石の音をなすものである。第二は現代はどうやらすこぶる「厭女派」（Misogynistes）の文章が歓迎されているらしく、わたしも一篇紹介しようと思ったのだが、結局この文章しか見つからなかった。当初は『欲海回狂』[i]で一部分を見ただけで、とても残念だったのだが、後になって西山で療養して、全般を見ることができたので、それを書き写した。末尾には年月日の数字「二一七五」がある、今回幸い発表の機会を得たのだが、数字はすでに「二五一一三〇」である。

わたしはこの色欲法はどうも叱り方があまりに古すぎ、あまりに寺院の気が多すぎることは知っている。現代の厭女哲学の最も新しいのはゲルマン派である。キリスト教の不浄観はすでに時代遅れである。その影響は、どんなに新教国であろうとも、当然のことまだ人々の心に残っているけれども。マルティン・ルターの宗教革命もやはり女人をおまるとみなした。もちろん、われわれが述べようとするのは哲学者であり、彼らの思想が一等新鮮なのは、たとえばショーペンハウアーであり、ニーチェであり、それにワイニンガーである。いささか遠い分家には、バイロンとストリンドベルクがおり、著名な文人で、十二分に女嫌いだが、また十二分に女好きでもあった。しかし最も有名な祖師はどうしてもショーペンハウアーということになろう。彼の『婦女論』[ii]は現代厭女宗のバイブルである。

だが、わたしはいささか守旧癖のある人間で、新しい、焼き直しのものはあまり好きではない。彼らによれば、ショーペンハウアーの厭女哲学は全く性愛の欠陥による反動で、ちょうど失恋した者が相手を悪く言うようなもので、うまく言えば人の同情も引くことができるが、その人が同病でない限りは、あまり人を説得することはできないそうだ。ショーペンハウアーと彼の母との関係は誰もがだいたいは知っている。彼女はバイロン老夫人のように彼の足をびっこにはしなかったけれども、さんざんよくないことをした。こうした情況は心理分析家によれば、子女に極めて大きな不幸な影響があると言う。後になって全部が全部彼が猫顔だったせいではないだろうが、要するに彼は娶らなかった。だが冶遊は当然常のことだった。だからついには梅毒に罹った、――この事は彼がもっと深くかの憎むべき女性を憎悪する原因になったようである。彼の先輩のサド（de Sade）公爵もそうであった。不幸な結婚と恋愛関係のために、一変して現代厭女宗の開山大師となり、また「サディスムス」（Sadismus は「他虐症」と訳せる）の代表者である。彼の著作にはこの二つの特色が満ちているが、文章があまりよくないようで、医者の類を除いては、世間にはそれほど知られていない。しかしながら彼の思想のあるものはショーペンハウアー先生に伝授された。ベルリンの皮膚生殖科の医師で医学博士のイワン・ブロッホが『現代の性生活』[iii]で述べるところによれば、『婦女論』の中の意見は多くがサド侯爵の言うところと同じで、論中最

も生彩のある一節は、女人の体型の醜悪を痛罵して次のように言う。(張慰慈先生の訳文を借りる)

「ただ性欲に迷うような男子だけが、この小さくて、狭い肩の、でかい太もも、短い足の人種を優美な女性と呼ぶのだ！」

サド侯爵は彼の小説『ジュリエット』(*Juliette*)[iv]三巻で同様の話をしている。

「君の崇拝する偶像から彼女の衣服を剥ぎ取ってみたまえ。これがその二本の短くて曲がった足だよ、君をこのように昏倒迷妄させているのは。」彼はまた別の小説で、情欲を断つことができ、かの「堕落した虚偽の悪辣なもの」と情交しない男たちこそ、真に幸福な人間だと言う。ショーペンハウアーが剽窃の詩人だとは言わないが、確かに彼のこうした思想は決してそんなに新奇ではないと思う。彼の文章は要するにまだ読む価値があると思うけれども。彼は性欲に惑わされると言うが、これは実に平凡至極の話である。生まれて性ある動物となる人間は、何事にしろ性欲の影響を受けないものはない。花を見るにしても、ハドスン(W. H. Hudson)やエリス(Havelock Ellis)などによれば、やはり性的な意味があり、花の色の優劣は肉体の連想を基準とし、花の香りは性的な気体と近いということだ。人間が彼女に惑わされないようにしようとしても、まるで孫悟空がお釈迦様の掌から跳び出そうとするように、とてもじゃないが容易ではない。わたしが思うに、涅槃の楽しみは一杯の薄酒を飲み、二首の短い足の人種を賛美した詩を読むには及ばない、古今に別なくと。というのはわたしは完全に俗人であり、凡人であるからである。ショーペンハウアーは涅槃に熱心であったそうだが、それはむろん良いことで、中国の老小の居士たちが知ればきっと大喜びをするだろう、東方文化が西洋を救うのは決してヨーロッパ大戦後に始まったわけではないことが分かると。(実は、キリスト教も我が東方のものであって、さらに古已にこれ有りなのだ。だがいま現在これはしばらく談じないことにする。)それでは日明師匠は確かに彼の先輩で、われわれが彼の文章を編訂でき、この新聞に引き写せるのは、やはり光栄の突き当たりといえよう。

ブロッホ(Dr.Bloch)医師がこれを聞いて勃然として怒り、「厭女思想」の一章で次のように言う。「ショーペンハウアー、ストリンドベルク、ワイニンガーなどは、完全にド・サドと同一の精神で、著書で女性に対する軽蔑を宣伝する。このタネが現代の青年に出会うと、ちょうど肥えた土地に落ちたようなものである。それら若いバカどもはそこで“男性の傲慢”を膨らまし、自分は劣性に対しては“精神の武士”なのだと感じる。そうした目醒めに満足した蕩児たちも流行を真似して、厭女を言い、(当然いずれもしばらくのことだが、)いささか自分たちの自尊心を維持する。もし“生理的低能”という言葉を使うとすれば、この名称をそうしたいやらしい者たちの上に加えよう。まさしくジョージ・ヒルトが『自由への道』で言ったように、このような男性の狂妄はただ精神欠陥症の一変種に過ぎない。」おう、おう、ブ先生はあまりにユーモアがなさすぎるのではないか。思うに、ロンブローゾの、天才はすべて幾らか風狂なところがあるというのは確かだ。だが芸術ではこの風狂は何も大したことはなく、しかもいいものだと言える。というのはそれはわれわれのために大芸術を作り出してくれるからである。だが、君自身に少し天分があって彼らを真似しようとするのでなければ、彼らの風話(ふうわ)を信じるのは、とても危険であって、普通の気狂いの話を信じるのと大して違いはない。ブ先生の警告がもしこうした平凡な読者に対し

てなされるなら、それはやはりとても有益であろう。だからそれをここに引き写したのであって、識者にはご寛恕を請う次第である。

おう、「色欲を訶る法」の後に「靴の話」[v]（古文で書けばおそらく履言という文字を当てるのだろう）を書いたが思わず本文の四倍以上の長さになったのは、バカと言う他ない。しかもそこにはすこぶる「女を重んじ男を軽んじる」嫌疑がかかり、さらによくない。理屈としても急いで終わらねば、書き終わりて上文の如し。

一九二五年十一月三十日夜中、豈明謹んで識す。

注：ハドスンの言うところは『鳥と人間』（*Birds and Man*）の花の色を論じた文に見える。

「色欲を訶る法」附録

女色なる者は世間の枷鎖なり。凡夫の恋する者は、自ら抜く能わず。女色なる者は世間の重患なり、凡夫困乏し、死に至るも免れず。女色なる者は世間の衰禍なり、凡夫之に遭えば、厄として至らざるなし。

行者既にして之を捨て得たるに、復顧念するが若し、是れ獄より出づるを得たるに、還た復入らんことを思い、狂より正を得たるに、而るに復之を楽しまんとし、病より差ゆるを得たるに、復病を得んことを思うと為す。智者は之を怒り、其の狂にして顛蹶し、死するに日無きなるを知る。

凡夫は色を重んじ、甘んじて之が僕と為る、終身馳驟して、之が為に辛苦す、復鉄質寸斬し、鋒鏑交々至ると雖も、心に甘んじて之を受け、以て患と為さず、狂人狂を楽しむは、是れ過ちにあらざる也。

行者若し能く之を捨てて顧みざれば、是れ則ち枷を破り鎖を脱し、狂を悪み病を厭い、衰禍を離れ、既に安にして且つ吉なり、牢獄を出るを得て、永く患難無からん。

女人の相は、其の言蜜の如く、而して其の心は毒の如し。喩うれば停淵澄鏡、而して蛟龍之に居り、金山宝窟、而して師子之に処るが如し。当に此の害を知りて、暫しも近づくべからず。室家不和なるは、婦人の由、宗を毀ち族を破るは、婦人の罪なり。実に是れ陰賊にして、人の慧明を滅す。亦是れ猟囲にして、出るを得る者は少なし。喩うれば高羅の如く、群鳥之に落かれば、奮飛する能わず。又密網の如く、衆魚之に投ずれば、腸を俎几に刳らん。亦暗坑の如く、目の之に投ずる無く、蛾の火に赴くが如し。是を以て智者は知りて之を遠ざけ、其の害を受けず、悪みて之を穢なりとなし、此の物の惑わす所と為らざる也。

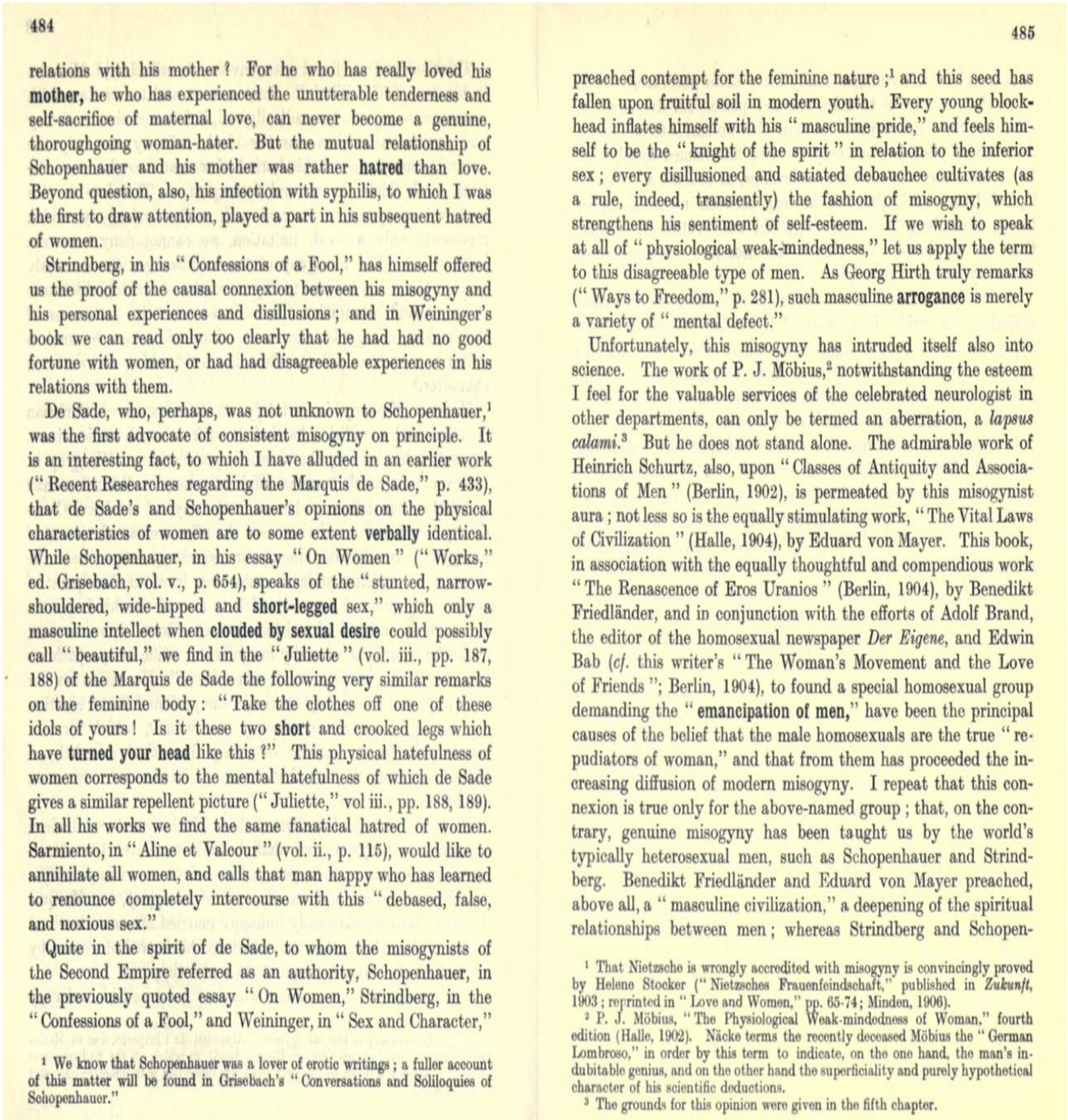
※初出：1925 年 12 月 14 日『語絲』第 57 期

---

[i] 『欲海回狂』　『読書雑記』第三巻九「『欲海回狂』を読む」（『雨の日の書』）参照。

[ii] ショーペンハウアー『婦人論』　日本語訳では『女について』石田立訳（櫻井書店 1949）、のち角川文庫（1952、1968）、『ショーペンハウアー全集』第十四巻（白水社 1973）のち『ショーペンハウアー随感録』（白水社 1998）所収など。

[iii] イワン・ブロッホ『現代の性生活』　Iwan Bloch; *The sexal life of our time in its relation to modern civilization*. Trans. by M.Eden Paul. Rebman Ltd. 1909. 周作人がこの文章で引用するのは主にこの書の第十八章“Mysogyny”つまり「厭女思想」である。書影はインターネット・アルヒーフより。



484

relations with his mother? For he who has really loved his **mother,** he who has experienced the unutterable tenderness and self-sacrifice of maternal love, can never become a genuine, thoroughgoing woman-hater. But the mutual relationship of Schopenhauer and his mother was rather **hatred** than love. Beyond question, also, his infection with syphilis, to which I was the first to draw attention, played a part in his subsequent hatred of women.

Strindberg, in his "Confessions of a Fool," has himself offered us the proof of the causal connexion between his misogyny and his personal experiences and disillusions; and in Weininger's book we can read only too clearly that he had had no good fortune with women, or had had disagreeable experiences in his relations with them.

De Sade, who, perhaps, was not unknown to Schopenhauer,[1] was the first advocate of consistent misogyny on principle. It is an interesting fact, to which I have alluded in an earlier work ("Recent Researches regarding the Marquis de Sade," p. 433), that de Sade's and Schopenhauer's opinions on the physical characteristics of women are to some extent **verbally** identical. While Schopenhauer, in his essay "On Women" ("Works," ed. Grisebach, vol. v., p. 654), speaks of the "stunted, narrow-shouldered, wide-hipped and **short-legged** sex," which only a masculine intellect when **clouded by sexual desire** could possibly call "beautiful," we find in the "Juliette" (vol. iii., pp. 187, 188) of the Marquis de Sade the following very similar remarks on the feminine body: "Take the clothes off one of these idols of yours! Is it these two **short** and crooked legs which have **turned your head** like this?" This physical hatefulness of women corresponds to the mental hatefulness of which de Sade gives a similar repellent picture ("Juliette," vol iii., pp. 188, 189). In all his works we find the same fanatical hatred of women. Sarmiento, in "Aline et Valcour" (vol. ii., p. 115), would like to annihilate all women, and calls that man happy who has learned to renounce completely intercourse with this "debased, false, and noxious sex."

Quite in the spirit of de Sade, to whom the misogynists of the Second Empire referred as an authority, Schopenhauer, in the previously quoted essay "On Women," Strindberg, in the "Confessions of a Fool," and Weininger, in "Sex and Character,"

[1] We know that Schopenhauer was a lover of erotic writings; a fuller account of this matter will be found in Grisebach's "Conversations and Soliloquies of Schopenhauer."

485

preached contempt for the feminine nature;[1] and this seed has fallen upon fruitful soil in modern youth. Every young block-head inflates himself with his "masculine pride," and feels himself to be the "knight of the spirit" in relation to the inferior sex; every disillusioned and satiated debauchee cultivates (as a rule, indeed, transiently) the fashion of misogyny, which strengthens his sentiment of self-esteem. If we wish to speak at all of "physiological weak-mindedness," let us apply the term to this disagreeable type of men. As Georg Hirth truly remarks ("Ways to Freedom," p. 281), such masculine **arrogance** is merely a variety of "mental defect."

Unfortunately, this misogyny has intruded itself also into science. The work of P. J. Möbius,[2] notwithstanding the esteem I feel for the valuable services of the celebrated neurologist in other departments, can only be termed an aberration, a *lapsus calami*.[3] But he does not stand alone. The admirable work of Heinrich Schurtz, also, upon "Classes of Antiquity and Associations of Men" (Berlin, 1902), is permeated by this misogynist aura; not less so is the equally stimulating work, "The Vital Laws of Civilization" (Halle, 1904), by Eduard von Mayer. This book, in association with the equally thoughtful and compendious work "The Renascence of Eros Uranios" (Berlin, 1904), by Benedikt Friedländer, and in conjunction with the efforts of Adolf Brand, the editor of the homosexual newspaper *Der Eigene*, and Edwin Bab (*cf.* this writer's "The Woman's Movement and the Love of Friends"; Berlin, 1904), to found a special homosexual group demanding the "**emancipation of men,**" have been the principal causes of the belief that the male homosexuals are the true "repudiators of woman," and that from them has proceeded the increasing diffusion of modern misogyny. I repeat that this connexion is true only for the above-named group; that, on the contrary, genuine misogyny has been taught us by the world's typically heterosexual men, such as Schopenhauer and Strindberg. Benedikt Friedländer and Eduard von Mayer preached, above all, a "masculine civilization," a deepening of the spiritual relationships between men; whereas Strindberg and Schopen-

[1] That Nietzsche is wrongly accredited with misogyny is convincingly proved by Helene Stocker ("Nietzsches Frauenfeindschaft," published in *Zukunft*, 1903; reprinted in "Love and Women," pp. 65-74; Minden, 1906).

[2] P. J. Möbius, "The Physiological Weak-mindedness of Woman," fourth edition (Halle, 1902). Näcke terms the recently deceased Möbius the "German Lombroso," in order by this term to indicate, on the one hand, the man's indubitable genius, and on the other hand the superficiality and purely hypothetical character of his scientific deductions.

[3] The grounds for this opinion were given in the fifth chapter.

[iv] マルキ・ド・サド『ジュリエット』　渋沢龍彦訳『悪徳の栄え』（桃源社・現代思潮社など）

[v] 「靴の話」　人の文章に靴を履かせるという意味だろう。跋や書後と同じ意味だが、「履言」の例が見つからない、周作人の造語であるかもしれない。

## 109　新聞を読んだ経験

われわれの普段の習慣では、毎日必ず新聞を読むのは、ほとんど中毒のようなもので、もし一日でも偶然に休みになると、いささか物足りなく感じる。だから新聞とわれわれとは確かに関係がある。もしよい新聞がわれわれに提供されるならば、その長所は決して読書に引けを取らない。しかしよい新聞は得難く、わたしが経験から感じるその欠点をいくつか書き出してみて、みんなの参考にし、併せて五周年後の『晨報』が理想的なよい新聞になれたらと思う。

自分の経験では、新聞を手にするとたいていは先ず附録を見る、――ある種の副刊はとても風変わりだが、また別に一種の趣味がある。その中でも真っ先に見るのは雑感・通信といった小品で、ついでは詩文小説である。われわれはもちろん常に本当の文芸作品の出現を期待しているが、これは無理強いできるものではない。だからしばらくは現状で満足せざるを得ない。ただ青年の思想界をできるだけ触発して、その精神を奮い立たせることを希望する。玄学の問題、愛情の定理といった弁論は、人によっては紳士的な態度でないとする人もあるかもしれないが、わたしはとてもよいと思う。副刊の作用は、「多く文学思想上の事業をする」ことにある。だが日刊にくっついて非専門的な雑誌なので、その性質は少し軽めであるべきで、嘲弄や痛罵が過ぎてはいけないけれども、いま通行する幾つかの副刊は、もちろん大いに改良発展の余地はあるが、たいていは通用するもので、われわれは完璧を求め過ぎる必要はないだろう。

その次に、われわれが注意するところは、政治的ニュースである。自分にはまるで政見はなく、他人の政論についてもあまり興味はないけれども、この方面の事情に関してはどうしても少しは知っておく必要がある。だから毎日例によって一通りは読む。上に述べた如くだから、政治そのものについては興味はなく、いつもは新聞を読んでそのままにしていて、別にそれらの報道の中に何か大道理を求めようなどとはしない。だが読むべきニュースがないときはまたいささか寂しい思いもする。幸い中国の新聞界には一種奇妙な習慣があって、政治上・社会上にかかわらず何か大騒ぎがあっても、もしそれがなにかの佳節吉日などに当たったとなると、即刻仕事を辞めて休息とし、時にはまるまる一二週間全国に一紙も出ないということになる。まことに不思議なのは、わたしのような政治を語らない人間でも、その時は、時局が一体どうなっているのかわからないことに、いつもイライラするのを免れない。政治を語るのを仕事にしている人々が却って悠然としていて、まるでなんの不満もないようなのは、いったいその訳はどこにあるのだろう。中国の祭日中毒は実際とても大きい。轟々烈々たる外交運動も年末になると休みになるし、商会のストライキも祭日の後に行われる、全てがよい前例である。新聞界の一二週間の停刊もあるいは当然のことかもしれない。だがわたしは希望する。中国の新聞界にも少なくとも一つや二つはこの慣例を破って、隣国の「年中無休」を見習うことができたらと。この犠牲はきっと小さくはないことは分かっているが、でもほんとうに新聞をやることに熱心な人なら必ずしも担えないわけではない。ましてその中には特別に得られる利益がないのではないのだ。ただ中国人の祭日の過ごし方がこのように熱狂して新聞さえ見ようとしないという風にならなければよいのだ。たとい一歩退いて、年越し佳節はいつものようには出版できないとしても、半分に減らせばよいので、

毎日ただ号外のような一枚を出すだけでも、緊要なニュースは伝達できないものではない。中国ではこのように気が入らぬ国内政治から軍事行動まで祭日となると休みになる。ほんとうに何も伝えるべき緊要のニュースがないのだろうか。だがわたしは要するに一二の新聞社が改革を起こして、言論出版界の停滞した空気を打ち破ってくれるよう希望する。

最後に、われわれは社会ニュースと広告を見る。現在の社会ニュースの編集法については、幾つもの欠点をあげることができる。その一は重複である。いつも同じニュースが、記事に少しの異同はあるものの、前後に重出したり、あるいは同じ新聞に載ったりする。これは小さな欠点で、見ていてとても不愉快である。その二は有頭無尾である。一つの事件が起った時に載るだけで、後に続きがない。中国の社会ニュースはたいていがすべて投稿で、本社記者の調査探訪を経ず、しかも多くがただの道聴塗説でしかなく、決して本件の関係人あるいは関係官庁に探訪しないから、大半が不確実で、読者も暇つぶしの材料としか見ず、見たらお仕舞いである。先だっての孫美瑤旅団長が臨城で起こした事件*の後、新聞には汽車が時刻表を変えると出て、あとは続報をすると声明したが、ついに消息は杳然としてない。汽車に乗ろうとする人は当然駅に行って改正された時刻を尋ねるだろうが、新聞の記事が有頭無尾であるのは、要するに欠点である。このように真面目な事でもこんな体たらくだから、ほかの小事件なら言うまでもない。その三はあまりに社会心理に迎合すること。上に二点は編集方法に関してだが、この点は材料に関してのものだ。中国人はニュースを読んで、多くがそれを『聊斎』と見なす。これは旧『申報』や『点石斎画報』の題目を調べてみると、「怪胎はどこから来るか」でなければ、「貞烈風すべし」あるいは「鴛鴦を打散す」で、それだけで、明らかである。今の新聞紙上にはあまりこうした標題は見られなくなったが、その内容を調べるとやっぱり二十年前と同様である。論理としては、ニュースで重大な事件と公衆に利害関係があるもの、あるいは特殊な事物で面白いものを載せさえすれば十分である。例えば某所での学術講演、某地での強盗殺人、あるいは三貝子花園〔北京動物園〕の猿が子猿を生んだとか、中央公園の二月にランが開いたとかの類であって、ほかの個人の私事に至っては一概に載せる必要はない。しかしながら公衆は人の悪口を聞くのを喜び、新聞は社会心理に迎合するために、多くがやはりいわゆる風化のニュースを載せ、人の欠陥を暴くのはまだその中に入っていない。こうしたニュースは表面上名教のものと卑猥なものとの二種に分けられる。しかし根本的には同じように劣悪でしかも不健全である。彼らは某貞女が「一言の微を以て竟爾に身を殞なう」ことを述べたり、あるいは「二かけの骨」が道士廟の密会にあったとか、時にはさらに遠く数千里外の何ヶ月も前の個人の秘密を述べて篇幅を充たす。これは当然読者の無形の要求によるものだが、ニュースという点から論ずればその価値はいったいどこにあるのか。わたしの考えによれば、個人の寝食の他に、両性の関係は天下の最もプライヴェートな事であり、一切は自己の責任によるべきで、第三者とはまったく関わりがない。たといいかに変態であろうと、犯罪を構成しないならば、社会的には別に問題にする必要はない。だからそういうニュースを記述して読者を楽しませるのは、実は性的現象を使って笑い話を作るのと同じく下司の根性である。こうした事は風化と関わるから、掲載する価値があるのだと言う人があるかもしれない。わたしには全く解らない。一人の貴夫人の二十年前の禁欲だの、一組の男女のあからさまにしない同居

だのが、いわゆる風化の盛衰に何か影響があるのか。世間にもし風化があるとすれば、それは一時代の両性関係の現象に過ぎないが、中に貞女節婦、童男義夫などが含まれ、またあの二かけらの骨およびその他も含まれるが、われわれは任意に粉飾を加えることはできない。わたしは新聞記者に守節の愚を力めて退け幽会の雅を褒めあげることを希望しているのではない。なぜならそれも極めて誤っているから。わたしはただ記者がこうした事についてもう少し常識を持って欲しい、両性関係をあまりに神秘にあまりに重大に見て、少し聞きかじっただけで、筆を振るって書き連ね、いかにも興味津々と記すのはやめて欲しい、これは極めてプライヴェートな事柄であって公にする必要などないことを知ってくれればよいのだ。性の事実は決して記述して悪いことはないが、それには別の方法を使うべきである。あるいは芸術的に公表して文学・美術にするか、あるいは科学的に性の心理の研究をするとか、すべていけないものはないが、社会ニュース欄に庸俗の公衆に酔後飯後の玩弄として供するのはよくない。彼らにこうした要求があったとしても、構わなければよい。公衆を相手にする新聞はもちろん社会心理を無視するのは都合が悪いだろうが、多くの場所では拒絶するしかない。ある種の新聞には紹介式に芝居便り遊里便りが載っているが、それはもともとわれわれが言う新聞の範囲内に入らないから、むろんその良し悪しを言う必要はない。

わたしは新聞学には全くの素人である。いま言ったことはただわたし個人の意見でしかなく、なんの根拠もない。しかもすこぶる人の好むところを憎む所があるから、容易に実行はできないだろう。もしこれによって極めて少数の局部的な改革でも引き起こすことができれば、それはこの小文の最大の成功である。　民国十二年十一月。

※初出：1923 年 12 月 1 日『晨報五周年紀念増刊』

---

* 臨城事件　本書「抱犢谷通信」参照。

## 110　叢台修復の事について

今年の夏休みに、燕京大学の王徳曦・黄文宝の両君が邯鄲に社会の状況の調査にゆき、叢台*の古跡を見、そこで寄付金を募って再建しようとし、わたしに文章を書けと言う。わたしは文章が得意でないうえに、叢台もまだ見たことがないから、当然何も語ることがない。ただ古跡保存の事についてはいささか意見があるので、書くことにした。

古跡保存の運動は、開化した国では大抵どこにでもある。保存の目的は二つに分けられる。一つは美術的なもの、二つは歴史的なものである。しかし古跡には全てに美術的価値があるとは限らないから、この第二の意義が重要な位置を占めることになる。フランスのモンタランベール（Montalembert）が、「久遠の記念は偉大な国民を作る」と言ったことがあるが、簡明な解釈とすることができよう。この久遠の記念の効用は、決して昔を追慕して、地球を逆転させようとすることにあるのではなく、一種の自覚を喚起することである、過去を望見することはつまり将来を意識することである。これが国民を偉大ならしめる所以である。歴史的な古跡はまさに一つの道標べであって、民族の無限の行程の路傍に立てられ、経過した里数を記録すると同時に、遼遠な前途をも表示し、道行く者に次の標べを建てるよう促す。王羲之は『蘭亭序』で、「後の今を視ること、亦猶今の昔を視るがごとし」と言っている。これは達観した言葉だが、もし積極的に使うなら、懐古の心情への一つの解説とすることができる。

中国は古跡について今まで重視してき、常に整備保存の動きもあった。しかし一般の意見は昔の追慕に偏りがちであり、しかも保存も法を得ていない。これはとても残念なことである。例えばわたしの故郷の蘭亭にしても、もともと有名な古跡で、地方でもすこぶる注意して、常に修理をしている。だから建物は極めて整っているのだが、装飾があまりよろしくない。近頃またある生地商人が監督して改造して、俗悪極まりないものにしてしまった。蘭亭に遊ぶ人はただロバの背からはなんとか山水の美を知ることができるが、一旦門前に着くと、かえって興味索然としてしまう。また大同の石仏寺には、いまも無数の彫像が残り、もともと東亜の偉大な美術の一たるに恥じないが、やはり多くが修整によって損なわれている。仏像はひとたび俗工が漆を塗ると、全てラマ廟の菩薩に化けてしまい、ほんとうの美術家が見ればそうした金碧を剥がして、本来の、残欠してはいるが光栄ある面目に戻せないのを残念がる。また石窟を「保護」する兵士警察の駐在が、さらになし崩しに破壊の自然力の進行を助けている。この二つの事について見ても、中国の古跡保存に対する方法が実にきめ細かさを欠いていることが分かる。したがってまた古跡保存の道理についてもあまりはっきり理解していないことが分かる。

王・黄両君によれば、今回の叢台の修復は、以前の方法とは大きく違い、わざと流觴曲水などといったものを作らず、金碧の塗飾もせず、単にすこし地面を拡張し、何間かの建物を修理し、公園のようにして、公衆の遊覧に供するというものである。この方法は極めてよろしい。叢台の由来はみんなの深い感興を引き起こすとは限らないが、邯鄲は記念すべき所で、そこから叢台を取り出して代表とするのも、またまさにまっとうなやり方である。美術的な古跡を保存するには、当然別の計画を立てるべきだが、普通の歴史的遺跡には、ただこのようにするだけでも十分に適

わしい。

一九二二年十一月三日、北京にて記す。

※初出：1922 年 11 月 3 日『晨報副刊』

---

*叢台　戦国時代の趙が邯鄲城内に築いた台で、それが幾つもあったので叢台と言う。台は高く土を盛り上げ平くした所に建物を建てた。用途は不明。

## 112 『児童世界遊記』を読む

杭州の小さな友人から手紙をもらった、その末節に、「喔喜喔（オシーオ）！（『児童世界遊記』からこの日本語を学びました、でたらめに使いましたが、面白そうです。）」とある。わたしも読んで面白く思い、そこで『児童世界遊記』を買いに行った、開けてみて、いささかがっかりした、というのはこの句は解釈を誤っているのだ。それは言う、「喔喜喔、その意味はこんにちはと言うことだ。」だがわたしはこんな句を思い出せない、ただ通用する「阿哈育（Ohayo）」があるばかりで、意味はおはよう、朝顔を合わせての挨拶の言葉である。あるいは英米人が完全な英国綴りで Ohiyo と書き、今ではそれをまた普通のローマ字綴りで読んで、それで間違ったのかもしれない。

日本人の姓名は、中国では普通皆漢語の原字が沿用されるのだが、この本では皆音訳であるのも、検討の余地がある。「塔羅」は当然「太郎」である、だが「海鹿顧勝」は相当する人名が思い出せない、ただ「花子」は女の子の常用の名前で、Hanakosan（花姑娘）と読むが、中国の NL 交替*の例によって、これが「海鹿顧勝」の原文であるかもしれない。

書中に、「木枕はレンガのような大きさである」とあり、又「いくつかの紙燈」とあるが、この木枕と紙燈いずれも事実ではあるけれども、現在ではもう通用しない。たとい「箱枕」を無理に木枕と言ったとしても、旧式の婦人が使うものでしかなく、太郎は決してこんなものは使わない。又テニスの図の中で、男の子が女の服を着ているように描いてあるのも、とても奇怪に思う。思うにこうした材料は多分西洋の書物の中から採ってきたのだろうが、西洋人はわれわれ藪睨みの東方人の事に対しては、往々にしてはっきりと見ていず、だから彼らの書いたり描いたりするものは、些か誤りを免れない。われわれがチェンベントーの地理読本を読んで、だいたいわかるように、この遊記も彼らから材料を取っていて、自然と誤りが出るのは避けられない。

しかし他にも一件事があって、西洋人は多分責任は負えないだろう、つまり遊記の中に、「日本人は秦朝の時の徐福の子孫だと言う人がある、このことは以前の日本人も承認していることで、思うに間違いではなかろう」と言う。一民族の始祖が誰であるかは、容易に断定できることではない。以前様々な推測があって、後になって研究がいよいよ深まったが、結論はまだまだ保留である。例えば漢族の問題でも、バビロンから来たと言う人もあるし、ユダヤから来たと言う人もあるが、現代のドイツの有名な中国学者ヒルトの著『周代以前の古史』で考証できないとしか言わないのは、実は最も聡明な見識である。中国の家譜式の人の始祖を推定するやり方は、あまりに附会に過ぎるのを免れないし、しかもそれを人様に応用するのは失礼というものである。

遊記の第一冊の後半はフィリピンについて述べたもので、わたしはそれの正不正を言うことはできない。しかし最後に「村じゅうで父を食べる儀式を挙行する」ことを述べている、思うに我々がもしフィリピン人が現在ほんとうに「お前に一切れわしに一切れ」とまだそこで父を食べているのを確実に知っているのでなければ、この一節はあってはならない。（民国十一年四月）

※初出：1922 年 4 月 10 日『晨報副刊』

---

* NL 交替　中国語では地方によって字音の頭子音の N（那）と L（拉）が入れ替わることがある。たとえば万年ならふつうは「wannian」と読むが、湖南や四川地方では「wanlian」となる。「海鹿顧勝」は近似音では「halukosan」、それは「hanakosan」の n が l に交代したのかもしれない（著者が湖南や四川の出身で）と言うのである。近似音が「halukosan」なら「はるこさん」（例えば春子）の可能性もある。

## 113　『自由魂』を評す

今年は映画を見たことがない。だからこの「偉大なる映画『自由魂』」も当然見ていない。ただ友人のところで一枚「自由魂特刊」を見て、何か言わなくては気が済まなくなった。だが他人の営業を妨害するつもりはないから、特に上演されるのを待ってそれから批評する。

アメリカは金持ちがいっぱい、またいろいろ映画界の有名人もいるから、この映画はきっとうまく撮れているのだろう。――たといまずくとも、わたしは素人だし、それに見ていないのだから、口を挟む資格はない。わたしが言いたいのは、特刊に言われているプロットによれば、これは不道徳な映画であるということだ。わたしはもともと道徳的見地によって芸術を批評することには極端に反対である。しかし文芸上で私情に言及すれば風俗壊乱だというのは承認しないけれども、暴力的行為を鼓吹する作品は不道徳なものだとは確信する。およそ鼓吹の性質のあるものは、すべてそれが正当な文芸だとは認めない。『自由魂』は黒人撲滅主義を鼓吹する映画である。少なくとも説明によればそうであるから、わたしはそれは不道徳だと言うのだ。

『自由魂』の原名は「国家の誕生」である[i]。主人公は白人のベンで、映画の第一段では南軍の隊長で、リンカーンに対抗し、黒人奴隷解放に反対する。第二段では三K党を組織し、「民を弔れみ罪を伐ち」、黒人を征伐し、英雄と美人が例によって団円になり、そして「これよりアメリカの自由の光は永遠に全国を照らす」ことになる。この映画がよしとするところによれば、リンカーンが黒人奴隷を解放したのはまさに国難の始まりであり、三K党首のベンが「衆醜を殲滅し」、始めて国事が定まり、国家がここにおいて誕生するのだ。要するに全篇の精神は反リンカーンである。われわれがもしリンカーンの行為が人道正義に合っていると考えるならば、この篇で鼓吹する主義はそれには合わないと認めざるを得ない。われわれはもともとあまりに真面目になりすぎ、娯楽の中にくそまじめに意味を求めてはならない。だがこういった宣伝の映画は自ずと例外に属する。なぜならその意味はすでに明瞭だからである。

わたしは種族思想を打ち破れる人間ではない。ラム[ii]は「不完全な同情」という文で、「黒人の顔にはいつも温和な表情を見ることができる。街中で偶然出会って、穏やかに人を見れば、こうした顔――あるいはマスクと言った方がよいかもしれない――に対してわたしはいつも柔和な恋慕を感じるのである。わたしはフラーが美しくも言った――「黒檀に彫り上げた神像」を愛する。しかし彼らと交際することは願わないし、一緒に食事をしたり挨拶したりすることもしたくはない、――なぜなら彼らは黒いから」と言う。（ラムの文章を訳そうとは思わないが、今回は止むを得ず、ただ引用という意味でしかない。）今わたしは黒い人に対してやはり心の中で一種の隔たりがあるのを免れない。少なくとも黒人の女と恋愛する勇気はない。しかし、この親しさの障碍となるのは人種の異同でしかなく、決して物類としての違いではない。つまり我々は黒人を異族と考えるが、決して彼らを異類とはしない。われわれはどんなに黒人が嫌いでも、人類の前では要するにお互いが平等であると認める。しかしながら『自由魂』ではまったく黒人を人間として見ず、一群の醜類でしかなく、（ただ一人白人に忠義な黒人の嫗を例外とする、）その挙動は一つとして「醜」でないものはなく、しかも残虐無類で、ついに「黒人の肉は其れ食うに足るか」とな

って三K党が大挙して反乱を起こし、「諸醜を洗い流して」、人心を大いに快ならしめるのである。こういう態度はどうしたって正当化できず、わたしは決しておべんちゃらを言うことはできない。これは中国が崇拝するアメリカ人の傑作であり、しかもまた「値千万」であるけれども。

劇中で外国人を描写するのは勤めて慎重であるべき事だと思う。喜劇あるいは映画では特に極めて細心に注意しなければいけない。天下の人間はいずれも少し排外の性質があり、随時に発露しようとするが、群衆を観客とする滑稽あるいは通俗作品においてはさらに容易に発現し、流毒もずっと多く、民族間の憎悪を助長する。ユダヤ人は特別な理由を持っているから、中に入れないでよい。他は例えばロシアの劇のドイツ人、アメリカの劇の中国人、中国の劇の日本人、いずれもとても醜いものになっているが、実際にはそうあってはならない。これは外国人を侮蔑するのみならず、知らぬうちに帝国主義のタネをまき、しかも間違った形容であるのは、やはりとてもおかしい。なぜなら外国人を描写するのは容易な事ではないからである。わたしは一昨日フランスの画家モンジが北大で展覧した絵を見たが、その中に一幅日傘をさした日本の女性を描いた絵があった。だがその姿勢はとてもよく満州婦人に似ており、そしてその面立ちはまるで西洋人である。西洋人の描く極東の人物を見るたびに、いつも『アラビヤンナイト』の挿絵の雰囲気があるように思い、不愉快な気持ちになる。たぶん東方の景色を描くのに最も適したのはやはり東方人自身である。したがって嘲罵諷刺の劇を作ろうとするには、最も良いのはやはり自分自身の民族を嘲罵諷刺することである。そうすればきっと形容も描写も間違わないだろう。自己譴責はまた民族が偉大であることの兆候であり、偉大な人間は他人の罵倒に耐えうるばかりか、さらに自己の罵倒にも耐えられる。もっぱら他人を罵倒するのは貧乏人の相であって、われわれの切に戒めるべきことである。特刊によれば、『自由魂』の製作はアメリカ政府の肝いりで、在華のアメリカ人も「熱狂してこのフィルムを迎えた」そうで、特刊の記者はさらに「特に我が国の現状とよく似ていて、大いに我らの借鑑に供するに足る」と宣う。中国人が見て虜になり、本当に真似をして、唐継尭が三J党を組織し苗族を撲滅（我が国の現情を調べると黒人に相当するものは苗人しかいない）とかいう映画を製作し、扶漢滅苗の暴動（あるいは義挙）を引き起こしかねないのが心配だ。まことに城門失火して殃い池魚に及ぶである。だからここでついでに言及し、みんなが注意して、ベン大師兄の罠に嵌らないように希望する。

この「『自由魂』の説明」を読み終わって、思わずふと一部の本を連想した。それはアメリカのストウ夫人の書いた『黒奴籲天録』〔『アンクル・トムズ・ケビン』〕である。本来これも宣伝の書であり、よい文芸とはすることはできないのだが、宣伝の中ではよい方のものである。アメリカがもし「本国の民気を表揚」しようとするなら、どうしてアンクル・トムの物語を制作しないのか。まさかアメリカの精神はリンカーンではなく三K党であって、アメリカの光栄は黒人奴隷解放ではなく、黒種殲滅であるわけはないだろう。何が正しくなく、何が正しいのか。わたしはまだアメリカへ行ったことがないから、分からない。また『自由魂』の上映を見ていないから、その内容が一体どうなのかも分からない。ただその特刊の話によるだけだから、もし間違った批評で、事実と合わないならば、それは大半が林琴南風の古文の説明書きを書いた人間のせいである。なぜならこの大文の中には確かに帝国主義に対する憧憬と異民族に対する怨毒が充満しているか

らである。

われわれが黒人の生活の真相を知ろうとすれば、最もよい方法はやはり黒人自身に尋ねてみることだ。フランス領コンゴの黒人マランが書いた小説『バトワラ』（*Batouala*）[iii]は極めてよい書であり、映画にするには、最も適している。だが可哀想な中国人は『大義親を滅す』しか制作できない、――わたしはそれが何を言っているのか知らない。だがその題名を見ただけですでに吐き気がする。

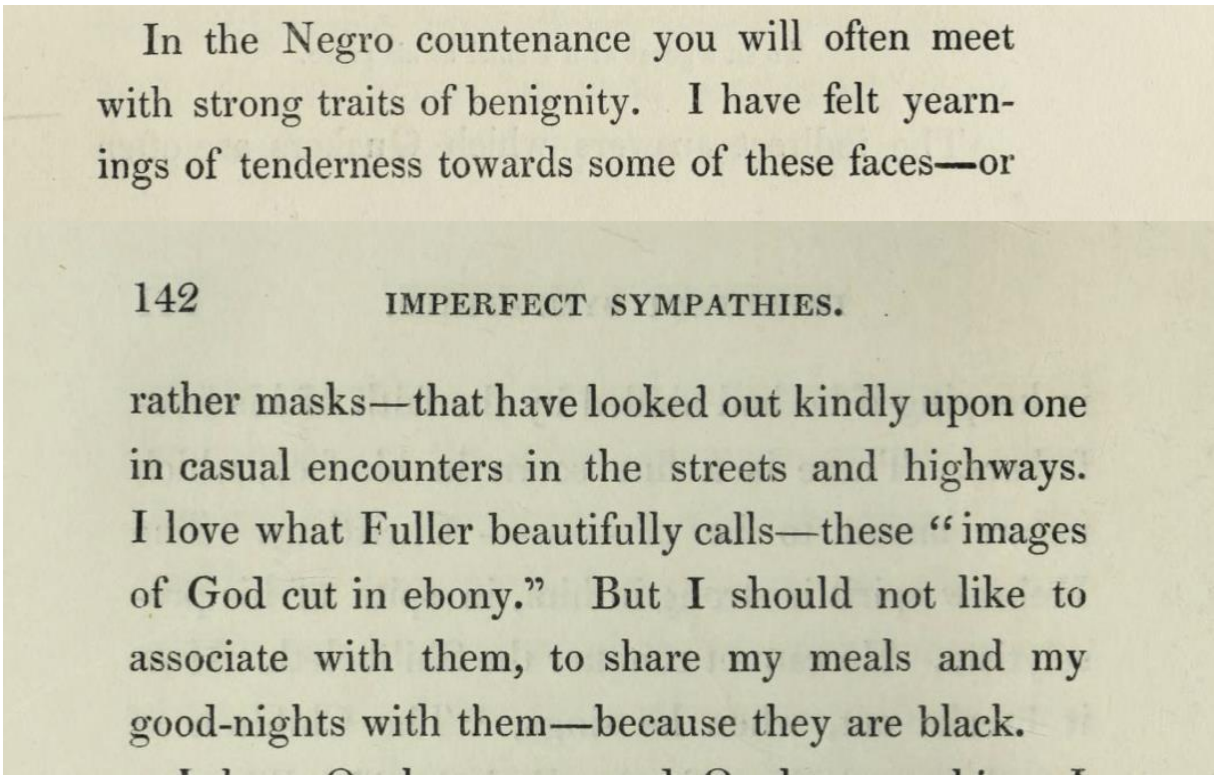
民国十三年四月。

※初出：1924 年 4 月 3 日『晨報副刊』

---

[i] 『自由魂』　“*The Birth of a Nation.*”　日本の訳名『国民の創生』。1915 年公開の D. W. グリフィス監督の無声映画。主人公はベン・キャメロン。

[ii] チャールズ・ラム　『エリア随筆』*Elia* by Charles Lamb.Edward Moxon ,London 1836.“imperfect sympathies”pp.141-2.



In the Negro countenance you will often meet with strong traits of benignity. I have felt yearnings of tenderness towards some of these faces—or

142 IMPERFECT SYMPATHIES.

rather masks—that have looked out kindly upon one in casual encounters in the streets and highways. I love what Fuller beautifully calls—these “images of God cut in ebony.” But I should not like to associate with them, to share my meals and my good-nights with them—because they are black.

[iii] 『バトワラ』（*Batouala*）　Rene Maran（1887～1960）, 1921 年にフランス語で書かれたこの小説はゴンクール賞を受けた。英訳は Adele Szold Seltzer による翻訳が 1922 年にニューヨークの Thomas Seltzer が出していて、それをインターネット・アルヒーフで見ることができる。日本語訳はないようである。

## 114　ギリシア人名の訳音

師範大学から出て、琉璃廠を歩いていて、商務分館に漢訳『外国地名人名表』[i]があるのを見て、一冊買って帰った。わたしは訳音については、まだ十分には使えないけれども、注音字母を使うことを主張するものである。だが今は過渡期で多くの人がまだ認識していないから、漢字を使うのもやむを得ない方法である。ただそれを中国の姓名のように訳しさえしなければである。商務のこの表は通行する旧訳を採用している他は全てみな一定の字法を用いて同一の音を表示していて、訳名をほぼ統一しようとしているのは、すこぶる意義のあることである。それが成功しているかどうかは別問題である。表の用字はわざと艶麗あるいは奇異な字を採用せず、また必ずしも『百家姓』を外国人に分配していないのは、いずれもその長所である。もう一点、イギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン各国の人名地名の音がことごとく本国の読みに倣っており、スラヴ族でも大体はそうであるのは、「名は主人に従う」の例を実行していて、やはり佩服すべきことである。中国人は今までずっとイギリス一国だけが西海にあり、英語がすべての外国語で、英語の発音がすべての表音の金科玉条であると思っていたようで、別国も本国もあるいは人名もその表音がむちゃくちゃであったが、今ようやくわかってきて、張という姓の者が自分からミスター羌と称したがらず、また人の姓名を無茶読みしたがらなくなった。この『表』はそうした趨勢の表れと言え、また提唱ともスローガンともできる。

しかしながら、古典の人名の一部を見たが、失望を禁じ得ない。多くのギリシア・ローマの人名がみなまだ英語の読み方によっているのである。したがって訳し方がとても不正確なのだ。今いくつかギリシアの字を例にあげよう。本来イギリスのギリシア文化は最初ローマから間接に輸入され、ローマとギリシア語は系統は同じだけれども、字母は違い、ローマ人がギリシアの人名を訳すと一二誤解しやすい字母に変えてしまい、また自分の文法に従って語尾を変えてしまう。イギリス人はその上それを自分の発音で読み、その結果ついにとても妙ちきりんな名前に変わってしまう。われわれは「名は主人に従って」読まなければならない。第一歩は欠けたり誤ったりした語尾を改正あるいは補足しなければならない。もう一歩進めて律儀なドイツ派に倣ってそれを還原し、別のローマ字で書き表して、読音がようやく的確なものになる。例えばギリシアの二人の大悲劇作家は、『表』では次のように書かれている。

（1）Aeschylus 伊士奇

（2）Sophocles 索福克　あるいは索福克儷

これらはすべてイギリス式発音による旧訳で、正しくない。最初のは Aiskhulos と読むべきで、商務の『漢訳表』の規定によれば、「愛斯屈羅斯」とするべきで、その二は Sophokles とし、漢訳は「索福克雷斯」である。

その次は、神話上の師弟二人、

（3）Dionysus 帯奥奈薩斯

（4）Silenus 賽利那斯

しかし、（3）は Dionusos とすべきで、漢訳は「第奥女索斯」、（4）Seilenos 漢訳は「舎雷諾斯」である。

また次に、これは二人の美少年が花に変身した者で、すなわち今のヒヤシンスと水仙で、誰でもよく知っている。

（5）Hyacinthus 亥阿辛塔斯

（6）Narcissus 那息薩斯

このヒヤシンスの前身は Huakinthos とすべきで、漢訳は「許阿琴託斯」、そのほかの一人は Narkissos で、漢訳は「那耳岐索斯」である。

最後にもうお二方の女神にお出まし願おう。

（7）Circe 塞栖

（8）Psyche 賽岐

最初は有名な太陽の娘、彼女は魔法を使い、道ゆく旅人を豚の子に変えてしまい、また英雄「奥度修斯」を二年も留めたことは、史詩『奥度舎』（Odyssey）に見え、彼女の本名は Kirke で、漢訳は「岐耳開」である。――言うのも可笑しいが、わたしは二十年前ハガードとアンドリューラングの共著の小説を一冊訳したことがあり、そこでそれを Sest のように読み、とても奇異な二字に訳した。 思い返すと、まことに今日のわたしが昨日のわたしと戦っているようだ。二番目の女神は本名 Psukhe、訳して「普緒嘿（プシヘイ）」である。 彼女の尊名は「什科洛支（サイコロジー）」名称で世界に通行していて、（最近ではまたフロイトに感謝しなければならない、） みんな誰でも少しは見覚えがある。だが彼女は愛の神（Eros）自身の愛人で、彼らの恋愛物語は『変形記』（Metamorphoses）に保存されている、ギリシア神話の中で最も美しい一章で、ペイター（Pater）の『快楽派のマリュウス』[ii]の中でも転述されている。

こうした類の古典の人名の不正確な訳はまだ少なくない。再版あるいは『地名人名辞典』出版の時には訂正を加えられることを希望する。ただ閲覧者の実用のためばかりでなく、この『表』を完善に近くし、三年の編集と十一人の学者の校閲のご苦労に背かないようにと。民国十四年五月二十日、北京溝沿にて。

今日新月書店の出版した潘光旦君の著『小青の分析』を受け取り、第二章「自己愛」の中でも Narcissus に言及しているのを見た。ところがその音訳を「耐煞西施（ナイシャシー）」としているのはなんとも奇妙だ。その後ろにまた「今でも植物分類学の水仙の属はこれから名を得たもので、Narcissus はギリシア語の原義では沈酔麻痺で、おそらく耐煞西施が池に映る影を見たときの精神状態を指すのだろう」と言う。これは潘君自身が言うように「因果の間には倒置なきにあらず」を免れない。けだしこうした縁起を説明する神話はすべて先に物があってそれから後に人および物語がある。故にこの美男子が流れに自分の影を見たという伝説は、水仙の花から紡ぎ出されたのであって、決して水仙の花がこの少年によって名前を得たわけではない。（Echo の解釈もまたこれに準ずる。）また Narkissos という言葉は Narkē から出て、意味は麻痺という、だがこれは水仙の属には麻酔性があることによる。それはイギリスの Skeat の語源辞典を調べると分かるが、美男子が造ったものではな

い。字義の面から物語を解析するのは、もともととても面白いのだが、ややもすると牽強錯誤に陥り、あまり意味がなくなってしまう。

民国十六年十一月六日附記。

※初出：1925 年 6 月 1 日『語絲』第 29 期

---

[i]『外国地名人名表』　何崧齢・余祥森・夏粋若編　1924 年商務印書館発行　これから「西文訳音総表」を省いたものが汲古書院から 1975 年に影印出版されている。外国人には漢文を読む時に「漢文索引」が役に立つ。

[ii]『快楽派のマリュウス』　Walter H. Pater：*Marius the Epicurean: His Sensations and Ideas*, 1885.日本語訳には工藤好美訳『享楽主義者マリウス』（南雲堂 1985 年）などがある。

## 115　新ギリシアと中国

最近はする事がないので、新ギリシアの文芸と宗教思想に関する書物をざっと読んで、とても中国に似ていると思った。第一は狭隘な郷土観念である。あの人はどこの人と訊く者があれば、その人は決してギリシアとか某島とか某省とかは言わないで、必ず彼が成長した小さな地方の名前を挙げる。たとい彼が幼年の頃に外に出て、他のところで二十年三十年いたとしても、そこの人は決して彼が当地の人間だとは認めない 。彼の方も終始一人の「外江佬（よそものの）」（Xenos）だと自認している。第二は権力争いである。彼らには「良い奴隷、悪い主人」という俗語がある、つまり一たび権勢を握ったなら、分に安んじないと言うのである。だから先ごろのトルコに対する独立の戦いでも、革命に首領たちが権力を争い、ほとんど失敗しかけた。独立の後も、政治家がまた首領を以て自認し、互いに推倒そうとして、議会は毎年一回は解散する。第三は保守である。本国の風俗習慣は何でも良く、結婚は仲人がなくては叶わないし、人が死ねば、身内（女の）は歌を唱うように泣かなければならないし、葬送の人はすべて死人と最後の接吻をしなければならない。彼らはまた欧化を最も嫌悪する。第四は詐欺である。そこのものはただ列車の切符と新聞と巻きタバコだけに定価があり、そのほかはすべて各人の腕によってその場その場で値段が決まる。商売をするものは儲ければもちろん良いが、負けて安く売った時でも平然として金を受け取る、心では買主の腕の良さに敬服しているのだが。第五は多神の迷信である。あるイギリス人[i]は彼らを批評して、「ギリシア国民は多くの哲学者の出現消去を見てきたのに、結局しがみついて放さないのは連中の世襲の宗教である。プラトーにアリストトール、シヌオにエピキュールの学説は、ギリシアの人民には、まさしくそんな事はなかったのと同じだ。しかしホーマーとそれ以前の時代の多神教は生きているのだ」と言った。夢判断に占い、お札にお告げの処方、雨乞いにこっくりさん、中国のこういうあの手この手は、そこにはたいていある、ただ静坐と採補の術[ii]のほかは。わたしがこんな話をすると、まるでギリシアを引いて中国のために嘲りを解いてやっているようで、大いに「西洋にも南京虫はいる」と言っている気味がある。しかし必ずしも全部が全部そうではない。わたしが言いたいのはギリシアは中国と同じように老年の国であり、同じようにこうした悪いところがあるけれども、ギリシアは結局トルコの束縛を脱したのであり、今では一個のそれなりの国になっている。これは一体どういうわけでか。

ギリシア人には一種の特性がある。やはり先代から伝わってきたもので、熱烈に生を求める欲望である。それはただ虫の息をつなぐような一筋の命を求めるのではなく、美的で健全な充実した生活を希求するのである。宗教的には古代の地母神の秘密儀式から脱皮した死後の霊肉の完全と神との合体の思想である。話し出すと「この事は話せば長い」ので、仕方なく引かないが、しばらく国民生活の反映である文芸の中から一例を引こう。現代の詩人パラマス（Palamas）の小説『ある人の死』[iii]の中で、少年メトロス（Metros）は転んで膝と踝を傷つけた。治ってからも、足は少しびっこになった。彼はまた多くの道士や道姑の類に、真っ直ぐに治してくれるよう頼んだ。ある大術士が足で彼の筋を蹴って断ち切った、別の一人がメスで切ったが手こずった。さらに道姑たちが訳の分からぬことを長くやったので、その足は切ってしまわなければダメというこ

とになった。だが彼はうんとは言わず、後になってそれが元で亡くなった。彼はなぜ良くなったのにまた術士に筋を断ってくれと頼み、断った後また切り取ることを拒んだのか。彼は言う、「ある人はぼくの足を治してくれ、あるひとはぼくを殺す。」また言う、「一本足で歩くなんて死んだ方がましだ。」小説では「彼は死ぬか、あるいは終生障害者だ、それにどんな違いがあるか。彼らは実際この二つの悪いことの区別が着けられないのだ。」彼らは生活に対してイプセンの言う「オール・オア・ナッシング」の態度をとって、熱烈な要求を抱いているのである。彼らが現代の世界において地位を占めることができたのは、つまりここにある。しかし中国はどうか。中国人は実にあまりに求生の意志が少ない、少ないというよりほとんど全くないところまで行っている。幾たびもの戦乱あるいは災難の時の状況を記載したものを見るだけでよい。最近では例えば『南行雑記』[iv]第三「大水」の一節など、その一斑を見ることができる。自然先生はもともと「求めあれば必ず応ず」る霊験あらたかな菩薩であり、彼らがあまり生きようとしないのなら、当然願い通りにやってくれるだろう。しかし生を求めることは生物の本能であり、どうして無くなるわけがあろう。だからわたしはかつて日本の医師と話したが、彼は笑いながら信じようとはしなかった。しかしながら中国人はあまり生を求める意志がないことは、また確かな事実である。――近頃わたしはふと思ったのだが、あるいは中国人は植物的なのかもしれないと。これはたぶん上の疑問に答えられるだろう。しかし植物もむろん生活をしなければならない。たとえば白藤のような生活法は、確かに驚異的である。だがわたしは植物の生活で中国人を形容するのは、動物に比べてより適切適当であると思う。

中国人は近頃いつも平和・忍苦をもって誇るが、これは実はよい現象ではない。わたしは決して平和を悪いというのではない、ただ中国の平和・忍苦は積極的な徳性ではなく、消極的な衰亡の徴であるから、よくないと言うのだ。たとえば強く力のある人間がいるとする、彼は威圧あるいは報復の力を持っているが、隠忍自重する、これこそ真の平和である。中国人のいわゆる平和を愛すとは、実は、まさしく病人のように、ただ気力がないだけなのだ。このように気力がないまま行けば、当然「人の世に久し」くはおれない。この原因はたぶんとても長きにわたるから、今はしばらく措くとして、救済が緊要である。これにはどんな方法があるか。わたしも言えないが、少しカンフル剤――進化論的倫理学の人間観、互助をしながら生存を争う生活が欠かせないのは確かである。ニーチェとトルストイ、社会主義と優生学、はいずれも必要である。だが中国はまた最も容易に誤解し利用する、『新青年』九巻二号の「随感録」[v]で言うように、生存を争うと言えば権利の争奪になり、互助を言えば他人は自分を養うべきだとなり、「東を助ければ西がまた倒れる」始末で、結局完善な方法はないのである。民国十年九月、西山にて。

※初出：1921 年 9 月 29 日『晨報』第 7 版

---

[i] あるイギリス人　未詳。

[ii] 採補の術　道教の術で、他人の精血を採って自分の滋養とする法。

[iii] パラマス（Palamas）小説『ある人の死』　Kostis Palamas：コスティス・パラマス（1859～1943）、現代ギリシアの詩人、小説に『青年の死』というのがある、ここに言う『ある人の

死』と同一か。

[iv] 『南行雑記』　未詳。

[v] 『新青年』九巻二号「随感録」　「青年の誤解（青年的誤会）」と題する陳独秀の随感録（117）を言う。

## 122　ギリシアの風教維持

十月十三日の『順天時報』は西欧諸国の婦人の異様な服装の取り締まりを載せている。その第二はギリシアを記したもので、原文には云う。「ギリシア政府は婦人が短いスカートを穿くことは風教に関係が大だとして、特に二月十三日に新たな法律を施行し、婦人が短いスカートを穿くことを禁止した。およそすでに結婚している婦人及び十四歳以上の未婚の女子は、着るスカートが地面から英寸で 7 インチ半を超えてはならない。今すでにこの法律は施行され、女検査員二人を特派して街頭で検査し、もし法に違反する者があれば、逮捕処罰する。その最も注意すべき点はすなわちギリシア政府が強制的にその父である者にその娘の責任を負わせ、その夫である者にその妻の責任を負わせることであるという。」

これはわれわれギリシアを愛好する本の虫から見ると、ひそかに驚きを覚えずには済まないだろう。これはわれわれの知っている書物の上でのギリシアとなんと遠いことだろう。しかしわれわれが間違っているのだ。これもわれわれが本の虫である所以である。けだしギリシアは滅ぶこと久しく、キリスト紀元前三三八年にはマケドニアに併合され、続いてローマおよびトルコの属国となり、そのまま一八三四年になってようやく独立を果たし、奴隷となること二千余年、今のギリシアはすでにペリクレス時代の旧物ではない、文化は湮滅し、野蛮性が復活し、民種は雑乱し、異族を主君としたことは、中国とすこぶるよく似ていて、ギリシアのキリスト正教が人心を束縛することあるいは儒教とほとんど同様にひどいかもしれない。バイロンが「ギリシアを弔(あわ)れむ」という詩の中で、「ああなんじ奴隷の民よ、轅下に局促すること牛羊の如し」（劉半農君の訳文による、『新青年』二巻四号）と罵ったのは確かに間違っていない。独立後百年になろうとするが、ついにその元気を回復することはできず、しかも名は自主というものの、実際はまだ他国の指揮を受けざるを得ず、ヨーロッパ大戦以後は、ほとんど大英帝国主義の従者になってしまった。こうした状況のもとで、ギリシアの腐敗と反動はもともと当然であったのだ。われわれがアテネ文化によって現代ギリシアを批評するのは、ちょうど周秦の諸子の思想によって現代中国を批評するのと同様、その迂闊・世故を知らぬことを示すものに他ならず、何の正しいところもない。われわれは知らねばならない。ギリシアは滅んで久しい古国であり、われわれ中華のようなところがあり、独立したもののまだ属国と同じで、一群の東方風の無文化の民族であり、戴くものも東方風の専断的政教であり、名前をまだギリシアというに過ぎないということを。だからギリシアの近況を理解しようとすれば、現代中国の眼光を以て見れば、たいてい十の八九は理解することができる。上に述べた短いスカートを禁ずる狙いも完全に理解することができる。驚く必要などないばかりか極めて道理があると思うのだ。いわゆる最も注意すべき点についても、中国の父は子の綱、夫は妻の綱という趣旨で、何の奇怪な点もない。日本も結局は東方民族であって、また中国のために風教を維持する責任を負っているから、こうしたニュースを聞けば特別に嬉しくなって、収集発表する、用心の深さはまことに佩服に値する。ただ残念ながら中国はもともと東方文明の代表であり、一切の奇事怪話は全て揃っている。ギリシアの良法美意といえども、中国においてはすでに言い古されたことに属する。なぜならば京津の官憲ではとっくに実行している

からである。しかし、日本人がわれわれのために礼教を維持してくれる厚意には、要するにわれわれは感謝してしかるべきである。

※初出：『談虎集』

## 123　清朝の玉璽

玉璽という物は、民国以前にはあるいは少しは役に立ったかもしれないが、今となっては完全に骨董になり、ただ太平天国の宋体の字の印と同じように歴史博物館にゆく資格しかない。今回政府は溥儀君に宮殿を出てもらうについて、玉璽の返還を求めたのは、もともと極めて当たり前のことであって、何も大騒ぎするには当たらない。まさかこのハンコを持っていればまた皇帝になるのに都合がよいというわけではあるまい。ところが天下には意表の外に出るものがあるものだ。『順天時報』によれば、「市民は大いに驚き、たちまちデマが四方に起こり、みな……玉璽を奪うのはとりわけむちゃだと言う」そうだ。わたしにはこうした「市民」が一体何を考えているのかほんとうに理解できない。そこで二つの感想を持った。一つは大多数はバカだということ。言われている市民の意見があてになるかどうかに関わらず、要するに彼らはすべて遺民であり、玉璽を有難がる奴隷であることは確かだ。だから他人が当てこすったり利用したりできるのだ。世論や公意は、真偽にかかわらず、多くがデタラメで、信用できない。その二は外国人には中国の事情が理解できないということ。外国人は遺民ではない、しかしながら遺民と同じようであっても本国人ではない。だから意見も同じようにデタラメか、あるいは悪意でなくとも、やはりどうしても誤謬は免れず、少なくとも理解していない。異国の人と文化を、互いに理解することは、当然決して絶対に不可能な事ではない。だがわたしの知るところでは、中国については多分そんな人があったためしはない、――われわれもむろん他人を理解したためしなぞない。われわれも努力して他国を理解しようとは思う、しかしひとの状況を見ると、自分の努力についてもどうも懐疑が起こるのである。

『順天時報』は外国人の新聞であるから、民国に対してたとい好意がなくはないとしても、やはりどうしても絶対に理解はない。その好悪はわれわれと相反しないものはない。自然だとは言うもののやはりとても不愉快な事である。『順天時報』は優待条件は朱爾典が中に入って斡旋したもので、今修改するとなるとおそらく列国は手を引こうとしないだろうと言う。ならば誤謬であるばかりか、全く無理に騒いでいるのだ。朱爾典と列国（および『順天時報』の記者）に聞きたいが、復辟の時、君らはなぜ干渉に出てこなかったのか、優待条件はわれわれが斡旋して議定したと言うからには、清室が約束を破って復辟を実行するのを許せぬはずだ。もし当時これは中国の内政で、干渉しないと言ったのであれば、今回はどういう理由によって無駄口をきくことができるのだ。まさか清室が訳もなく約束を破って復辟してもよく、民国はすでに復辟したことのある清帝の待遇条件を修改できないとでも言うのではなかろうな。外国人といえども、こんな無茶を言うのは具合が悪かろうに。――しかしながらよく考えてみると、たとい本国人であろうと、教育を受けた人間の中に、そのように思う人間もいないわけではない。ならばわたしは外国人に何の咎め立てができよう。民国十三年十一月。

※初出：1924 年 11 月 17 日『語絲』第 1 期

## 124　李佳白の不解

最近『順天時報』が「アメリカの進士」李佳白*の文章を転載し、優待条件の改修に反対し、解せぬものが五つあるという。彼の記憶力はまことに都合よく、辛亥の譲位の事をはっきり覚えているが、民国六年の十一日間の復辟はすっかり忘れている。外国人はこの事件には特に健忘症のようで、まったくわたしには「解せない」。（復辟を打倒した本人もこの件は忘れているようだそうで、あるいはこの件はもともと覚えやすくないのか、フロイト派の学説で分析してみれば、きっと重大な理由を探し出せるだろう。）

李佳白は中国に居留していて、「清朝政府の下に二十九年、民国政府の下に二十三年」だけれども、結局は外国人で、完全に中国の事を理解できない。そして例として外国人が中国にいればいるだけ、その思想の烏煙瘴気もいよいよひどくなるのだ。李佳白は無論この公例を逃れることはできない。よく考えてみると、李佳白の解せぬもの五つとは、実はすでに解せぬことがあまりにも少なすぎるのだ。というのはわたしが考えるに彼が解せぬことはもともともこれだけの数に止まらぬはずだからである。

『順天時報』は外国の機関紙であり、その中国への好意と理解の程度は考えてもわかる、それが李佳白の同調を引用するのはしたがってまさに当然なのである。しかしわれわれもこうしたデタラメな議論を利用することはできる。こうした外国の機関紙の論調を見さえすれば、彼らが幸いとし楽しみとすることが多分中国にとっての災禍であり、彼らが反対することは大抵が中国にとって有利有益な事であるのが分かる。それほど断固とした言い方はできないけれども、概ねは要するにかくの如しである。われわれがもしこうした視線を使うなら、彼らの罠にはまらずに済むし、しかも時にはとても参考するに足る資料となる。民国十三年十二月。

※初出：1924 年 12 月 8 日『語絲』第 4 期

---

*李佳白（Gilbert Reid ギルバート・リード　1857～1927）北米長老会の牧師で、中国主に山東で布教したが、のち北米長老会を脱し、独自に北京・上海に尚賢堂という中外人氏の社交クラブのような組織を設立、社会活動を行なった。辛亥革命には反対の立場であった。

## 131　本当の瘋癲日記

### 編者小序

最近神経病がずいぶん流行しているようで、わたしが新世界とかいうところで拾った『瘋癲日記』はもう七、八冊にもなった。しかしそれらは大抵が本屋で発売する実用日記の類のもので、表紙には『瘋癲日記』と金文字で印刷してあり、中にはカレンダーや郵便代金表などもついている。うしろの記事も「一日晴れ、午前 10 時 17 分起床」などとありきたりの話である。その中にただ一冊、あるいは本当の狂人が書いたものだろうと思われるのがある。それは一巻の小さい四角な紙の手抄本で、全篇が「鉄線篆」で書いてあり、一見しただけでは、目もくらむようでなんのことか分からない、――幸いわたしは「小学」について勉強したことがあり、篆法は少しは解る、しかも好都合なことにみな正楷の篆文で書いてくれているので、二日かけて、果たしてそれを翻訳することができた。この篇に記されたのは、著者（名前はわからず、ただ彼がその鉄線篆を書いた人であることしか考証できない）の「民君の邦」――デモデスポディオン*――遊記の一部分であり、言うことはいささか支離滅裂曖昧模糊の気味があるようだが、この支離滅裂曖昧模糊がまたまさにその唯一の取り柄である。もし誰か細心に研究する人があれば、きっと深奥な大道理を探し出せるとわたしは確信するので、これを発表する次第である。彼が本当の狂人であるかどうかについては、われわれはその姓名を知らないから、当然彼自身に尋ねるわけにはいかない。しかし彼がたとい狂人でなくとも、必ずしも狂ってない人であるわけでもない。これはわたしが深く信じて疑わないところである。小序終わる。

### 一　最古にして最好の国

質と力の名によって、わたしは自分が書いたものは全て真実であることを保証するが、もしこれらのことが果たして実際にあり、しかもわたしがほんとうに自ら彼の国に行ったのならば、実地に見てきたのだ。

「民君の邦」――デモデスポディオンは、この二句をわたしはすでにどれだけ言ったか分からない、いまこの一巻の叙述を始めるにあたって、もう一度言わないわけにはいかない、――東海の中の、世界で最も古い、しかも、最も良い国。この一節は、我々遊歴の人でも否認するには具合が悪く、本国の人がそう思うだけではない。そこでは各人すべてが極めて大きな自由を持っており、この自由は自己の自由を限界とするから、君がもし誰かに打倒されないとすれば、随意に人を打倒してよく、漫罵などはもちろんもっと随意である。というのは「学者」がこれは一種の習慣であって、なんでもないと考えているからである。みんなは誰でも自由を尊重するから、三人集まればたちどころに論争や殴り合いにならないということはない。彼らの意見が一致できるのはただ一つの事しかない。つまり自分自身は決して間違っているはずがないと考えることである。

彼らには二句のスローガンがあり、いつも口にしている。「平民」と「国家」である。実は彼ら

には平民など一人もいずに、みんな私服の皇帝なのだけれども。彼らの国はあまりに古く、皇帝もあまりに多いから、各人の祖先はほとんどがかつて一度皇帝になったことがあり、――少なくとも各人の家譜にはみんなそう書いてある。その極めて大きな自由はつまりこの事に基づいて発生したものであるという。愛国という点は事実で、世界には彼らのように外国を憎悪する人間はいないから、これは実に愛国の証拠であるのだ。しかしふだんは外国人とも仲良くしようとし、且つまたすこぶる信用する。たとえばわたしが提げて行ったバイカルを、彼らは喜んで飲んだし、しょっちゅう買いに来た。また一度などみんなが喧嘩をし、「唯一愛国会」の会長が一括りの古い貸借帳を背負ってわたしのところへ預けに来た、などもその例である。こうした古い貸借帳はもともと五百年前の出入りが全部載っているのだが、いまでは回収できなくなったもので、彼らはそれでも重視して、我々華商の家に預けに来るのは、実は我が国の人間が札束や契約書を詰め込んだ赤いトランクを東城に運ぶよりもずっと高尚なのである。

閑話があまりにずれてしまった。さて正伝に戻りまして、かの「平民」と「国家」という二つのスローガンについて述べよう。ある日わたしが道を歩いていると、二人の衣冠を整えた人が向こうからやって来るのが見えた、と彼らは互いに憎らしげに睨み合うと、一人が大声で吠えた。「お前はなんでおれを見るんだ、この国家の反逆者が……」相手も吠えた。「平民を愚弄しやがって、この知識階級が！」そのとたん、もし道路の真ん中に立っていた巡査が棍棒を彼らの頭上に打ち下ろし、一人一発、追い散らさなかったなら、たぶん二人はとっくに取っ組み合いを始め、互いに長衣を引きむしり、それからそれぞれ別れるが、歩きながら罵り、どこまで行ったらやめるのやら見当も付きかねたろう。

※初出：1922 年 5 月 17 日『晨報副刊』

---

*デモデスポディオン　民君之邦　demos+desopotes からなる周作人の造語。

二　准仙人の教員

この「民君の邦」で最も敬服すべきは彼らの教育制度である。これはあるいは理想に近いやり方だと言ってよいかもしれない。彼らは教育を一種の神聖――いや、むしろ清高な事業と言ったほうがよい、飯を食って糞を垂れ、百歳までも生きられない俗人がやれるようなものではなく、理論上から言えば仙人にしか担当できないはずだと考えている。しかし不幸な事に葛仙翁の『列仙伝』が出版されて以降、神仙界もいまは昔に如かず、白日昇天する人もだんだん少なくなり、いささか落莫の感を免れなくなったようである。呂純陽ら何人かは兄弟をやはりいつも下界に下し、なんとか一「桌」を満たしているが、彼らに国立七校（彼らは美術学校を欠いているから）の教職に就いてもらおうとしてもやはり足りない、ましてやもっと多くの小中学校などは言うまでもない。彼らの教育当局は苦心惨憺十一カ月も密議を凝らしたが、終に已むを得ずその次を考え、「准仙人」を採用して教職員に当て、過渡期の臨時の便法とすることを決議した。このいわゆる准仙人とは一種の仙でもなく人でもない、仙と人との間に介在する清高な人物である。その養

成法は人の気を抜き仙の気を注入し、飯を食い糞を垂れることを禁止することを修練の初歩とする。学校の任用の規則は、辟穀〔穀物を食べない〕する者を正教授とし、風を食い露を飲む者を教授とし、日に一麻一麦を食うものを講師とする。この類は自然とバラモンが多い。学校は准仙人の教員に対しては、極めて優遇する。およそ教授ならばすべて学校の東南の対角一帯に住むよう規定し、彼らが登校するときに西北風を吸ってそれで生命を維持するに便ならしめる。辟穀の正教授は彼らが校内に住むことを許す。彼らはもう滋養補給の風露を必要とせず、しかも彼らの状態も確かに移動に適していないからである。講師についてはあまり尊重されない。まだ一麻一麦を食べねばならず、いささか凡俗にして且つ卑陋なるを免れぬからである。もし清高な教育事業に従事するのにまだ飯を食わねばならぬとは、それでは苦力や車夫と同じではないか。これは「民君の邦」の教育原理では絶対に認められないものである。

彼らの学校は各種揃っているが、ただ美術学校だけがない。彼らは平民の功利主義の立場から見るので、美術は奢侈品であり、だから工業に合せてしまって、哲学も理化に属し、文学は博物に付属する。わたしがそこにいた時は、文壇を統治するのはまさに植物学者であった。彼らの学科は分類に多少の種類はあるけれども、彼らは人間は全知全能であり、活動の範囲は無限であると主張するので、実際には分けないに等しい、これがすなわち術語上のいわゆる学術の統一である。わたしは見たことがあるのだが、造船を学んでいる人が法政学校でローマ法を教え、その学生が卒業後開業して外科医になって、あとで『白昼見鬼術』という本を著し、結局は法学博士の学位を取ったことがある。こうしたやり方は、とても古く、且つなかなかの成績で、最近では欧米が皆調査に人を派遣しているから、おそらく間もなくみんなに採用されるだろうということである。彼らは人類の全知全能を主張するから、懐疑派には猛烈に反対し、学問の敵だと言う。したがって彼らは古人の中では又最もソクラテスと孔子を恨んでいる。というのはソクラテスは自分はその知るところなきを知っている、故に唯一の智者であると言ったし、孔子も、之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す、是れ知るなりと言ったからである。彼らの国にもしこれは自分の研究しているものでないから、みだりに論断を下せないという人があったら、彼らは彼にはソ党の嫌疑があると言い、彼は御用学者だ、尋問審判に付さねばならないと言う。こうした災難を逃れようとすれば、最も良いのは知らざるところ無しを装い、一度附和して、いい加減にやり過ごすことである。幸いこうした新手の学説は流行しても、たいてい速成法政と同じように、じきに終わってしまうから、たやすくごまかせる。あるとき、果非道人という和尚が静臥を提唱し、病気を退け長生きできると言った。もし賛成しないならソ派の嫌疑がかかるので、一時に噂を聞いて反響が大きく、教室はいたるところ禅床となった。我々せっかちな傍観者はすでに、その第一陣の静臥者たちが然るべき時期になって禅床もろともゆっくりと天に昇ってゆくのを見んものと準備万端整えていた。しかし一月半も経つと、果非道人は又別のところで星雲の説を講演しており、禅床の上の諸君もすでに影も形も見えなくなっていた。よく聞いて見てようやく次のことが分かった。近頃誰かが豚のしっぽには毒があり、食べるとノイローゼになるということを発見した、そこで新たに豚のしっぽを食べない同盟が発起され、みんなして自動車に乗って田舎にこの真理を宣伝するために出発した。その結果豚のしっぽは若干は売れ行きが落ちた、

――しかしながらいまではむろん相変わらず売っている。

※初出：1922 年 5 月 19 日『晨報副刊』

三　様々の集会

わたしは多くの場所を参観した。規模が最も広大なのは統一学術研究所である。程度はすべての大学院の上にあるということで、わたしはそこである学者が四万八千倍の顕微鏡を使って人生の真義を考察しているのを見た。また別の学者は目を閉じて瞑想し、化学原子が結局七十幾種あるのかを考え出そうとしていた。また囚人の格好で垢だらけの顔をした人、彼はこの国で唯一の支那学者で、わたしが中国人だと知って、特に呼び出されたのだそうだが、彼は寝食を忘れて――それは彼の容貌が証拠となる――中国の文字を研究している、前後四十年、近頃ようやく俗に一はね一払いと称する人の字が実は一払いの上に一はねを加えたもので、彼はすでに一篇三百ページの論文を発表して、まもなく太博士に昇進の可能性があると言った。――というのは彼はもともと名誉博士だったのだから。

理性発達所は去年成立したばかりで、一種の新式学説の実験場である。某学者はアリストトールの学説によって青年の理性を発達させるには、まずそうした蘊蓄を持った先天的な狂議論を発するのでなければダメだと考えて、それでこの実験場を建設し、この仕事に従事している。そのやり方は禅宗の「念仏する者は誰ぞ」の方法を運用して、学生に一日中「二四が……」という句を暗誦させる。初級の人は皆大声で「二四が甲」あるいは「二四が二千七」などと読み上げ、――なぜならこれはもともと狂議論だから。最高級のはただ一人、ある教室でひとりで「二四が六！」と読み上げている。引率の人は彼の卒業の時期はもう間近、ただ二四が七と言いさえすれば、それは学力が十分で、理性が十分発達しており、そこで卒業証書をもらって出所し、理性得業士と称するのだと言った。「二四が八」という句は、そこでは通用しない。なぜなら理性発達所を建設した学者は自分でも「二四が七」と言ったからである。

色謨拉忒勒亜（ソモラトロワ）を――無理やり訳せば主義礼拝会とでもなるが、儀式であって「宗教ではない」けれども、盛大な集会である。わたしが参観した時、大半の儀式は終わっていたが、ちょうど「亜那台瑪（アナタイマ）」が行われていた。ローマ旧教のやり方に倣って、一派の礼拝者が口を合わせて自分と異なる各派を呪うのである。その時はちょうど民生主義派の主席が、ギルドおよびアナキー諸派を呪っているところだったから、それら何派かの人はしばらく退席していた。だが復辟党・帝制党・民党はいずれも一緒になって、留まっていた。彼らにとっては関係なかったから、お互い親善をしていたのである。これは実に彼らの偉大な寛容の精神を示すに足り、わが国の度量の狭い民主主義者が決して宗社党と握手しないのとは大違い、わたしはそこで思わず「礼失してこれを夷に求む」という言葉の的確切実さに嘆息したのであった。

「民君の邦」の法律は――どの階級が制定したのか知らないが、これは彼らの議員すらはっきり知らない――信仰の自由を規定し、一箇所公共の講堂があり、各派の信徒の公用に供している。そこは清浄境と呼ばれ、その日はちょうどインドのコブラ礼拝派・エジプトのワニ拝派およびい

わゆる大食アラビヤの拝口派[i]がいずれもそこを道場としていた。しかしわたしが熟知している大仙廟と金龍四天王廟だけは見えず、そして朱天君[ii]の神像さえなかった。わたしはそれを見て、どうも奇妙だと思ったので、（かつ不満で、）後でその太博士に教えてもらって、ようやくことが飲み込めた。彼らは支那は無宗教の国だと認めているので、そうした大仙などはただの伝統的な習慣でしかなく、決して迷信ではないから、宗教ではないというのだ。しかしもう一つわたしにはとうとう理解できないことがあった。それはあのアラビヤの拝口派である。われわれの故郷の老婆たちには確かにそのような伝説がある。しかし読書人は誰でもそれは某教を誣いるためのデマであって、反駁にも値しないということを知っている。わたしはまた仔細に考証して、本教の友人に頼んでわたしのためにお経を調べてもらった。前から一通り、また後ろから一通りと順にページを繰ってもらったが、とうとう証拠は見つけられなかった。――しかしながら「民君の邦」ではある学者が論文で明々白々に言ったことがある。だからたとい世間にそのような事実がなくとも、それは必然の真理であって、もう人の疑いを容れないのである。だから彼らは特に祭壇を設け、捕り方所が日毎に貧民隊を派遣して礼拝させ、その儀式式次はその学者が自ら規定したのだという。

この他にまだ「児童講演会」があって、会員は十歳以下の小学生で、その時の演題の一つは「産児制裁の実際」、一つは「万古不変の真理」、一つは「漢の高祖丁公を斬る[iii]の論」で、余興は国粋芸術の「後ろ向きとんぼ返り」であった。しかしわたしはちょっと他の用事があって聞きにゆかず、そのまま宿舎に帰った。

※初出：1922 年 5 月 21 日『晨報副刊』

---

ⅰ 拝口派　未詳。「口」はあるいは「□」か。また『説文』に「口は回なり」と言うから、或は回教を指すものかいずれも不明。

ⅱ 朱天君　未詳。明末に崇禎帝毅宗（朱）を太陽の生まれ変わりの朱天菩薩とする信仰が生まれた。そのほかに道教の火と雷の神に朱天君というのがある。

ⅲ 「漢の高祖丁公を斬る」　『史記』第 100 巻「季布列伝」参照。

## 四　文学界

「民君の邦」の文学は非常に発達していて、専門の植物学者がリンネの法でそれを分類し、若干科に分け、高下二級に分けてある。最高級は「雅音科」で、――つまりわれわれが外国文学史でしょっちゅう聞く「偽古典派」で、最下級はいわゆる堕落科で、無韻の詩がつまりこの一科に属する。雅音科はまた「雅手ながら俗口の科」とも称され、原文は長ったらしいラテン文字なので、今思い出せない。彼らの主張は、「雅がすべて」というものなのだが、天下には又古にしか雅はなく、すべての今はいずれも耐えられないほどに俗なのである。彼らは祖先崇拝の教徒であって、その理想は己一個の個性を消滅して、その原始の魂魄を始祖の精霊と合体させることにあるのだが、実は一種非常に消極的な厭世の教義なのである。彼らがこの理想を実現する唯一の手段

は、たとい大家が大いにその雅文を書くにしても、第一部の古書の第一篇の第一句を書式にする。だから彼らの一派の文章の始めは必ず詰屈膠牙[i]という四文字が記されている。その意味は中国語の「おお、昔を調査考察すれば……」に等しいのだそうだ。しかし残念ながら国内で雅音が解る人（自分で解ると思っているものも数に入れて）はすこぶる少なくはないけれども、俗人のほうがやはりずっと多い。しかもそういう雅人は何句か古雅な文を書く他には、全くの能無しであって、日常の諸事は俗人が手助けしてやらねばならない。その時にもし「咨（ああ）、汝張三、予に餕盛（しせい）〔飯盛〕せよ！」と言ったならば、それは俗人には決して解らないから、彼らも仕方なく口を突き出して、現代人の俗悪な言葉を発するしかない。「雅手ながら俗口」とはこのことを指し、中間の「ながら」とは痛惜の意を表す語助詞である。

この正統の雅音派の文学は、平民と国家が協力して擁護するので、勢力は最大である。しかし別の派も自由に流通するのだが、『八存閣』[ii]書目に登録される権利を手にすることはできない。彼らはくじ引きの方法で自己の宗派を認定する。そこで運動を始め、一切の傍門外道に反対する。任期がいっぱいになると、またくじ引きをやるが、続投はできない。およそ文人を志願する者は、雅音派に入る以外は、皆試験を受けなければならない。第一場は文章の試験、西洋の五言古詩一首を作ることができれば合格、第二場は学術の試験、盲腸炎は本国の何病にあたるかなど医学上の専門知識である。

---

i 「詰屈膠牙」　普通には「詰屈聱牙」で、文章が入り組んでいて平易ではないことを言う。「膠牙」としたのには何か意味があるのか未詳。「膠牙」なら歯にまとわりつくと言う意。「聱」と「膠」は韻母は同じだが、語頭の子音つまり声母が少し違う。

ii 『八存閣』　八つの分類に属する書物の図書館なのだろうが、中国では八項目に分類整理する物事が多く、具体的に何を言うかは未詳。

編者跋

わたしは原稿をここまで抄写したところで、突然一人のわたしの友人――この言葉は少し禁忌を犯しているが、彼は本当にわたしの他人ではない友人だから、こう書かざるを得ない――がやって来て、取り上げて読むと、これは本当の瘋癲日記ではない、なぜなら彼には医者の証明書がないと言った。わたしは鉄線篆のせいで著者は瘋癲だと信じたのだけれども、その友人は中産階級の紳士であって、彼の言葉も間違っているはずもない。だからわたしはこの原稿の発表を中止した。これはもともと遊戯の諷刺だという人がいる。それはもちろん必ずしも確かではないが、たとい幾分か信用がおけるにしても、やはり別の題名でないと発表できず、本当の瘋癲日記とは言えなくなった。一九二二年五月吉日跋す。

※初出：1922 年 5 月 23 日『晨報副刊』

## 132　アヘン祭竈考

日本の『読売新聞』十一月二十四日の附録は当日の放送のプログラムを載せていて、次のような文がある。[i]

「珍らしい支那風俗
飴や阿片を供へて「竈神」を祭り
一年一度の虫のいゝ願ひ事
中野江漢さんの面白い趣味講座

けふは支那の「竈神」を祭る日である。それで今晩趣味講座で、“日本にない珍らしい支那風俗”と云ふ題で中野江漢さんのお話がある。氏は本名を吉三郎、号を江漢と云つて多年支那に在り支那の風物の紹介につとめてゐられる方。著書も二三あり現に支那風物研究会主である。

元来支那人と日本人とは同文同種と云ってすべてのものが同じやうに思ふ人もあるが、実は思想、風俗、習慣非常な違つてゐる。例へば支那人は非常に計算高い国民で何でもそろばんづくでやる。一例を引けば、“功過格”と云つて、日常の道徳標準を計算するものがある。この標準によつて自分の行為の収支計算をして自分の行為の批判をする。また支那人は、宇宙は天が作つたものであり、人間も亦た天が作つたものである故に人を造つた天は、人を保育して行かねばならない。そのためには色々の形態の食物を人間に與へてゐるがと同じやうに道徳上でも人間を導いて行かねばならない。即ち善には善の報ひあり悪には悪の報ひがあると云ふ因果応報の思想を持つてゐる。そして天はその代表者「竈神」を下界に送つて人間を監視すると思つてゐる。そしてこの神様が一家の主人公であり、一番こはいものとしてある。。またこの因果応報の思想から一種の宿命観が出来て来る。何事もこれ運命なりと思つてあきらめることが多い。たとへば悪い事ばかりが続くとそれは「苦命」だと云つてさう云ふ運命に生まれついて来てゐるのだから「没法子」〔仕方がない〕と云つてあきらめてしまふ。で此竈神の祭りは十一月二十三日でこの日この神が一年に一度昇天して一年の人間の行為を天の神に報告するのだとしてある。だからこの日は飴や阿片や酒などを供へて、どうか悪いことは報告してくれるな、善い事だけ報告してくれとたのむのであるが、神様に賄賂を使つて自分に都合のいゝことをたのむなどは支那式で面白いではないか。その他食人の風俗があり、世界に類例のない死刑の方法、子孫を絶やさないで祖先を尊崇しようとするため極端な男尊女卑の習慣が生じ「人市」と云つて女の売買をする風習など、日本人には思ひも及ばぬ風俗が甚だ多い。今夜はそれらをお話しするのである。」

この文章を書き写した後、微笑を禁じ得なかった。支那に多年おり、著書も二、三種あり、支那風俗研究会の主と尊ばれる有名人が、中国民間の竈の祭りが十二月二十三日であることを知らないのは、まことに「おめでたい」の至りだと言うべきである。わたしは南京に五年、北京に十年、浙江に二十年いたが、竈大王にアヘンをお吸いくださいとお願いした人があるなんて聞いたことがない。現今では南北共アヘン厳禁を励行しているし、病気治療の許可証も交付されている

から、そのうちアヘンで神を祀る日が来るかどうかは解らない。神様に賄賂を使うのは、これは本当である、およそ祭祀の献上品や供養はこの意味を含まないものはないからである。たといアヘンを使わなくても酒だけはあるし、たといバイカルでなくとも日本のお神酒がある。ここまで考えると一種の感慨を禁じ得ない、日本と中国とは同文同種でないけれども、結局は関係があって、従兄弟でなければ、要するにお隣であり、いいも悪いも多くが繋がっている。もし人の家の盲点を見つけようとして、少し気をつけないと、自分のほっぺたを引っ叩くことになる、慎重にやらざるべからず。たとえばいわゆる「人市」であるが、わたしはこれがどこにあるのか知らないが、中国のこのような野蛮を以て論ずれば、民国を号しながら婢妾制度はまだ公然と認可されるのだから、こういう市は当然あってよい。現在事実上あるかないかはともかくとして。しかしながら、東亜の事は「福は双(なら)び至るなく、禍は単行せず」だから、人市と言えば、日本の有名な吉原を連想せざるを得ない、――ここでは一言断っておくべきだろう、わたしは吉原の「楼」に登ったことはないが、そこは知っていてしかも行ったことはある、ある年の春に、わたしの妻と、妻の弟、妻の妹夫妻と一緒に、吉原の夜桜を見に行ったことがある。吉原に関する文献は現代のものにも一冊明治四十三年（1910）の『新吉原細見』[ii]がある。その種の勧工場式の売笑は、ハリスのような西洋人はたぶん嘲笑するだろうが、しかしロンドン・パリに行った人なら彼らの暗黒面を探し出し、醜悪をさらけ出させることができよう。甚だしいかな、人の盲点を暴き出そうとすることの困難よ！

『新吉原細見』の序はとても面白いので、ここに訳して付ける。文に云う、公娼制度は日本に固有のものである。けだし花魁（oiran 娼妓の美称）を以て美術として尊重すべきである、この説に対してはあるいは反対する者があるかもしれぬ。だが生理的欲情はついには防ぎ難く、壮年の男子がもし街灯の影暗く、柳陰に躑躅する曖昧婦に遇えば、危険は此れを踰ゆる者なし、ただ一生残廃するのみならず、悪疾を子孫に伝う、これ実に火を見るよりも明らか也。故に安全に快楽を満足せんと欲すれば、当に風骨あり意気を尚ぶ花魁を買うを以て最佳となす、花魁は清浄無垢、後患なき者なり。奨勧誘引を云うがごときは、則ち吾豈敢えてせんや。惶恐、惶恐。
四十三年の三月、南史題す。

もう一点、ふつうに言う風俗とは、現代に通行するものを基準とすべきで、古書に記載されているものや、一人か二人のやる事を引いて、概括して当世の風俗だと認めることはできない。もしこれがそう言う風に言えるなら、われわれは徳川時代に火あぶり、釜茹で、熱湯掛け、磔などの死刑の方法があったことを知っているから、やはり世界無比だと言えるし、野口男三郎の臀肉切り取り事件によって、日本には食人の風習があるとも言える。しかし頭が少しでもはっきりしている人なら、これは正しくないとわかる。なぜなら後者は個人の事だし、（人肉が病気を治すというのは民間の迷信だけれども）、前者は以前の事であるから。現在の日本の死刑は文明国の通例によって、絞首の方法を使う。彼らが叛徒幸徳秋水・難波大助たちを絞首にしたのは、ちょうど大元帥〔張作霖〕が李大釗ら赤党を絞首にしたのと同様で、そして日本の病人がふだん人肉スープを飲みたいと思わないのは、だいたい中国とさして変わりはない。かりにもこんな常識さえないなら、どうして学問などやれよう。もともと学問をやるのは容易な事ではない。風俗研究も例

外ではない。こうした学問をやるには第一に学識が要り、第二に見識が要り、常識についてはむろん言うまでもない。風俗研究はもと民俗学の一部分であり、民俗学はある人は社会人類学とも称するが、その方がより適当のようだ。日本の西村真次の著に『文化人類学』[iii]というのがあるが、それもこの学問の別称である。民俗学で礼俗を研究するのは、決して異聞を羅列し、話の種にすることではなく、また単に収録することでもない。その目的は古今を貫いて、その変遷を明らかにし、内外を比較し、異同を考えて、その中に礼俗の本意を発見し、以前は荒唐無稽で根元を追及し難いと思われた儀式伝説を現在に明らかにし、人類文化の発達とその遺留の跡まで知ることができるようにすることにある。これは実に意味のあることであるが、やはりとても難しく、第二流以下の人間のやれる事ではない。日本の中国の文史哲各方面についてはいずれも相当の学者が真面目に研究しており、相当の成績を挙げているが、ただ民俗学方面についてはまだ手を着ける学者がなく、ただ支那浪人たちに見せびらかし誑かしの道具にさせているのは、実に残念なことである。日本人が中国の野蛮な行為をあげつらおうとすることに、わたしは決して反対ではない。しかしもし勝手にデタラメをこくなら、いくらか訂正をしないわけにはいかない。実はこうしたデタラメは、およそ中国に住む正直な日本人なら知らない者はない。だが彼らはあえてすっぱ抜こうとしないだけだ。第一に、彼らは自ずと同胞の面目を保とうとする。そいつがどんなに無頼であったとしても。第二に、誰が無頼漢とのゴタゴタを恐れないでおれよう。しかし彼らはそれが害群の馬であるとは気づかない。彼らは馬に蹴られるのを恐れてあえてそいつを怒らせず、一方でその害群の馬のために全群がその害を受けることが分からないのである。民国十六年十二月四日。

※初出：1927 年 12 月 24 日『語絲』第 4 巻第 2 期

---

[i] 『読売新聞』昭和 2 年 11 月 24 日「よみうりラジオ版」周作人は全文を翻訳している。いま彼の訳文を『読売』の記事と差し替える。新字体に変えルビは省いた。

[ii] 『新吉原細見』　富里長松編『新よし原細見』　昇進堂書店明治 43 年刊。未見。同名の書は吉原の案内書で、大火で新吉原に移転した明暦年間から連綿として大正まで続いている。

[iii] 西村真次『文化人類学』人類学概論第一編　早稲田大学出版部　大正 13 年刊。

## 133　断髪の一考察

民国十六年十二月十六日北京の『順天時報』に次のようなニュースが載った。題して「世界の進化における男女断髪不断髪の問題」と云う、――

「東京八日電、女性の断髪を、日本人はすこぶるこれを嫉視し、東方の伝染病となす。女性の断髪問題は実は南方のマニラに起こり、北はハルピンに至り、西はムンバイから、東は東京に至るまで、家庭で、社会で、老幼の間で、保守と急進の各派の中で、常に極めて大きな風波を引き起こした。髪を梳くという事は極めて小節に属するけれども、すでに社会の不安をもたらし、ついには政治法律と関係するに至り、ヒ島の断髪税のほかに、日本の警察は断髪の女子に対して堕落した者と認め、長髪の男子については赤化と認める。これ以前に極東の各国の女子が美髪の風を重んじたのはすでに過去のものとなったようだが、断髪に反対する最も有力な者は日本を推すべきで、最近大阪の映画会社がついに全ての断髪の女優を解雇し、あわせてそれぞれの女優に、長い髪を蓄えなければ復職させない旨告げた。そして東京の警察は女子の断髪に対してついに裸体と同等で禁止違反だと認め、同時に日本の青年男子の髪を蓄え欧米の芸術派の真似をしようとする者も、警察の許可しないところとなり、彼らが受ける苦痛は女性と全く変わらない。日本の各大都市の警察は蓄髪の青年男子を見つけると、たちまち警察署に拘留して革命思想を抱いているかどうかを審問し、あるいは厳重な監視を受けねばならない。だが多数の青年はむしろ警察の監視を受けても、その長髪を捨て去るに忍びないのである。そもそも髪の長短は、女にあっては長いのがよく、男にあっては短いのがよい、というのもまことに近代の不可解な習俗である。」

この文を読んで、しばらく目を閉じ沈思して、この「習俗」には別になんの不可解もないと思った。簡単に言えば、これがすなわち「犬は絨毯を引っ掻く」であり、なぞなぞの答えは「蛮性の遺留」である。野蛮時代には一道風を同じくする統治を励行し、異言異服の者には「嫉視」を加えたが、現代も専制が流行し、赤化のロシアであれ、白化のイタリアであれ、あるいは別色化のどこかであれ、一致して独断高圧の政治を実行しないところはない。というご時世、男女の断髪蓄髪は当然当局によって法令でもって規制しなければダメで、でなければ禁止違反になる。われわれは記憶しているところだけでよく、本をめくる必要はない。ちょっと考えてみれば、例えば満州族が山海関を入った時の留髪するかしないか、「長毛」時代の短髪は「妖怪」と言われたこと、孫聯帥〔孫伝芳〕治下の江西で断髪の女子（それ以前に三一八があった、先に言うのを忘れていた）と洋髪の男子を殺したこと、上海バンドの人間が断髪の女子を革命女と言ったこと、（これはもともと聯帥治下の時代を言うのだが、今はどうなのか、わたくしは遠く京兆にいるので知りようがない）、赤色討伐の奉天・吉林・黒龍江・直隷・山東が女子の断髪を禁止処罰すること、反赤党の広東が断髪の女子を殺戮すること、その例は山ほどあり、実際用務員に数えさせても数えきれない。なぜ頭髪がこのように関係するところ重大なのか。そうだ、頭髪は体の一部分である、つまり生命の一部分であるから、軽々しく伸ばしたり短くしたりしてはいけない。これはどうか江紹原君の研究『髪・髭・爪』[i]をご覧いただければはっきりする。だがここではそれは二の次で、最も肝心なのはすなわちこの頭髪の象徴、――つまり主君の臣下に対する、男子の女子に

対する主権なのである。そもそも何筋かの黒髪が、なんで重要なのか。我輩からみれば、長くしようが短くしようが、勝手次第、せいぜい個人の形相の美醜に影響するだけで、傍聴する者は己の考えで愛憎を加える、ただそれだけのことだ。しかしながらこの頭髪を伸ばすか短くするかに含まれる政治的意義は決して小事ではなく、当局が見て「心に杞天の憂を抱き」既得権を保護するために断固とした処置に出ざるを得ないのも無理はないのである。男性の主権者が頭髪は女にあっては長いのがよく、男にあっては短いのがよいと決めた以上、それがすなわち金科玉条で、改変することはできない。もし短くすべきなのに長くしたり、長くすべきなのに短くしたりするのは、つまり反抗を示しているわけで、正朔服色〔暦と車馬犠牲の色。皇帝が決める〕を奉じないのと同じく、大逆無道と見なすべきで、日本の警察がこれらの男女を堕落者と赤化と見なすのは、とてもこの意を得ているのである。中国では「二百余年深い仁と厚い沢と〔のお蔭で〕土を食らい毛を践む」[ii]という関係があったから、弁髪に対してはすこぶる名残があって、男子の長髪から辮髪にした者まで社会的には特に人から敬愛を受けないまでも、要するに差し障りがなく、自由にどこにでも行けたが、ただ洋髪だけは許さずに殺した。この点は日本の寛厳とはいささか違う。女子については長髪は義務で、従わない者はすぐに反逆となる。それが男性の嫉視するところであるのはもちろんその道理である。北方ではとっくに処罰され、南方でもその後に捕えられて殺される。これは李福林[iii]君の政策だというけれども、南北の赤党討伐ではもとより同じ意向であったことがわかる。つまり女子の断髪についての男子の義憤は中国ではやはりすこぶる一致したところがあったのである。わたくしも男性の一分子であり、男権を擁護する点では、あえて人後に落ちないが、ただ生まれつき性が遅鈍で、熱狂に欠けていて、考えれば考えるほど、疑問がいよいよ多くなり、ついには男子のこの種の行為はどうやら神経過敏だと思うようになった。まことに梁実秋君の言うように、いま現在中国はロマン時代にあるのだ。外出した時にはもちろんいつも断髪の女子の頭を見る。けれどもまたいつもその足を見る。断髪とは言うものの、尼のようでもなく、また兵隊のようでもなく、ある者は分けある者は巻き、もちろん飾りを着けており、足の靴も、相当に美しく、しかも人によっては高い踵でそれもすこぶる高い。それでそういう男性は確かに神経過敏かあるいはすでに神経衰弱なんだろうと思う。女子が男性の規定する長髪を切るのは表向きは反抗に似ているけれども、そういう靴を見て彼女らがまだ実際には解放されたくないのだということがわかる。その一には、彼女たちがこんな靴を履くのは、大抵が流行につられたもので、つまりまだ“己を悦ぶ者のために容づくる”のであり、たといそういう靴を履かなくとも、その短く切った頭髪もやはり一種の「容」である。その二には、したがって彼女らの断髪は決して反逆などという代物ではないのに、男性の狼狽ときたらいささかアホに近いのは、実になんとも情けない。感情は野蛮人のものであり、理性は文明の産物である。人類は往々にして感情に動かされやすく、理性の統制を受けない。断髪問題はその一例であり、これもまた蛮性の遺留が発現したものと言える。

もう一つ理由がある。特に女子に関してだが、それはシャーマニズムの礼教思想である。ニュースの原文はとてもはっきりしていて且つ面白い。「東京の警察は女子の断髪にたいしてついに裸体と同等で禁止違反に属すると認めた。」この嫉視の中には幾分かは政治問題を含み、幾分かは「風

教」の問題を含んでいることがわかる。わたしは今までこの二つの神秘な言葉の意味がわからず、後になって原始宗教からこれがすなわちいわゆるタブー（Tabu、禁忌）であり、一種の汚気・毒気の伝染で、形而上の感応だということがわかった。現代の社会は裸体を禁止違反だとし、表面上は淫を教え、側の人間の欲情を挑発するからと言うのだが、実は最初に怖がったのは裸体の魔力であって、この恐怖は今でもまだ存在しており、しかも裸体禁止の最大の原動力になっている。古今中外には多くの魔術があり、魔法をかけるときは裸体にならなければならず、且つ書物に言うように、被髪禹歩することもある。現在の記者が断髪と裸体は同じだと言うのは、意識下から自然に出た言葉で、素朴ではあるが、深厚な意味を含んでいる。女子の頭髪がもし髷などに結われずざんばらであったり短く切ったりすれば、それは不吉であって、特に男性の身に降りかかってくる。裸体であれば、男たちがどのように見たがろうとも、見れば不吉であって、科挙に合格しなければ、ハゲになってしまうのだ。民間では尼に会うのを忌み、和尚なら決してそうではない。およそ尼を見れば必ず唾を地面に吐かないと、不運を免れない。もし連れがいれば、それぞれ道の両側を歩き、その尼を「夾(はさ)んで過ぎる」（Gaehkuu）のが最もよい。なぜか。彼女は断髪の女子であり、したがって彼女には魔力があり、見た男を不運にすることができるからである。今熱心に礼教を護持しようとする政府と社会は実にこの迷信を伝える正統であって、個人が嫌悪し祓除する行為を政府の嫉視に転じ、唾を吐くことを政治法律の干渉に変えているのである。次のように疑う人がいる。一切の道学的反動にはすべて色情の分子があり、政府・社会が女子がズボンを履くか履かないか、髪を長くするかしないかに注意するのは、明らかにその兆候であり、政治と礼教からその原因を求めようとするのは、あまりにも迂闊を免れない、と。このことはわたしも承認する。こうした反動の中に色情の分子を多く含むことはわたしも知っているが、わたしはそれを単独で一つの原因だとはせず、それを上に述べた二つの原因の中に含める。と言うのは政治のあるいは礼教の女子の断髪に対する嫉視のその動機はもともとすべて色情的なものであり、男子の長髪を嫉視する原因と全部が全部同じではないからである。――江君の『髪・髭・爪』はまもなく出版されるが、相当の好材料が残念ながら収録に間に合わなかったそうだから、再版の時には改訂増補することを希望する。あるいはその頃には材料が爆発的に増え、一巨冊の髪の研究となって単行で出版されるかもしれない。中華民国十六年十二月三十日、北京にて、厳寒の中で。

※初出：1928 年 1 月 21 日『語絲』第 4 巻第 6 期「髪之一考察」

---

[i] 江紹原『髪・髭・爪――それらの風俗について』　開明書店 1928 年初版。周作人はそれに序を書いている。『談龍集』所収「『髪鬚爪』序」参照。

[ii] この句は誰の言葉か未詳。清朝二百数十年の支配を言う。後の句「食土践毛」は「食毛践土」その土地に居てそこの収穫を食らうという意味の言葉を言い違えたのを、ここではわざわざ訂正せずに使ったのだろう。

[iii] 李福林　（1872～1952）広東番禺の人。国民党の軍人。当時広州市長の職にあったのだろう。

## 134　後記

何週間もの時間を費やしてこの百三十篇の文章を切り貼りし、校閲し、『談虎集』の編成はなんとか片がつき、とても愉快に思うし、気がかりであった一件が落着したようだ。原稿の封をして、傍に置いた後、よく考えて見ると、こうした文章に表現されたわたしの意見は、前後九年にわたって、いくらか変わったようだが、実はまたそれほど大きくは変わってもいない。だがいささか歳をとると、ロマンティックな気分は少なくとも少しは減っただろう。学芸の方面については、完全に「三つ足の猫」〔生かじり〕で、いい加減に撮まんでみたり置いてみたりで、時代のロマン性を抜けきれない。だがわたしは結局情熱的な人間ではない。多くの事実を見て承認せざるを得ない。だからわたしの意見は要するに平凡という面に傾き、近来それがますます顕著である。いつも友人たちに笑いながら、わたし自身は中庸主義者だと言う。わたしが基づくのは孔子三世の孫が書いたあの一冊の本*ではないけれども。わたしは一教派の門徒でもなければ一学派の門徒でもない。守るべき一家の言もなければ、ふだん気ままに語り、人事百般についてたまには褒貶を加えたりするが、ただ個人が持っている僅かな浅い常識によるだけで、それも自然および人文科学の普通の知識から得たもので、決して静坐瞑想なんぞをして悟得したものではない。昔を懐かしがる青年たちからわたしの意見は過激だと批判されたことがあるが、わたしは自分でも慙愧で、時にはいささか「郷愿」〔偽善者〕に似ているかと思うのである。譬えばわたしは神と霊魂の存在を信じない、だが宗教的要求はわたしもやや理解できる。各宗派の儀式・経典にはすこぶる興味を感じるし、理のない攻撃には時に反撃を加えなければならない。また各派の社会改革の志士仁人などは、わたしも敬意を表するが、しかしながらわたし自身は大衆を信仰しないから、共産党・無政府党とは道を同じうできない。わたしは人類が等しくなく、思想が統一できず又してはならないことを知っている。これがわたしが寛容を主張する理由である。もう一点、わたしは旧劇が好きではない。敵役の嗄れ声、女形のきいきい声、道気役の白い鼻、二枚目の転げまわり、こういう変な御面相は皆嫌いである。このほかおよそ度の過ぎた事物はみな良いとは思わないが、不寛容もそのうちの一つということになろう。わたしの頭脳が現代のものでないことを恐れるが、儒家の気かそれとも古典の気かがあまりに重過ぎるのか、根っから現代の濃厚な空気とはどうも合わない。実を言うとビアズレーの絵はよく見るがやはり飽きがくる、まことにおそらくは落後のおそれを免れ難いのだろうが、これも何の関係もない。たぶんわたしのようなのはもともと十八世紀の人間とよく似ていているのだろう、ただあのようには楽観はしていない。というのはつまるところダーウィン、フレイザーの後に生まれ、哲人の思想は空中から地上に落ち、凡人に変わってしまったのだから。

民国十年以前わたしはまだ幼稚で、すこぶる理想的な、楽観的な話が多かった。しかし後になって次第に分かったのだが、少なからぬ代償を払った。「路を尋ねる人」一篇はわたしの告白である。わたしは人間は亡霊に食われる者だということが分かった。これは自分では魔を降参させることができると思って、ニコニコと坐ってお札を書いているうちに突然食われてしまうのに比べれば、少しは賢い。しかしながらわたしには、時には「来るぞ」という予感を持って、人のうま

い夢を驚かすようになるには、まだ相当の曠達さが欠けている。ここ六年来ほとんど毎日反動運動の到来を恐れていたが、それが今やとうとうやって来た。まったく康聖人〔康有為〕の「不幸にして吾が言中れり」の感がある。この反動とは何か。必ずしも守旧復古ではない。およそ統一思想の棒喝主義がそれである。北方の「赤党討伐」は言うまでもなく、南方の「清党」もわたしの恐れるそういう反動の一つである。それが問題とするのは決して全てが行為の罪ではなく思想の罪であるからである。――思想を以て人を殺す、これはわたしが最も恐れるものである。中国がもしよくなろうとすれば、直ちにこの殺人さわぎを止め、政治・経済・宗教・芸術上の各新派がみな同じように自由に思想し言論しうるようにならなければならない。『孟子』には云う、孰か能くこれを一にせん。曰く、人を殺すを嗜まざる者能くこれを一にせん、と。この句は老生の常談であるが、今でもまだ同じように有用である。しかし何の役にたつか。棒喝主義は今まさに中国に瀰漫しており、わたしが八九年前に恐れたのはこれであるが、今に至るまでずっと変わらない。ただ反動が消滅し、理性が勢いを得ることを希望する思いは、今では変わった、減じた、――これもたぶん一種の進歩なのだろう。

民国十六年十一月二十五日、北京にて、豈明。

※初出：1928 年 1 月 16 日『北新』第 2 巻第 6 號

---

＊ 孔子三世の孫が書いた一冊の本　孔伋が書いたと言われる『中庸』を言う。

二〇二二年三月三一日発行　第一版

周作人文集翻訳叢刊
『談虎集』

訳　者　　中島長文©

発行所　　雙楡書屋